



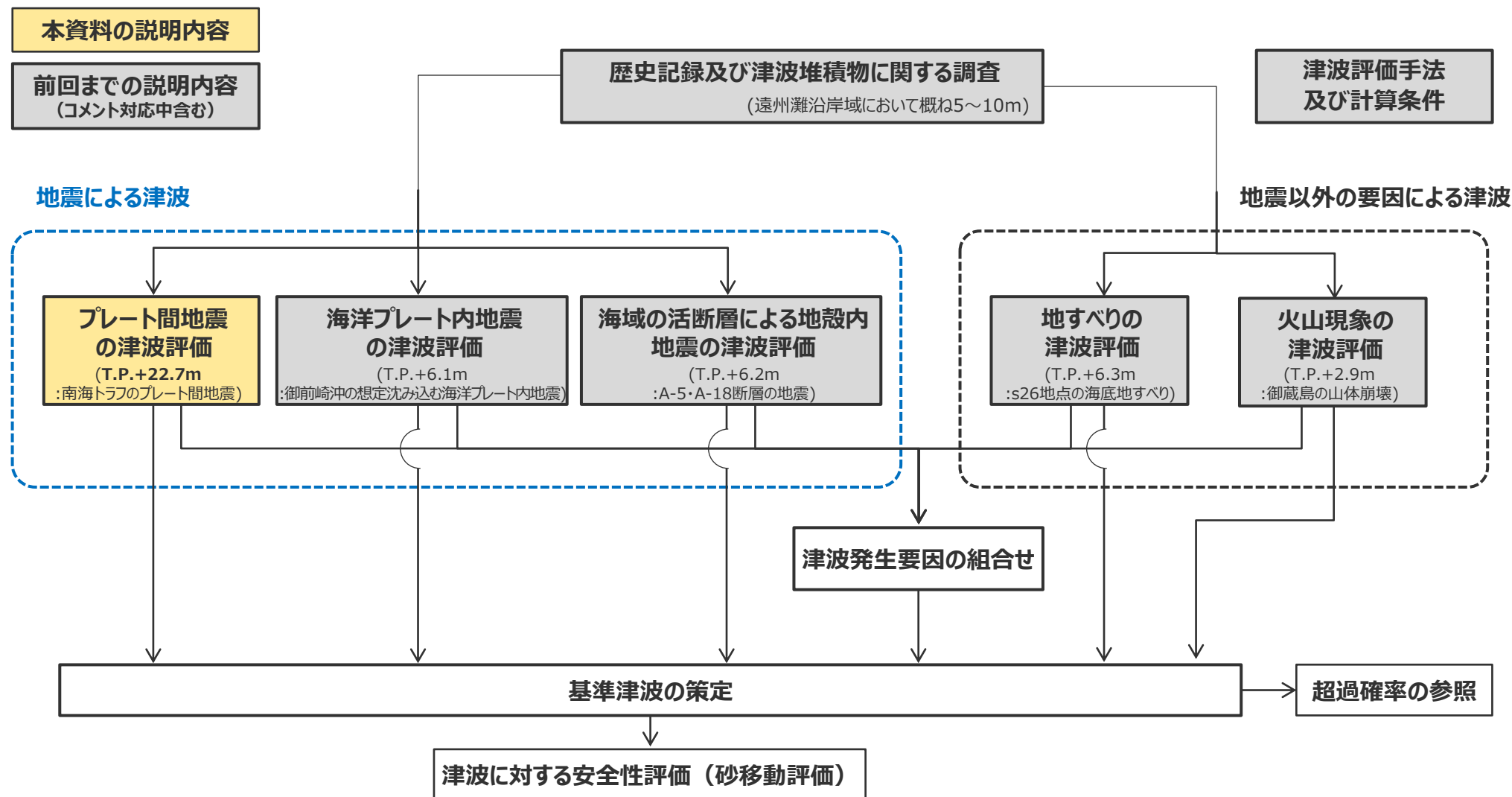
中部電力

浜岡原子力発電所
地震による津波のうち
プレート間地震の津波評価について
(本編資料)

2024年1月23日

本資料の説明内容

■ 本資料の説明内容は以下に示すとおり。



・それぞれの津波発生要因の津波評価等の下には、津波の大きさの程度を示すため、敷地前面の津波高（現時点の評価結果）等を記載している。なお、津波発生要因の組合せの津波高は、検討中のため記載していない。

プレート間地震の津波評価の全体概要

プレート間地震の津波評価の方針

■ プレート間地震の津波評価は、敷地に近い南海トラフのMw9クラスのプレート間地震を**検討対象とする地震として選定**し、南海トラフおよび国内外の巨大地震の最新知見に基づき、南海トラフの特徴と東北沖地震の知見とを適切に反映した複数の検討波源モデルを設定したうえで、敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域位置のパラメータスタディを実施して**基準断層モデルを設定**し、津波評価に影響を与える**動的パラメータに関するパラメータスタディ**を、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めて網羅的に実施することにより、不確かさを考慮した津波評価を行い、**内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認**も行ったうえで、敷地に及ぼす影響が最も大きいケースをプレート間地震の津波評価結果とする。

検討対象地震の選定

■ 文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「**南海トラフのMw9クラスのプレート間地震**」を検討対象地震として選定した。

基準断層モデルの設定

- 基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル**(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルC）した。
- 次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル**(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定した。
- 設定したこれらの検討波源モデルに対し、敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域位置に関する概略パラメータスタディ**を実施することにより、敷地への影響が大きい**複数の基準断層モデルを設定**（基準断層モデル1-1～5、2-1～3、3-1～3、4-1）した。

動的パラメータに関するパラメータスタディ

■ 設定した基準断層モデルに対し、**動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度・破壊開始点）に関する詳細パラメータスタディ**を、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に検討した。その際、Mw9クラスの地震ではライズタイムが津波水位に与える影響が大きいと考えられることを考慮して、まずライズタイム、次に破壊伝播速度・破壊開始点の順でパラメータスタディを実施した。これらのパラメータスタディ結果について、パラメータスタディ因子の影響分析を行い、大すべり域の位置、ライズタイム、破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディの順序などが網羅的な検討として妥当であることを確認した。

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

■ 設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、内閣府の最大クラスモデルとの比較を行った結果、**敷地の津波評価が、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めた検討になっていること、そのうえで敷地への影響の観点からより幅広く不確かさを考慮したものとなっていることから**、敷地のプレート間地震の津波評価は妥当であることを確認した。

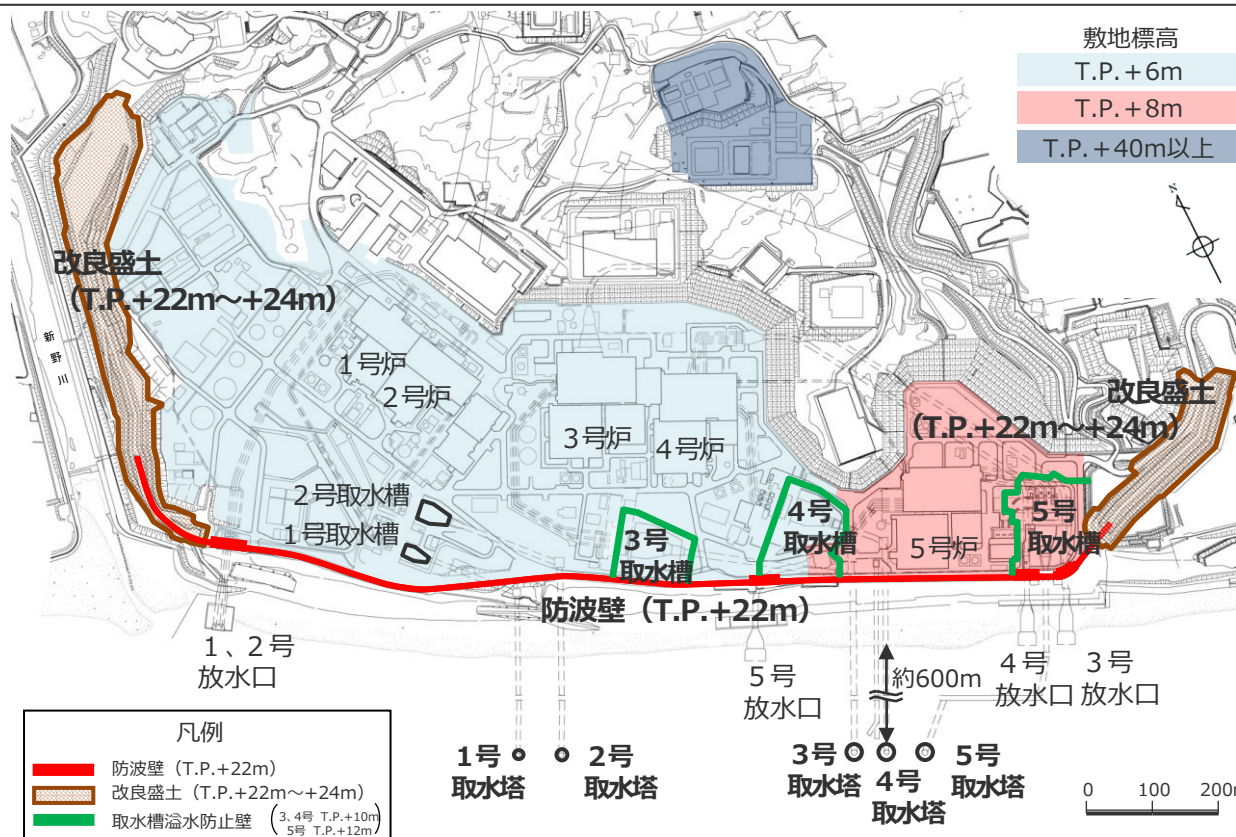
プレート間地震の津波評価結果

- ・敷地前面の上昇水位は、**最大T.P.+22.7m**（基準断層モデル1-1（検討波源モデルA、大すべり域1箇所）のケース）
- ・1～5号取水槽の上昇水位は、**1～4号（敷地標高6m）で最大T.P.+9.6m、5号（敷地標高8m）で最大T.P.+11.8m**（基準断層モデル3-2（検討波源モデルD、大すべり域1箇所）のケース）
- ・3、4号取水塔の水位低下時間は、**最大13.6min**（基準断層モデル2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所）のケース）

浜岡原子力発電所の概要

■施設の概要

- ▶ 浜岡原子力発電所の敷地標高は、1号炉～4号炉建屋周辺でT.P.+6m、5号炉建屋周辺でT.P.+8m。また、敷地北側に標高T.P.+40mの高台等を有している。
- ▶ 敷地前面には、**防波壁 (T.P.+22m)** を延長約1.6kmにわたって設置しており、その両端を**改良盛土 (T.P.+22m～+24m)** に接続している。
- ▶ 原子炉機器冷却水系に必要な海水は、敷地沖合約600mに位置する取水塔から取水トンネルを経て敷地内の取水槽へ導き、取水している。
- ▶ 取水槽の周囲には、**取水槽溢水防止壁 (3、4号：天端高T.P.+10m、5号：天端高T.P.+12m)** を設置している。



浜岡原子力発電所 全体配置図



防波壁 (T.P.+22m)



取水槽溢水防止壁 (T.P.+10mもしくはT.P.+12m)

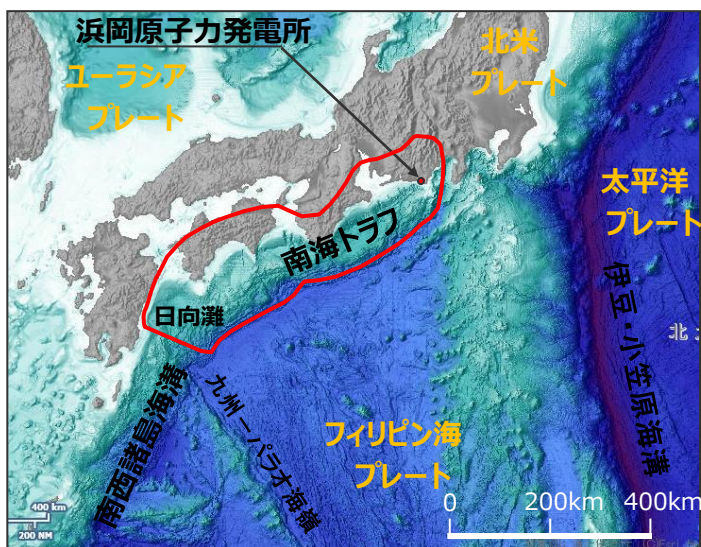
・防波壁・改良盛土、取水槽溢水防止壁の構造については第1109回資料1-3 1章を参照。
 なお、防波壁・改良盛土等の津波対策に関しては、今後、基準津波の確定後、必要な対策を行っていく。

敷地周辺の既往津波

- 南海トラフの沿岸域を対象として、伝承を含む歴史記録に基づく津波痕跡の文献調査*1を実施した。
その結果、敷地が位置する遠州灘沿岸域では、南海トラフのプレート間地震が他の津波発生要因よりも大きな影響を及ぼしていることを確認。
- 南海トラフのプレート間地震による遠州灘沿岸域の津波高は、概ね5~10m。

*1 国内外の津波痕跡に関する主な科学技術系論文データベース等を対象とし、敷地周辺を含む南海トラフの沿岸域の津波高が整理されている文献を抽出。
・津波痕跡データベース ・地震調査委員会等のHP ・J-STAGE ・CiNii ・KAKEN ・JAIRO ・当社歴史地震調査

各津波発生要因による敷地周辺の主な既往津波



(海上保安庁「海洋台帳」を基に作成)

日本列島周辺の海底地形

津波発生要因	名称	Mj	Mw	敷地周辺の津波高	
プレート間地震	南海トラフ	1944年昭和東南海地震	7.9	8.1-8.2	5~10m程度 (遠州灘沿岸域)
		1854年安政東海地震	8.4	-	
		1707年宝永地震	8.6	-	
		1605年慶長地震	7.9	-	
		1498年明応地震	8.2-8.4	-	
南西諸島海溝	敷地周辺に影響を及ぼした津波は確認されていない。			-	
伊豆・小笠原海溝	1972年八丈島東方沖地震	7.2	-	0.25m*2 (御前崎市)	
日本海溝	2011年東北地方太平洋沖地震	9.0	9.0	1.44m (御前崎市)	
遠地津波	1952年カムチャツカ地震	-	9.0	0.3~1.9*2m (遠州灘沿岸域)	
	1960年チリ地震	-	9.5		
	1964年アラスカ地震	-	9.2		
	1996年ニューギニア島沖地震	-	8.1		
	2010年チリ地震	-	8.8		
海洋プレート内地震*3	2004年紀伊半島南東沖の地震	7.4	7.5	0.5m (御前崎市)	
海域の活断層による地殻内地震	敷地周辺に影響を及ぼした津波は確認されていない。			-	
地すべり	2009年駿河湾の海底地すべり			0.36m (御前崎市)	
火山現象	2022年トンガの火山噴火			(0.7m (御前崎市))*4	

*2 文献には最大全振幅が記載されているため、最大全振幅の1/2を津波高と仮定した。

*3 なお、2010年小笠原諸島父島近海の海洋プレート内地震（太平洋プレート内の地震、Mw7.3）について、敷地周辺の御前崎市では津波は観測されていない。（気象庁(2010b)）

*4 本事象に伴う潮位変化は、大気中を伝播する波による影響が支配的であったと考えられており(防災科学技術研究所(2022)、気象庁(2022a))、基準津波の策定において評価している海面を伝播する津波とはやや異なることから、括弧書きで表記した。

プレート間地震の津波評価の全体概要 (検討概要)

■ プレート間地震の津波評価は、敷地に近い南海トラフのMw9クラスのプレート間地震を**検討対象地震として選定**し、南海トラフおよび国内外の巨大地震の最新知見に基づき、南海トラフの特徴と東北沖地震の知見とを適切に反映した**複数の検討波源モデル**を設定したうえで、敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域位置のパラメータスタディ**を実施して**基準断層モデルを設定**し、津波評価に影響を与える**動的パラメータに関するパラメータスタディ**を、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めて網羅的に実施することにより、不確かさを考慮した津波評価を行い、**内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認**も行ったうえで、敷地に及ぼす影響が最も大きいケースをプレート間地震の津波評価結果とする。

プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定 (本編1章)

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「**南海トラフのMw9クラスのプレート間地震**」を検討対象地震として選定。

基準断層モデルの設定 (本編2章)

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)

・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定（検討波源モデルC）。

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)

・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

基準断層モデルの設定 (本編2.3章) (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

・敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域位置のパラメータスタディ**を実施することにより、**基準断層モデルを設定**。

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える**動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）のパラメータスタディ**を、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、**内閣府の最大クラスモデルとの比較**を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

プレート間地震の津波評価の全体概要 (検討フロー)

基準断層モデルの設定

2章

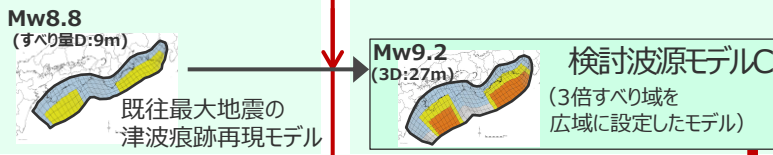
東北沖地震において巨大津波が発生した要因③⑥を反映

③地震規模

⑥浅部の破壊形態

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定)

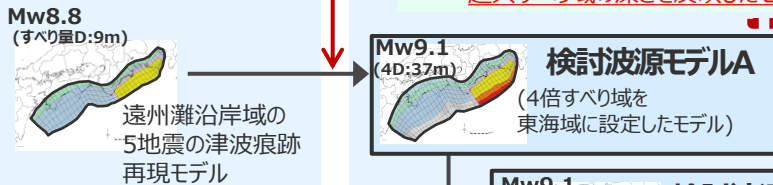
2.1章



より敷地への影響が大きいモデルを設定

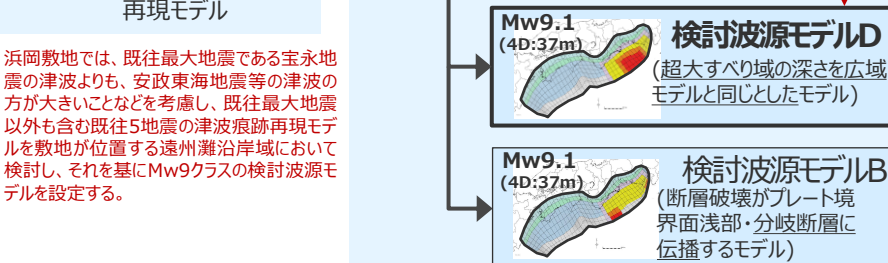
敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定)

2.2章



(敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超すべり域の深さを反映したモデルも設定)

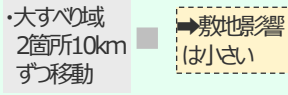
浜岡敷地では、既往最大地震である宝永地震の津波よりも、安政東海地震等の津波の方が大きいことなどを考慮し、既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデルを敷地が位置する遠州灘沿岸域において検討し、それを基にMw9クラスの検討波源モデルを設定する。



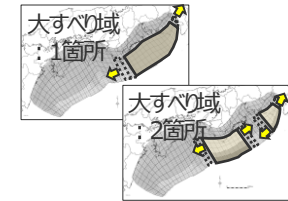
基準断層モデルの設定

2.3章

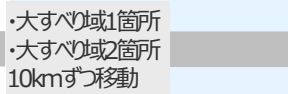
(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)



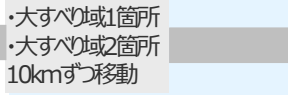
基準断層モデル1-1~1-5 (検討波源モデルA)を選定: 水位上昇側(敷地前面)への影響が大きい



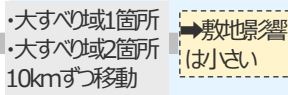
基準断層モデル2-1~2-3 (検討波源モデルA)を選定: 水位下降側(取水塔)への影響が大きい



基準断層モデル3-1~3-3 (検討波源モデルD)を選定: 水位上昇側(取水槽)への影響が大きい

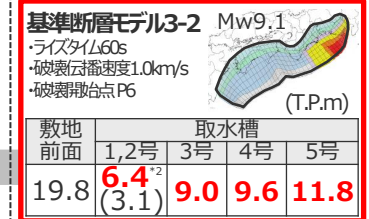
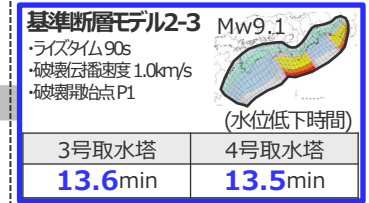
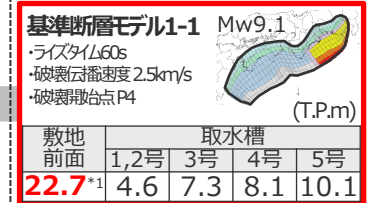


基準断層モデル4-1 (検討波源モデルD)を選定: 水位下降側(取水塔)への影響が大きい



動的パラメータに関するパラメータスタディ 3章 (動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

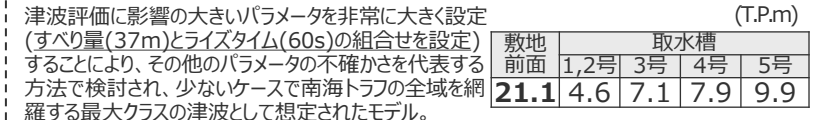
最も影響の大きいケース



*1 防波壁の高さを無限大として解析を実施。今後、基準津波の確定後、必要な対策を実施していく。

*2 1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。なお、括弧内の数値は、取水路の設備対策を実施した場合における解析結果。(1号取水路出口流路の縮小(流路面積1.0m²)・2号取水路出口流路の閉塞)

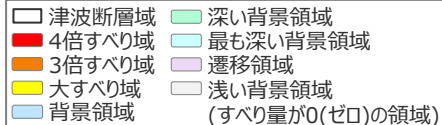
内閣府の最大クラスモデル



日本海溝の手法を用いたモデルとの比較

基準断層モデルとして選定した検討波源モデルについて、日本海溝の手法を用いたすべり量分布等との比較も行い、東北沖型のモデル設定としての妥当性確認を実施。

・D: 平均すべり量
・各波源モデルには、内閣府(2012)による約5kmメッシュの津波断層面を用いた。



プレート間地震の津波評価の全体概要

(内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認)

- 敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルAについて、パラメータ設定と津波評価結果を比較した。
- その結果、敷地の津波評価が、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めた検討になっていること、そのうえで敷地への影響の観点からより幅広く不確かさを考慮したものとなっていることから、敷地のプレート間地震の津波評価は妥当であることを確認した。

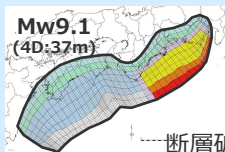
プレート間地震の津波評価 (南海トラフのMw9クラスのプレート間地震の津波評価)

○すべり量分布

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル
 広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定
 ↳ 3倍すべり域を広域に設定した場合

より敷地への影響が大きいモデルを設定

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル
 正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定
 ↳ **断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合**※
 ↳ 断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播する場合
 ↳ 超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合



※内閣府(2012)によるすべり量分布に対して、駿河湾内にも超大すべり域のすべり量を考慮

断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合の例

D:平均すべり量 (括弧内の数値は、面積割合)
オレンジ太字：内閣府の最大クラスモデル(ケース①)のパラメータ

○パラメータスタディ

超大すべり域・大すべり域の位置	・東西約10kmごとに移動 (駿河湾～紀伊半島沖を含む) ・大すべり域： 1箇所 、2箇所
ライズタイム	・ 60s ～300s
破壊伝播速度	・ 0.7 ～ 2.5km/s
破壊開始点	・大すべり域の周囲の6地点 (大すべり域の下端中央 を含む)

・パラメータスタディは、国内外の巨大地震・津波に基づく知見を踏まえて段階的に実施。

○津波評価結果

敷地 前面	最大上昇水位 (T.P.m)			
	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
22.7	4.6	7.3	8.1	10.1
19.8	6.4	9.0	9.6	11.8

(上段：プレート境界面浅部に伝播する場合、大すべり域1箇所)
 (下段：超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合、大すべり域1箇所)

水位低下時間	
3号取水塔	4号取水塔
13.6min	13.5min

(プレート境界面浅部に伝播する場合、大すべり域2箇所)

(参考)
 内閣府の最大クラスモデルの津波評価結果

敷地 前面	最大上昇水位 (T.P.m)			
	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
21.1	4.6	7.1	7.9	9.9

水位低下時間	
3号取水塔	4号取水塔
6.6min	6.7min

プレート間地震の津波評価の全体概要

(津波評価結果)

■ プレート間地震の津波評価結果は以下のとおり。

【検討波源モデルの津波評価結果】

(水位上昇側)

波源モデル	最大上昇水位(T.P. m)*1					備考
	敷地 前面	1,2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽	
基準断層モデル1-1(検討波源モデルA)	22.7(22.65)	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-2(検討波源モデルA)	22.7(22.64)	4.6	7.3	8.1	10.0	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ30km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-3(検討波源モデルA)	22.7(22.61)	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ20km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-4(検討波源モデルA)	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ10km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-5(検討波源モデルA)	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：基準位置 ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル3-1(検討波源モデルD)	19.4	6.4	8.9	9.5	11.6	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P6
	19.5	6.4	8.9	9.5	11.6	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル3-2(検討波源モデルD)	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km ライスタイム60s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル3-3(検討波源モデルD)	19.3	6.4	8.9	9.5	11.7	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km ライスタイム60s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
	19.0	6.4	8.9	9.5	11.7	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km ライスタイム60s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6

*水位上昇側：朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮

(水位下降側)

波源モデル	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
	3号取水塔	4号取水塔	
基準断層モデル2-1(検討波源モデルA)	海底面(13.2min)	海底面(13.2min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km ライスタイム120s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル2-2(検討波源モデルA)	海底面(13.3min)	海底面(13.3min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離140km ライスタイム120s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル2-3(検討波源モデルA)	海底面(13.6min)	海底面(13.5min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ30km・距離120km ライスタイム90s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P1
基準断層モデル4-1(検討波源モデルD)	海底面(12.5min)	海底面(12.4min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：基準位置・距離140km ライスタイム90s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P1

*水位下降側：朔望平均干潮位T.P.-0.93mを考慮

*海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している(水深1m未満である)ことを示す。

*1 防波壁および3~5号取水槽溢水防止壁の高さを無限大として解析を実施。また、1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。



：基準断層モデルごとに 影響が大きく着目した評価地点

太字：全評価結果の中で、敷地への影響が最も大きいケース

目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

目次

[プレート間地震の津波評価]

1 検討対象地震の選定	11
2 基準断層モデルの設定	19
2.1 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1 既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5 プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

1 検討対象地震の選定

プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定 (本編1章)

基準断層モデルの設定 (本編2章)

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)

- ・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
- 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)

- ・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

基準断層モデルの設定 (本編2.3章) (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルC）。

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

・敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域位置のパラメータスタディを実施することにより、基準断層モデルを設定。

・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）のパラメータスタディを、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、内閣府の最大クラスモデルとの比較を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

1 検討対象地震の選定 検討概要

- 浜岡敷地は南海トラフに面しており、敷地に近い南海トラフのプレート間地震の津波が大きな影響を及ぼしている。
- 検討対象地震の選定では、南海トラフおよびその周辺の沈み込み帯を対象として、「既往津波の文献調査」、「各沈み込み帯の特徴に関する文献調査」、「数値シミュレーションによる敷地影響評価」を実施し、南海トラフのプレート間地震の津波影響が大きいことを確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

(詳細は、本編資料1章参照)

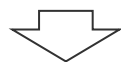
検討概要

【調査対象】

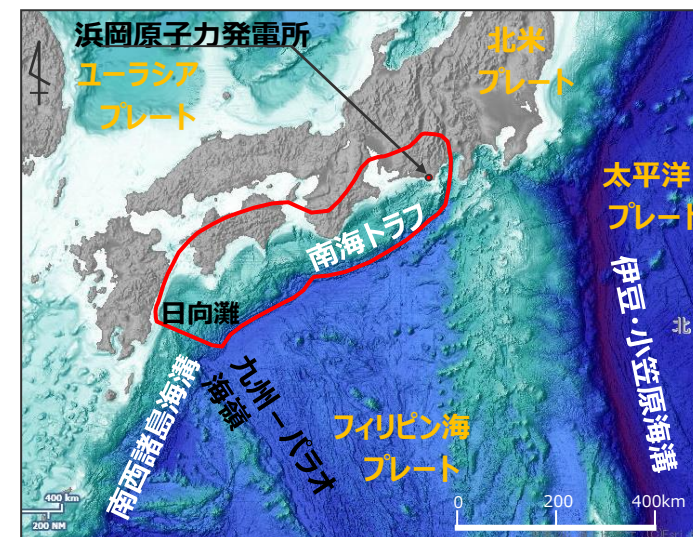
・南海トラフ ・南西諸島海溝 ・伊豆・小笠原海溝 ・その他遠地津波

【検討項目・検討結果】

検討項目	検討結果（概要）
既往津波の文献調査	・既往津波の文献調査の結果、敷地が位置する遠州灘沿岸域では、南海トラフのプレート間地震による津波が繰り返し発生し、他のプレート間地震よりも大きな影響を及ぼしている。
各沈み込み帯の特徴に関する文献調査	・沈み込み帯の過去地震、固着、構造に関する知見に基づき、敷地に近い南海トラフにおいて巨大地震の発生が想定され、南西諸島海溝と伊豆・小笠原海溝では領域全体を波源とするような巨大地震が発生する可能性は低いと評価した。 ・また、九州-パラオ海嶺付近に構造境界が確認されており、南海トラフの領域と南西諸島海溝の領域とは一体となって破壊しないと評価した。
数値シミュレーションによる敷地影響評価	・各沈み込み帯の領域全体を波源とする最大クラス（Mw9クラス）の地震規模を想定して波源モデルを設定し、数値シミュレーションを実施した結果、「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」の影響が大きいことを確認した。



以上より、南海トラフのプレート間地震の津波影響が大きいことを確認し、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。



(海上保安庁「海洋台帳」を基に作成)

日本列島周辺の海底地形

- 敷地周辺に影響を及ぼしたと考えられる既往津波について、文献調査を実施。
調査文献：羽鳥(1980a,b)、静岡県(1986)等、計51文献



- 敷地が位置する遠州灘沿岸域では、南海トラフのプレート間地震による津波が繰り返し発生し、他の津波発生要因よりも大きな影響を及ぼしている。

敷地周辺の主な既往津波

津波発生要因	地震の名称	Mj	Mw	敷地周辺の痕跡高	
プレート間地震	南海トラフ	1944年昭和東南海地震	7.9	8.1-8.2	5~10m程度 (遠州灘沿岸域)
		1854年安政東海地震	8.4	-	
		1707年宝永地震	8.6	-	
		1605年慶長地震	7.9	-	
		1498年明応地震	8.2-8.4	-	
	南西諸島海溝	敷地周辺に影響を及ぼした津波は確認されていない。			-
	伊豆・小笠原海溝	1972年八丈島東方沖地震	7.2	-	0.25m※(御前崎市)
	遠地津波	1952年カムチャッカ地震	-	9.0	0.3~1.9※ m (遠州灘沿岸域)
		1960年升地震	-	9.5	
		1964年アラスカ地震	-	9.2	
1996年ニューギニア島沖地震		-	8.1		
2010年升地震		-	8.8		

※文献には最大全振幅が記載されているため、最大全振幅の1/2を津波高と仮定した。

・津波痕跡高の詳細については第1109回 補足説明資料2章を参照

1 検討対象地震の選定 各沈み込み帯に関する文献調査

■ 各沈み込み帯の特徴及び構造境界について文献調査を行い、巨大地震の発生について分析を実施。

- 敷地に近い南海トラフにおいて巨大地震の発生が想定され、南西諸島海溝と伊豆・小笠原海溝では領域全体を波源とするような巨大地震が発生する可能性は低いと評価した。
- また、九州-パラオ海嶺付近に構造境界が確認されており、南海トラフの領域と南西諸島海溝の領域とは一体となって破壊しないと評価した。

南海トラフの特徴

- ・Mw8クラスの巨大地震が100～200年間隔で繰り返し発生。宝永地震(Mj8.6)等、領域全体を波源とする巨大地震の発生が知られている。
 - ・地殻変動観測結果から、駿河湾～日向灘の領域で固着域が推定されている。
- ⇒**巨大地震の発生が想定されると評価した。**

南西諸島海溝の特徴

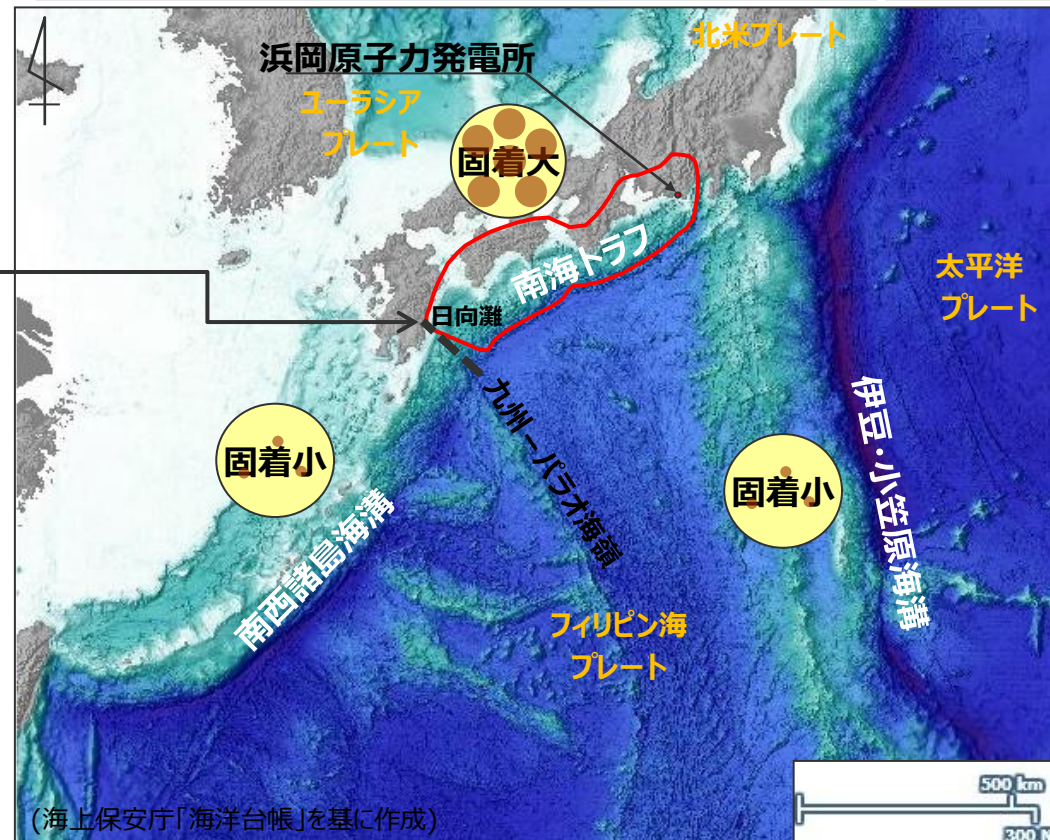
- ・海溝軸方向に3つの地質構造区分が示されており、津波石の調査等において地震・津波の発生状況に顕著な地域差が見られる。
 - ・地殻変動観測結果によりプレート境界の固着は小さいとされている。
- ⇒ **領域全体を波源とするような巨大地震が発生する可能性は低いと評価した。**

伊豆・小笠原海溝の特徴

- ・Mw8クラス以上の巨大地震の発生は確認されていない。
 - ・地殻変動観測結果から固着は小さいとされている。
- ⇒ **領域全体を波源とするような巨大地震が発生する可能性は低いと評価した。**

南海トラフと南西諸島海溝の構造境界

- ・南海トラフの領域と南西諸島海溝の領域とは、フィリピン海プレートの形成年代・形成過程、地震発生状況等が異なっており、九州-パラオ海嶺付近に構造境界が確認されている。
- ⇒ **南海トラフの領域と南西諸島海溝の領域とは一体となって破壊しないと評価した。**



・各沈み込み帯に関する文献調査の詳細については第1109回 補足説明資料4-1章を参照

1 検討対象地震の選定

数値シミュレーションによる敷地への影響検討

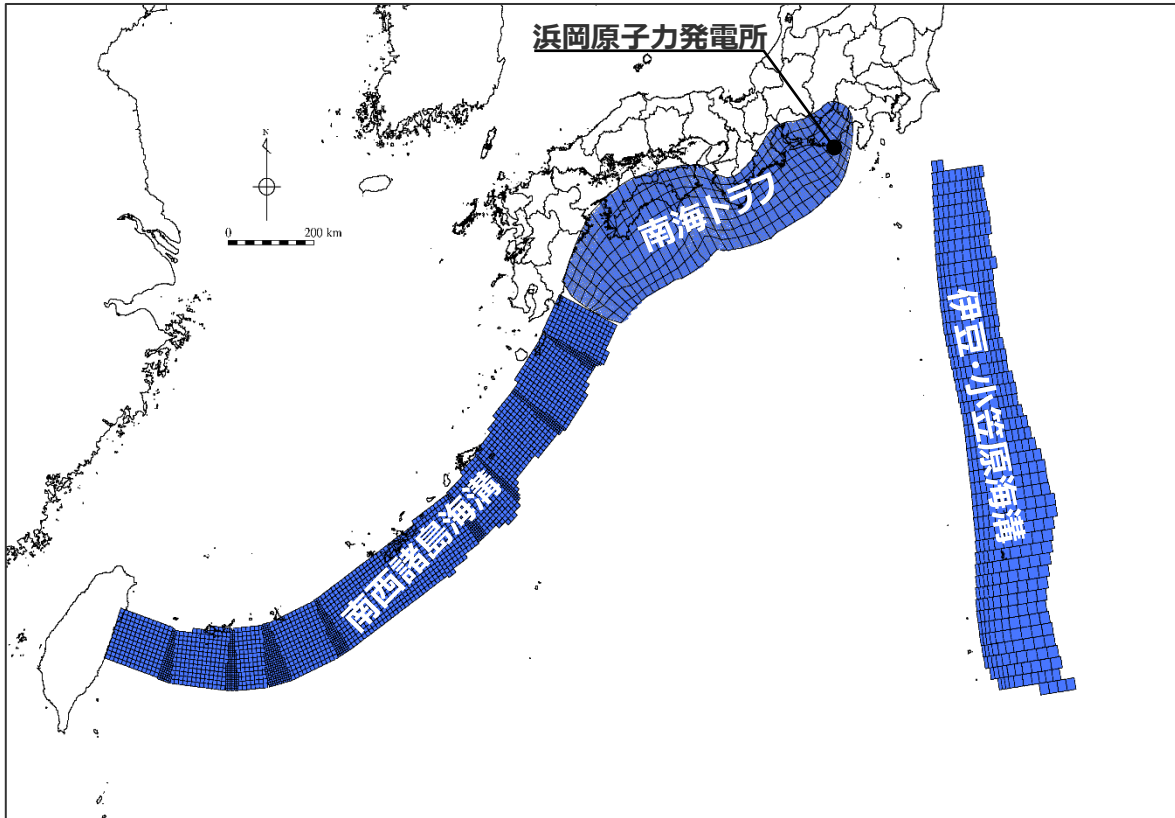
検討方針

- 発生する地震・津波の地震規模などの特徴は沈み込み帯ごとに異なると考えられるが、ここでは領域全体を波源とする最大クラスの地震規模を想定して波源モデルを設定し、数値シミュレーションにより敷地への影響を比較検討した。



波源モデルの設定

- 波源モデルの地震規模は、領域全体を波源とした上で、内閣府(2012)と同様に、主部断層の応力降下量を3MPaとしたスケーリング則により設定した。
- 波源モデルのすべり量分布は、敷地及び敷地周辺への影響を比較する観点から、すべり量一律のモデルとして設定した。



波源モデル

断層パラメータ

領域	面積 (km ²)	Mw	すべり量 (m)
南海トラフ	144,379	9.1	10.0
南西諸島海溝	207,537	9.3	11.9
伊豆・小笠原海溝	179,236	9.2	11.3

1 検討対象地震の選定 波源モデルの断層パラメータ

断層パラメータ

項目		設定値		
		南海トラフ	南西諸島海溝	伊豆・小笠原海溝
面積 (km ²)	全体	144,379	207,537	179,236
	主部断層	109,725	158,084	140,210
	浅部断層	34,655	49,453	39,026
地震モーメント (Nm)		5.9×10^{22}	1.0×10^{23}	8.3×10^{22}
Mw		9.1	9.3	9.2
すべり量 (m)		10.0	11.9	11.3
剛性率 (N/m ²)		4.1×10^{10}	4.1×10^{10}	4.1×10^{10}
破壊伝播速度 (km/s)		∞(同時破壊)	∞(同時破壊)	∞(同時破壊)
ライズタイム (s)		60	60	60

波源モデルの断層パラメータは以下のとおり設定。

- 断層面積：プレート境界深さ0～40kmの面積から算定
- すべり量： $D = 16 / (7\pi^{3/2}) \cdot \Delta\sigma \cdot S^{1/2} / \mu^{1/2}$
 ここで、 $\Delta\sigma$ ：主部断層全体の平均の応力降下量(3MPa)
 S ：主部断層全体の面積
 μ ：剛性率 ($\rho \cdot V_s^2$)
 ρ ：密度(2.8g/cm³)、 V_s ：S波速度(3.82km/s)
- 地震モーメント $M_0 = \sum \mu D_i S_i$
 ここで、 D_i 、 S_i はそれぞれ、 i 番目の小断層の断層すべり量及び断層面積
- $Mw = (\text{Log}M_0 - 9.1) / 1.5$
- 破壊伝播速度 $V_r = \infty$ (同時破壊)
- ライズタイム $T = 60s$

1) スケーリング則 $M_0 = 16 / (7\pi^{3/2}) \cdot \Delta\sigma \cdot S^{3/2}$ と地震モーメントの式 $M_0 = \mu DS$ から導出

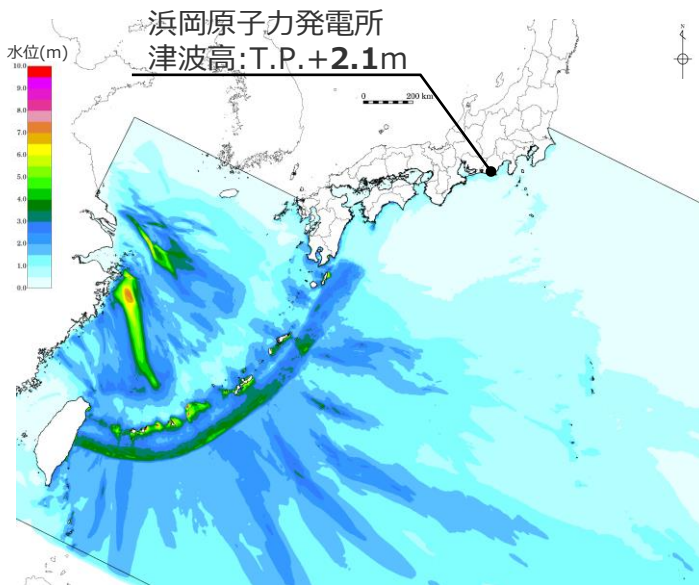
主部断層：深さ10km以深の断層、強震動と津波を発生させる可能性がある領域 (内閣府(2012))

浅部断層：深さ10km以浅の断層、強震動は発生しないものの津波を発生させる可能性がある領域 (内閣府(2012))

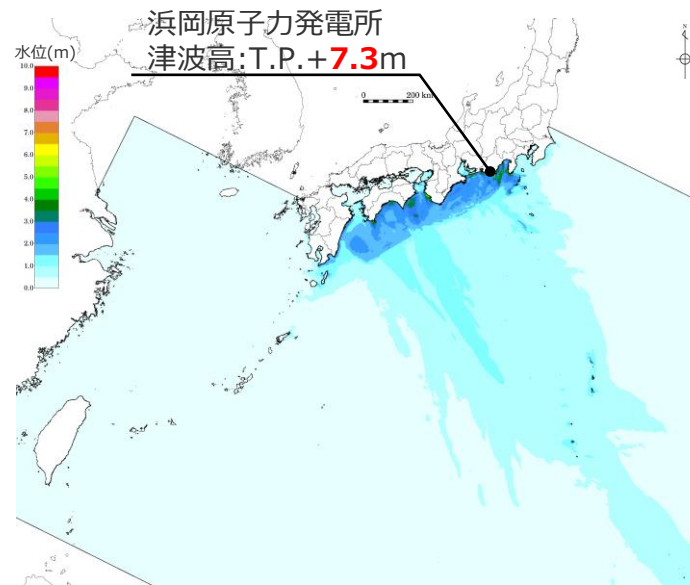
1 検討対象地震の選定

数値シミュレーションによる敷地への影響検討結果

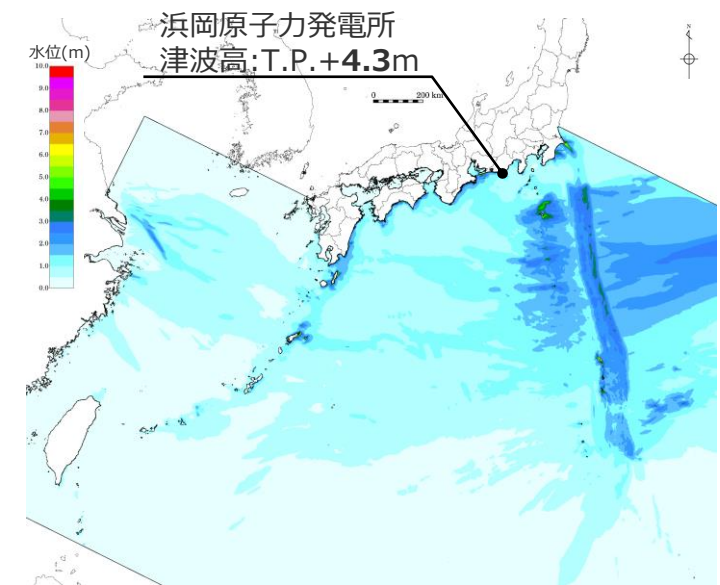
■ 領域全体を波源とする最大クラスの地震規模を想定して波源モデルを設定し数値シミュレーションを実施した結果、敷地及び敷地周辺への影響について、「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」の津波の影響が大きいことを確認した。



南西諸島海溝のプレート間地震



南海トラフのプレート間地震



伊豆・小笠原海溝のプレート間地震

数値シミュレーションによる敷地への影響検討結果

・敷地を波源とした津波の伝播特性に関する検討について第1109回 補足説明資料4-2章に記載



以上の結果に基づき、敷地への影響の観点から、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象として選定。

目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

2 基準断層モデルの設定

プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定 (本編1章)

基準断層モデルの設定 (本編2章)

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定
(本編2.1章)

・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの
超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定
(本編2.2章)

・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

基準断層モデルの設定 (本編2.3章)
(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルC）。

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

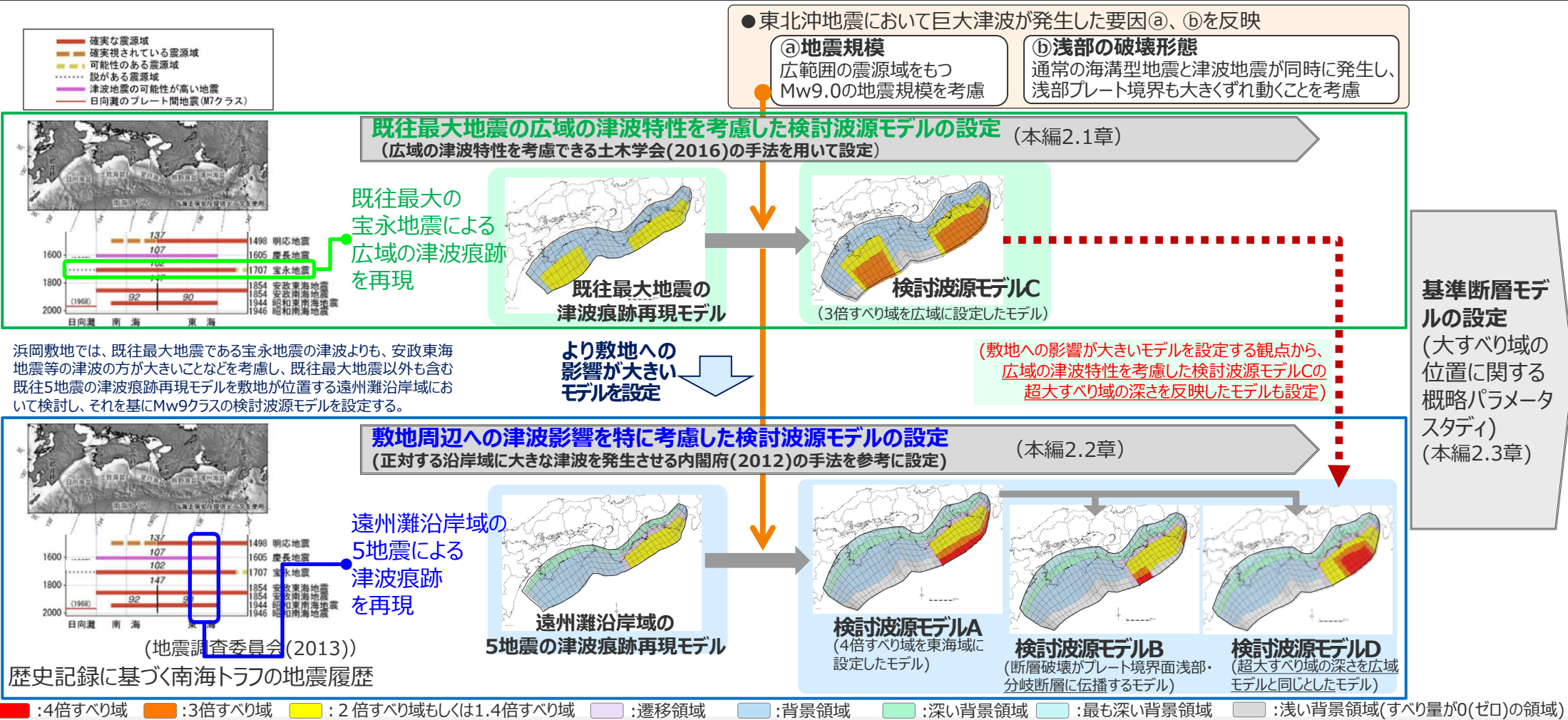
・敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域位置のパラメータスタディを実施することにより、基準断層モデルを設定。

・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）のパラメータスタディを、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、内閣府の最大クラスモデルとの比較を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

2 基準断層モデルの設定 検討概要

- 基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震(宝永地震)の広域の津波特性を考慮する観点から、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定(検討波源モデルC)。
- 次に、浜岡敷地では、既往最大地震である宝永地震の津波よりも安政東海地震等の津波の方が大きいことなどを考慮し、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定(検討波源モデルA)。更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル(検討波源モデルB)を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル(検討波源モデルD)を設定。
- 設定した複数の検討波源モデルに対し、敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域位置のパラメータスタディ**を実施することにより、**基準断層モデルを設定**。

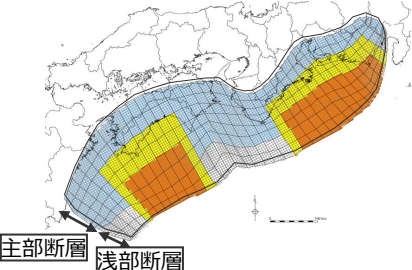
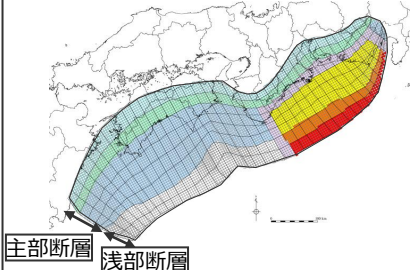
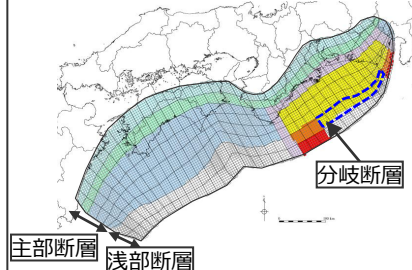
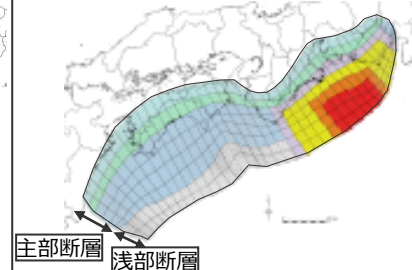


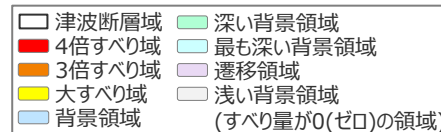
2 基準断層モデルの設定

検討波源モデルの波源域設定の考え方

- プレート間地震の津波評価では、南海トラフの沈み込み帯の領域全体を波源域とする最大クラス（Mw9クラス）のプレート間地震を想定し、南海トラフの特徴の考慮として、断層破壊がプレート境界面浅部や分岐断層に伝播するモデルを検討する。
- ここで、沈み込み帯の領域の一部を波源域とするプレート間地震（主部断層の領域の地震（強震動を伴う通常の地震）、浅部断層の領域の地震（津波地震）等）による津波影響は、沈み込み帯の領域全体を波源域とし、スケーリング則に基づき地震規模やすべり量も大きいMw9クラスのプレート間地震の津波影響より小さいと考えられることから、Mw9クラスのプレート間地震の津波により代表することとする。

各検討波源モデルの波源域の設定

波源モデル名		既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル		
		検討波源モデルC	検討波源モデルA	検討波源モデルB	検討波源モデルD
		・3倍すべり域を広域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播	・4倍すべり域を東海域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播	・4倍すべり域を東海域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播	・4倍すべり域を東海域に設定 ・超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした
波源モデル図					
主部断層	強震動を伴う通常の地震の領域	●	●	●	●
浅部断層	プレート境界面浅部（津波地震の領域）	●	●	○ (いずれかへの破壊伝播を考慮)	●
	海溝軸付近の分岐断層*	—	—	○ (いずれかへの破壊伝播を考慮)	—



● : 波源域として考慮する
○ : 波源域としていずれかを考慮する

* 付加作用が卓越する南海トラフでは、プレート境界面浅部に破壊が伝播する場合に加えて、分岐断層に破壊が伝播する場合があると考えられることから、これを考慮した検討波源モデルを設定している。
(検討波源モデルの設定の詳細は、本編資料2.2.2参照)

2 基準断層モデルの設定 検討波源モデル設定の考え方

- 検討波源モデルの津波評価では、南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映された痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（㉔地震規模、㉕浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）を設定することとした。

検討波源モデル

- 南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映された痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（㉔地震規模、㉕浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）



東北沖地震において巨大津波が発生した要因

保守的設定：㉔地震規模

- ・ 南海トラフでは、宝永地震等と大きく異なる巨大地震が発生する可能性は低いと考えられるが、不確かさとして南海トラフの波源の広がりを最大限考慮*した上で、東北沖地震（Mw9.0）と同等以上の規模の地震を考慮した。

保守的設定：㉕浅部の破壊形態

- ・ 付加作用が卓越する南海トラフと造構性侵食作用が卓越する東北沖とでは浅部のすべり挙動が異なると考えられるが、保守的に東北沖地震の特徴を踏まえた浅部の破壊形態も考慮した。

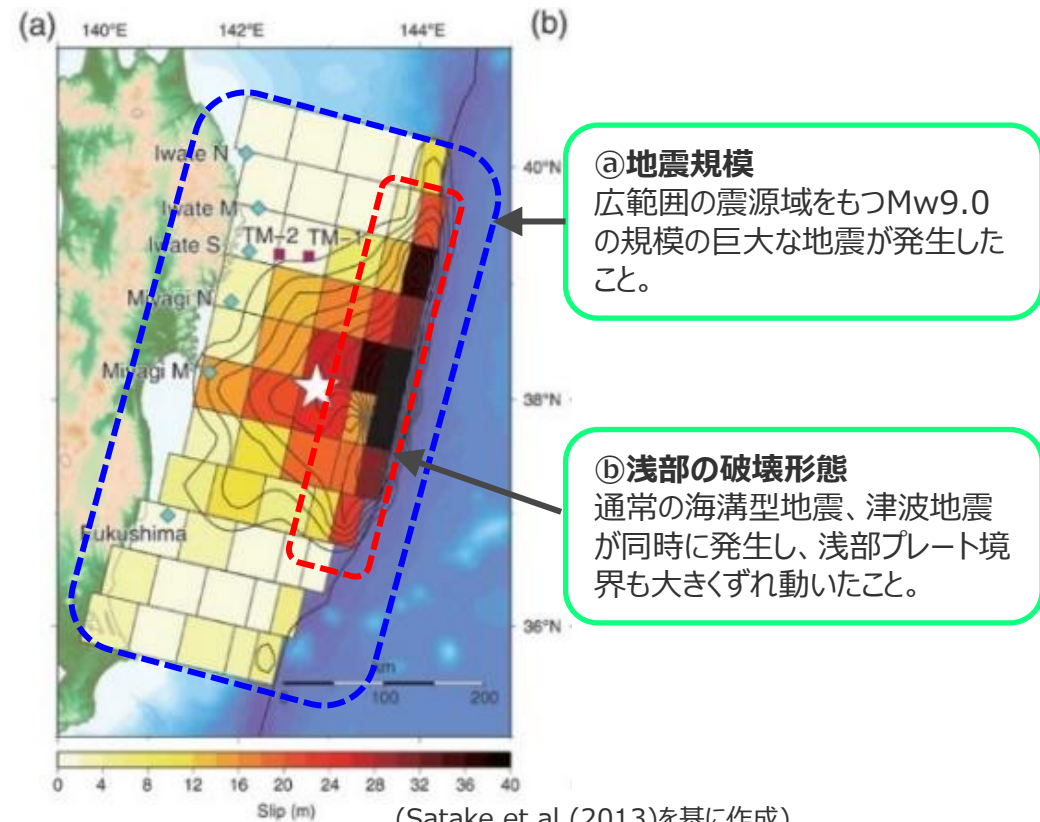
*内閣府(2012)の最大クラスモデルが考慮している波源域を考慮

(東北沖地震において巨大津波が発生した要因を反映する考え方の概要)

- 中央防災会議(2011)によると、東北沖地震において巨大津波が発生した要因として、①地震規模（広範囲の震源域をもつMw9.0の規模の巨大な地震が発生したこと）と、②浅部の破壊形態（通常の高溝型地震と津波地震が同時に発生し、浅部プレート境界も大きくずれ動いたこと）とが挙げられている。
- 検討波源モデルは、これら東北沖地震において巨大津波が発生した要因を不確かさとして保守的に考慮することとした。

東北沖地震において巨大津波が発生した要因（中央防災会議(2011)）

項目	巨大津波が発生した要因
①地震規模	・過去数百年間の地震の発生履歴からは想定することができなかったマグニチュード9.0の規模の巨大な地震が、複数の領域を連動させた広範囲の震源域をもつ地震として発生したこと。
②浅部の破壊形態	・今回の津波の発生メカニズムが、通常の高溝型地震が発生する深部プレート境界のずれ動きだけでなく、浅部プレート境界も同時に大きくずれ動いたことによるものであったこと。いわゆる「通常の高溝型地震」と「津波地震」が同時に起きたこと。



(Satake et al.(2013)を基に作成)

東北沖地震において巨大津波が発生した要因

2 基準断層モデルの設定 検討波源モデル設定の考え方

(痕跡再現モデルと検討波源モデルの設定の考え方の関係)

- 痕跡再現モデル、検討波源モデルは、いずれも、南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえ、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴を考慮して設定した。
- 痕跡再現モデルは、内閣府(2020)等、2020年時点までの最新の科学的知見を踏まえると南海トラフの最大クラスの津波のモデルと考えられるが、検討波源モデルの設定にあたっては、「大規模な津波を発生させる巨大地震や津波地震は、沈み込みプレート境界では、過去の事例の有無や場所に関わらずその発生を否定できない」と考えて、東北沖地震における巨大津波の発生要因 (㉔地震規模、㉕浅部の破壊形態) を不確かさとして保守的に考慮した東北沖地震型の波源モデルを設定することとした。

南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見の考慮 (設定の考え方: 共通)

- ・国内外の巨大地震に関する最新の科学的・技術的知見を踏まえ、波源海域から敷地周辺までの海底地形、地質構造及び地震活動性等の地震学的見地から南海トラフで想定することが適切なものとして策定
- ・南海トラフのプレート形状、すべり欠損分布、断層形状、地形・地質並びに火山の位置等から考えられる発生要因に応じた適切な規模の津波波源を考慮

痕跡再現モデル

- 歴史記録および津波堆積物に基づき、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映されている南海トラフの津波痕跡高を再現するモデル (Mw8クラス)

検討波源モデル

- 南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映された痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因 (㉔地震規模、㉕浅部の破壊形態) を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル (Mw9クラス)

【国内外の最新知見の確認結果】 (設定の考え方: 痕跡再現モデル)

国内外の大規模な津波事例、津波の発生機構やテクトニクスに関する最新の科学的知見を踏まえると、南海トラフの最新の歴史記録および津波堆積物に基づく痕跡再現モデルの津波が、南海トラフにおける最大クラスの津波と考えられる。

項目 (要因)	国内外の巨大地震に関する最新知見の確認結果 (東北沖地震において巨大津波が発生した要因に関する最新知見)
㉔地震規模	<ul style="list-style-type: none"> ・国内外の巨大地震に関する地震履歴、固着、構造的境界に関する知見から、東北沖や南海トラフを含む国内外の巨大地震の発生領域では、過去に、同程度の巨大津波が数百年間隔で繰り返し発生していたと考えられる。 ・内閣府(2020)では2020年時点までの津波堆積物に関する調査資料から最大クラスの津波を推定できることを示唆するとされていることを踏まえると、2020年時点までに確認されている痕跡高を再現する痕跡再現モデルの津波が最大クラスの津波として想定される。
㉕浅部の破壊形態	<ul style="list-style-type: none"> ・付加作用が卓越する南海トラフと造構性侵食作用が卓越する東北沖とでは、地震時における浅部のすべり挙動が異なると考えられる。 ・一方で、付加作用が卓越する南海トラフでは、プレート境界浅部に破壊が伝播する場合と、分岐断層に破壊が伝播する場合があると考えられる。

・詳細は第1109回 補足説明資料6-3,6-4章参照

【検討波源モデルにおける保守的設定】 (設定の考え方: 検討波源モデル)

「大規模な津波を発生させる巨大地震や津波地震は、沈み込みプレート境界では、過去の事例の有無や場所に関わらずその発生を否定できない」と考え、東北沖地震における巨大津波の発生要因 (㉔地震規模、㉕浅部の破壊形態) について不確かさとして保守的に南海トラフにおいても考慮することとした。

項目 (要因)	検討波源モデルにおける保守的設定 (東北沖地震において巨大津波が発生した要因の考慮)
㉔地震規模	<ul style="list-style-type: none"> ・南海トラフでは、宝永地震等と大きく異なる巨大地震が発生する可能性は低いと考えられるが、不確かさとして南海トラフの波源の広がり最大限考慮*した上で、東北沖地震 (Mw9.0) と同等以上の規模の地震を考慮した。
㉕浅部の破壊形態	<ul style="list-style-type: none"> ・付加作用が卓越する南海トラフと造構性侵食作用が卓越する東北沖とでは浅部のすべり挙動が異なると考えられるが、保守的に東北沖地震の特徴を踏まえた浅部の破壊形態も考慮した。

*内閣府(2012)の最大クラスモデルが考慮している波源域を考慮

2 基準断層モデルの設定 検討波源モデル設定の考え方 (検討波源モデルにおける保守的設定 (地震規模))

【国内外の巨大地震に関する最新知見の確認結果】@地震規模

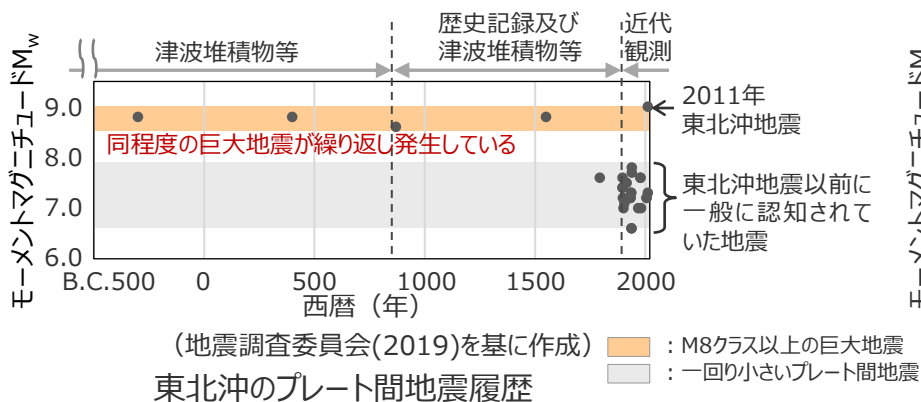
- 国内外の巨大地震に関する地震履歴、固着、構造的境界に関する知見から、東北沖や南海トラフを含む国内外の巨大地震の発生領域では、過去に、同程度の巨大津波が数百年間隔で繰り返し発生していたと考えられる。
・詳細は第1109回 補足説明資料6-3章参照

国内外の巨大地震が発生する沈み込み帯の地震規模に関する知見

項目	国内外の巨大地震が発生する沈み込み帯	南海トラフ
① 地震履歴	・津波堆積物調査等から、東北沖地震等、プレート境界の一部ではなく全域が破壊したと考えられる巨大地震が繰り返し発生していることが確認されている。	・歴史記録及び津波堆積物調査等から、全域が破壊したと考えられる宝永地震クラスの巨大地震が繰り返し発生していることが確認されている。
② 沈み込み帯の固着	・プレート境界の固着域は巨大地震の波源域と概ね一致。 ・ひずみの蓄積・解放の収支は、東北沖地震などの巨大地震を考慮することにより一致。	・南海トラフの固着域は宝永地震等の既往地震の波源域と概ね一致。 ・ひずみの蓄積・解放の収支は、宝永地震等の巨大地震を考慮することにより一致。
③ 沈み込み帯の構造境界	・沈み込むプレートの構造変化などの構造境界が巨大地震の波源域を規定していると考えられる。	・九州-パラオ海嶺付近において沈み込むプレートの構造変化が存在し、九州-パラオ海嶺付近の構造境界は宝永地震等の巨大地震の波源域の南西縁と一致しているとされる。

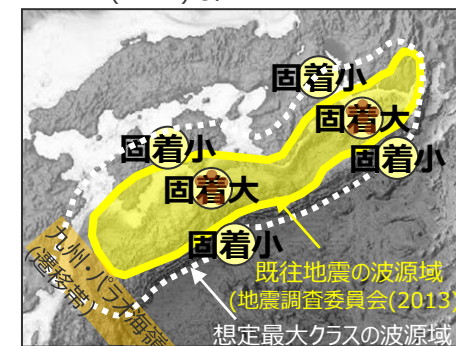
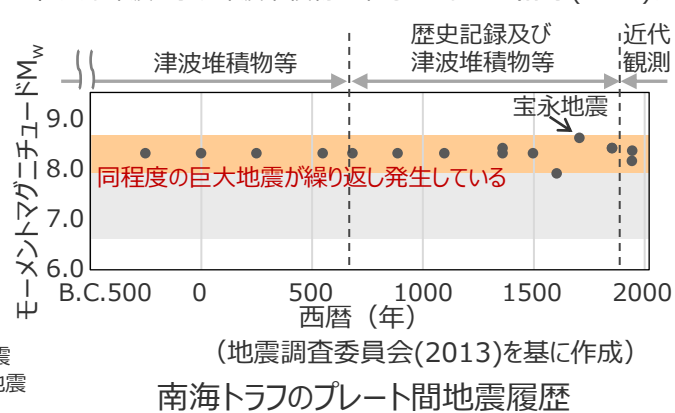
▶ 国内外の巨大地震が発生する沈み込み帯 (東北沖)

- ・津波堆積物の調査により、過去2,500年間で4回の巨大津波による津波堆積物が確認されている。(地震調査委員会(2019))



▶ 南海トラフ

- ・過去4000年間に、浜松平野と太田川低地では、3~4m程度の浜堤を大きく超えて広域に分布する巨大な津波を示す津波堆積物は確認されない。(藤原(2013)、Fujiwara et al. (2020)等)



南海トラフの既往地震の波源域 (黄) と、沈み込み帯の固着、構造境界との関係

【検討波源モデルにおける保守的設定】@地震規模

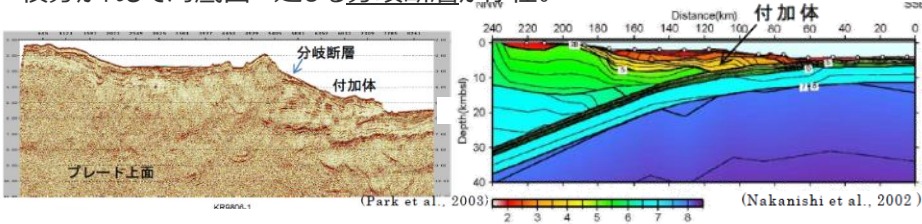
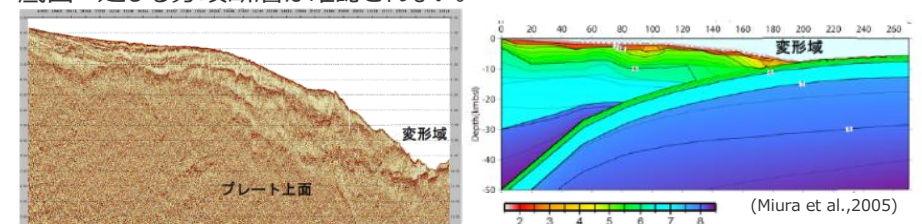
- 調査結果からは、南海トラフの痕跡高を再現する痕跡再現モデルの津波が最大クラスの津波として想定され、南海トラフでは宝永地震等と大きく異なる地震が発生する可能性は低いと考えられるが、不確かさとして南海トラフの波源の広がり最大限考慮した上で、東北沖地震 (Mw9.0) と同等以上の規模の地震を考慮することとした。

2 基準断層モデルの設定 検討波源モデル設定の考え方

(検討波源モデルにおける保守的設定 (㊀浅部の破壊形態))

【国内外の巨大地震に関する最新知見の確認結果】㊀浅部の破壊形態

■ 付加作用が卓越する南海トラフと造構性侵食作用が卓越する東北沖とは、地震時における浅部のすべり挙動が異なると考えられる。 ・詳細は第1109回 補足説明資料6-4章参照

項目	(A)南海トラフ (付加作用が卓越する沈み込み帯)	(B)東北沖 (造構性侵食作用が卓越する沈み込み帯)
(1)海溝軸付近の構造	<ul style="list-style-type: none"> 低速度の付加体が発達。 海溝軸へ抜けるプレート境界面浅部と、プレート境界面から付加体内に枝分かれして海底面へ延びる分岐断層が存在。 	<ul style="list-style-type: none"> 比較的高速度の島弧地殻が分布し、付加体は未発達。 海溝軸へ抜けるプレート境界面浅部が存在。一方、付加体内に枝分かれして海底面へ延びる分岐断層は確認されない。 
(2)海溝軸付近の固着状況	付加体が分布する領域であり、応力を蓄積しにくい領域と考えられる。	島弧地殻が分布する領域であり、応力を蓄積しやすい領域と考えられる。
(3)海溝軸付近の断層すべり	プレート境界面浅部および分岐断層のボーリング試料の分析から、過去に大きな津波発生の要因となる断層すべりは発生していないことを示す痕跡が確認されている。	地震履歴から、プレート境界面浅部で大きな断層すべりの発生が確認されている。
(4)動力学解析による海溝軸付近のすべり挙動	付加体の幅が広いことが要因となり、プレート境界面浅部のすべりは主部断層よりも抑制される傾向にある。また、分岐断層のすべり量は主部断層よりも更に抑制される傾向にある。	付加体の幅が狭いことが要因となり、プレート境界面浅部のすべりは、主部断層よりも促進される。
(5)海溝軸付近の断層間物質	南海トラフと東北沖のボーリング試料の材料分析及び高速摩擦実験の結果、東北沖は南海トラフに比べてプレート境界面浅部で大きなすべりを起こしやすいとされる。	

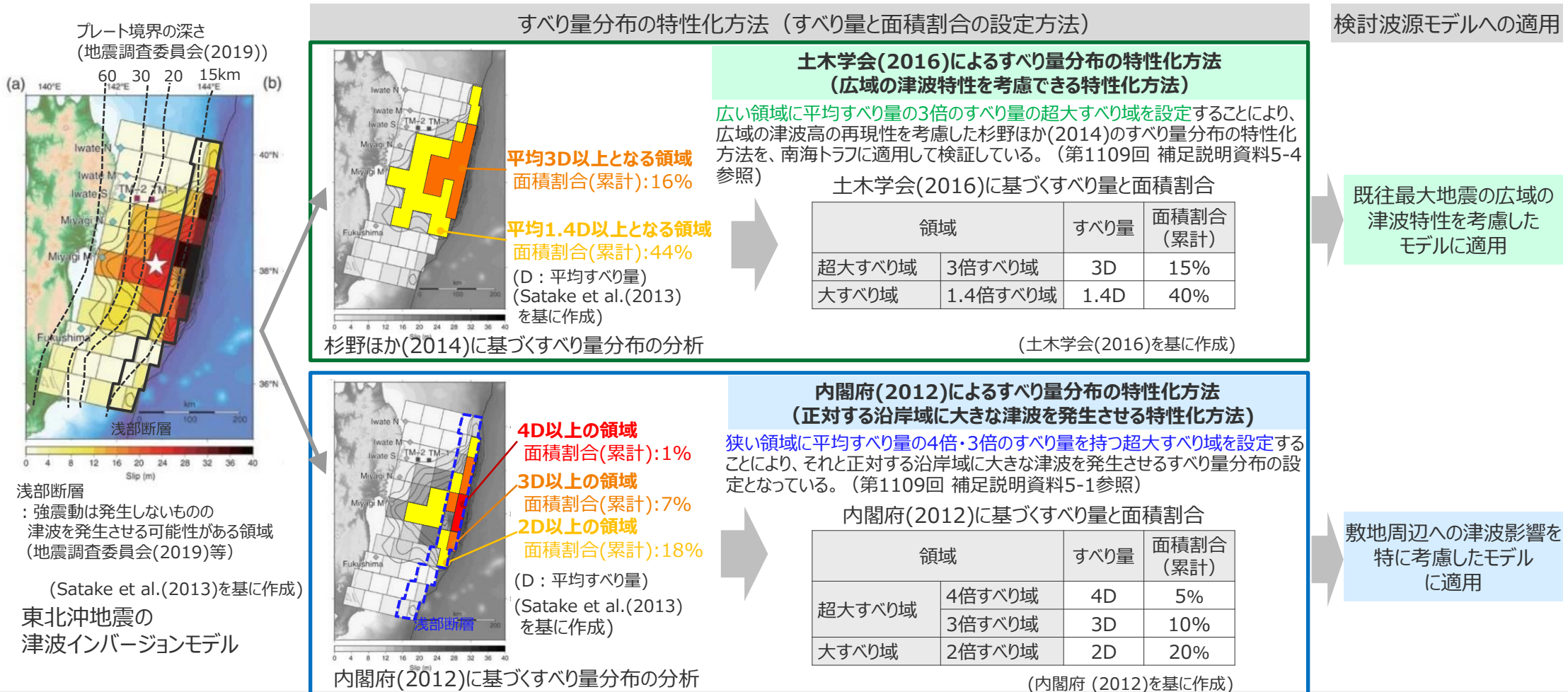
浅部の破壊形態に関する検討結果	付加作用が卓越する南海トラフでは、海溝軸付近において付加体が分布し、浅部の破壊形態に応じて以下のすべり挙動が考えられる。		造構性侵食作用が卓越する東北沖では、海溝軸付近において島弧地殻が分布し、浅部の破壊形態に応じて以下のすべり挙動が考えられる。	
	断層破壊が プレート境界面浅部へ伝播する形態 プレート境界面浅部のすべりは、主部断層よりも抑制される	断層破壊が 分岐断層へ伝播する形態 分岐断層のすべりは、主部断層よりも抑制される	断層破壊が プレート境界面浅部へ伝播する形態 プレート境界面浅部のすべりは、主部断層よりも促進される	断層破壊が 分岐断層へ伝播する形態 分岐断層のすべりは、確認されない

【検討波源モデルにおける保守的設定】㊀浅部の破壊形態

■ 調査結果からは、(A)付加作用が卓越する沈み込み帯と、(B)造構性侵食作用が卓越する沈み込み帯とは、地震時における浅部のすべり挙動が異なると考えられるが、津波評価への反映にあたっては保守的設定として(A)(B)の沈み込み帯の浅部のすべり挙動を同時に考慮してすべり量分布を設定することとした。

2 基準断層モデルの設定 検討波源モデル設定の考え方 (検討波源モデルの設定において適用した特性化方法)

- 東北沖型のMw9クラスのプレート間地震のすべり量分布の特性化方法（すべり量と面積割合の設定方法）を南海トラフに適用した知見として、土木学会(2016)による方法と内閣府(2012)による方法とが挙げられる。
- 土木学会(2016)によるすべり量分布の特性化方法は、広い領域に平均すべり量の3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定することにより、広域の津波高の再現性を考慮した杉野ほか(2014)のすべり量分布の特性化方法を、南海トラフに適用して検証したのとなっている。
 - ➔ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルには、土木学会(2016)によるすべり量分布の特性化方法を適用した。
- 内閣府(2012)によるすべり量分布の特性化方法は、狭い領域に平均すべり量の4倍・3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定することにより、それと正対する沿岸域に大きな津波を発生させる方法であり、この超大すべり域等の位置を移動させて検討することにより、他の沿岸域もカバーする方法となっている。
 - ➔ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルには、内閣府(2012)によるすべり量分布の特性化方法を適用した。



2 基準断層モデルの設定

検討波源モデルの設定結果

- 検討波源モデルの断層パラメーター一覧は以下のとおり。
- 検討波源モデルは、まず、既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル（検討波源モデルC）を設定したうえで、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル（検討波源モデルA、B、D）を設定した。

より敷地への影響が大きいモデルを設定

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

(広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの
超すべり域の深さを反映したモデルも設定)

検討波源モデルC	
<ul style="list-style-type: none"> ・3倍すべり域を広域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播 	
波源モデル	
面積 (km ²)	144,379
地震モーメント (Nm)	6.7×10^{22}
Mw	9.2
平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0
平均すべり量 (m) ※2	12.6
最大すべり量 (m) ※3	31.3
剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
破壊伝播速度 (km/s)	2.0
ライズタイム (s)	150

検討波源モデルA	検討波源モデルB-1	検討波源モデルB-2	検討波源モデルD
<ul style="list-style-type: none"> ・4倍すべり域を東海域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播 	<ul style="list-style-type: none"> ・4倍すべり域を東海域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部・東海断層系に伝播 	<ul style="list-style-type: none"> ・4倍すべり域を東海域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯に伝播 	<ul style="list-style-type: none"> ・4倍すべり域を東海域に設定 ・超すべり域の深さを広域モデルと同じとした
144,379	144,379	144,379	144,379
6.2×10^{22}	5.3×10^{22}	6.1×10^{22}	6.0×10^{22}
9.1	9.1	9.1	9.1
3.0	3.0	3.0	3.0
12.1	10.9	12.0	11.8
41.7	37.5	41.7	41.7
4.1×10^{10}	4.1×10^{10}	4.1×10^{10}	4.1×10^{10}
2.0	2.0	2.0	2.0
150	150	150	150

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量
 ※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積に基づき算出
 ※3 東海地域の最大すべり量を記載

大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディを実施し、基準断層モデルを選定 (2.3章)

2 基準断層モデルの設定 検討波源モデルの設定結果 (東海地域のすべり量分布)

- 設定した検討波源モデルについて、敷地への影響が支配的である東海地域のすべり量分布は以下のとおり。
- 検討波源モデルは、まず、既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル（検討波源モデルC）を設定したうえで、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル（検討波源モデルA、B、D）を設定した。

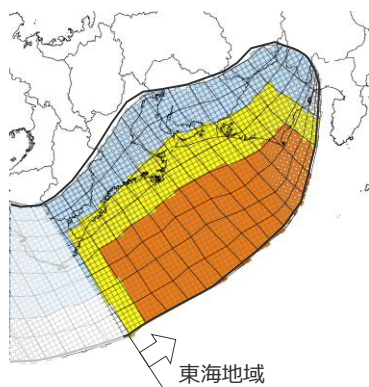
・なお、大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。

より敷地への影響が大きいモデルを設定

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

検討波源モデルC

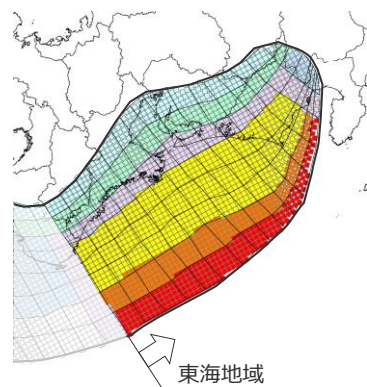
- ・3倍すべり域を広域に設定
- ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播



敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

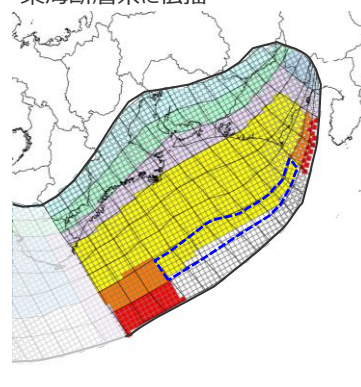
検討波源モデルA

- ・4倍すべり域を東海地域に設定
- ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播



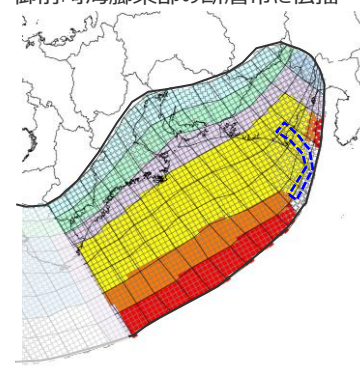
検討波源モデルB-1

- ・4倍すべり域を東海地域に設定
- ・断層破壊がプレート境界面浅部・東海断層系に伝播



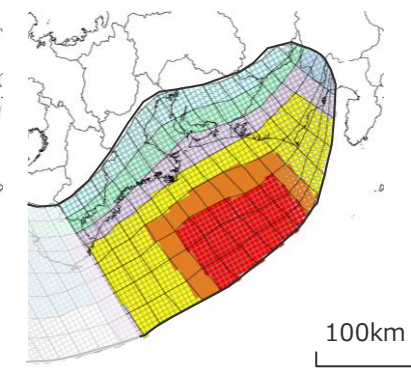
検討波源モデルB-2

- ・4倍すべり域を東海地域に設定
- ・断層破壊がプレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯に伝播



検討波源モデルD

- ・4倍すべり域を東海地域に設定
- ・超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした



(広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

- : 4倍すべり域
- : 3倍すべり域
- : 2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域
- : 遷移領域
- : 背景領域
- : 深い背景領域
- : 最も深い背景領域
- : 浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)
- : 分岐断層

2 基準断層モデルの設定 基準断層モデルの選定結果 (水位上昇側)

■ 水位上昇側の大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの影響が大きいことを確認し、そのうち敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、基準断層モデルとして設定した。

- ① 敷地前面への影響が大きいケース： 基準断層モデル1-1～1-5（検討波源モデルA、大すべり域1箇所）
- ② 1～5号取水槽への影響が大きいケース： 基準断層モデル3-1～3-3（検討波源モデルD、大すべり域1箇所）

・大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果の詳細は、2.3章参照。

➤ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

モデル名	大すべり域の数	最大上昇水位(T.P. m)					備考
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルC (3倍すべり域を広域に設定したモデル)	東海地域、 南海地域： 1箇所	12.4	5.3	7.6	7.6	9.5	東海地域の大すべり域を東へ60km

より敷地への影響が大きいモデルを設定

➤ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

検討波源モデルA (4倍すべり域を東海地域に設定したモデル)	東海地域： 1箇所	19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ40km	⇒基準断層モデル1-1
		19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ30km	⇒基準断層モデル1-2
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ20km	⇒基準断層モデル1-3
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ10km	⇒基準断層モデル1-4
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	基準位置	⇒基準断層モデル1-5
検討波源モデルB-1 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層 (東海断層系) に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	10.7	4.6	6.5	6.5	8.4	東海地域の大すべり域を西へ20km	
	東海地域： 2箇所	14.5	3.6	6.2	6.4	8.7	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離100km	
検討波源モデルB-2 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層 (御前崎海脚東部の断層帯) に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	11.1	4.9	6.6	6.4	7.7	東海地域の大すべり域を東へ40km	
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	東海地域： 1箇所	16.4	6.0	8.7	9.3	11.2	東海地域の大すべり域を東へ70km	⇒基準断層モデル3-1
		16.5	6.2	8.7	9.3	11.3	東海地域の大すべり域を東へ60km	⇒基準断層モデル3-2
		16.5	6.1	8.7	9.2	11.2	東海地域の大すべり域を東へ50km	⇒基準断層モデル3-3
	東海地域： 2箇所	15.7	5.0	8.0	7.7	9.5	東海地域の大すべり域を東へ60km移動、大すべり域間の距離80km	

・太字：各評価地点において最も値の大きいケース
・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

■：評価地点における最大上昇水位が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
(赤字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値)

2 基準断層モデルの設定 基準断層モデルの選定結果 (水位下降側)

■ 水位下降側の大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの影響が大きいことを確認し、そのうち敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、基準断層モデルとして設定した。

③3、4号取水塔への影響が大きいケース： 基準断層モデル2-1～2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所の場合）
基準断層モデル4-1（検討波源モデルD、大すべり域2箇所の場合）

・大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果の詳細は、2.3章参照。

➤ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

モデル名	大すべり域の数	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
		3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルC (3倍すべり域を広域に設定したモデル)	東海地域、 南海地域： 1箇所	海底面(11.4min)	海底面(10.1min)	東海地域の大すべり域を東へ60km

より敷地への影響が大きいモデルを設定

➤ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

検討波源モデルA (4倍すべり域を東海域に設定したモデル)	東海地域： 1箇所	海底面(7.1min)	海底面(6.9min)	東海地域の大すべり域を西へ40km	
	東海地域： 2箇所	海底面(12.6min)	海底面(12.5min)	東海地域 <small>の敷地に近い</small> 大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離130km	⇒基準断層モデル2-1
		海底面(12.5min)	海底面(12.5min)	東海地域 <small>の敷地に近い</small> 大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離140km	⇒基準断層モデル2-2
検討波源モデルB-1 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(東海断層系)に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	海底面(5.5min)	海底面(5.5min)	東海地域の大すべり域を西へ10km	
	東海地域： 2箇所	海底面(11.9min)	海底面(11.9min)	東海地域 <small>の敷地に近い</small> 大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離120km	
検討波源モデルB-2 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(御前崎海脚東部の断層帯)に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	海底面(8.7min)	海底面(8.7min)	東海地域の大すべり域を西へ40km	
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	東海地域： 1箇所	海底面(9.3min)	海底面(9.2min)	東海地域の大すべり域を西へ10km	
	東海地域： 2箇所	海底面(12.5min)	海底面(12.3min)	東海地域 <small>の敷地に近い</small> 大すべり域基準位置、大すべり域間の距離140km	⇒基準断層モデル4-1

・太字：各評価地点において最も値の大きいケース
 ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮
 ・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

□：評価地点における水位低下時間が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
 (青字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値)

目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

2.1 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定

プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定 (本編1章)

基準断層モデルの設定 (本編2章)

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定
(本編2.1章)

・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの
超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定
(本編2.2章)

・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

基準断層モデルの設定 (本編2.3章)
(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルC）。

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

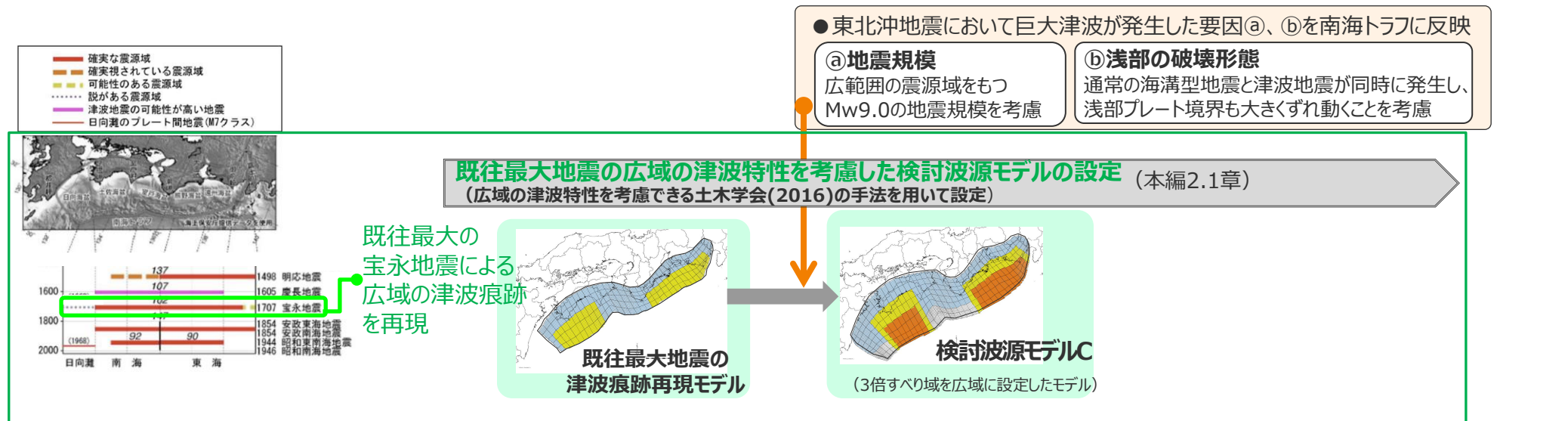
・敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域位置のパラメータスタディを実施することにより、基準断層モデルを設定。

・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）のパラメータスタディを、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、内閣府の最大クラスモデルとの比較を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

2.1 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 検討概要

- まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルC(Mw9クラス)を設定した。
- 既往最大地震の津波痕跡再現モデルは、宝永地震の南海トラフ広域の津波痕跡高に基づき、広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法（超大すべり域のないMw8クラスのすべり量分布の特性化方法）を用いて設定した。
- 検討波源モデルCは、既往最大地震の津波痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（㉔地震規模、㉕浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮することとし、土木学会(2016)の手法（超大すべり域のあるMw9クラスのすべり量分布の特性化方法）を用いて設定した。



目次

[プレート間地震の津波評価]

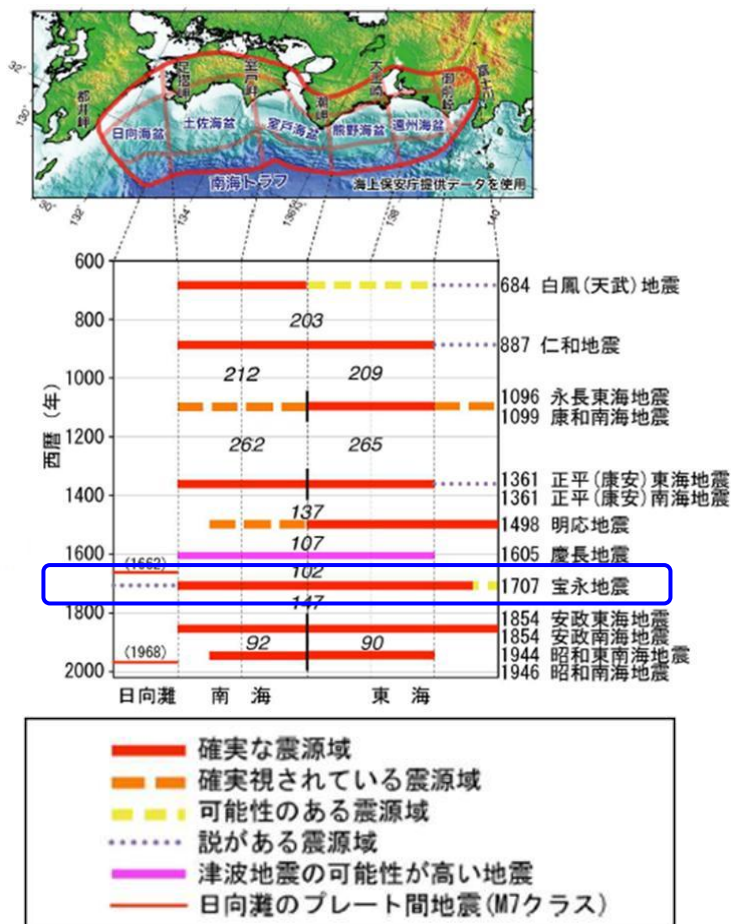
1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

2.1.1 既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討

既往最大地震の津波痕跡再現モデル

(検討方針)

- 南海トラフでは、歴史記録から、M8級の巨大地震が100～200年間隔で繰り返し発生していることが分かっているとされ、このうち、東海地域・南海地域の震源域が同時に破壊した宝永地震が既往最大規模の地震とされる。(地震調査委員会(2013))
- ここでは、南海トラフ広域の津波に着目し、南海トラフの東海地域・南海地域の震源域が同時に破壊した既往最大規模の宝永地震による南海トラフの沿岸域の津波痕跡高を再現した「既往最大地震の津波痕跡再現モデル」を検討する。



(地震調査委員会(2013))

歴史記録に基づく南海トラフの地震履歴

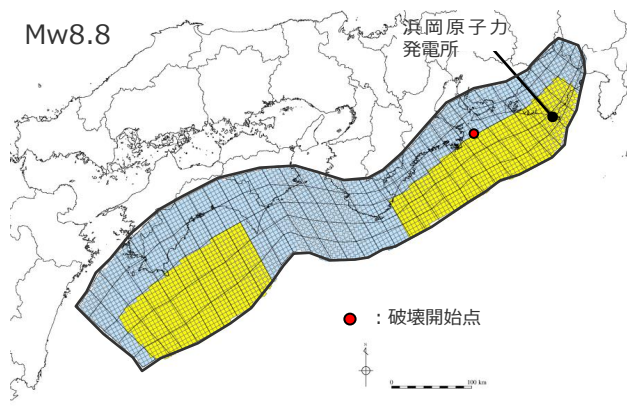


南海トラフの沿岸域における宝永地震の津波痕跡地点

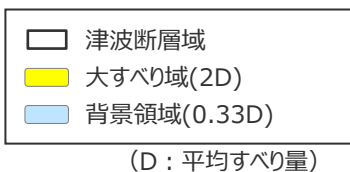
2.1.1 既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討

既往最大地震の津波痕跡再現モデルの設定 (設定方法)

- 既往最大地震の津波痕跡再現モデル（特性化モデル）の設定フローを、以下に示す。
- 南海トラフ広域の津波痕跡高を再現するために、すべり量分布の特性化には、東北沖地震等を事例として広域の痕跡の再現性を検討した特性化モデル（杉野ほか(2014)）を南海トラフに適用した土木学会(2016)の手法（Mw8.8以下の波源モデルの設定手法）を用いた。
なお、土木学会(2016)の手法は、大すべり域と背景領域との境界部等に遷移領域を設定しない手法となっている。

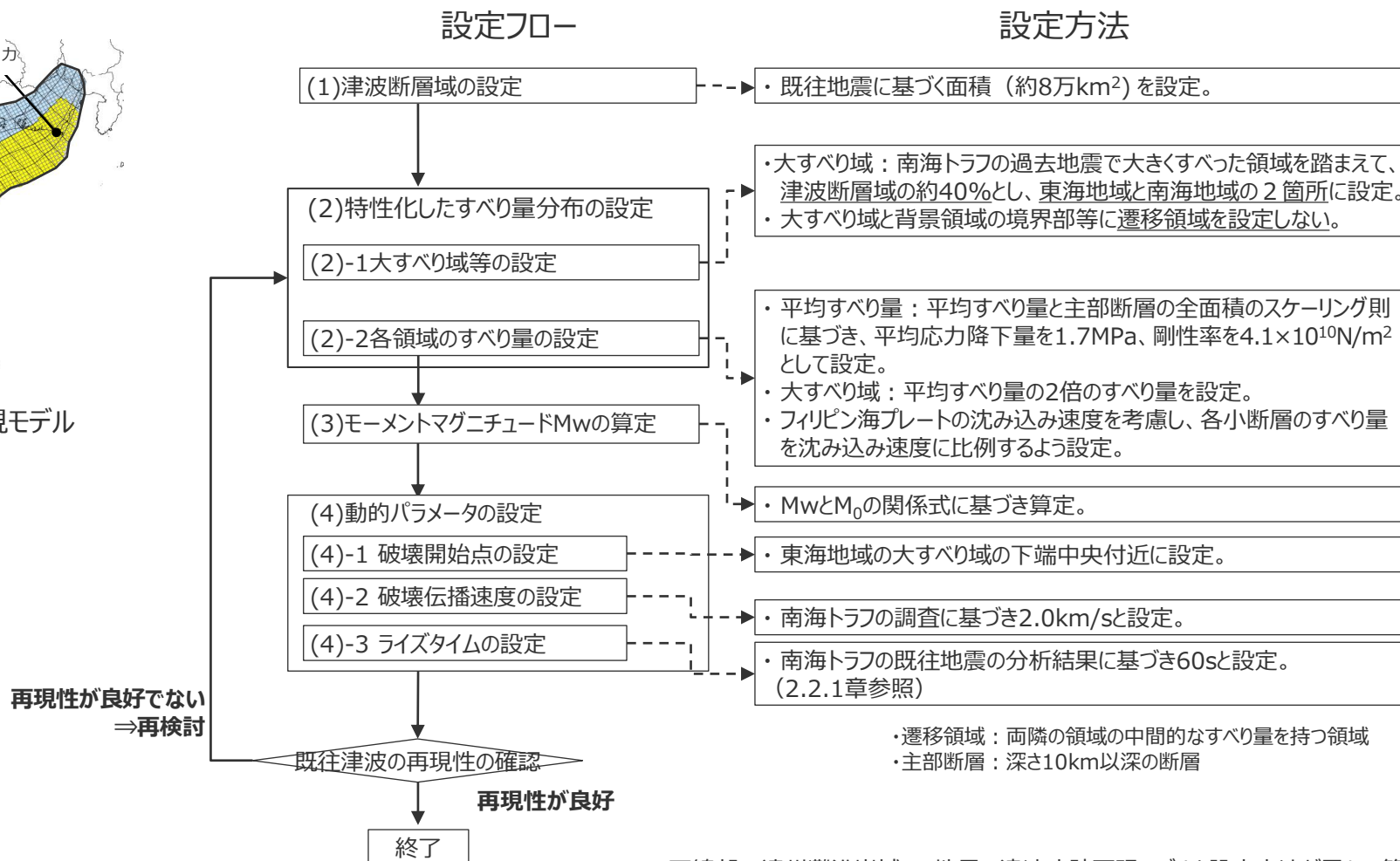


既往最大地震の津波痕跡再現モデル
(特性化モデル)



設定フロー

設定方法

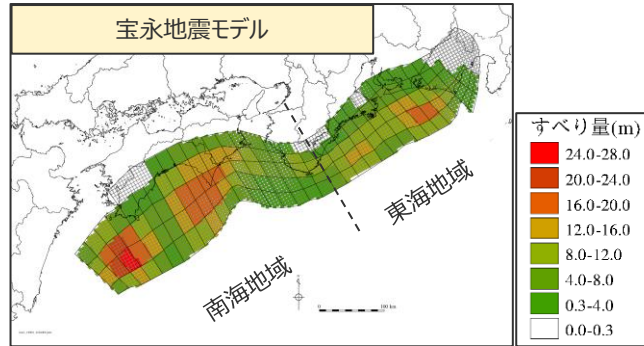


下線部：遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルと設定方法が異なる箇所

2.1.1 既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討

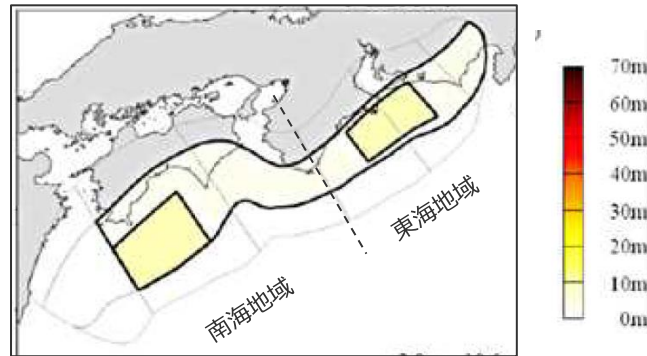
既往最大地震の津波痕跡再現モデルの設定 (大すべり域の位置)

■ 既往最大地震の津波痕跡再現モデルの大すべり域は、南海トラフ広域の津波痕跡高を再現するため、宝永地震の津波を再現するモデルにおいて大きくすべった領域を踏まえて、東海地域では遠州灘沖～紀伊半島沖に、南海地域では室戸岬沖～日向灘沖に設定した。



(内閣府(2015)に基づき作成)

宝永地震を再現するインバージョンモデル



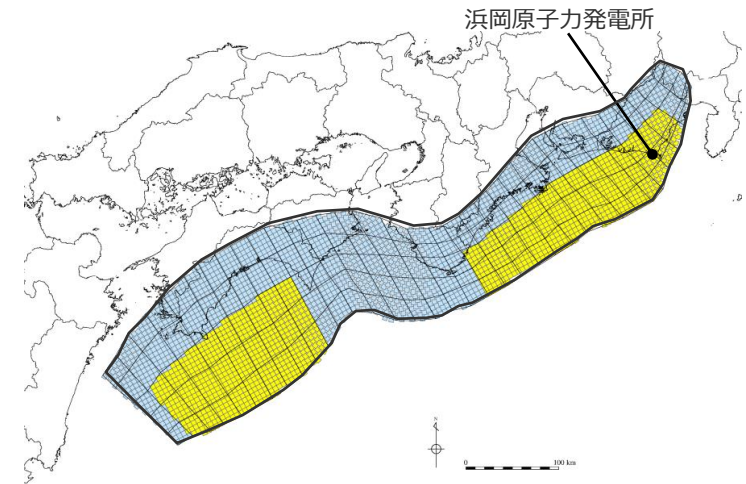
(地震調査委員会(2020))

宝永地震の津波を再現する特性化モデル

(地震調査委員会(2020)が設定した南海トラフの約3,000ケースの特性化波源モデルの中で、宝永地震による津波と類似する津波評価が得られるとされる波源モデル)

内閣府(2015)および地震調査委員会(2020)により推定されている宝永地震モデルの大きくすべった領域は、東海地域では遠州灘沖～紀伊半島沖の深さ約10～20kmの領域に、南海地域では室戸岬沖～日向灘沖の深さ約10～20kmの領域に推定されている。

【既往最大地震の津波痕跡再現モデルの設定】
・大すべり域は、津波断層域の全面積の約40%の面積で、遠州灘沖～紀伊半島沖および室戸岬沖～日向灘沖の深さ約20kmより浅い側の領域に設定した。(各大すべり域の面積比は1:1)



既往最大地震の津波痕跡再現モデル

津波断層域 ➡ 82,604km²

大すべり域 ➡ 津波断層域の全面積の約40%

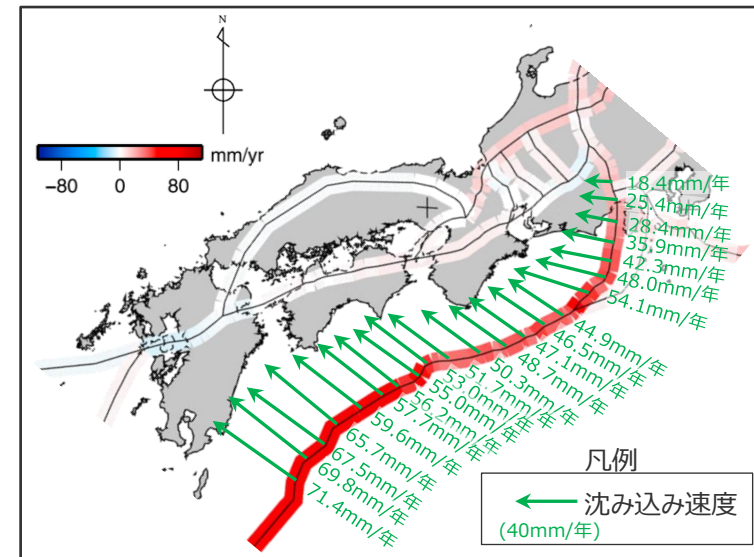
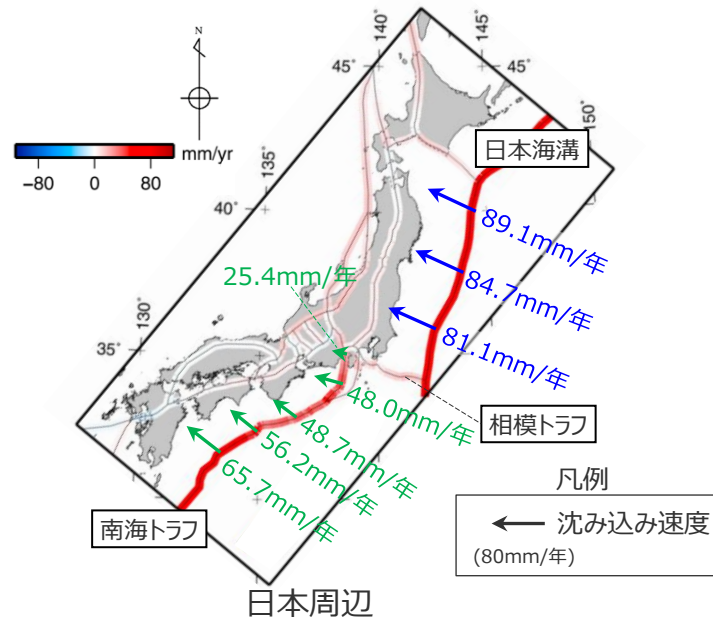
津波断層域 大すべり域 背景領域

2.1.1 既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討

既往最大地震の津波痕跡再現モデルの設定

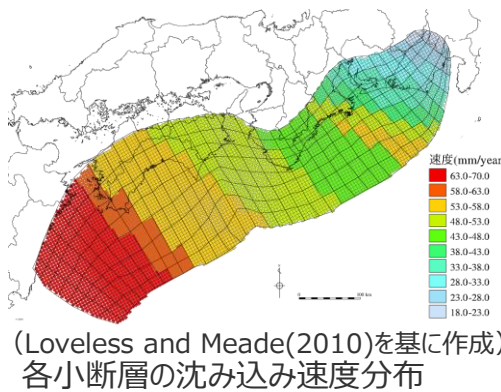
(すべり量分布の設定)

- プレート運動の観測結果によると、南海トラフでは、駿河湾から日向灘に向かって次第に大きな速度でプレートが沈み込んでおり、地域に依らずほぼ一樣の速度でプレートが沈み込んでいる日本海溝等とは特徴が異なる。(Loveless and Meade(2010))
 - 地震調査委員会(2013)では、宝永地震等による大地震の推定すべり量とその発生間隔から計算される長期的な断層のすべり速度は、プレートの沈み込み速度と矛盾しないとされるなど、南海トラフの大地震のすべり量とプレートの沈み込み速度とは関連があるとの議論がなされている。
- ⇒ 痕跡再現モデルの検討にあたっては、プレートの沈み込み速度を考慮して断層すべり量を検討することとした。



プレートの沈み込み速度分布の観測結果 (Loveless and Meade(2010)を基に作成)

各小断層の沈み込み速度分布 (mm/年)



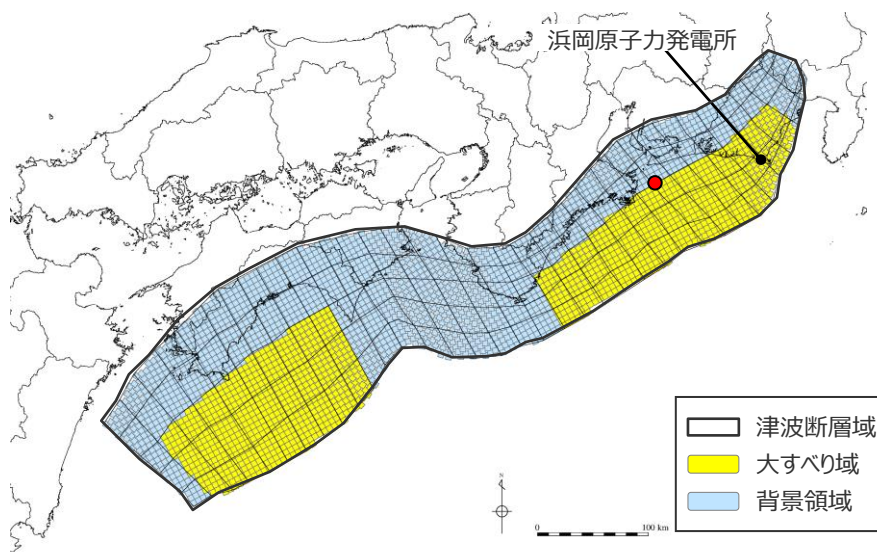
深度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
40km	1	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	57.7	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	28.4	28.4	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4		
30km	2	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	35.9	28.4	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4	
20km	3	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	56.2	56.2	55.0	53.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	44.9	44.9	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	35.9	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4
10km	4	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	54.1	48.0	48.0	42.3	35.9	35.9	35.9	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4	
5km	5	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	44.9	54.1	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4
10km	6	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	54.1	54.1	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4
5km	7	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	53.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	44.9	54.1	54.1	54.1	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4	
0km	8	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	53.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	44.9	44.9	54.1	54.1	54.1	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4	

(Loveless and Meade(2010)を基に作成)

・津波断層面の各小断層には、南海トラフの沈み込み速度の分布を表現できるよう考慮された内閣府(2012)のものを用いた。

既往最大地震の津波痕跡再現モデルの設定

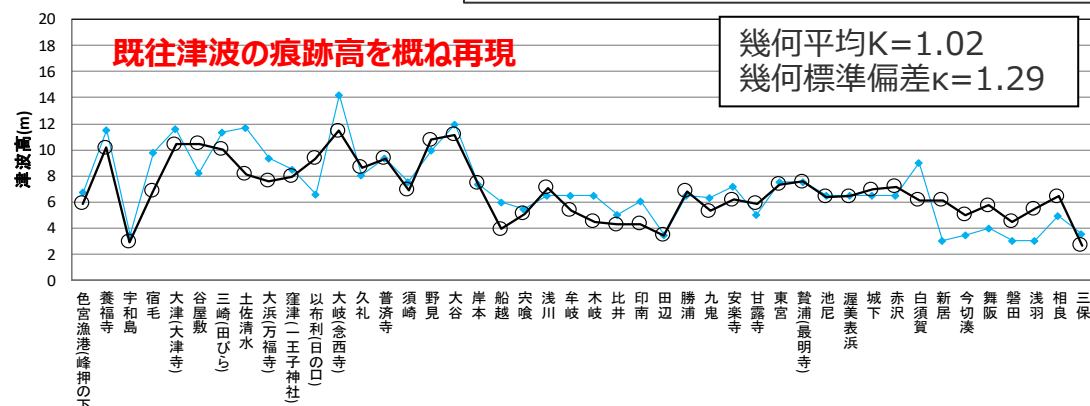
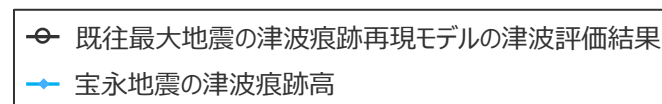
- 津波断層域は、既往地震に基づく面積（約8万km²）を設定。
- 大すべり域（平均すべり量の2倍のすべり量を有する領域）を津波断層域の全面積の約40%の面積で、既往地震に基づき東海地域では遠州灘沖～紀伊半島沖に、南海地域では室戸岬沖～日向灘沖に設定。
- フィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮し、平均応力降下量を1.7MPaとして、各小断層のすべり量が沈み込み速度に比例するよう設定。



● : 破壊開始点

既往最大地震の津波痕跡再現モデル（特性化モデル）の波源モデル

・詳細は、第1109回 補足説明資料7章に記載。



既往最大地震の津波痕跡再現モデル（特性化モデル）による海岸線の津波高と宝永地震の痕跡高との比較

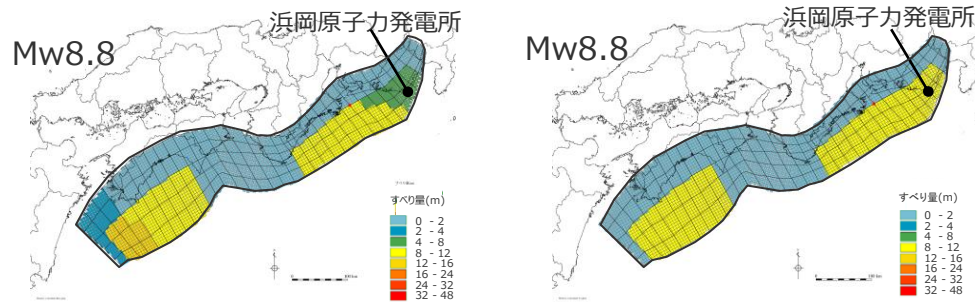
- ・宝永地震の痕跡高には、当社が調査した遠州灘沿岸域の痕跡高（「歴史記録および津波堆積物に関する調査」参照）、および、南海トラフの沿岸域において土木学会(2016)が整理した津波痕跡データベースの信頼度A・Bの痕跡高を用いた。なお、土木学会(2016)では、津波高と痕跡高との比較を行うために、津波痕跡データベースの信頼度A・Bの痕跡高について、近傍の複数の痕跡を集約する等の整理を行っている。
- ・土木学会(2016)による再現性の目安： $0.95 < K < 1.05$ 、 $\kappa < 1.45$

南海トラフの沿岸域全域で確認されている既往最大規模の宝永地震の津波痕跡高を概ね再現できることを確認。

2.1.1 既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討

既往最大地震の津波痕跡再現モデルのすべり量分布設定の妥当性確認 (プレートの沈み込み速度を考慮しないモデルとの比較結果)

- 「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」と「プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル」の解析結果について、南海トラフの沿岸域全域における津波痕跡の再現性指標 $K \cdot \kappa$ を確認した。その結果、 K は応力降下量の増減に応じて減増するが、 κ は「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」の方が小さく、痕跡高に対して計算水位の空間分布の妥当性が高いことを確認した。
- なお、「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」の中でも平均応力降下量を1.7MPaとした「既往最大地震の津波痕跡再現モデル」は、 K の数値が土木学会(2016)による再現性の目安(0.95~1.05)の概ね中央値となっていることから、痕跡高に対して計算水位が平均的に同じ程度であり、南海トラフの沿岸域全域における津波痕跡を良好に再現するモデルとなっている。



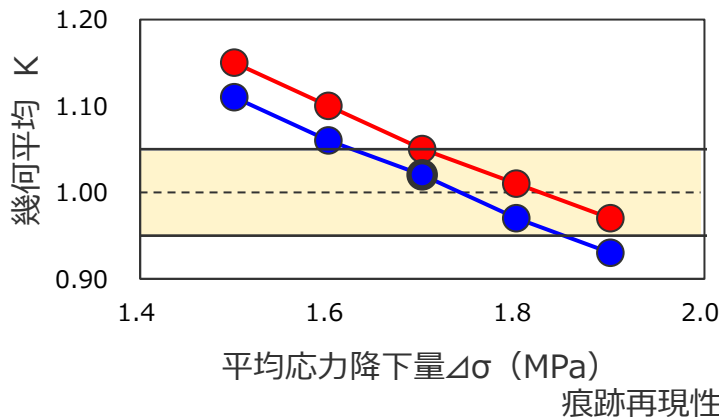
プレートの沈み込み速度を考慮したモデル
($\Delta\sigma = 1.7\text{MPa}$ の例)

プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
($\Delta\sigma = 1.7\text{MPa}$ の例)

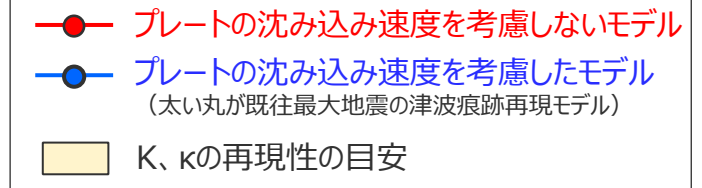
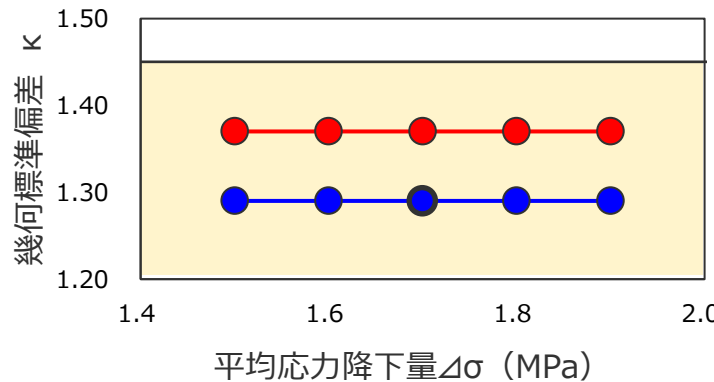
解析結果の南海トラフの沿岸域全域の痕跡再現性指標 (K, κ)

項目	プレートの沈み込み速度を考慮したモデル	プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル	
すべり量分布	沈み込み速度を考慮して設定	沈み込み速度を考慮せず設定	
平均応力降下量	1.5MPa	$K=1.11, \kappa=1.29$	$K=1.15, \kappa=1.37$
	1.6MPa	$K=1.06, \kappa=1.29$	$K=1.10, \kappa=1.37$
	1.7MPa	$K=1.02, \kappa=1.29$ (既往最大地震の津波痕跡再現モデル)	$K=1.05, \kappa=1.37$
	1.8MPa	$K=0.97, \kappa=1.29$	$K=1.01, \kappa=1.37$
	1.9MPa	$K=0.93, \kappa=1.29$	$K=0.97, \kappa=1.37$

・土木学会(2016)による再現性の目安: $0.95 < K < 1.05, \kappa < 1.45$



痕跡再現性指標の分布



K : 痕跡高/計算水位の空間分布の平均値を表す指標。
 K が小さいほど、痕跡高に対して、計算水位が平均的に大きい。
 κ : 痕跡高/計算水位の空間分布のばらつきを表す指標。
 κ が小さいほど、痕跡高に対して、計算水位の空間分布の妥当性が高い。

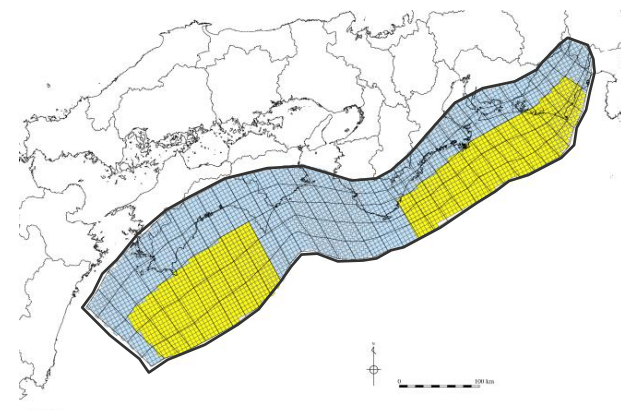
以上から、既往最大地震の津波痕跡再現モデルにおいて、プレートの沈み込み速度を考慮したすべり量分布を設定することの妥当性を確認した。

既往最大地震の津波痕跡再現モデルの設定

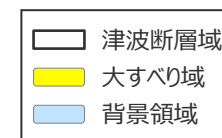
(断層パラメータ)

既往最大地震の津波痕跡再現モデル
の断層パラメータ

項目	設定値
面積 (km ²)	82,604
地震モーメント (Nm)	1.7×10^{22}
Mw	8.8
平均応力降下量 (MPa)	1.7
平均すべり量 (m)	5.0
最大すべり量 (m)	12.7
剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
破壊伝播速度 (km/s)	2.0
ライズタイム (s)	60



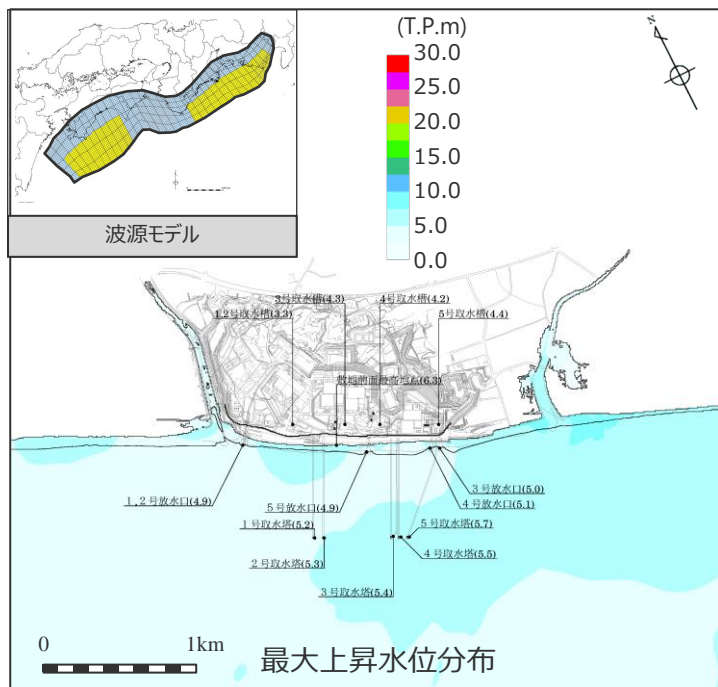
既往最大地震の津波痕跡再現モデル



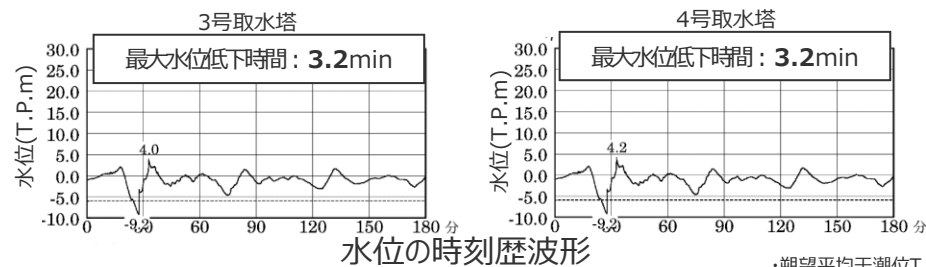
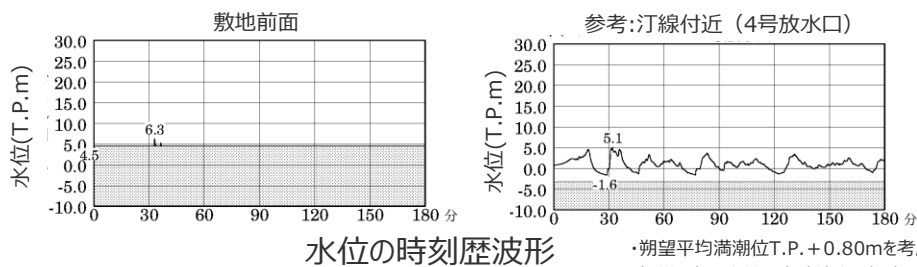
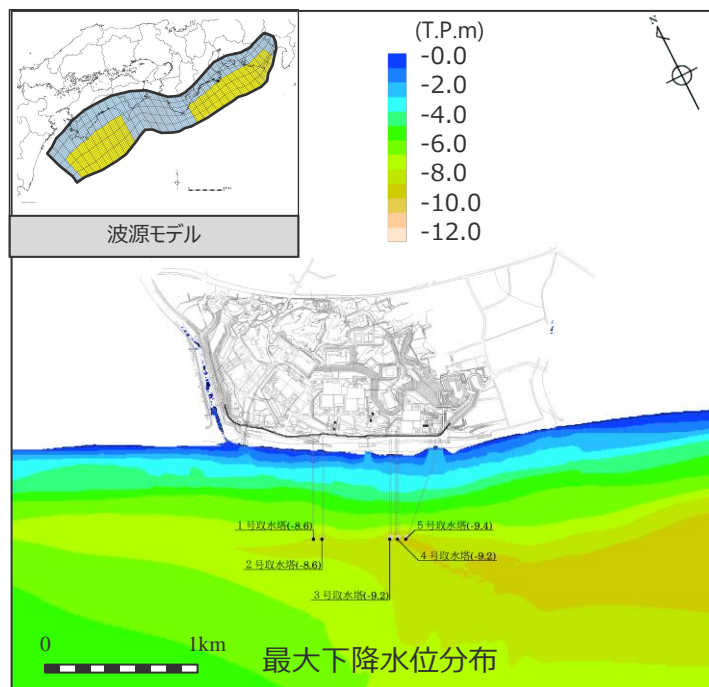
2.1.1 既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討

既往最大地震の津波痕跡再現モデルによる敷地への影響

【水位上昇側】



【水位下降側】



最大上昇水位(T.P. m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
6.3	3.3	4.3	4.2	4.4

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (3.2min)	海底面 (3.2min)

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮
・点線は取水塔呑口 下端レベル

・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

目次

[プレート間地震の津波評価]

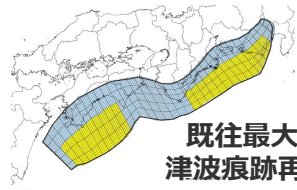
1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

2.1.2 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルCの設定

■ 検討波源モデルCは、南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、広域の津波に着目した既往最大地震の津波痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）として設定した。

痕跡再現モデル

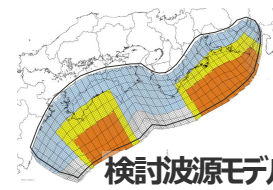
■ 歴史記録および津波堆積物に基づき、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映されている南海トラフの津波痕跡高を再現するモデル（Mw8クラス）



既往最大地震の
津波痕跡再現モデル

検討波源モデル

■ 南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映された痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）



検討波源モデルC

項目	パラメータ設定		設定根拠
	既往最大地震の津波痕跡再現モデル	検討波源モデルC	
認識論的 不確かさ	面積	約8万km ²	<ul style="list-style-type: none"> 南海トラフでは、宝永地震等と大きく異なる地震が発生する可能性は低いと考えられるが、不確かさとして南海トラフの波源の広がりを見限考慮した上で、土木学会（2016）手法に基づき、東北沖地震と同等以上の規模の地震を考慮した。 <small>（第1109回 補足5-6章 ③南海トラフの津波堆積物等に関する最新知見の整理 第1109回補足6-3章 国内外の巨大地震に関する最新の科学的知見の収集・分析）</small> 付加作用が卓越する南海トラフと造構性侵食作用が卓越する東北沖とでは浅部のすべり挙動が異なる考えられるが、保守的に東北沖地震の特徴を踏まえた浅部の破壊形態を考慮した。なお、検討波源モデルA・Bの津波評価の結果から、敷地への影響が大きい「断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する」場合を対象とした。 <small>（第1109回 補足6-4章 浅部の破壊形態）</small> ライズタイムに着目した東北沖地震の津波インバージョンの結果、ライズタイムを60sとした津波インバージョンでは観測記録を再現できず、ライズタイムを150～200s程度とするのが最も適切であることを確認した。 <small>（第1109回 補足6-5章 ライズタイムの設定）</small>
	地震規模	Mw8.8	
	すべり量	約9m	
	ライズタイム （すべり速度）	60s (0.15m/s)	
	浅部の 破壊形態	破壊せず	
	超大すべり域・ 大すべり域の位置	東海地域：駿河湾～紀伊半島沖 南海地域：室戸岬沖～日向灘沖 (超大すべり域は無し)	
偶然的 不確かさ	破壊伝播速度	2.0km/s	<ul style="list-style-type: none"> 歴史記録および津波堆積物に基づき、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映されている痕跡再現モデル（既往最大地震の津波痕跡再現モデル）に基づき設定した。
	破壊開始点	大すべり域の下端中央	

・すべり量：超大すべり域のすべり量。超大すべり域が無いモデルについては、大すべり域のすべり量
 ・すべり速度：(すべり量)/(ライズタイム) ：検討波源モデルにおいて、不確かさとして保守的に考慮したパラメータ

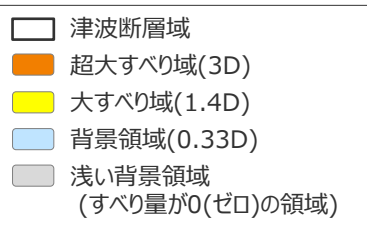
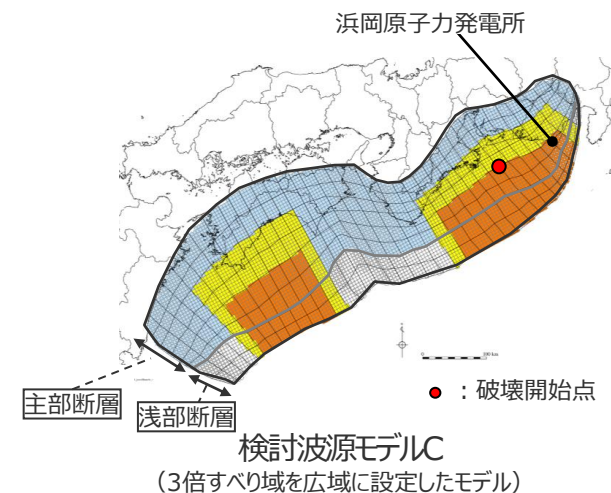
2.1.2 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルCの設定 (設定方法)

- 検討波源モデルCの設定フローを、以下に示す。
- 検討波源モデルCは、南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）として設定した。すべり量分布には、土木学会(2016)によるMw9クラスの地震のすべり量分布の特性化方法（特性化されたすべり量と面積割合の設定方法）を適用した。
- なお、検討波源モデルCは、土木学会(2016)に従い、大すべり域と背景領域との境界部等に遷移領域を設定しないモデルとなっている。

・検討波源モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-1章を参照。

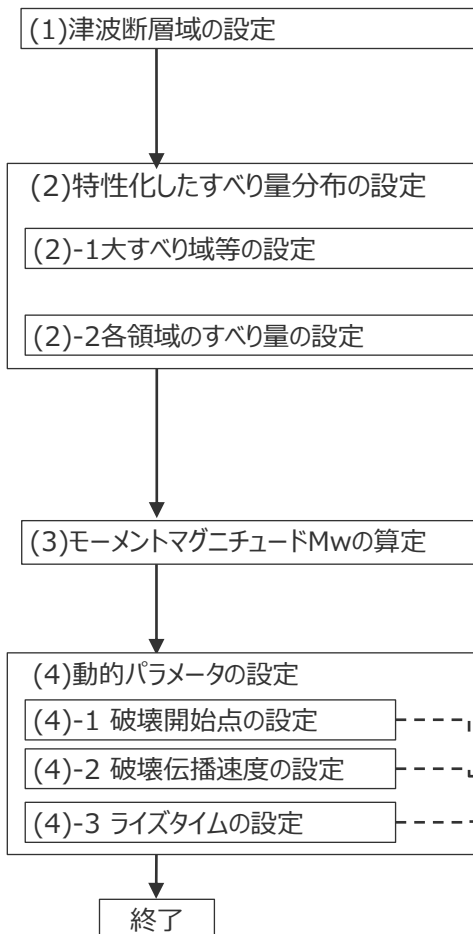
設定フロー

設定方法



(D : 主部断層の平均すべり量)

主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層



・既往地震に基づく面積（約8万km²）を拡大して南海トラフの波源の広がりを最大限考慮し設定。
(津波断層域の面積S：約14万km²
そのうち、深さ10km以深の主部断層：約10万km²
深さ10km以浅の浅部断層：約4万km²)

・大すべり域(1.4D)：南海トラフの過去地震で大きくすべった領域を踏まえて、主部断層の約40%として隣接する浅部断層にも拡大し、基準位置として東海地域と南海地域の2箇所に設定。
・中間大すべり域：なし。
・超大すべり域(3D)：主部断層の約15%として隣接する浅部断層にも拡大し、大すべり域の中のトラフ沿いの領域に設定。
(超大すべり域(3D)は深さ15kmまでの領域に設定)
・大すべり域と背景領域の境界部等に遷移領域を設定しない。

・平均すべり量：平均すべり量と主部断層の全面積のスケールリング則に基づき、平均応力降下量 $\Delta\sigma$ を3MPa、剛性率 μ を 4.1×10^{10} N/m²として設定。
・大すべり域(1.4D)：平均すべり量の1.4倍のすべり量を設定。
・中間大すべり域：なし。
・超大すべり域(3D)：平均すべり量の3倍のすべり量を設定。
・南海トラフの調査に基づきフィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮し、各小断層のすべり量を沈み込み速度に比例するよう設定。
・浅部断層の浅い背景領域にはすべり量を設定しない。

・MwとM₀の関係式に基づき算定。
・東海地域の大すべり域の下端中央付近に設定。
・南海トラフの調査に基づき2.0km/sと設定。
・国内外の巨大地震を踏まえ150sと設定。

下線部：検討波源モデルAと設定方法が異なる箇所

・大すべり域の面積には、超大すべり域の面積を含む。

2.1.2 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルCの設定 (大すべり域の位置)

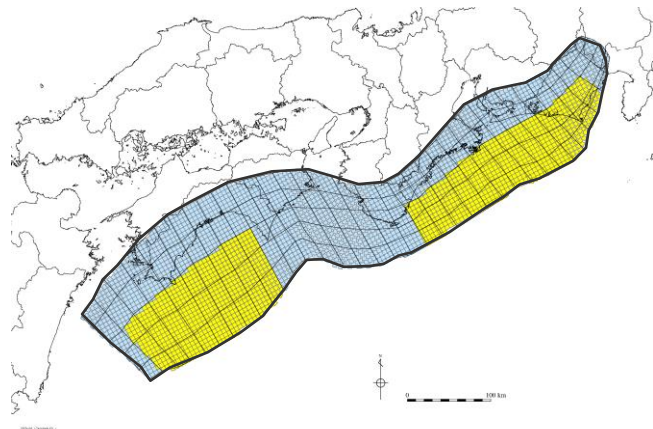
■ 検討波源モデルCの大すべり域は、既往最大地震の津波痕跡再現モデルに基づき、トラフ軸付近の浅部断層を含めた領域に設定し、これを基準位置とした。

・なお、大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。(本編2.3章)

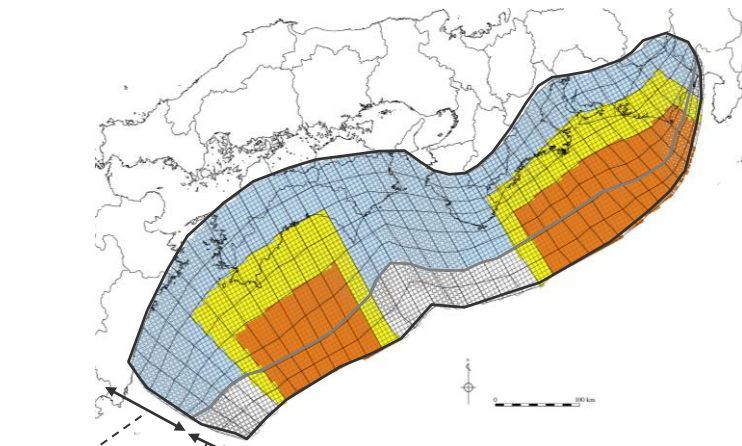
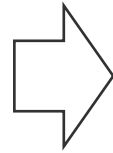
【検討波源モデルCの設定】

- ・大すべり域(1.4D)は、主部断層の全面積の約40%の面積で、遠州灘沖～紀伊半島沖および室戸岬沖～日向灘沖の深さ約20kmより浅い側の領域に設定した。(各大すべり域の面積比は1:1)
- ・超大すべり域(3D)は、主部断層の全面積の約15%の面積で、大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域に設定した。

・D：主部断層の平均すべり量



既往最大地震の津波痕跡再現モデル



主部断層 浅部断層 検討波源モデルC

■ 層：深さ10km以深の断層
■ 層：深さ10km以浅の断層

- | | | |
|-------------|---|---|
| 津波断層域 | ➔ | 144,379km ² |
| 大すべり域(1.4D) | ➔ | 主部断層の全面積の約40% ¹⁾ とし、浅部断層まで拡大 |
| 超大すべり域(3D) | ➔ | 主部断層の全面積の約15%とし、浅部断層まで拡大 |
- 1) 大すべり域の面積には、超大すべり域の面積を含む。

■ 津波断層域 ■ 超大すべり域 ■ 大すべり域 ■ 背景領域 ■ 浅い背景領域 (すべり量が0 (ゼロ) の領域)

・検討波源モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-1章を参照。

2.1.2 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルCの設定 (ライズタイムの設定)

津波評価におけるライズタイムに関する知見

- 津波評価におけるライズタイムに関する知見について整理した。

国内外のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例

⇒ 近年のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンから推定されるライズタイムはすべり量が大きい小断層ほど長く、大きくすべった領域の小断層のライズタイムは150～300sであることを確認した。

東北沖地震のライズタイムに関する分析

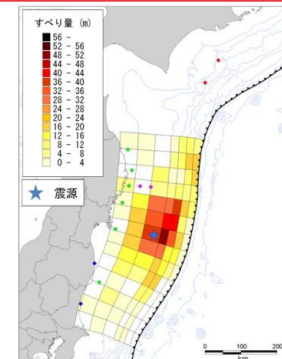
⇒ 東北沖地震の津波観測波形を対象として、タイムウィンドウの幅・個数を細かく設定して津波のタイムウィンドウバージョンを実施した結果、東北沖地震のライズタイムとしては150～200s程度が最も適切であるとともに、ライズタイムを60sとした場合の津波インバージョンでは津波観測波形を再現できないことを確認した。

⇒ 東北沖地震の再現モデルについて、すべり量を変更せずにライズタイムを60sと極端に短く設定すると、東北沖地震の津波の周期・波長等の物理特性は失われるとともに、東北沖地震の観測記録の津波高を大幅に上回ることを確認し、Mw9クラスの地震に対して内閣府のライズタイムの設定は過大な設定となっていることを確認した。

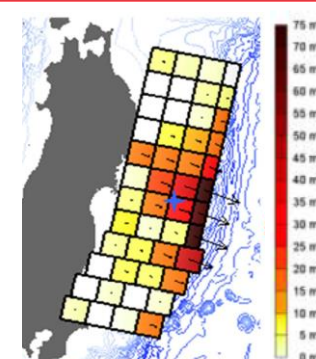
国内外の巨大地震・津波のライズタイムの推定事例および東北沖地震のライズタイムに関する分析から推定されるライズタイムの設定：**150～300s**

検討波源モデルのライズタイムの設定方針

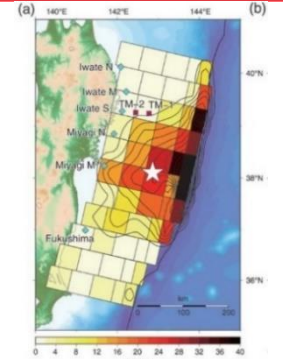
- 検討波源モデルのライズタイムは、国内外の巨大地震・津波のライズタイムの推定事例および東北沖地震のライズタイムに関する分析結果に基づき設定することとし、推定されたライズタイム150～300sのうち、最も短い150sと設定した。



ライズタイム：300s
(すべり速度：0.1m/s)
内閣府(2012b)

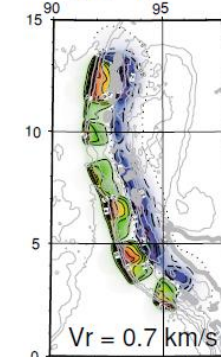


ライズタイム：300s
(すべり速度：0.2m/s)
杉野ほか(2013)

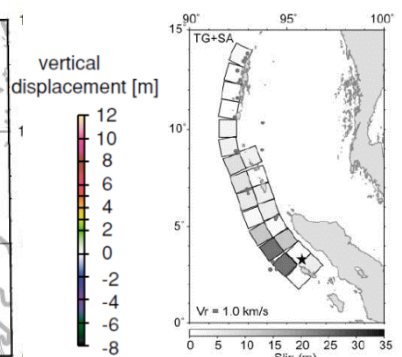


ライズタイム：150s
(すべり速度：0.3m/s)
Satake et al.(2013)

2011年東北沖地震



ライズタイム：150s
(すべり速度：0.2m/s)
Hirata et al.(2006)



ライズタイム：180s
(すべり速度：0.1m/s)
Fujii and Satake(2007)

2004年スマトラ島沖地震

巨大地震 (Mw9クラス) の津波インバージョンにより推定されたライズタイム
150～300s

・詳細は第1109回 補足説明資料6-5章を参照

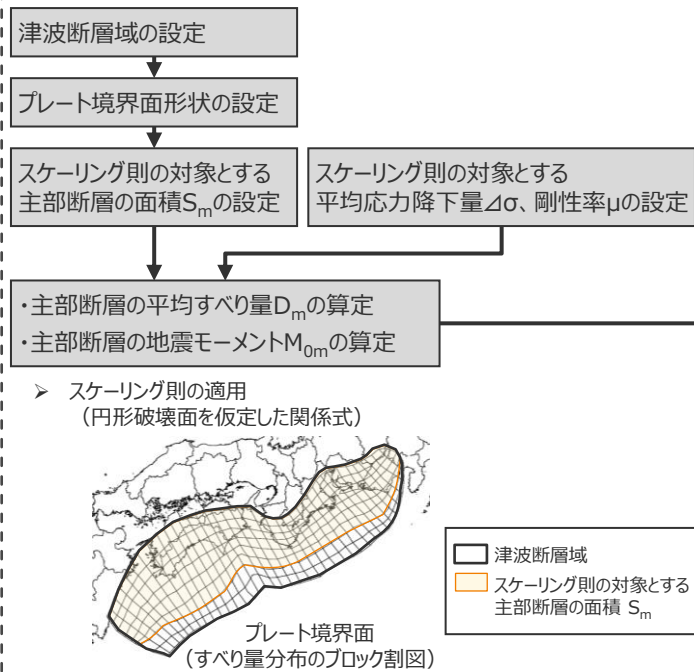
「3 動的パラメータに関するパラメータスタディ」では、ライズタイムのパラメータスタディ等を実施

2.1.2 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルCの設定

(すべり量分布の設定方法)

1. 巨視的波源特性の設定



各パラメーター一覧

項目	設定方法	設定値
津波断層域の面積S	駿河湾～日向灘沖の深さ0km～40kmの領域(浅部断層含む)	144,379(km ²)
スケーリング則の対象とする主部断層の面積 Sm	駿河湾～日向灘沖の深さ10km～40kmの領域(浅部断層除く)	109,725(km ²)
スケーリング則の対象とする平均応力降下量Δσ	内閣府(2012)、Murotani et al.(2013)	3.0(MPa)
スケーリング則の対象とする剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
主部断層の平均すべり量Dm	16/(7π ^{3/2})・Δσ・Sm ^{1/2} /μ	9.9(m)
主部断層の地震モーメント M0m	μDSm	4.5×10 ²² (Nm)

2. 微視的波源特性の設定

主部断層の各領域のすべり量の設定、地震モーメントの合計値M_{0m}の算定

➢ 断層面積S_{m3}、S_{m1.4}、S_{mb}、すべり量D_{m3}、D_{m1.4}、D_{mb}の算定、地震モーメントM_{0m3}、M_{0m1.4}、M_{0mb}の算定

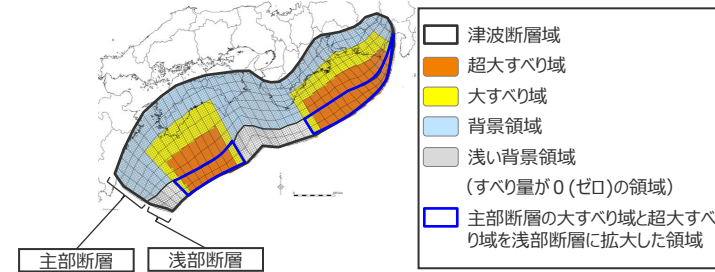
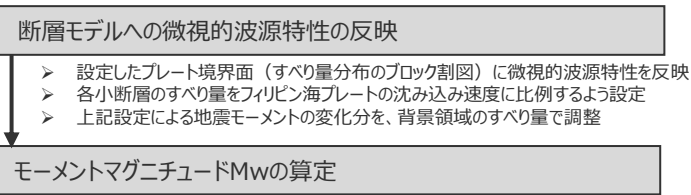
	項目	設定方法	設定値
超 大 す べ り 域	断層面積S _{m3}	主部断層の面積 S _m の15%	16,459(km ²)
	平均すべり量D _{m3}	主部断層の平均すべり量D _m の3倍	29.8(m)
	剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメントM _{0m3}	μD _{m3} S _{m3}	2.0×10 ²² (Nm)
大 す べ り 域	断層面積S _{m1.4}	主部断層面積 S _m の25%	27,431(km ²)
	平均すべり量D _{m1.4}	主部断層の平均すべり量D _m の1.4倍	13.9(m)
	剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメントM _{0m1.4}	μD _{m1.4} S _{m1.4}	1.6×10 ²² (Nm)
背 景 領 域	断層面積S _{mb}	主部断層面積 S _m の60%	65,835(km ²)
	平均すべり量D _{mb}	主部断層の平均すべり量D _m の0.33倍	3.3(m)
	剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメントM _{0mb}	μD _{mb} S _{mb}	8.9×10 ²¹ (Nm)
	主部断層の地震モーメント(M _{0m})	M _{0m3} +M _{0m1.4} +M _{0mb}	4.5×10 ²² (Nm)

浅部断層の各領域のすべり量の設定、地震モーメントの合計値M_{0s}の算定

- 主部断層の大すべり域と超大すべり域を、隣接する浅部断層に拡大 ()
- 地震モーメントM_{0s3}、M_{0s1.4}の算定

	項目	設定方法	設定値
超 大 す べ り 域	断層面積S _{s3}	主部断層の超大すべり域に隣接する領域	16,619(km ²)
	平均すべり量D _{s3}	主部断層の超大すべり域のすべり量D _{m3} と同じ	29.8(m)
	剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメントM _{0s3}	μD _{s3} S _{s3}	2.0×10 ²² (Nm)
大 す べ り 域	断層面積S _{s1.4}	主部断層の大すべり域に隣接する領域	3,584(km ²)
	平均すべり量D _{s1.4}	主部断層の大すべり域のすべり量D _{m1.4} と同じ	13.9(m)
	剛性率μ	内閣府(2012)、土木学会(2016)等	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	地震モーメントM _{0s1.4}	μD _{s1.4} S _{s1.4}	2.0×10 ²¹ (Nm)
浅い背景領域	断層面積S _{sb}	主部断層の背景領域に隣接する領域	14,452(km ²)
	地震モーメントM _{0sb}	すべり量が0(ゼロ)	0(Nm)
	浅部断層の地震モーメント(M _{0s})	M _{0s3} +M _{0s1.4} +M _{0sb}	2.2×10 ²² (Nm)

3. 検討波源モデルの設定



	項目	設定値
津波断層域全体	津波断層域の面積S	144,379(km ²)
	地震モーメントM ₀	6.7×10 ²² (Nm)
	M _w	9.2
	平均応力降下量Δσ※1	3.0(MPa)
	平均すべり量D※2	12.6(m)
	最大すべり量Dmax※3	31.3(m)
	剛性率μ	4.1×10 ¹⁰ (N/m ²)
	破壊伝播速度v _r	2.0(km/s)
	すべり角λ	フィリピン海プレートの運動方向に基づいて設定
	ライズタイムτ	150(s)
(うち、主部断層)	主部断層の面積S _m	109,725(km ²)
	地震モーメントM _{0m}	4.5×10 ²² (Nm)
	平均応力降下量Δσ _m	3.0(MPa)
	平均すべり量D _m	9.9(m)
浅部断層	最大すべり量Dmax _m ※3	31.3(m)
	浅部断層の面積S _s	34,655(km ²)
	地震モーメントM _{0s}	2.2×10 ²² (Nm)
	平均すべり量D _s ※4	27.2(m)
	最大すべり量Dmax _s ※3	31.3(m)

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量
 ※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積(129,927km²)に基づき算出
 ※3 東海地域の最大すべり量を記載
 ※4 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積(20,202km²)に基づき算出

・検討波源モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-1章を参照。

2.1.2 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルCの設定

(断層パラメータ)

検討波源モデルCの断層パラメータ

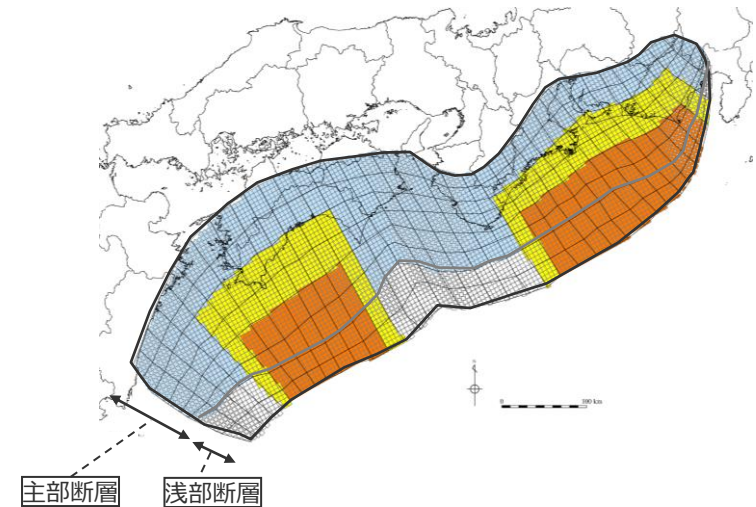
項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.7×10^{22}
	Mw	9.2
	平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	12.6
	最大すべり量 (m) ※3	31.3
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	9.9
	最大すべり量 (m) ※3	31.3
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	2.2×10^{22}
	平均すべり量 (m) ※4	27.2
	最大すべり量 (m) ※3	31.3

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

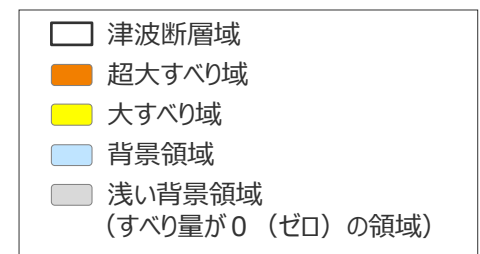
※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積(129,927km²)に基づき算出

※3 東海地域の最大すべり量を記載

※4 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積(20,202km²)に基づき算出



検討波源モデルC



主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層

目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定 (本編1章)

基準断層モデルの設定 (本編2章)

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)

・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)

・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

基準断層モデルの設定 (本編2.3章)
(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)
(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルC）。

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

・敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域位置のパラメータスタディを実施することにより、基準断層モデルを設定。

・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）のパラメータスタディを、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、内閣府の最大クラスモデルとの比較を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討概要

- 次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定した。
- 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルは、遠州灘沿岸域に大きな影響を与えた既往5地震の津波痕跡高に基づき、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)を参考とした手法(超大すべり域のないMw8クラスのすべり量分布の特性化方法)を用いて設定した。
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルは、既往最大地震の津波痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因(①地震規模、②浅部の破壊形態)を不確かさとして保守的に考慮することとし、内閣府(2012)の手法(超大すべり域のあるMw9クラスの地震のすべり量分布の特性化方法)を用いて検討波源モデルAを設定した。更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル(検討波源モデルB)を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル(検討波源モデルD)を設定した。

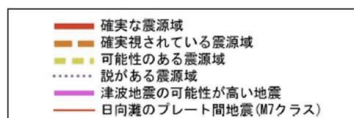
● 東北沖地震において巨大津波が発生した要因①、②を反映

①地震規模

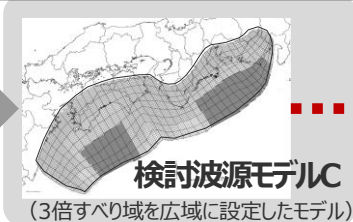
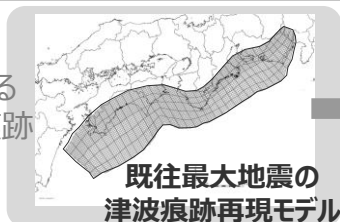
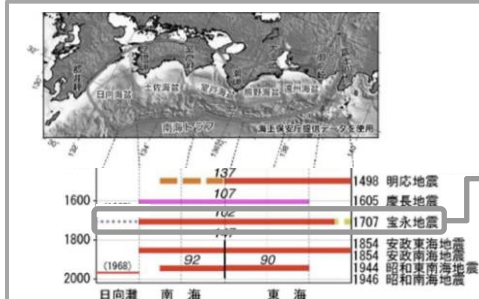
広範囲の震源域をもつ
Mw9.0の地震規模を考慮

②浅部の破壊形態

通常の高溝型地震と津波地震が同時に発生し、
浅部プレート境界も大きくずれ動くことを考慮



既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)
(広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定)

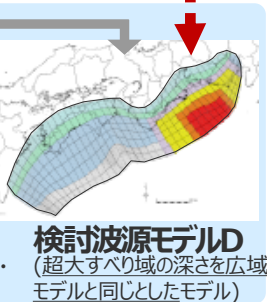
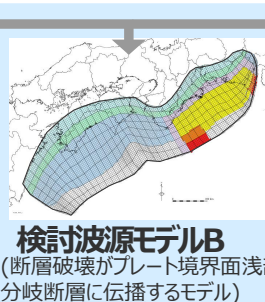
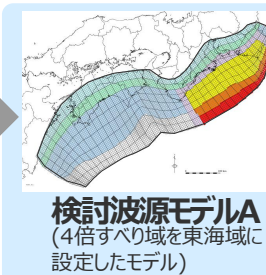
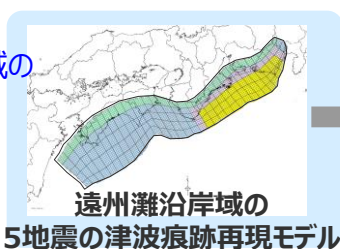
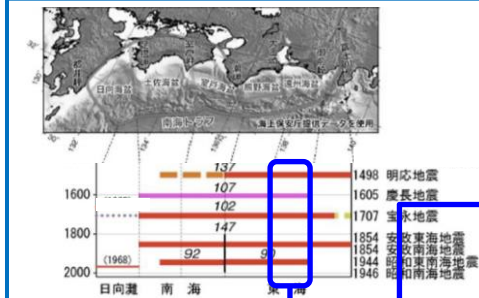


浜岡敷地では、既往最大地震である宝永地震の津波よりも、安政東海地震等の津波の方が大きいことなどを考慮し、既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデルを敷地が位置する遠州灘沿岸域において検討し、それを基にMw9クラスの検討波源モデルを設定する。

より敷地への影響が大きいモデルを設定

(敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

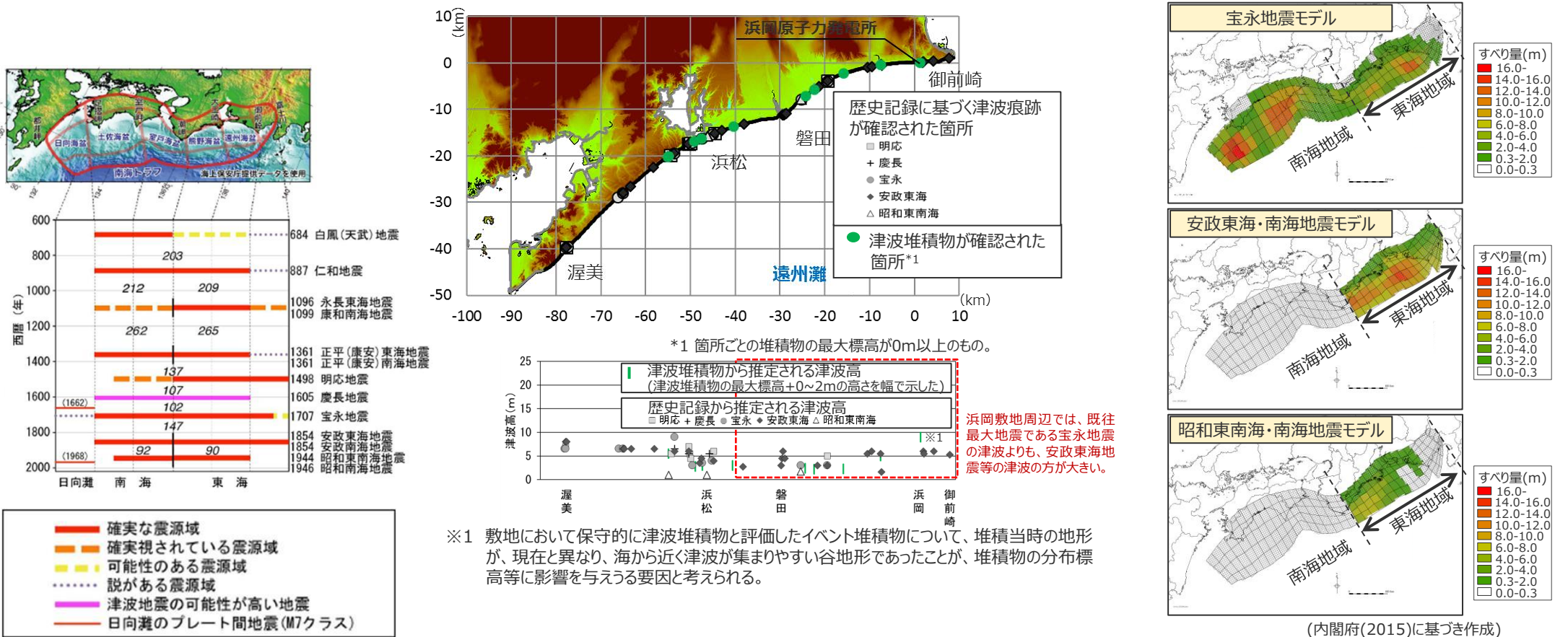
敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)
(正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定)



(地震調査委員会(2013))
歴史記録に基づく南海トラフの地震履歴

2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 敷地周辺への津波影響を特に考慮したモデルの設定方針

- 南海トラフでは、歴史記録から、宝永地震が既往最大規模の地震とされる（地震調査委員会(2013)）が、宝永地震の津波より安政東海・南海地震の津波の方が大きな地域があることも確認されており（中央防災会議(2003)等）、防災対策の観点からはそれぞれの地震を特別に区分することなく検討することが望ましい（内閣府(2012)）とされている。
 - 浜岡の敷地周辺においても、既往最大地震である宝永地震の津波よりも、安政東海地震等の津波の方が大きくなっている。また、内閣府(2015)によると、敷地周辺への影響が大きいと考えられる東海地域の波源のすべり量の推定値は、既往最大地震である宝永地震のものよりも、安政東海地震のものの方が大きくなっている。
- ⇒ここでは、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、敷地への津波影響が支配的である東海地域に着目して、まず既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデルを敷地が位置する遠州灘沿岸域において検討し、それを基にMw9クラスの検討波源モデルを設定する。



(地震調査委員会(2013))

歴史記録に基づく南海トラフの地震履歴

(内閣府(2015)に基づき作成)

・過去地震の津波を再現するインバージョンモデルのうち、東海地域のすべり量分布に着目
過去地震の津波を再現するインバージョンモデル

目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討

遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル

(検討方針)

- ここでは、既往津波の文献調査及び津波堆積物調査の結果に基づき、遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルを検討した。
- 痕跡再現モデルは、網羅的なパラメータスタディのベースとするため、**特性化モデル**として検討することとし、過去の南海トラフのプレート間地震による津波痕跡高を、その地震が発生した年代に関わらず再現することとした。

歴史記録および津波堆積物に関する調査結果

- 歴史記録及び津波堆積物に関する調査の結果、歴史記録及び津波堆積物から推定される遠州灘沿岸域の津波高は、概ね5~10mであることを確認した。

【歴史記録の文献調査の結果】

- ・ 敷地が位置する遠州灘沿岸域について、歴史記録から推定される津波高は、概ね5~10m。
- ・ なお、敷地付近の津波痕跡高は、1854年安政東海地震の御前崎市佐倉（旧浜岡町）における6m。

【津波堆積物調査の結果】

○津波堆積物に関する文献調査

- ・ 南海トラフでは、同規模の津波が数百年間隔で繰り返し発生していたことを示す津波堆積物が確認されている。
- ・ 敷地が位置する遠州灘沿岸域では、3~4m程度の浜堤を大きく超えて広域に分布する巨大な津波を示す津波堆積物は確認されず、津波の規模が時代によって顕著には変わらない結果が見られている。
- ・ 津波堆積物の標高は、約0~5m。

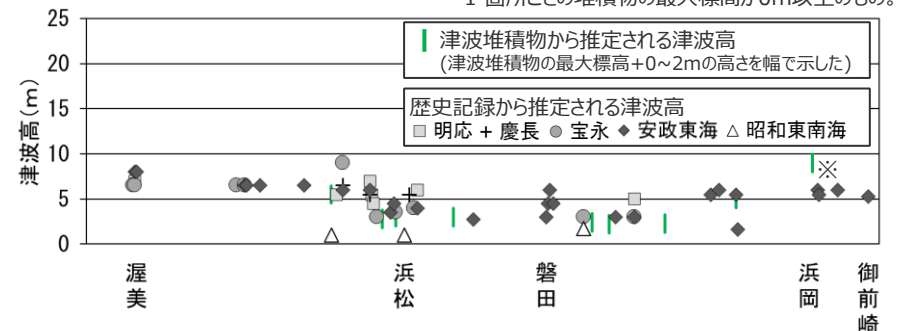
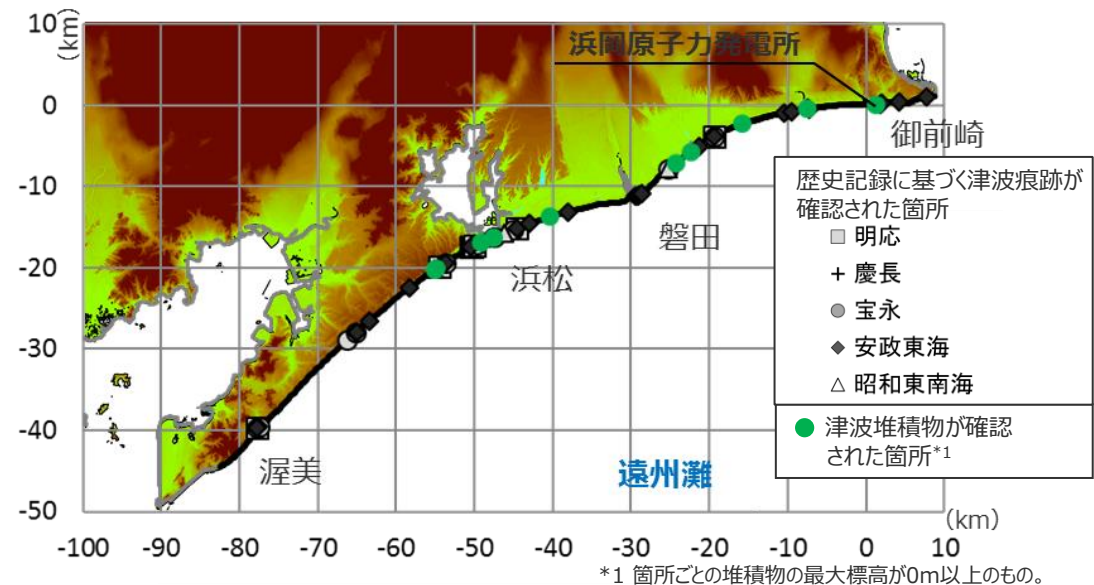
○津波堆積物に関する現地調査

- ・ 他機関による遠州灘沿岸域の津波堆積物調査と同様、巨大な津波を示す津波堆積物は確認されなかった。
- ・ 津波起因の可能性が否定できないことから保守的に津波堆積物と評価したイベント堆積物の標高は、敷地では約0~8m、菊川流域では約1~4m未満。

➡津波堆積物から推定される津波高

- ・ 東北沖地震等による津波の最大遡上高と津波堆積物の分布標高の差が約0~2mであることを踏まえると、津波堆積物から推定される遠州灘沿岸域の津波高は、概ね5~10mであることを確認した。

・ 調査の詳細は「歴史記録及び津波堆積物に関する調査について」の資料に記載。



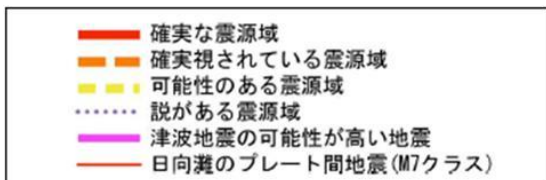
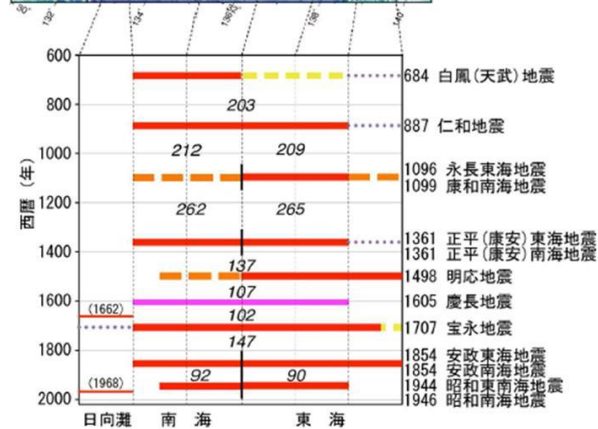
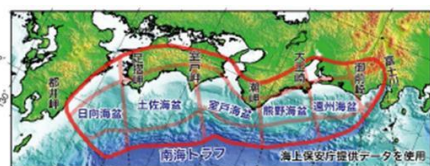
※ 敷地において保守的に津波堆積物と評価したイベント堆積物について、堆積当時の地形が、現在と異なり、海から近く津波が集まりやすい谷地形であったことが、堆積物の分布標高等に影響を与える要因と考えられる。

2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討

遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル

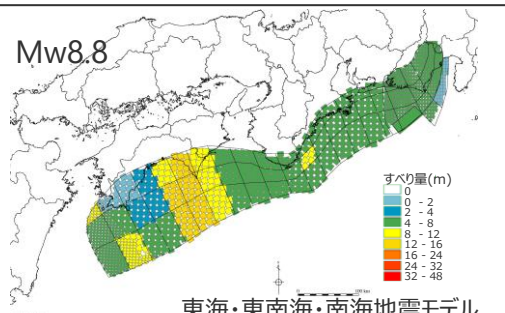
(再現対象とするプレート間地震の考え方)

- 南海トラフでは、歴史記録から、M8級の巨大地震が100～200年間隔で繰り返し発生していることが分かっているとされ、このうち、東海地域・南海地域の震源域が同時に破壊した宝永地震が既往最大規模の地震とされる。一方で、駿河湾の領域について、宝永地震では破壊しなかったが、東海地域の震源域のみが破壊したとされる安政東海地震では破壊したと推定されるなど、震源域の広がり方には多様性があるとされる。(地震調査委員会(2013))
 - 過去地震の津波について、宝永地震の津波よりも安政東海・南海地震の津波の方が大きな地域もあることが確認されており(中央防災会議(2003)等)、これを受けて、地震学的な観点ではなく、防災対策の観点からみると、それぞれの地震を特別に区分することなく検討対象とすることが望ましい(内閣府(2012))とされ、国・県の南海トラフ沿岸域の防災対策のための津波想定でも、各地域で確認されている過去の津波痕跡を、それが発生した年代に関わらず、網羅して再現するよう想定された波源モデルが採用されている。(中央防災会議(2003)、愛知県(2014)、静岡県(2015)、内閣府(2015))
- ⇒敷地周辺においても、宝永地震の津波よりも安政東海地震の津波の方が大きな地域もあることから、それぞれの地震を特別に区分することなく検討対象とすることとし、過去の南海トラフのプレート間地震による津波痕跡高を、その地震が発生した年代に関わらず再現することとした。

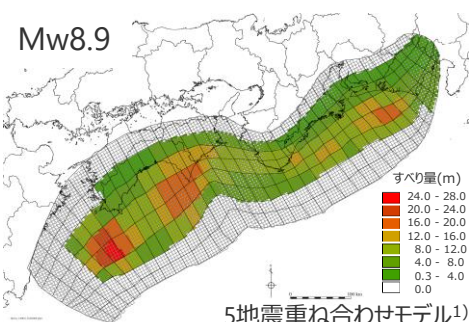


(地震調査委員会(2013))

歴史記録に基づく南海トラフの地震履歴

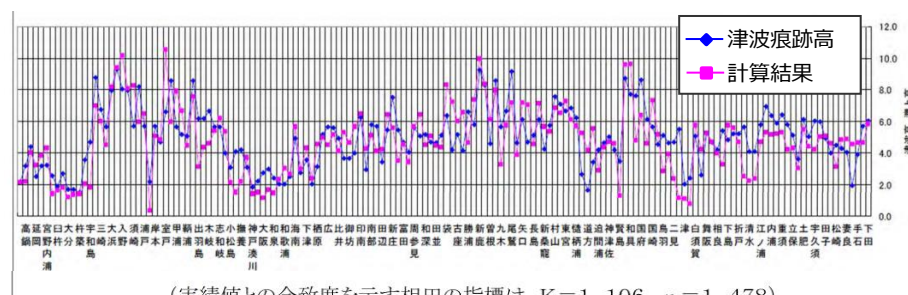


中央防災会議(2003)の津波痕跡再現モデル

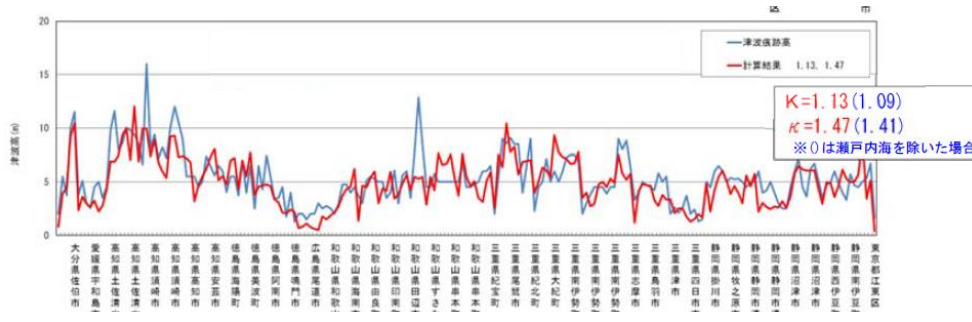


内閣府(2015)の津波痕跡再現モデル

1) 愛知県(2014)の「5地震参考モデル」、静岡県(2015)の「5地震総合モデル」と同じ



中央防災会議(2003)の津波痕跡再現モデルによる津波高と、過去の5地震による津波痕跡高との比較



内閣府(2015)の津波痕跡再現モデルによる津波高と、過去の5地震による津波痕跡高との比較

・過去の5地震：1707年宝永地震、1854年安政東海地震、1854年安政南海地震、1944年昭和東南海地震、1946年昭和南海地震

2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討

遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル

(再現対象とする地域の考え方)

■ 再現対象とする地域について、国土交通省(2019)では、広域の沿岸全体を平均的に推計できる断層モデルが、必ずしも各地域の海岸にとって再現性が高最も高いモデルではない場合があるとされ、地震調査委員会(2017a)では、広域の沿岸全体の痕跡高を説明する特性化モデルは、一部地域の痕跡高を説明できない場合があることに留意する必要があるとされる。個別地点の津波評価の技術を取りまとめた土木学会(2016)では、既往津波の痕跡高と比較する地域は、敷地周辺との海岸・海底地形の類似性を踏まえて検討の上、適切に設定するものとされている。

⇒ これらのことから、浜岡原子力発電所のプレート間地震の津波評価では、敷地周辺の海岸を中心とした津波痕跡高を再現することを重視し、その再現対象とする地域は、敷地周辺との海岸・海底地形の類似性を踏まえて検討した。

■ 浜岡原子力発電所敷地が位置する遠州灘沿岸域は、太平洋に面した直線的な海岸線が約100kmにわたって続く地域であり、南海トラフのプレート間地震による津波が一様に到来する地域と考えられる。

■ 一方、その周辺の熊野灘沿岸域、伊勢湾内、駿河湾内は、海岸線の地形的特徴が遠州灘沿岸域と大きく異なり、推定される津波の特徴も異なる。

⇒ 敷地周辺の遠州灘沿岸域の津波に着目したモデルは敷地周辺の海底地形の類似性を踏まえて、遠州灘沿岸域を再現対象とした。



敷地周辺を含む各地域の海岸線

各地域の海岸線の地形的特徴と推定される津波の特徴

項目	熊野灘沿岸域	伊勢湾内	遠州灘沿岸域	駿河湾内
地形的特徴	太平洋に面した入り組んだ海岸	湾内の海岸	太平洋に面した直線的な海岸	湾内の海岸
推定される津波の特徴	谷・岬地形による津波の集中	湾内における津波の反射・共振	一様な津波の到来	湾内における津波の反射・共振

国土交通省(2019)

- 中央防災会議や地震調査研究推進本部等の公的な機関が妥当性を検証したのとして発表している断層モデルは、広域の沿岸全体を平均的に推計できる断層モデルであり、必ずしも各地域海岸にとって再現性が高最も高いモデルではない場合がある。

地震調査委員会(2017a)

- 東北地方太平洋沖地震に伴う津波について、その観測記録(津波痕跡高)と「波源断層を特性化した津波の予測手法」に基づいて算出した津波予測計算結果を比較し、特性化波源断層モデルの妥当性を確認した。
- 青森県から千葉県にかけて抽出した痕跡高と、痕跡高の地点から最も距離の近い沿岸の計算高を比較した結果、計算高は痕跡高を概ね説明できている。ただし、特に福島県については計算高により痕跡高を十分に説明できておらず、特性化波源断層モデルの限界であると言える。特性化波源断層モデルを利用するにはこのことに留意する必要がある。

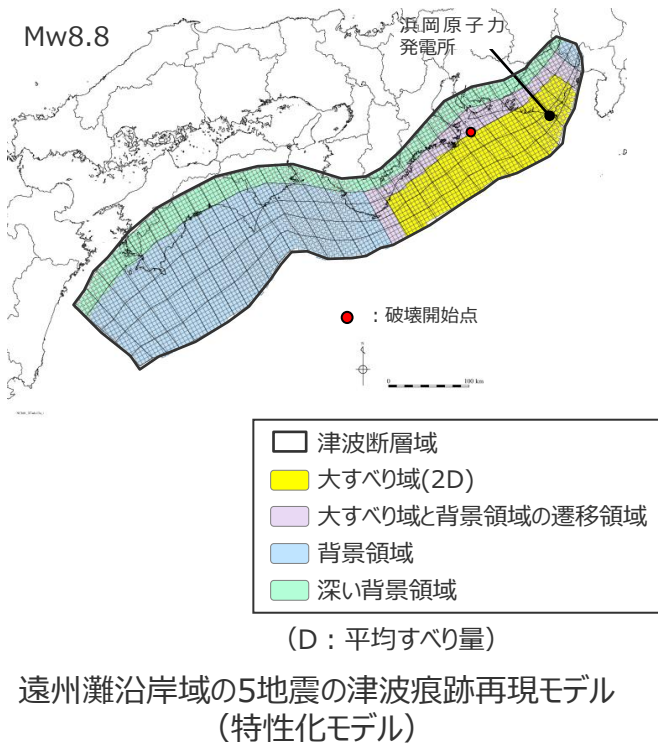
土木学会(2016)

- 既往津波の痕跡高と比較する「評価地点付近」は、評価地点に大きな影響を与えたと考えられる既往津波の痕跡高の数と分布状況、評価地点との海岸・海底地形の類似性を検討の上、適切に設定するものとする。

2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討

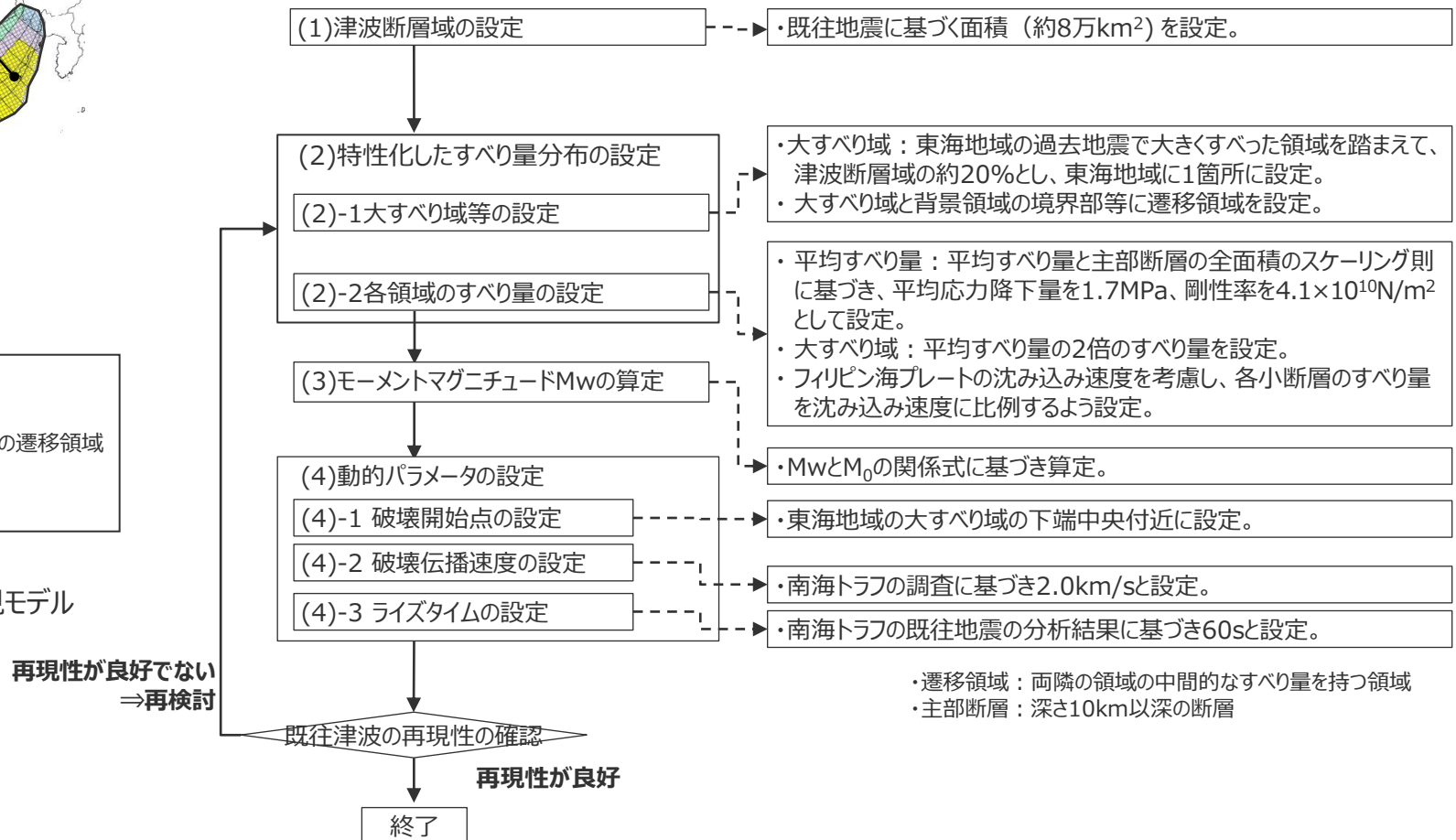
遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの設定 (設定方法)

- 文献調査及び津波堆積物調査の結果を踏まえて、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルのベースとする遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル（特性化モデル）を設定した。
- 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルは、遠州灘沿岸域に大きな影響を与えた既往5地震の津波痕跡高に基づき、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)を参考とした手法（超大すべり域のないMw8クラスのすべり量分布の特性化方法）により設定した。
- 以下に、遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの設定フローを示す。



設定フロー

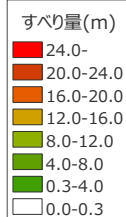
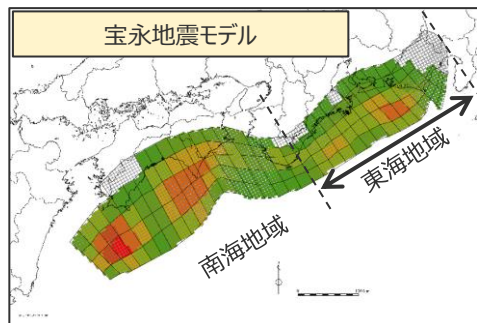
設定方法



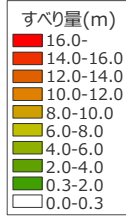
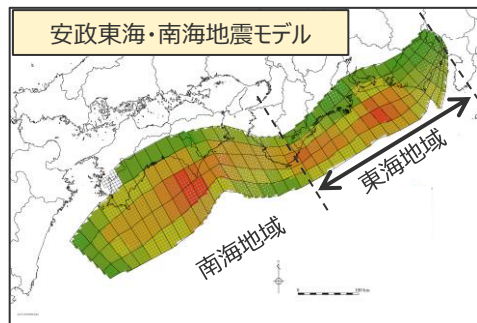
遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの設定

(大すべり域の位置)

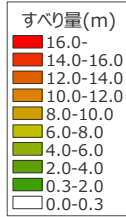
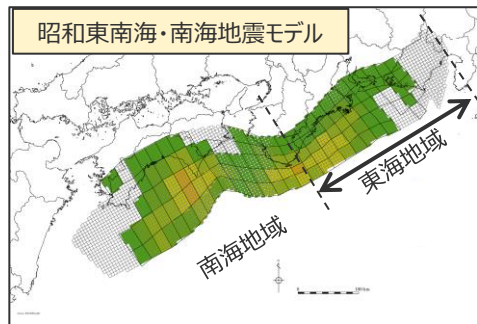
■ 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの大すべり域の位置は、再現対象地域とした遠州灘沿岸域の津波に影響が大きいと考えられる東海地域において、過去地震で大きくすべった領域を踏まえて設定した。



遠州灘沿岸域の津波に影響が大きいと考えられる東海地域において、内閣府(2015)で推定されている過去地震モデルの大きくすべった領域は、いずれも遠州灘沖～紀伊半島沖の深さ約10～約20kmの領域に推定されている。



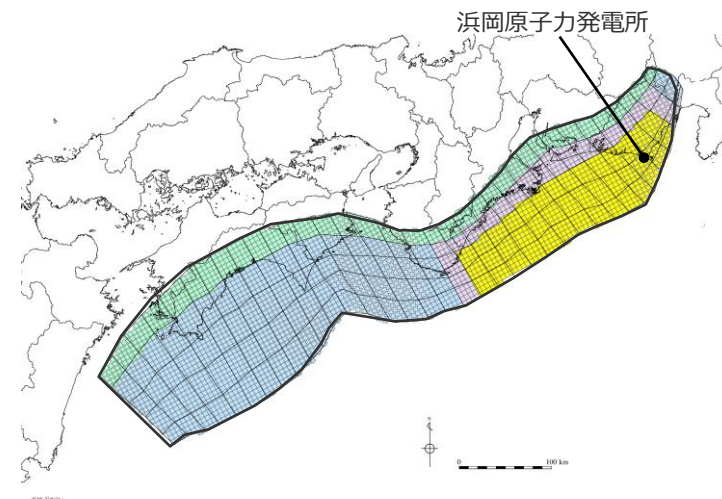
【遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの設定】
・大すべり域(2D)は、遠州灘沖～紀伊半島沖の深さ約20kmより浅い側の領域に、津波断層域の全面積の約20%の面積で設定した。



(内閣府(2015)に基づき作成)

・過去地震の津波を再現するインバージョンモデルのうち、東海地域のすべり量分布に着目

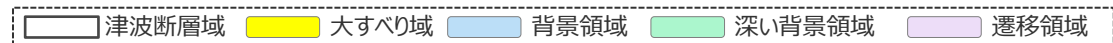
過去地震の津波を再現するインバージョンモデル



遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル

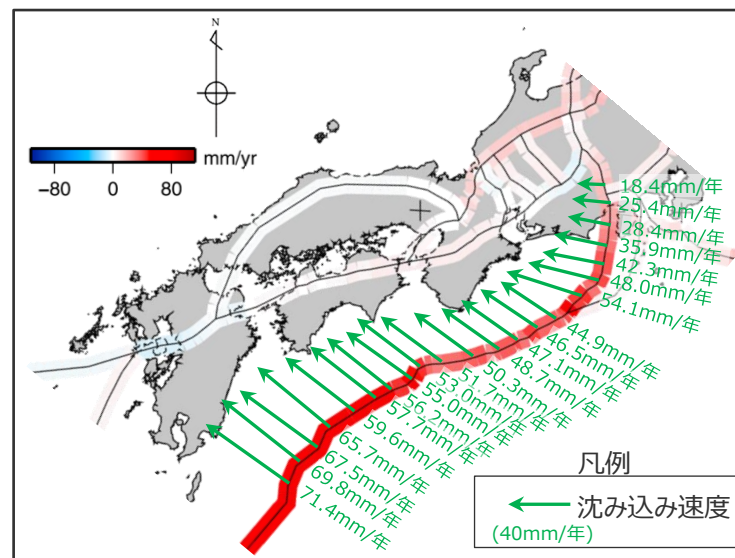
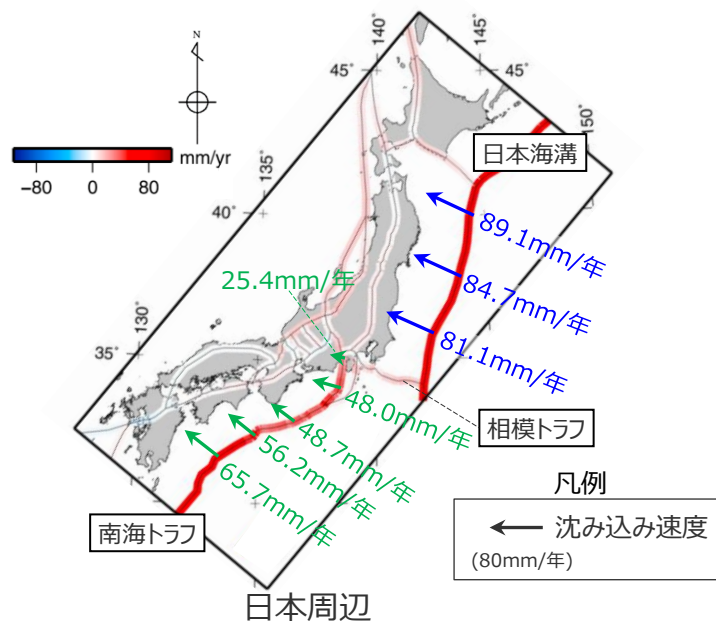
津波断層域 ➔ 82,604km²

大すべり域(2D) ➔ 津波断層域の全面積の約20%

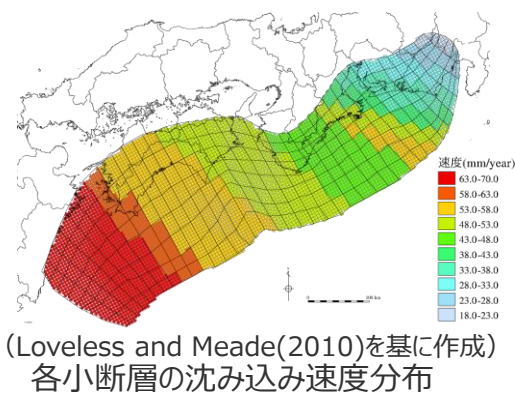


2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの設定 (すべり量分布の設定)

- プレート運動の観測結果によると、南海トラフでは、駿河湾から日向灘に向かって次第に大きな速度でプレートが沈み込んでおり、地域に依らずほぼ一樣の速度でプレートが沈み込んでいる日本海溝等とは特徴が異なる。(Loveless and Meade(2010))
 - 地震調査委員会(2013)では、宝永地震等による大地震の推定すべり量とその発生間隔から計算される長期的な断層のすべり速度は、プレートの沈み込み速度と矛盾しないとされるなど、南海トラフの大地震のすべり量とプレートの沈み込み速度とは関連があるとの議論がなされている。
- ⇒ 痕跡再現モデルの検討にあたっては、プレートの沈み込み速度を考慮して断層すべり量を検討することとした。



プレートの沈み込み速度分布の観測結果 (Loveless and Meade(2010)を基に作成)
各小断層の沈み込み速度分布 (mm/年)



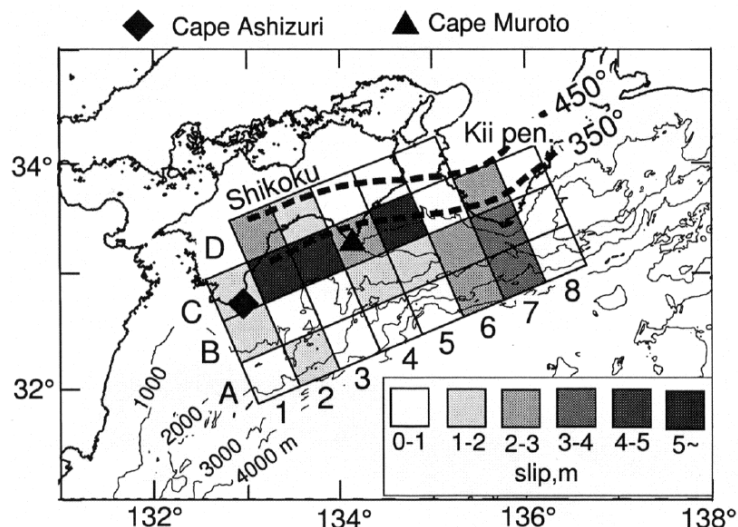
深度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
40km	1	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	57.7	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	28.4	28.4	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4		
30km	2	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	35.9	28.4	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4	
20km	3	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	56.2	56.2	55.0	53.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	44.9	44.9	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	35.9	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4
10km	4	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	54.1	48.0	48.0	42.3	35.9	35.9	35.9	28.4	28.4	25.4	25.4	18.4	18.4	
5km	5	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	56.2	55.0	55.0	53.0	51.7	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	47.1	46.5	46.5	44.9	44.9	54.1	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	35.9	28.4	28.4	25.4	25.4	
0km	6	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	56.2	55.0	53.0	51.7	51.7	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	44.9	54.1	54.1	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	28.4	25.4	25.4	
	7	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	53.0	53.0	51.7	51.7	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	47.1	47.1	46.5	46.5	44.9	44.9	54.1	54.1	54.1	48.0	48.0	42.3	42.3	35.9	28.4	25.4	25.4	
	8	69.8	69.8	67.5	67.5	65.7	65.7	59.6	59.6	57.7	57.7	56.2	55.0	53.0	53.0	51.7	51.7	51.7	51.7	50.3	50.3	48.7	48.7	47.1	47.1	46.5	44.9	44.9	54.1	54.1	54.1	48.0	48.0	42.3	35.9	28.4	25.4	25.4	18.4	

(Loveless and Meade(2010)を基に作成)
・津波断層面の各小断層には、南海トラフの沈み込み速度の分布を表現できるよう考慮された内閣府(2012)のものをを用いた。

遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの設定

(ライズタイムの設定)

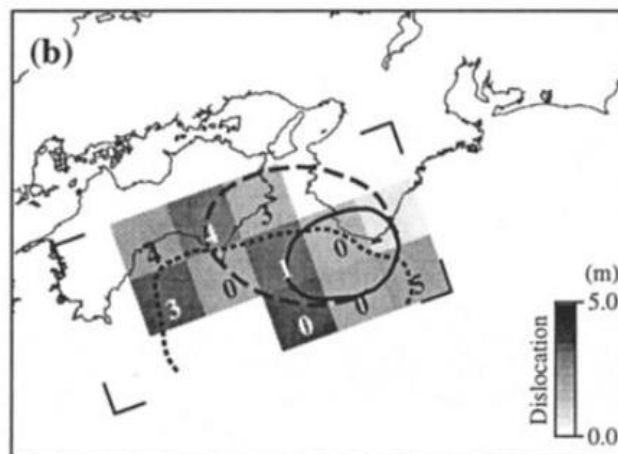
■ 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルのライズタイムは、南海トラフの既往地震の津波インバージョン結果に基づき最も短い60sと設定した。



ライズタイム(平均値) : 60~100s

1946年昭和南海地震

Tanioka and Satake(2001b)による津波インバージョン結果

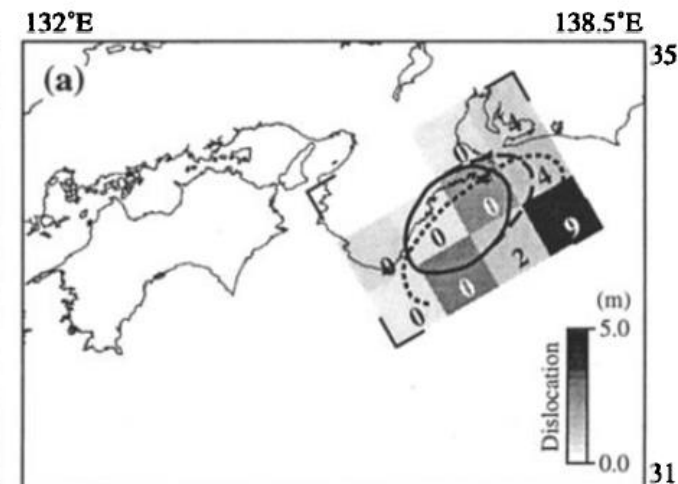


・小断層内の数値は小断層ごとに推定されたライズタイム

ライズタイム(平均値) : 150s

1946年昭和南海地震

Kato and Ando(1997)による津波インバージョン結果



・小断層内の数値は小断層ごとに推定されたライズタイム

ライズタイム(平均値) : 約110s

1944年昭和東南海地震

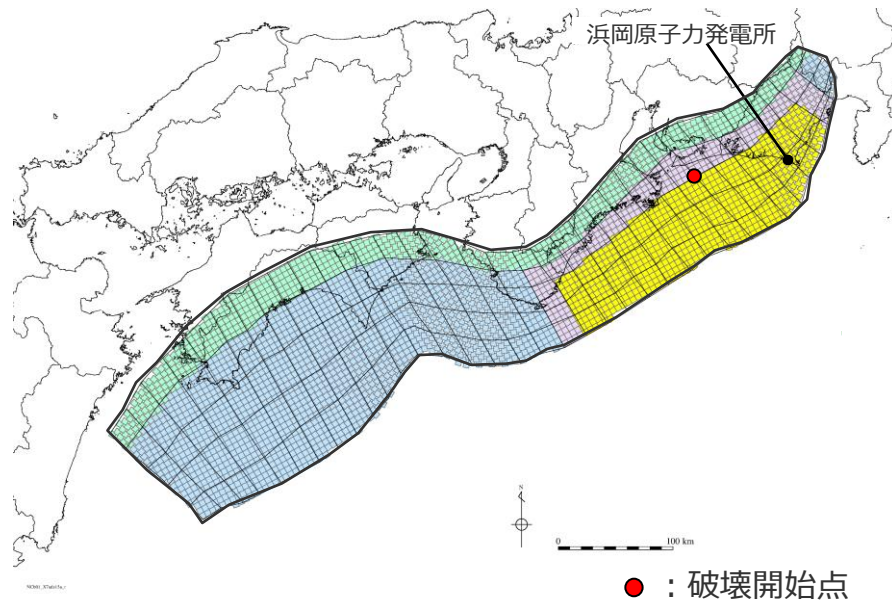
- 南海トラフの既往地震のライズタイムの検討事例について、Tanioka and Satake(2001b)及びKato and Ando(1997)は、南海トラフで発生した1944年昭和東南海地震・1946年昭和南海地震のすべり量とライズタイムを、津波インバージョンにより推定している。
- 1944年昭和東南海地震・1946年昭和南海地震の観測津波波形は限られているため、津波インバージョンによるライズタイムは幅広く推定されているが、これらの結果によると、**既往地震のライズタイムは60~150s程度。**

遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの設定

(検討結果)

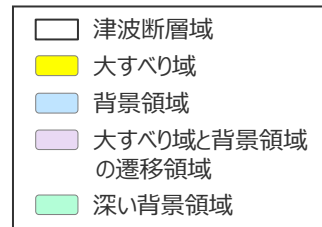
遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの設定

- 津波断層域は、既往地震に基づく面積（約8万km²）を設定。
- 大すべり域（平均すべり量の2倍のすべり量を有する領域）を津波断層域の全面積の約20%の面積で、既往地震に基づき敷地前面海域（駿河湾～紀伊半島沖）に設定。
- フィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮し、平均応力降下量を1.7MPaとして、各小断層のすべり量が沈み込み速度に比例するよう設定。



遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル（特性化モデル）の波源モデル

・詳細は、第1109回 補足説明資料7章に記載。

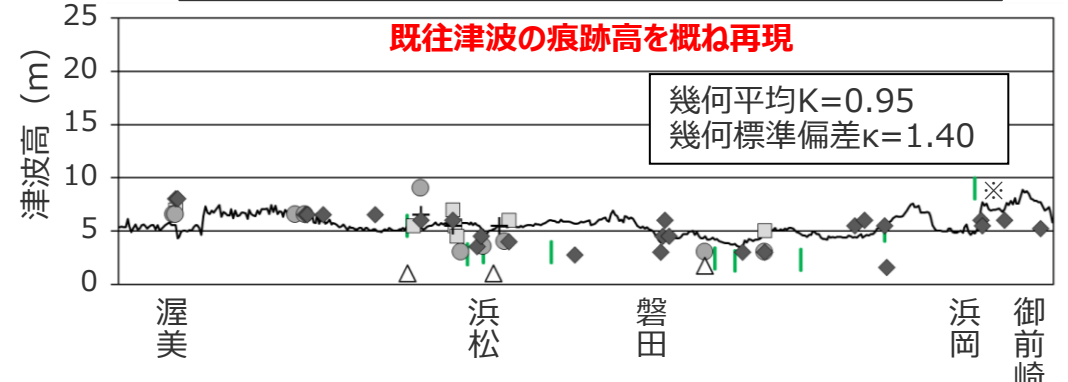


— 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの津波評価結果

■ 津波堆積物から推定される津波高
(東北沖地震等による津波の最大遡上高と津波堆積物の分布標高の差が約0～2mであることを踏まえ、津波堆積物の最大標高+0～2mの高さを幅で示した。詳細は「歴史記録及び津波堆積物に関する調査について」の資料に記載。)

■ 歴史記録から推定される津波高

- 1498年明応地震
- ◆ 1854年安政東海地震
- ✦ 1605年慶長地震
- △ 1944年昭和東南海地震
- 1707年宝永地震



遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル（特性化モデル）による海岸線の津波高と既往津波の痕跡高との比較

※ 敷地において保守的に津波堆積物と評価したイベント堆積物について、堆積当時の地形が、現在と異なり、海から近く津波が集まりやすい谷地形であったことが、堆積物の分布標高等に影響を与えうる要因と考えられる。

調査の詳細は「歴史記録及び津波堆積物に関する調査について」の資料に記載。

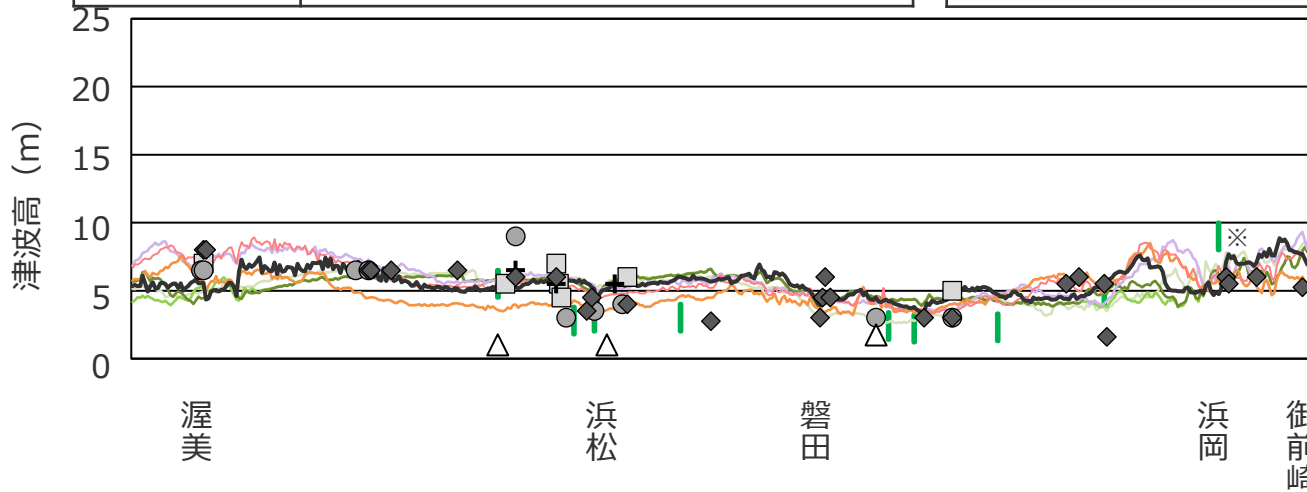
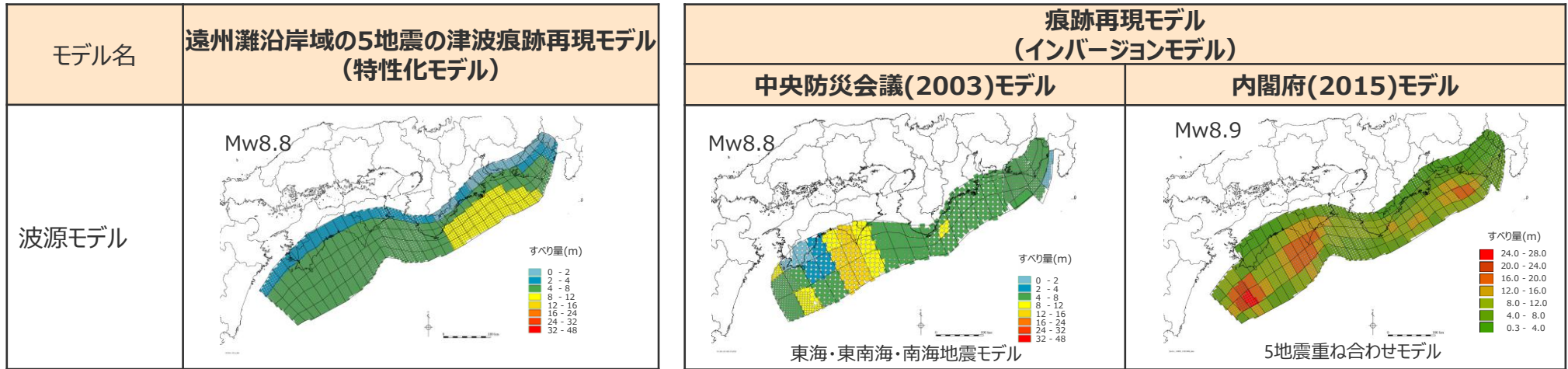
・相田の指標Kとkは津波堆積物及び津波高の小さい昭和東南海地震の痕跡を含めず算定

・土木学会(2016)による再現性の目安： $0.95 < K < 1.05$ 、 $k < 1.45$

遠州灘沿岸域の既往津波の痕跡高を概ね再現できることを確認。

2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討 (参考) 痕跡再現モデル(インバージョンモデル)との比較 (遠州灘沿岸域での比較)

- 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル（特性化モデル）の津波断層域及び地震規模は、痕跡再現モデル（インバージョンモデル）と同程度となっている。
- 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル（特性化モデル）の遠州灘沿岸域の津波高は、痕跡再現モデル（インバージョンモデル）の津波高とほぼ一致している。
⇒これらのモデルは、敷地が位置する遠州灘沿岸域の津波高について等価なモデルとなっている。



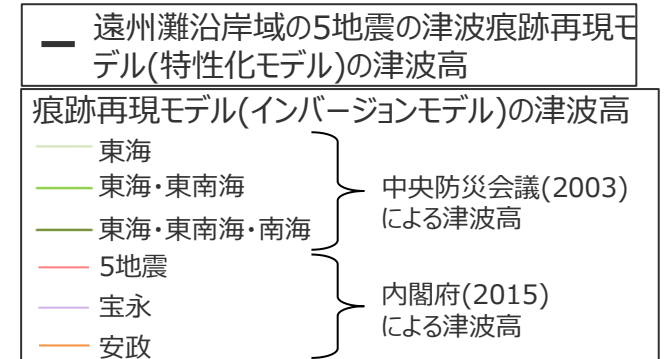
痕跡再現モデル（インバージョンモデル）による海岸線の津波高との比較

※ 敷地において保守的に津波堆積物と評価したイベント堆積物について、堆積当時の地形が、現在と異なり、海から近く津波が集まりやすい谷地形であったことが、堆積物の分布標高等に影響を与える要因と考えられる。
調査の詳細は「歴史記録及び津波堆積物に関する調査について」の資料に記載。

津波堆積物から推定される津波高
(東北沖地震等による津波の最大遡上高と津波堆積物の分布標高の差が約0~2mであることを踏まえ、津波堆積物の最大標高+0~2mの高さを幅で示した。調査の詳細は「歴史記録及び津波堆積物に関する調査について」の資料に記載。)

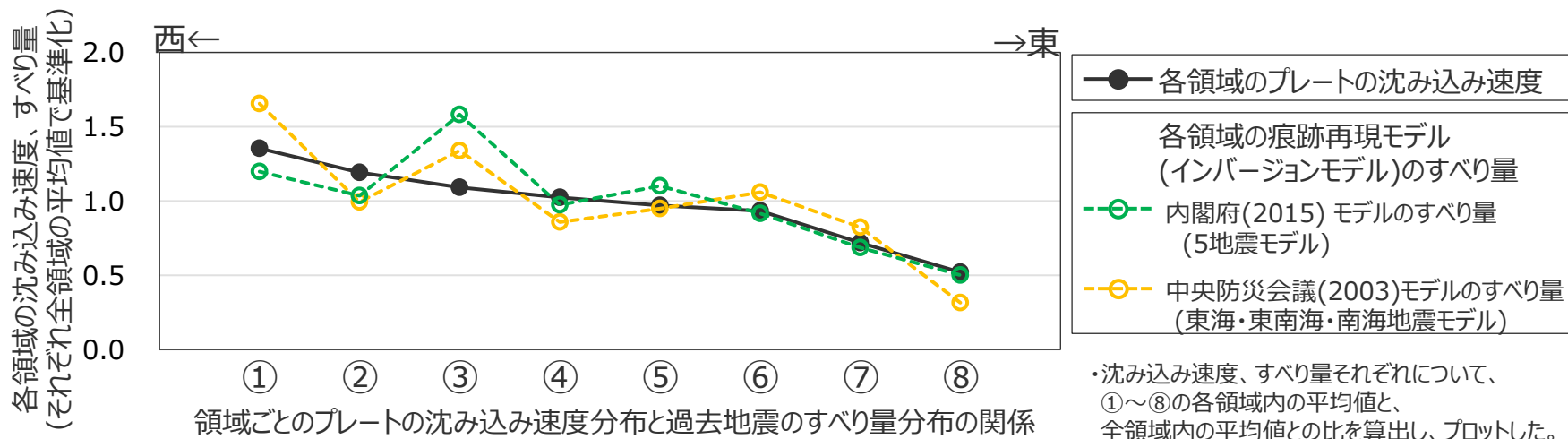
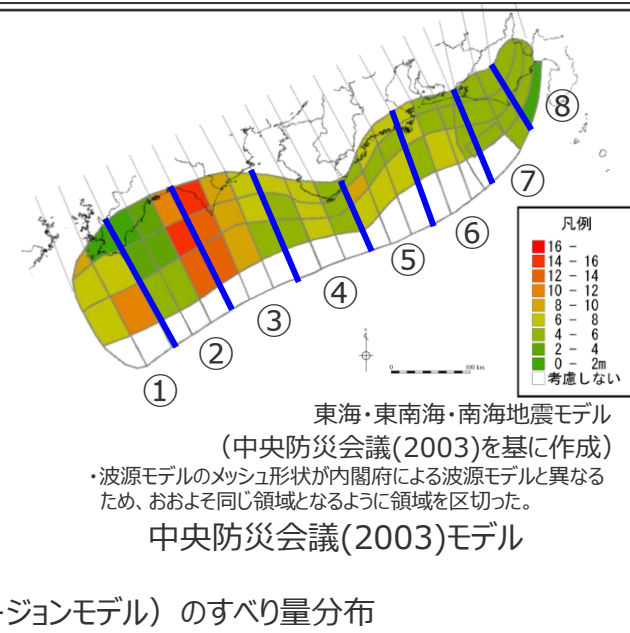
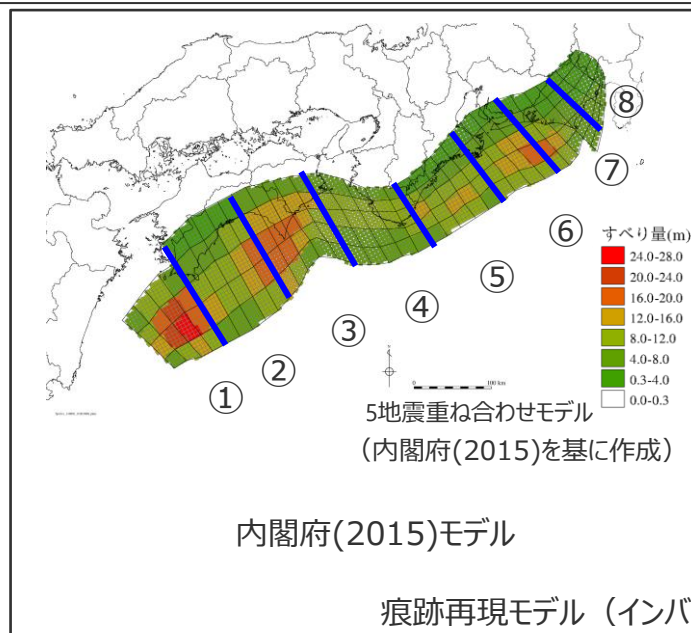
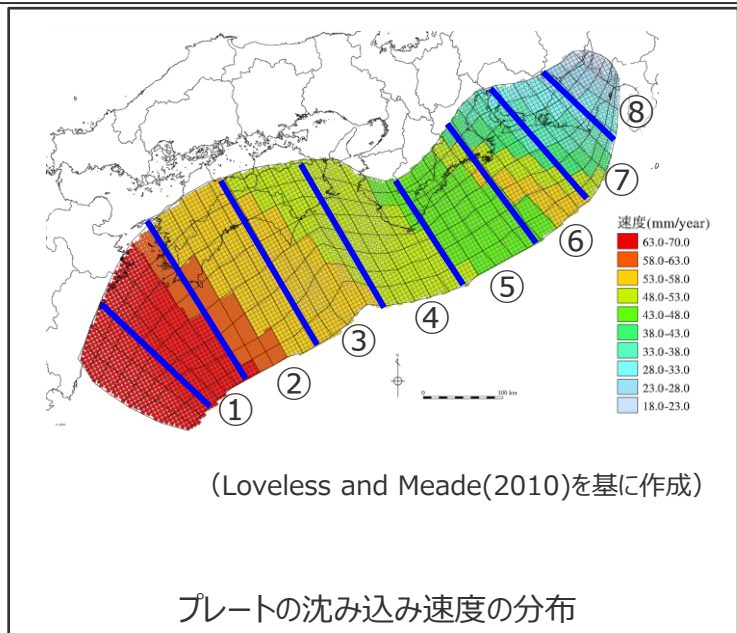
歴史記録から推定される津波高

- 1498年明応地震
- ◆ 1854年安政東海地震
- ✦ 1605年慶長地震
- ▲ 1944年昭和東南海地震
- 1707年宝永地震



2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルのすべり量分布設定の妥当性確認① (過去地震の痕跡再現モデル (インバージョンモデル) のすべり量分布との比較)

- プレートの沈み込み速度分布、過去地震の痕跡再現モデル (インバージョンモデル) のすべり量分布それぞれについて、南海トラフの領域を東西方向に区切って、その傾向を比較した。
- その結果、プレートの沈み込み速度分布の駿河湾から日向灘に向かって大きくなる傾向は、南海トラフの過去地震のすべり量分布の傾向と整合的であることを確認した。



2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルのすべり量分布設定の妥当性確認② (プレートの沈み込み速度を考慮しないモデルとの比較)

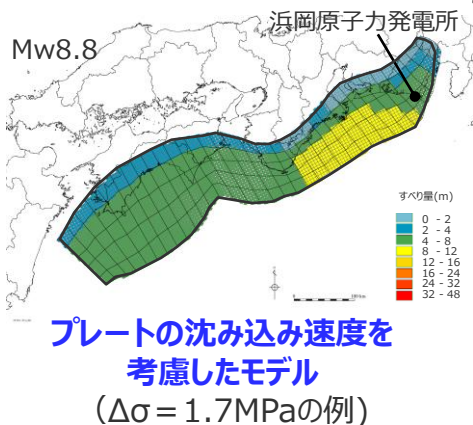
■ プレートの沈み込み速度を考慮したすべり量分布設定の妥当性を確認するため、「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」に加えて、「プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル」を設定し、それぞれ複数の平均応力降下量を検討して、遠州灘沿岸域の津波痕跡の再現性を確認した。

検討ケース

項目	プレートの沈み込み速度を考慮したモデル	プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル ¹⁾
すべり量分布	沈み込み速度を考慮して設定	沈み込み速度を考慮せず設定
平均応力降下量	$\Delta\sigma=1.5,1.6,1.7,1.8,1.9\text{MPa}$	$\Delta\sigma=1.5,1.6,1.7,1.8,1.9\text{MPa}$
ケース数	計5ケース	計5ケース

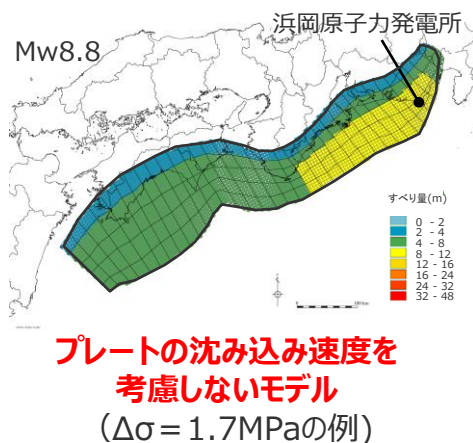
1) すべり量分布以外のパラメータは、「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」と同じ。

・各ケースの設定すべり量分布は、第1109回 補足説明資料7章に記載



西 ← 各小断層のすべり量 (m) → 東

深度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
40km																																								
30km																																								
20km				2.9	2.8	2.8	2.5	2.5	2.5	2.4	2.3	2.3	2.2	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.0	2.0	2.0	2.0	1.9	2.0	2.0	1.8	1.8	1.5	1.5	1.5	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1	0.8			
10km				5.8	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.8	4.8	4.7	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.2	4.2	5.5	5.5	5.5	5.3	5.3	5.6	5.6	5.0	5.0	4.2	4.2	4.2	3.3	3.3	3.3	1.6		
0km				5.8	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.9	4.8	4.7	4.7	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.2	6.6	9.1	9.0	9.0	8.6	10.4	9.2	9.2	8.1	6.9	6.9	6.9	6.9	5.5	5.5	3.5	1.6		



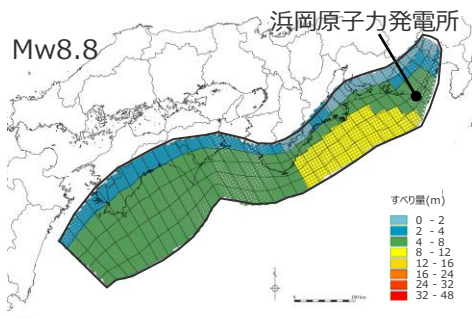
西 ← 各小断層のすべり量 (m) → 東

深度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
40km																																								
30km																																								
20km				2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0		
10km				4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	4.1		
0km				4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	6.9	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	9.8	6.9	4.1	

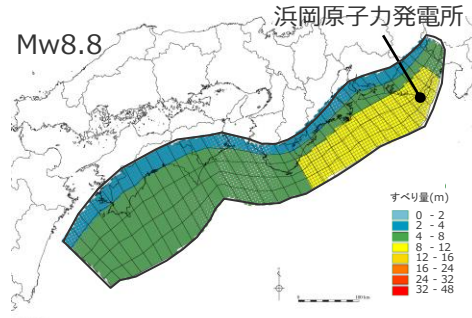
・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。

2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルのすべり量分布設定の妥当性確認② (プレートの沈み込み速度を考慮しないモデルとの比較結果)

- 「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」と「プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル」の解析結果について、遠州灘沿岸域における津波痕跡の再現性指標 $K \cdot \kappa$ を確認した。その結果、 K は応力降下量の増減に応じて減増するが、 κ は「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」の方が小さく、痕跡高に対して計算水位の空間分布の妥当性が高いことを確認した。
- なお、「プレートの沈み込み速度を考慮したモデル」の中でも平均応力降下量を1.7MPaとした「遠州灘沿岸域の痕跡再現モデル」は、 K の数値が土木学会(2016)による再現性の目安 (0.95~1.05) の概ね下限値となっていることから、痕跡高に対して計算水位が平均的にやや大きく、遠州灘沿岸域における津波痕跡を保守的に再現するモデルとなっている。



プレートの沈み込み速度を考慮したモデル
($\Delta\sigma = 1.7\text{MPa}$ の例)

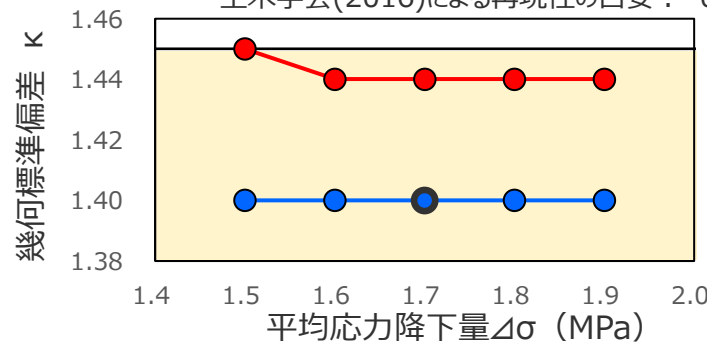
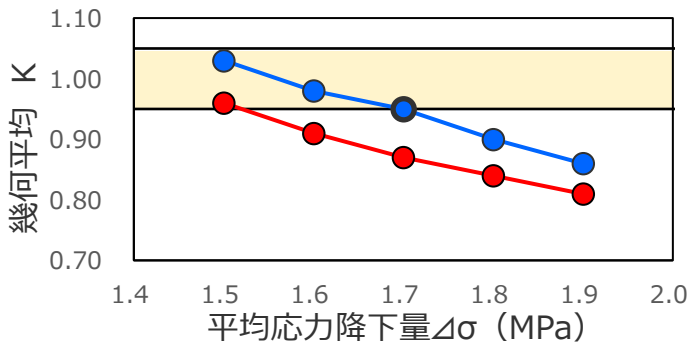


プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
($\Delta\sigma = 1.7\text{MPa}$ の例)

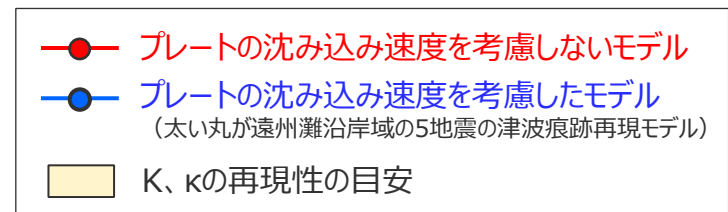
解析結果の遠州灘沿岸域の痕跡再現性指標 (K, κ)

項目		プレートの沈み込み速度を考慮したモデル	プレートの沈み込み速度を考慮しないモデル
すべり量分布		沈み込み速度を考慮して設定	沈み込み速度を考慮せず設定
平均応力降下量	1.5MPa	$K=1.03, \kappa=1.40$	$K=0.96, \kappa=1.45$
	1.6MPa	$K=0.98, \kappa=1.40$	$K=0.91, \kappa=1.44$
	1.7MPa	$K=0.95, \kappa=1.40$ (遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル)	$K=0.87, \kappa=1.44$
	1.8MPa	$K=0.90, \kappa=1.40$	$K=0.84, \kappa=1.44$
	1.9MPa	$K=0.86, \kappa=1.40$	$K=0.81, \kappa=1.44$

- ・ 相田の指標 K と κ は津波堆積物及び津波高の小さい昭和東南海地震の痕跡を含めず算定。痕跡が比較的多い宝永地震と安政東海地震を対象とした比較結果は、第1109回 補足説明資料7章に記載。
- ・ 土木学会(2016)による再現性の目安: $0.95 < K < 1.05, \kappa < 1.45$



痕跡再現性指標の分布

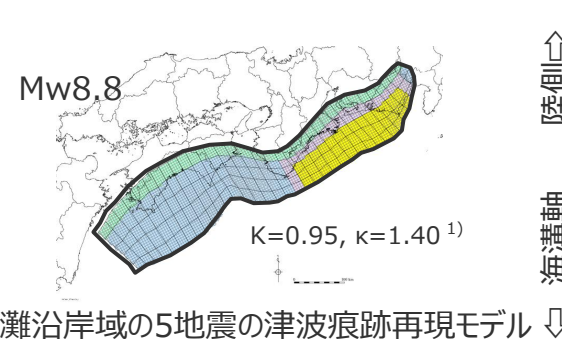


K : 痕跡高/計算水位の空間分布の平均値を表す指標。
 K が小さいほど、痕跡高に対して、計算水位が平均的に大きい。
 κ : 痕跡高/計算水位の空間分布のばらつきを表す指標。
 κ が小さいほど、痕跡高に対して、計算水位の空間分布の妥当性が高い。

妥当性確認①②の結果より、遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルにおいて、プレートの沈み込み速度を考慮したすべり量分布を設定することの妥当性を確認した。

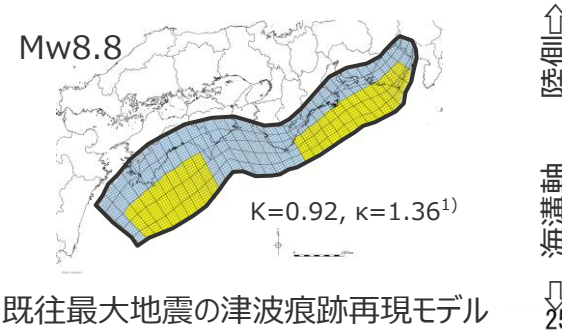
2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルと既往最大地震の津波痕跡再現モデルとの比較

■ 「既往最大地震の津波痕跡再現モデル」と「遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル」について、東海地域の大小すべり域のすべり量、および、遠州灘沿岸域における津波高を比較した結果、両者はほぼ同じであることを確認した。
➔ 敷地影響の観点から、東海地域の震源域の影響が支配的であることを再確認した。



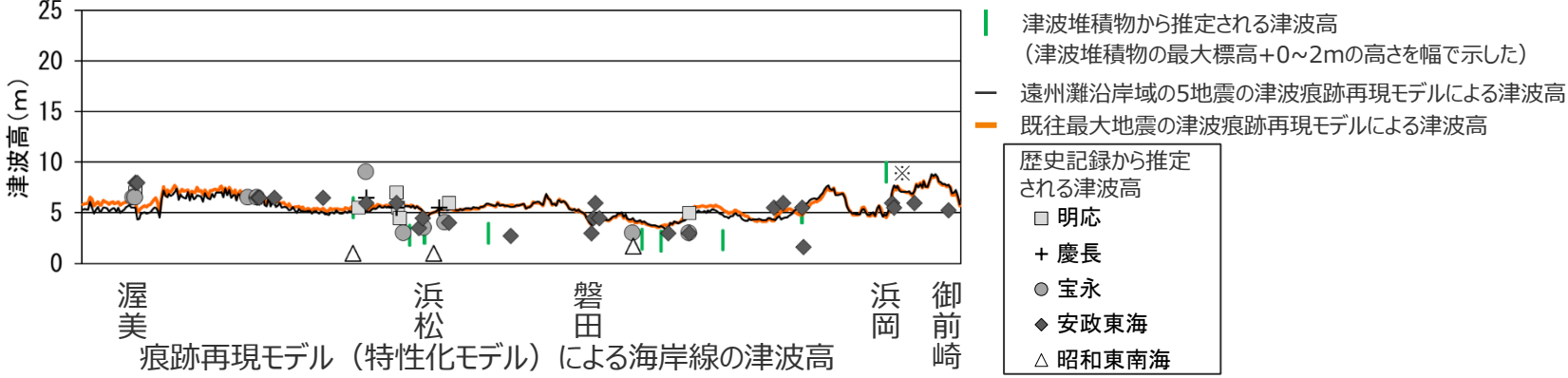
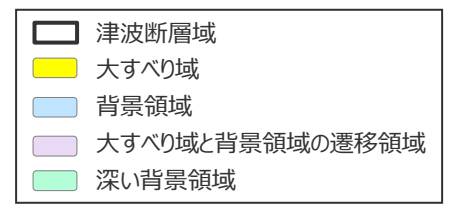
西 ← 各小断層のすべり量 (m) → 東

深度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	
40km																																							
30km	1																																						
20km	2				2.9	2.8	2.8	2.5	2.5	2.5	2.4	2.3	2.3	2.3	2.2	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.0	2.0	2.0	2.0	1.9	2.0	2.0	1.8	1.8	1.5	1.5	1.5	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1	0.8
	3				5.8	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.8	4.8	4.7	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.2	5.5	5.5	5.5	5.3	5.3	5.6	5.6	5.0	5.0	4.2	4.2	4.2	3.3	3.3	3.3	3.3	1.6
10km	4				5.8	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.9	4.8	4.7	4.7	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.3	4.2	4.2	6.6	9.1	9.0	9.0	8.6	10.4	9.2	9.2	8.1	6.9	6.9	6.9	6.9	5.5	5.5	3.5	1.6
	5				5.8	5.6	5.6	5.6	5.1	5.1	4.9	4.8	4.8	4.7	4.7	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.3	4.2	6.6	9.1	9.0	9.0	8.6	8.6	10.4	9.2	9.2	8.1	8.1	6.9	6.9	5.5	5.5	3.8	2.2
0km	7																																						
	8																																						



深度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38		
40km																																								
30km	1																																							
20km	2				2.1	2.1	2.1	1.9	1.8	1.8	1.8	1.7	1.7	1.7	1.6	1.6	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.5	1.5	1.3	1.3	1.1	1.1	1.1	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	0.6		
	3				2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.8	1.8	1.8	1.7	1.7	1.7	1.6	1.6	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.5	1.5	1.3	1.3	1.1	1.1	1.1	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	0.6	
10km	4				2.1	12.7	12.7	11.5	11.5	11.1	11.1	10.8	10.6	10.6	1.7	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	9.1	9.0	9.0	8.6	10.4	9.2	9.2	8.1	6.9	6.9	6.9	6.9	5.5	5.5	0.8	0.6	
	5				2.1	12.7	12.7	12.7	11.5	11.5	11.1	10.8	10.8	10.6	1.7	1.7	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.5	1.5	9.1	9.0	9.0	8.6	8.6	10.4	9.2	9.2	8.1	8.1	6.9	6.9	5.5	5.5	0.8	0.8	
0km	7																																							
	8																																							

1) 相田の指標Kとκは、遠州灘沿岸域を対象として津波堆積物及び津波高の小さい昭和東南海地震の痕跡を含めず算出
・ 土木学会(2016)による再現性の目安：
0.95<K<1.05, κ<1.45

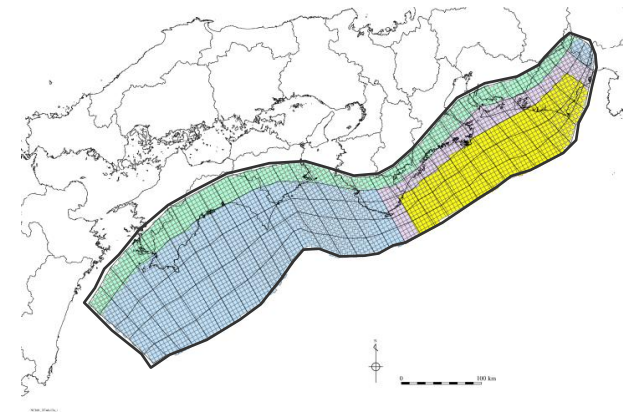


※ 敷地において保守的に津波堆積物と評価したイベント堆積物について、堆積当時の地形が、現在と異なり、海から近く津波が集まりやすい谷地形であったことが、堆積物の分布標高等に影響を与えうる要因と考えられる。調査の詳細は「歴史記録及び津波堆積物に関する調査について」の資料に記載。

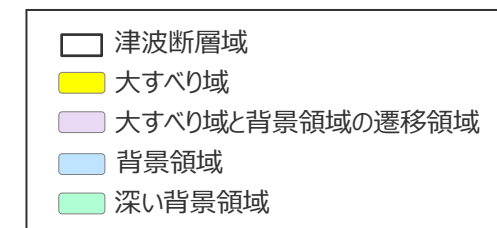
2.2.1 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルのパラメータ

断層パラメータ

項目	設定値
面積 (km ²)	82,604
地震モーメント (Nm)	1.7×10^{22}
Mw	8.8
平均応力降下量(MPa)	1.7
平均すべり量 (m)	5.0
最大すべり量 (m)	10.4
剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
破壊伝播速度 (km/s)	2.0
ライズタイム (s)	60



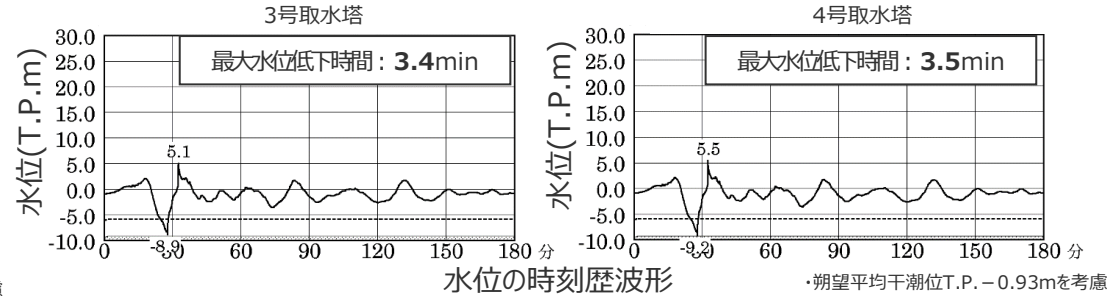
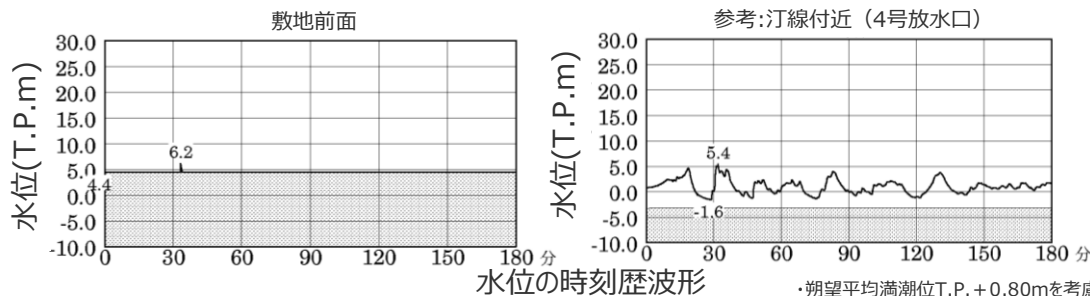
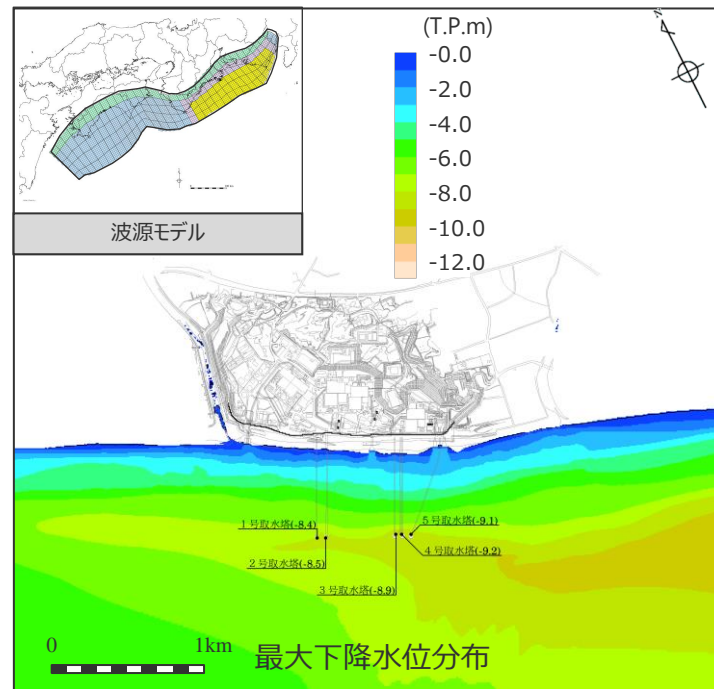
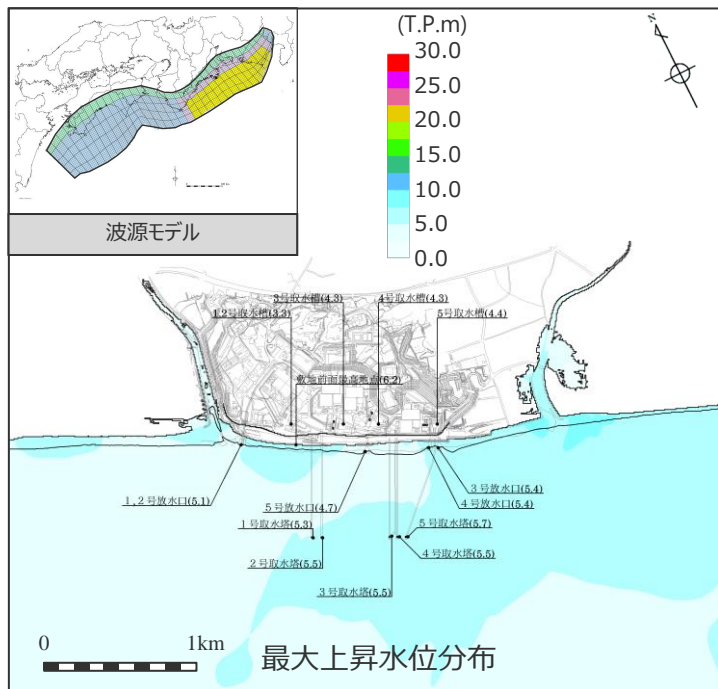
遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル



遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルによる敷地への影響

【水位上昇側】

【水位下降側】



最大上昇水位(T.P. m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
6.2	3.3	4.3	4.3	4.4

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (3.4min)	海底面 (3.5min)

・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

目次

[プレート間地震の津波評価]

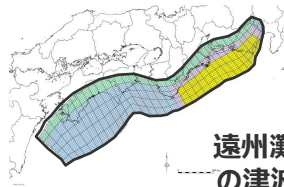
1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルA・Bの設定

■ 検討波源モデルAは、南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、敷地周辺の津波に着目した遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）として設定した。また、検討波源モデルAに対して、分岐断層への破壊伝播を考慮した検討波源モデルBを設定した（次頁参照）。

痕跡再現モデル

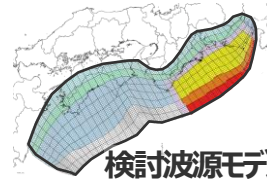
■ 歴史記録および津波堆積物に基づき、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映されている南海トラフの津波痕跡再現モデル（Mw8クラス）



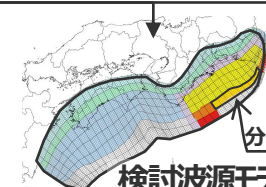
遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル

検討波源モデル

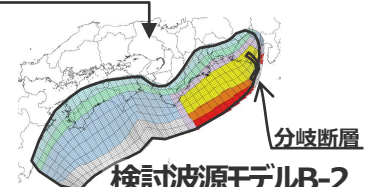
■ 南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映された痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）



検討波源モデルA



検討波源モデルB-1



検討波源モデルB-2

項目		パラメータ設定
		遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル
認識論的 不確かさ	面積	約8万km ²
	地震規模	Mw8.8
	すべり量	約9m
	ライズタイム (すべり速度)	60s (0.15m/s)
	浅部の 破壊形態	破壊せず
	超大すべり域・ 大すべり域の位置	駿河湾～紀伊半島沖 (超大すべり域は無し)
	破壊伝播速度	2.0km/s
偶然的 不確かさ	破壊開始点	大すべり域の下端中央

パラメータ設定		設定根拠
検討波源モデルA	検討波源モデルB	
約14万km ²		・南海トラフでは、宝永地震等と大きく異なる地震が発生する可能性は低いと考えられるが、不確かさとして南海トラフの波源の広がりを最大限考慮した上で、保守的なスケールリング則に基づき、東北沖地震と同等以上の規模の地震を考慮した。 (第1109回 補足5-6章 ③南海トラフの津波堆積物等に関する最新知見の整理 第1109回補足6-3章 国内外の巨大地震に関する最新の科学的知見の収集・分析)
Mw9.1		
約37m		
150s (0.25m/s)		・付加作用が卓越する南海トラフと造構性侵食作用が卓越する東北沖とでは浅部のすべり挙動が異なると考えられるが、保守的に東北沖地震の特徴を踏まえた浅部の破壊形態も考慮した。 (第1109回 補足6-4章 浅部の破壊形態) ・ライズタイムに着目した東北沖地震の津波インバージョンの結果、ライズタイムを60sとした津波インバージョンでは観測記録を再現できず、ライズタイムを150～200s程度とするのが最も適切であることを確認した。(第1109回 補足6-5章 ライズタイムの設定)
断層破壊が プレート境界面浅部に伝播	断層破壊が プレート境界面浅部・ 分岐断層に伝播	
駿河湾～紀伊半島沖		・歴史記録および津波堆積物に基づき、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映されている痕跡再現モデル（遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル）に基づき設定した。
2.0km/s		
大すべり域の下端中央		

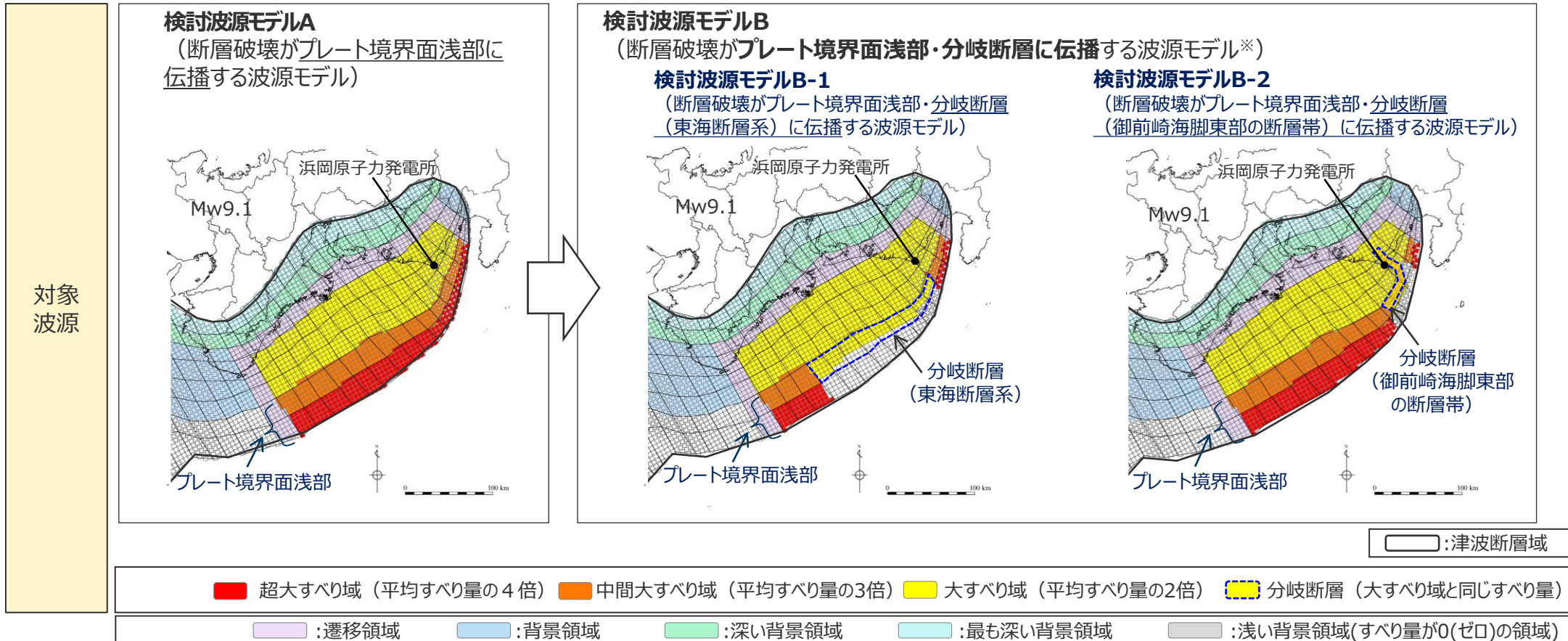
・すべり量：超大すべり域のすべり量。超大すべり域が無いモデルについては、大すべり域のすべり量

・すべり速度：(すべり量) / (ライズタイム)

■：検討波源モデルにおいて、不確かさとして保守的に考慮したパラメータ

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルA・Bの設定

- 断層破壊がプレート境界面浅部まで伝播する検討波源モデルAに対して、南海トラフの特徴の考慮として断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播する検討波源モデルBを設定した。
- 検討波源モデルBについては、分岐断層として東海断層系を考慮した「検討波源モデルB-1」と、御前崎海脚東部の断層帯・牧ノ原南稜の断層を考慮した「検討波源モデルB-2」を設定した。



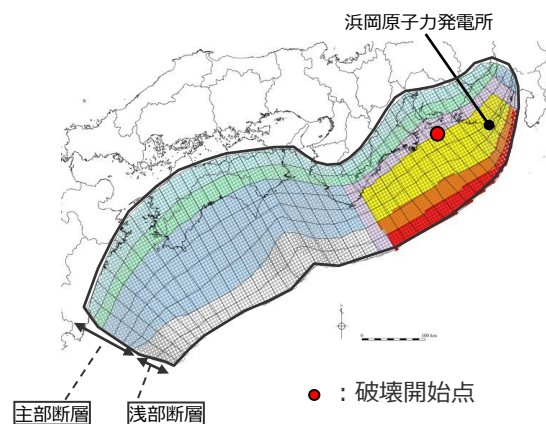
※ 地質調査および浅部の破壊形態の影響検討の結果を踏まえ、敷地前面に位置する東海断層系を考慮した検討波源モデルB-1と、敷地に近い御前崎海脚東部の断層帯・牧ノ原南稜の断層を考慮した検討波源モデルB-2を設定した。(詳細は第1109回 補足説明資料6-1章を参照)

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルA・Bの設定 (設定方法)

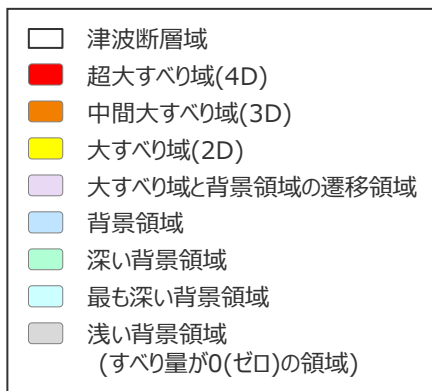
- 検討波源モデルA、Bの設定フローを以下に示す。
- 検討波源モデルA、Bは、南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）として設定した。すべり量分布には、内閣府(2012)によるMw9クラスの地震のすべり量分布の特性化方法（特性化されたすべり量と面積割合の設定方法）を適用した。

・検討波源モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-1章を参照。 設定フロー

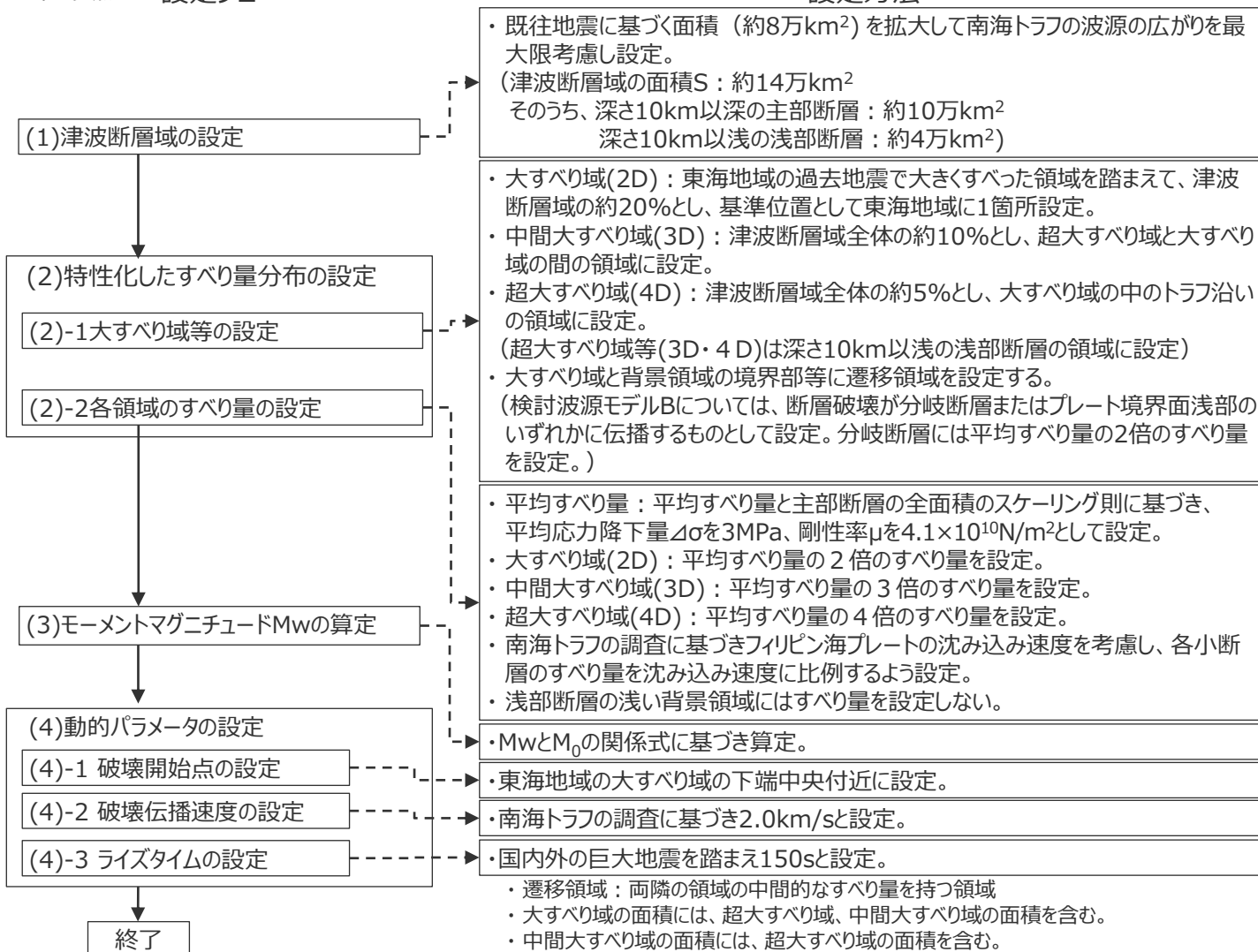
設定方法



波源モデル（検討波源モデルAの例）



(D：主部断層の平均すべり量)



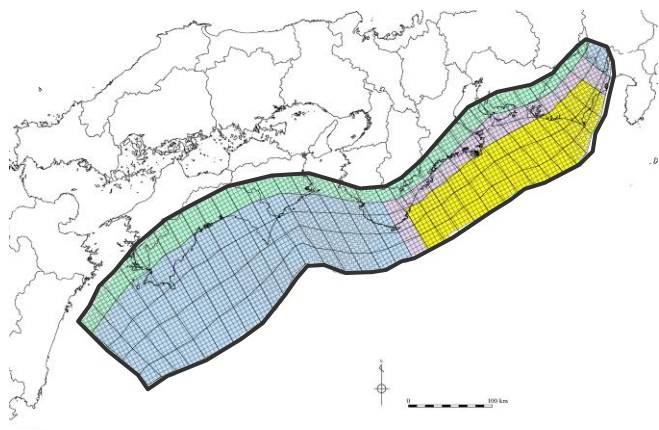
2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルA・Bの設定 (大すべり域の位置)

- 検討波源モデルA、Bの大すべり域は、遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルに基づき、トラフ軸付近の浅部断層を含めた領域に設定し、これを基準位置とした。
- なお、この大すべり域の位置は、敷地への影響が大きい内閣府の最大クラスモデル（ケース①）と同じ位置となっている。

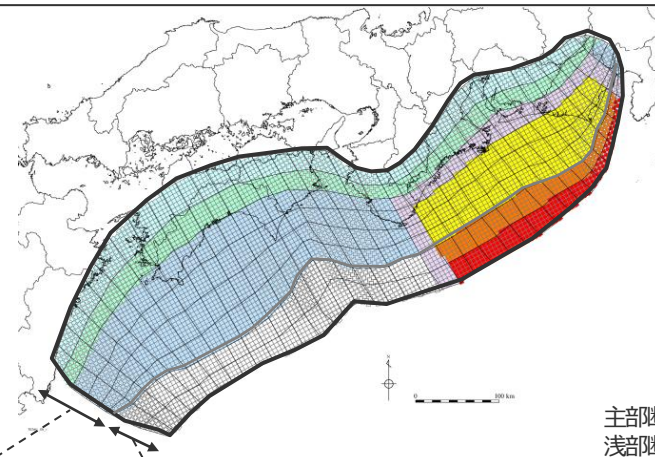
・大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。

【検討波源モデルA、Bの設定】

- ・大すべり域(2D)は、遠州灘沖～紀伊半島沖の深さ約20kmより浅い側の領域に、津波断層域の全面積の約20%の面積で設定した。
- ・中間大すべり域(3D)は、津波断層域の全面積の約10%の面積で、超大すべり域と大すべり域の間の領域に設定した。
- ・超大すべり域(4D)は、津波断層域の全面積の約5%の面積で、大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域に設定した。



遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル



主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層

主部断層 浅部断層 検討波源モデルAの例

- 津波断層域 ➔ 144,379km²
- 大すべり域(2D) ➔ 津波断層域の全面積の約20%¹⁾
- 中間大すべり域(3D) ➔ 超大すべり域と大すべり域の間の領域 (津波断層域の全面積の約10%²⁾)
- 超大すべり域(4D) ➔ 大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域 (津波断層域の全面積の約5%)

1) 大すべり域の面積には、超大すべり域、中間大すべり域の面積を含む。
2) 中間大すべり域の面積には、超大すべり域の面積を含む。

・検討波源モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-1章を参照。

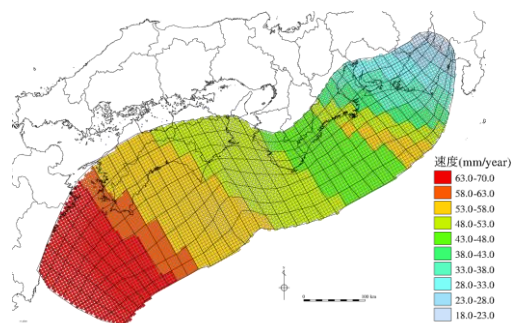
 津波断層域
 超大すべり域
 中間大すべり域
 大すべり域
 遷移領域
 背景領域
 深い背景領域
 最も深い背景領域
 浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルA・Bの設定

(検討波源モデルA (プレート境界面浅部) のすべり量分布の設定方法)

- プレート境界面浅部に破壊が伝播するケースのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定し、超大すべり域には平均すべり量の4倍、大すべり域には2倍のすべり量を設定した。
- プレート境界面浅部に破壊が伝播するケースのすべり量分布の設定方法は以下のとおり。



(Loveless and Meade(2010)を基に作成)
各小断層の沈み込速度分布

【主部断層のすべり量の設定】

まず、各小断層の平均すべり量 D_i は、フィリピン海プレートの沈み込み速度に比例し、かつ各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が主部断層のスケージング則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量はプレートの沈み込み速度に比例するよう設定。}^*$$

次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- | | | | |
|------------|----|--|-----------------------|
| ① 大すべり域 | 黄色 | : $2D_i$ | } 背景領域と断層下端との境界部の遷移領域 |
| ② 背景領域 | 水色 | : 主部断層(領域①～⑤)の小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が、 M_0 となるすべり量 D_b を設定 | |
| ③ ①と②の遷移領域 | 紫 | : $(2D_i + D_b) / 2$ | |
| ④ 深い背景領域 | 緑 | : $1/2 \times D_b$ | |
| ⑤ 最も深い背景領域 | 青 | : $1/4 \times D_b$ | |

D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 各背景領域のすべり量(= aD_i , a は定数) S_i : 各小断層の面積
 M_0 : スケージング則から算定される主部断層の地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

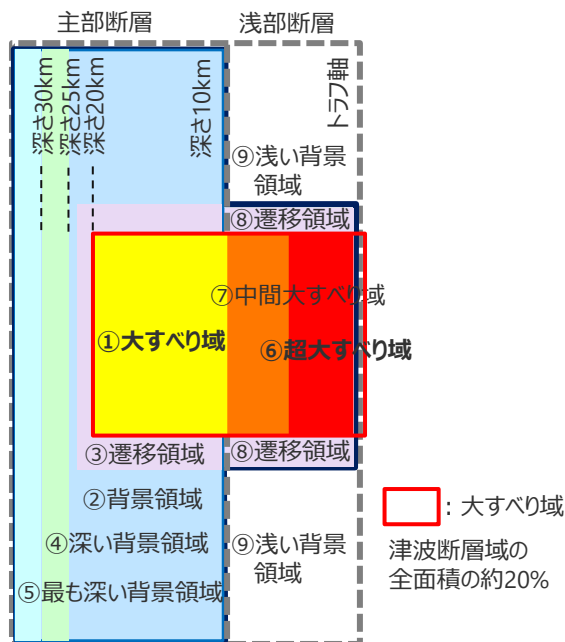
※ 内閣府(2012)と同様、上記のすべり量設定を行うにあたり、フィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮した遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルにより歴史記録及び津波堆積物調査等による津波痕跡高の再現性を確認。

【浅部断層のすべり量の設定】

以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- | | | |
|------------|------|----------------------|
| ⑥ 超大すべり域 | 赤 | : $4D_i^{1)}$ |
| ⑦ 中間大すべり域 | オレンジ | : $3D_i$ |
| ⑧ ⑥と⑨の遷移領域 | 紫 | : $(2D_i + D_b) / 2$ |
| ⑨ 浅い背景領域 | 水色 | : 0 (ゼロ) |

1) 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす(内閣府(2012))とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定している。



検討波源モデルAによるすべり量分布概念図

検討波源モデルA・Bの設定

(検討波源モデルA (プレート境界面浅部) の断層パラメータ)

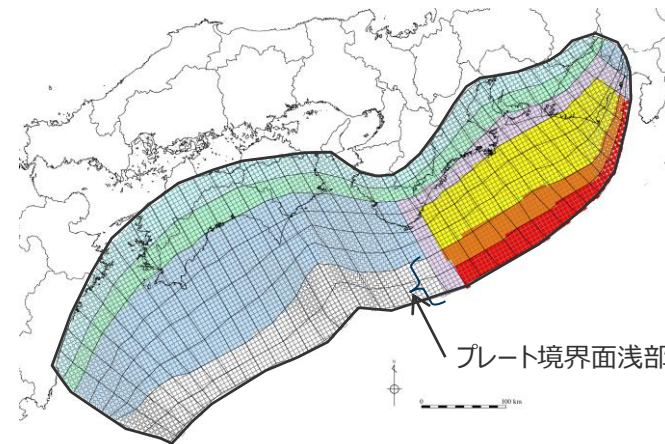
断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.2×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力低下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	12.1
	最大すべり量 (m)	41.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.0
	最大すべり量 (m)	20.8
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.7×10^{22}
	平均すべり量 (m) ※3	29.2
	最大すべり量 (m)	41.7

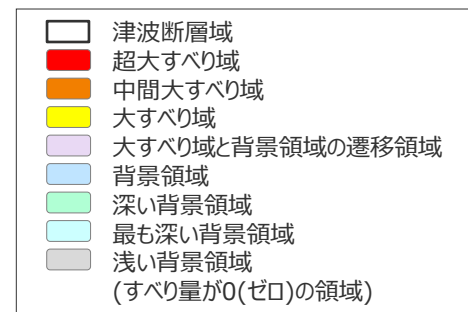
※1 スケーリング則の対象とした平均応力低下量

※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積 (123,700km²) に基づき算出

※3 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積 (13,975km²) に基づき算出



検討波源モデルA (断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル)



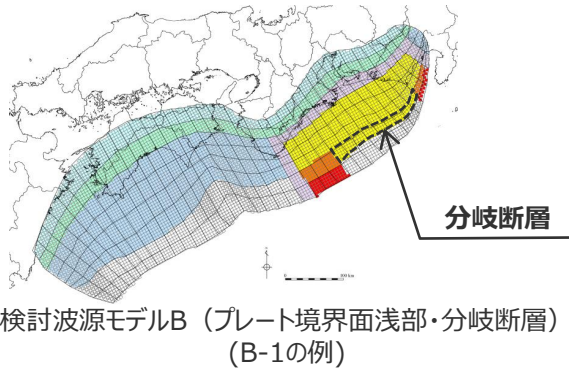
主部断層: 深さ10km以深の断層

浅部断層: 深さ10km以浅の断層

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルA・Bの設定

(検討波源モデルB (プレート境界面浅部・分岐断層) のすべり量分布の設定方法)

- 分岐断層は、内閣府(2012)を踏まえ、その分岐する場所（深さ10km）が大すべり域となった場合のみ活動するとし、その際には、それに対するプレート境界面浅部の小断層のすべり量は0（ゼロ）とした。また、分岐断層のすべり量は主部断層の大すべり域のすべり量と同じとした。
- 断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播するモデルの設定方法は以下のとおり。



【主部断層のすべり量の設定】

「断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル」と同様に設定。



【浅部断層のすべり量の設定】

断層破壊は、プレート境界面浅部または分岐断層のいずれかに伝播するものとして、以下の関係を与えてすべり量を設定。

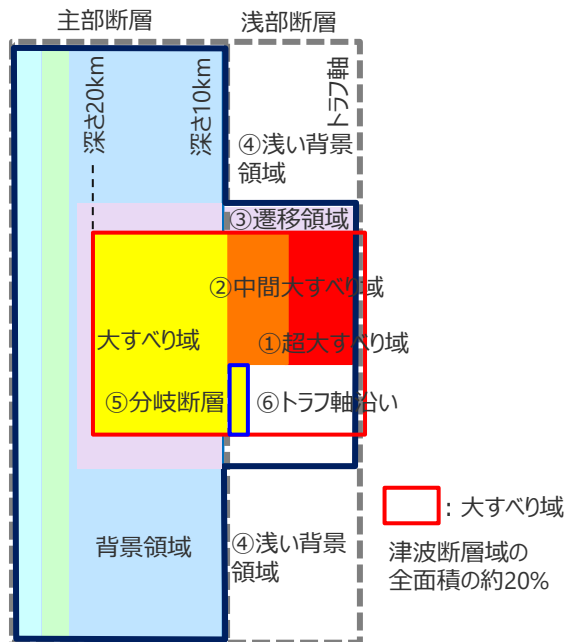
◇断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場所のすべり量の設定
(「断層破壊がプレート境界面浅部に伝播するモデル」と同様に設定。)

- | | | |
|------------|---|----------------------|
| ① 超大すべり域 | ■ | : $4D_i^{1)}$ |
| ② 中間大すべり域 | ■ | : $3D_i$ |
| ③ ①と④の遷移領域 | ■ | : $(2D_i + D_b) / 2$ |
| ④ 浅い背景領域 | ■ | : <u>0 (ゼロ)</u> |

◇断層破壊が分岐断層に伝播する場所のすべり量の設定

- | | | |
|----------|---|-----------------|
| ⑤ 分岐断層 | ■ | : $2D_i$ |
| ⑥ トラフ軸沿い | ■ | : <u>0 (ゼロ)</u> |

D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 各背景領域のすべり量 (= aD_i , a は定数)



検討波源モデルBのすべり量分布概念図

1)駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

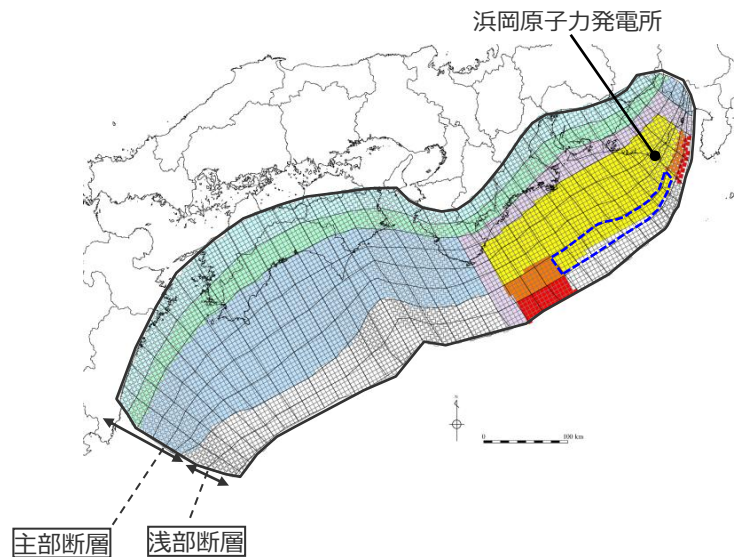
2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルA・Bの設定

(検討波源モデルB-1 (プレート境界面浅部・東海断層系) のすべり量分布)

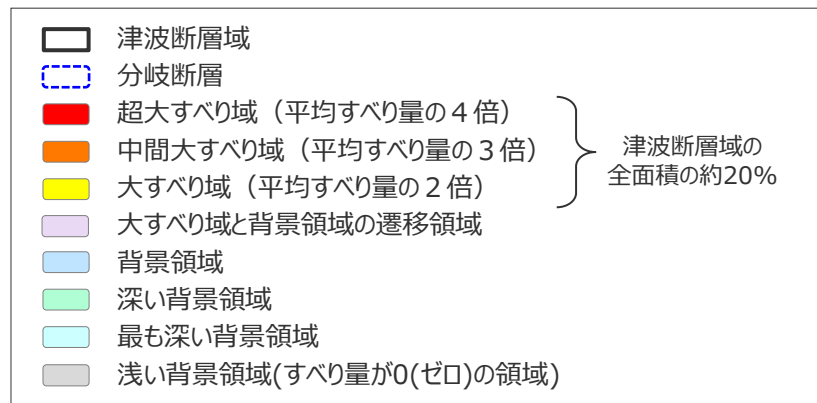
■ 断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播するケースのうち、「検討波源モデルB-1：断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層（東海断層系）に伝播するモデル」の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。

・検討波源モデルの各小断層のすべり量の詳細な設定方法、設定したすべり量については第1109回 補足説明資料6-1章を参照。



検討波源モデル B-1 (プレート境界面浅部・東海断層系) のすべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
37.5	10.9



検討波源モデル B-1
(プレート境界面浅部・東海断層系)

西 ← 検討波源モデル B-1 (プレート境界面浅部・東海断層系) の小断層のすべり量分布 (m) → 東

陸側 ⇄ 海溝軸側 ⇄	深度40km↓	検討波源モデル B-1 (プレート境界面浅部・東海断層系) の小断層のすべり量分布 (m)																																					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
⇄	30km↓	1	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.1	3.0	3.0	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0
	20km↓	2	7.5	7.5	7.3	7.3	7.1	7.1	6.4	6.2	6.2	6.0	5.9	5.9	5.7	5.6	5.4	5.4	5.4	5.2	5.2	5.2	5.1	5.1	5.0	5.0	4.8	5.2	5.2	4.5	4.5	3.9	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.7	2.7
⇄	10km↓	3	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	11.8	11.4	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	10.5	10.5	11.6	11.6	11.5	11.1	11.1	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	5.1	5.1	4.0
	4	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	10.5	14.3	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.4	4.0
⇄	5	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	14.3	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	10.9	8.2	5.5	
	6	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	14.3	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.2	5.5
⇄	0km↓	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	27.2	27.2	26.9	17.9	17.3	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	20.7	16.4	8.2	5.5
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	37.5	36.3	36.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.7	21.9	8.2

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
 ・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

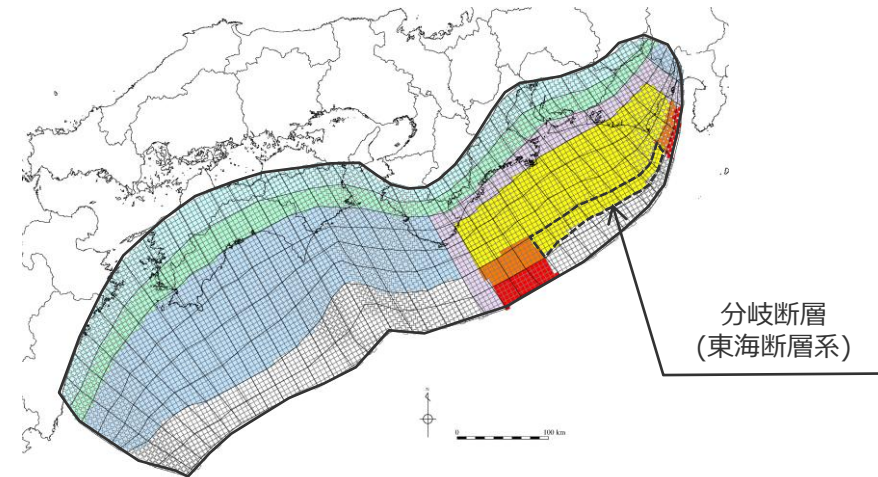
⇄ 分岐断層

検討波源モデルA・Bの設定

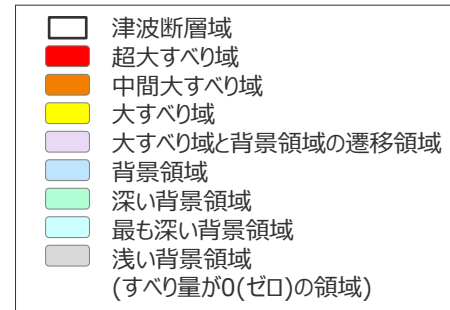
(検討波源モデルB-1 (プレート境界面浅部・東海断層系) の断層パラメータ)

断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	5.3×10 ²²
	Mw	9.1
	平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	10.9
	最大すべり量 (m)	37.5
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10 ¹⁰
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10 ²²
	平均すべり量 (m)	10.0
	最大すべり量 (m)	20.8
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	8.6×10 ²¹
	平均すべり量 (m) ※3	22.7
	最大すべり量 (m)	37.5



検討波源モデルB-1 (プレート境界面浅部・東海断層系)



※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積 (118,989km²) に基づき算出

※3 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積 (9,265km²) に基づき算出

主部断層: 深さ10km以深の断層

浅部断層: 深さ10km以浅の断層

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルA・Bの設定

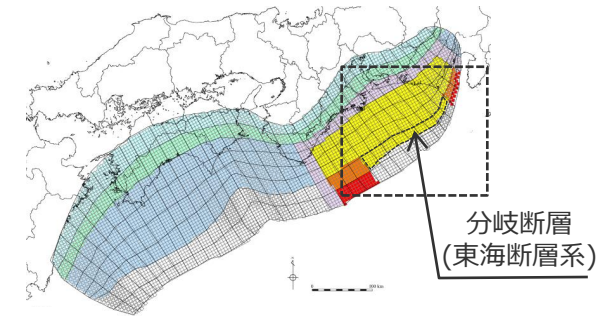
(検討波源モデルB-1のうち東海断層系の断層パラメータ)

■ 検討波源モデルB-1（プレート境界面浅部・東海断層系）のうち東海断層系の断層パラメータは、活断層評価結果及び内閣府(2012)等に基づき設定。

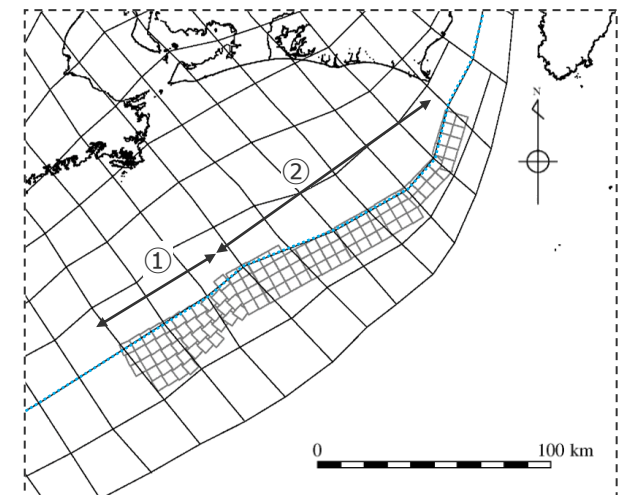
断層パラメータ

項目	設定値		設定方法
	セグメント①	セグメント②	
断層面積S (km ²)	1,204	2,044	
地震モーメントM ₀ (Nm)	2.4×10 ²¹		ΣμDS
剛性率μ(N/m ²)	4.1×10 ¹⁰		プレート境界の剛性率
すべり量D (m)	17.3~17.9	16.3~20.8	主部断層の大すべり域と同じすべり量を設定
断層長さ (km)	55	126	活断層評価結果を基に設定
断層上端深さ (km)	0	0	
断層下端深さ (km)	10	10	プレート境界面(主部断層上端)に接する深さ
断層幅 (km)	17~26	11~22	断層上下端深さ及び傾斜角による
傾斜角 (°)	14.8~28.4	26.0	内閣府(2012)・中央防災会議(2001)を基に設定※1

※1 セグメント①は内閣府(2012)に基づく。セグメント②は、中央防災会議(2001)に基づく。



検討波源モデルB-1
(プレート境界面浅部・東海断層系)



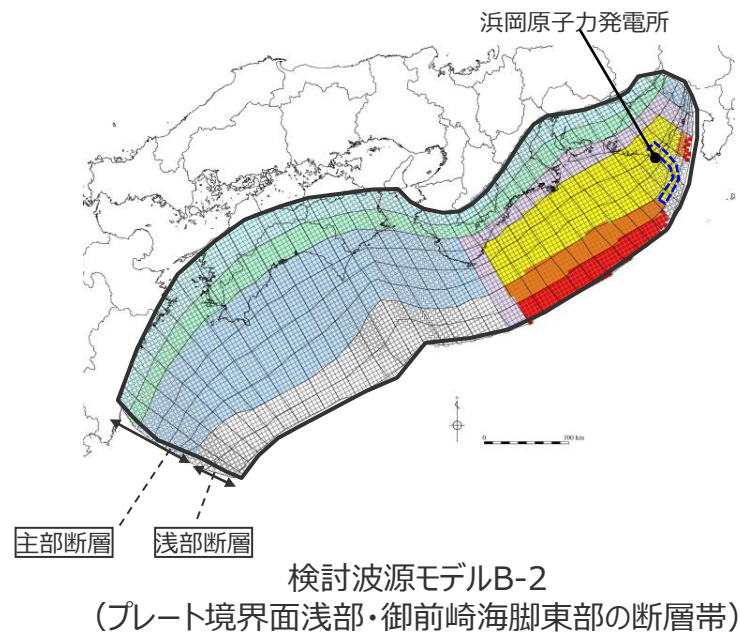
東海断層系の波源モデル

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルA・Bの設定

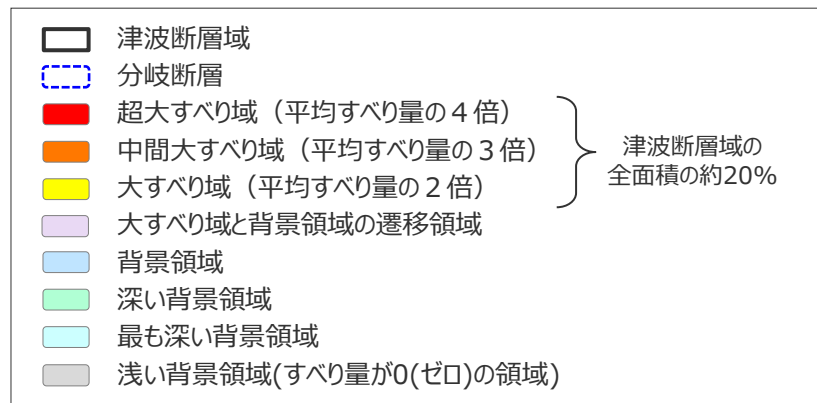
(検討波源モデルB-2 (プレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯) のすべり量分布)

■ 断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播するケースのうち、「検討波源モデルB-2：断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層（御前崎海脚東部の断層帯）に伝播するモデル」の各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



検討波源モデルB-2 (プレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯) のすべり量

最大すべり量(m)	平均すべり量(m)
41.7	12.0



検討波源モデルB-2 (プレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯) の各小断層のすべり量分布 (m)

		西 ←																																				→ 東		
陸側⇄海溝軸側	深度40km↓	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	
		30km↓	1	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.1	3.0	3.0	3.0	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0
	20km↓	2	7.5	7.5	7.3	7.3	7.1	7.1	6.4	6.2	6.2	6.0	5.9	5.9	5.7	5.6	5.4	5.4	5.4	5.2	5.2	5.2	5.1	5.1	5.0	5.0	4.8	5.2	5.2	4.5	4.5	3.9	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.7	2.7	2.0
		3	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	12.1	11.8	11.4	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	10.5	10.5	11.6	11.6	11.5	11.1	11.1	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	5.1	5.1	4.0
	10km↓	4	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.4	4.0
		5	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	10.9	8.2	5.5
	0km↓	6	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	14.3	18.2	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.2	5.5	
		7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	16.3	16.3	13.8	16.4	8.2	5.5	
		8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	37.5	36.3	36.3	35.8	34.6	34.6	41.7	41.7	41.7	37.0	0.0	0.0	0.0	21.9	8.2	5.5	

・すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。

・駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

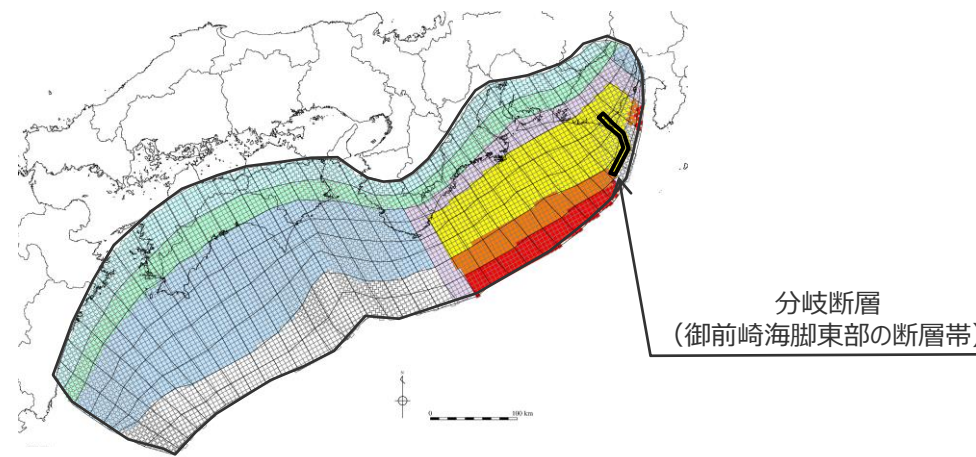
分岐断層

検討波源モデルA・Bの設定

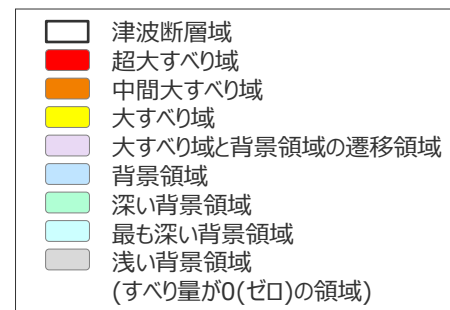
(検討波源モデルB-2 (プレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯) の断層パラメータ)

断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.1×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0
	平均すべり量 (m) ※2	12.0
	最大すべり量 (m)	41.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	10.0
	最大すべり量 (m)	20.8
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.6×10^{22}
	平均すべり量 (m) ※3	28.0
	最大すべり量 (m)	41.7



検討波源モデルB-2 (プレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯)



※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量

※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積(123,563km²)に基づき算出

※3 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積(13,838km²)に基づき算出

主部断層: 深さ10km以深の断層

浅部断層: 深さ10km以浅の断層

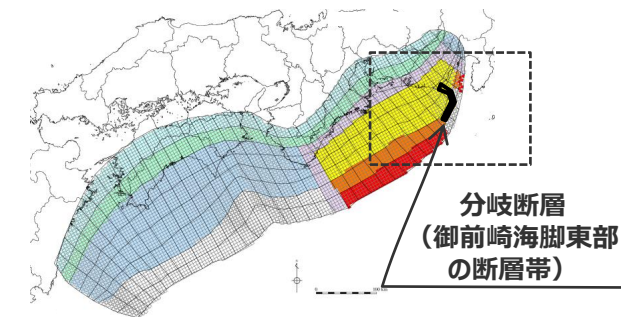
検討波源モデルA・Bの設定

(検討波源モデルB-2のうち御前崎海脚東部の断層帯・牧ノ原南稜の断層の断層パラメータ)

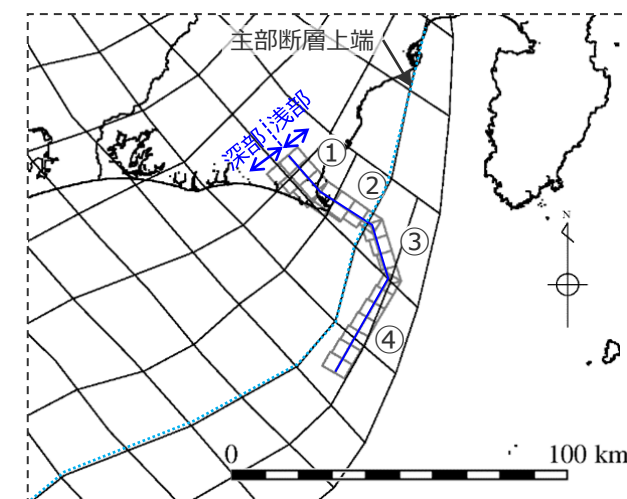
■ 検討波源モデルB-2（プレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯）のうち御前崎海脚東部の断層帯・牧ノ原南稜の断層の断層パラメータは、活断層評価結果等に基づき設定。

断層パラメータ

項目	設定値				設定根拠
	セグメント①	セグメント②	セグメント③	セグメント④	
断層面積S (km ²)	270	267	194	357	
地震モーメントM ₀ (Nm)	6.2×10 ²⁰				ΣμDS
剛性率μ (N/m ²)	4.1×10 ¹⁰				プレート境界の剛性率
すべり量D (m)	10.9~13.8	10.9~13.8	13.8	16.3	主部断層と同じすべり量を設定
断層長さ (km)	13.7	19.8	19.2	33.6	活断層評価結果を基に設定
断層上端深さ (km)	0	0	0	0	
断層下端深さ (km)	13.9~16.4	9.3~13.3	6.9~9.8	7.4~8.9	プレート境界面に接する深さ
断層幅(km)	17.2~20.7	10.6~16.4	7.6~12.0	9.3~11.9	断層上下端深さ及び傾斜角による
傾斜角(°)	浅部	65	65	60	活断層評価結果を基に設定
	深部	45	45	35	
浅部・深部の境界深さ(km)	8	8	8	6	



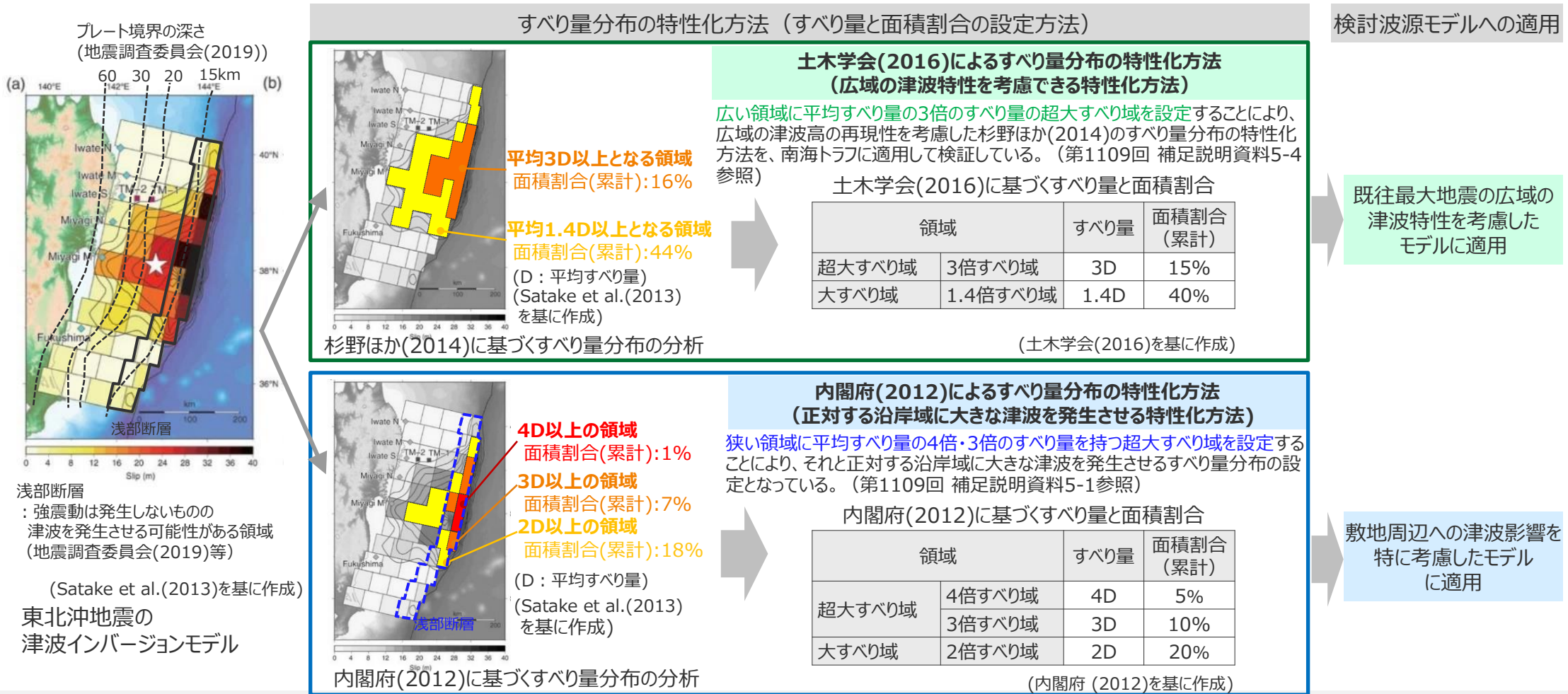
検討波源モデルB-2
(プレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯)



御前崎海脚東部の断層帯・牧ノ原南稜の断層の波源モデル

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルDの設定 (検討波源モデルの設定において適用した特性化方法)

- 東北沖型のMw9クラスのプレート間地震のすべり量分布の特性化方法（すべり量と面積割合の設定方法）を南海トラフに適用した知見として、土木学会(2016)による方法と内閣府(2012)による方法とが挙げられる。
- 土木学会(2016)によるすべり量分布の特性化方法は、広い領域に平均すべり量の3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定することにより、広域の津波高の再現性を考慮した杉野ほか(2014)のすべり量分布の特性化方法を、南海トラフに適用して検証したのとなっている。
 - ➡ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルには、土木学会(2016)によるすべり量分布の特性化方法を適用した。
- 内閣府(2012)によるすべり量分布の特性化方法は、狭い領域に平均すべり量の4倍・3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定することにより、それと正対する沿岸域に大きな津波を発生させる方法であり、この超大すべり域等の位置を移動させて検討することにより、他の沿岸域もカバーする方法となっている。
 - ➡ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルには、内閣府(2012)によるすべり量分布の特性化方法を適用した。

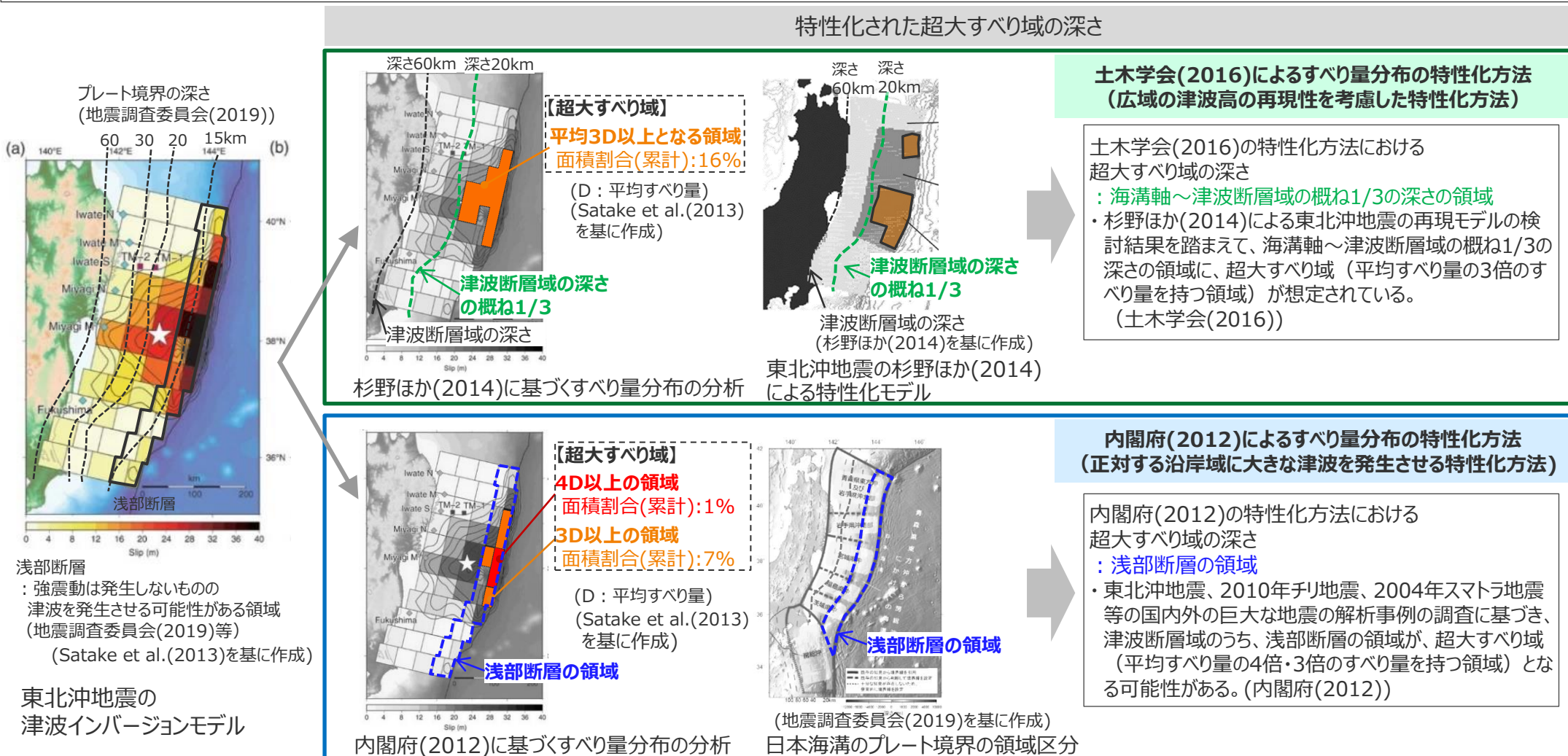


2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルDの設定

(すべり量分布の特性化方法と、特性化された超大すべり域の深さ)

- 内閣府(2012)の特性化方法と、土木学会(2016)の特性化方法とは、特性化されたすべり量と面積割合が異なることに伴い、特性化された超大すべり域の深さも異なっている。
- 狭い領域に平均すべり量の4倍・3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定する内閣府(2012)の特性化方法では、超大すべり域（平均すべり量の4倍・3倍のすべり量を持つ領域）は、津波断層域のうち、浅部断層の領域（強震動は発生しないものの津波を発生させる可能性がある領域）に想定されている。
- 一方、広い領域に平均すべり量の3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定する土木学会(2016)の特性化方法では、超大すべり域（平均すべり量の3倍のすべり量を持つ領域）は、内閣府(2012)よりも深い、海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域に想定されている。



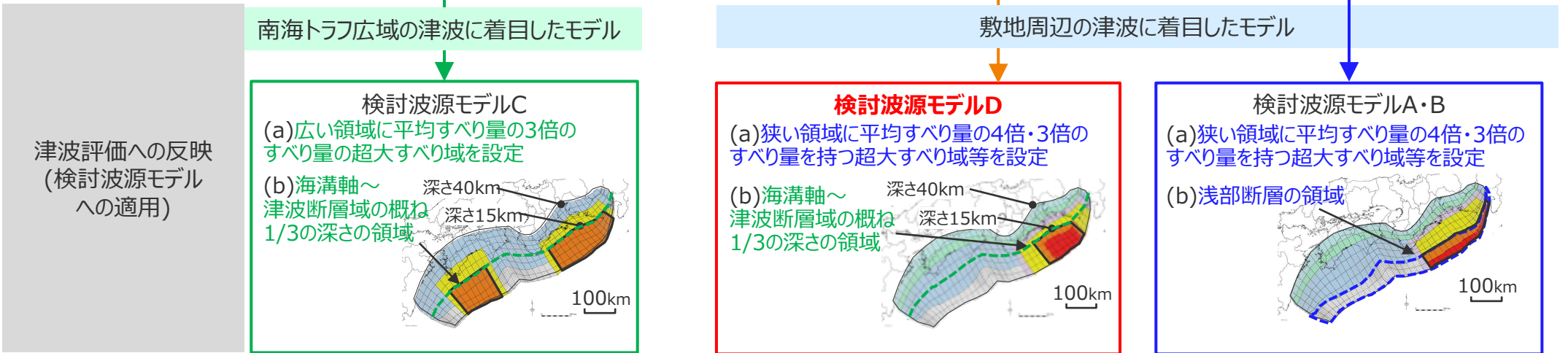
2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルDの設定

(すべり量分布の特性化方法と、特性化された超大すべり域の深さの津波評価への反映)

- 検討波源モデルの設定においては、すべり量分布の特性化方法と、特性化された超大すべり域の深さの組合せを保守的に検討した。
- まず、内閣府(2012)によるすべり量分布の特性化方法と、土木学会(2016)によるすべり量分布の特性化方法とでは、特性化されたすべり量と面積割合が異なることに伴い、特性化された超大すべり域の深さも異なっていることから、敷地周辺の津波に着目した検討波源モデルA・Bでは適用した内閣府(2012)による特性化方法に基づき、南海トラフ広域の津波に着目した検討波源モデルCでは適用した土木学会(2016)による特性化方法に基づき、それぞれ超大すべり域の深さを設定した。
- その結果、南海トラフ広域の津波に着目した検討波源モデルCの超大すべり域が、敷地周辺の津波に着目した検討波源モデルA・Bよりも、深い位置に設定されることを踏まえ、敷地に対して影響の大きい検討波源モデルAの超大すべり域の深さを検討波源モデルCと同じとしたモデルを検討波源モデルDとして追加し検討した。

すべり量の特性化方法（特性化されたすべり量と面積割合の設定方法）と特性化された超大すべり域の深さ

(a)すべり量分布の特性化方法 (特性化されたすべり量と面積割合の設定方法)	<p>土木学会(2016)によるすべり量分布の特性化方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広い領域に平均すべり量の3倍のすべり量の超大すべり域を設定することにより、広域の津波高の再現性を考慮したすべり量分布の特性化方法 	<p>内閣府(2012)によるすべり量分布の特性化方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・狭い領域に平均すべり量の4倍・3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定することにより、それと正対する沿岸域に大きな津波を発生させるすべり量分布の特性化方法
(b)特性化された超大すべり域の深さ	<p>海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域</p> <ul style="list-style-type: none"> ・杉野ほか(2014)による東北沖地震の再現モデルの検討結果を踏まえて、海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域に、超大すべり域（平均すべり量の3倍のすべり量を持つ領域）が想定されている。（土木学会(2016)） 	<p>浅部断層の領域</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東北沖地震、2010年チリ地震、2004年スマトラ地震等の国内外の巨大な地震の解析事例の調査に基づき、津波断層域のうち、浅部断層の領域が、超大すべり域（平均すべり量の4倍・3倍のすべり量を持つ領域）となる可能性がある。（内閣府(2012)）



2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

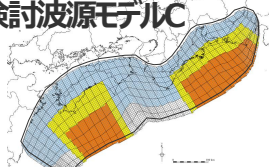
検討波源モデルDの設定

(広域モデルの超大すべり域の深さ反映の考え方)

- 設定した既往最大地震の広域の津波特性を考慮したモデル（検討波源モデルC）と、敷地周辺への津波影響を特に考慮したモデル（検討波源モデルA）を比較した結果、検討波源モデルCの超大すべり域が検討波源モデルAよりも深い領域まで設定されていることから、超大すべり域により励起されて到来する特に大きい津波の継続時間が長くなり、敷地への津波影響が大きくなる可能性があると考えられる。
- そこで、敷地への影響の観点から、検討波源モデルAに対し、検討波源モデルCの超大すべり域の深さの設定を取り込んだ検討波源モデルD（超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル）を設定することとした。

○ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

検討波源モデルC



(3倍すべり域を広域に設定したモデル)

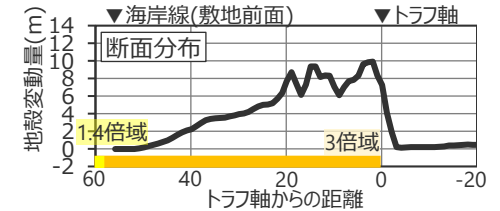
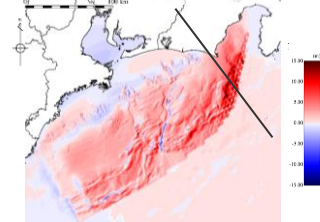
すべり量分布

超大すべり域の面積割合：
3倍すべり域を15%の面積
で設定

超大すべり域の深さ：
海溝軸～津波断層域の
概ね1/3の深さの領域

深度	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
40km	1	2.2	2.2	2.2	2.3	2.0	2.0	1.7	1.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.2	1.2	0.9
30km	2	2.2	2.2	2.2	2.3	2.3	2.0	2.0	1.7	1.7	1.7	1.4	1.4	1.2	1.2	0.9
20km	3	12.7	12.5	12.1	12.1	12.9	12.9	11.4	11.4	9.7	9.7	9.7	7.7	7.7	6.8	1.2
10km	4	12.7	12.5	12.5	12.1	11.4	12.9	12.9	11.4	9.7	9.7	9.7	7.7	7.7	7.7	1.2
0km	5	12.7	26.9	26.9	26.9	25.9	25.9	25.9	31.3	32.7	32.7	32.7	24.4	24.4	20.7	16.4
0km	6	12.7	27.2	26.9	26.9	25.9	25.9	25.9	31.3	32.7	32.7	32.7	24.4	24.4	20.7	16.4
0km	7	12.7	27.2	26.9	26.9	25.9	25.9	25.9	31.3	32.7	32.7	32.7	24.4	24.4	20.7	16.4
0km	8	13.1	27.2	27.2	26.9	25.9	25.9	25.9	31.3	32.7	32.7	32.7	24.4	24.4	20.7	16.4

断面位置



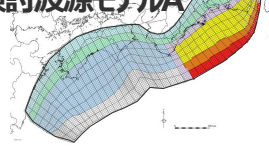
地殻変動量分布

検討波源モデルCは検討波源モデルAと比較して深い領域まで超大すべり域を設定
→ 到来する特に大きい津波の継続時間が長くなる可能性があると考えられる

より敷地への影響が大きいモデルを設定

○ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

検討波源モデルA



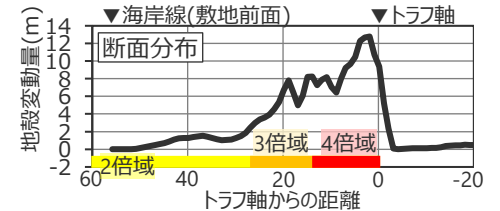
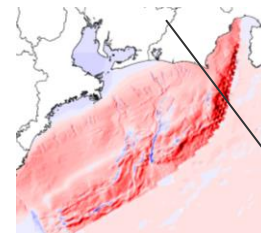
(4倍すべり域を東海に設定したモデル)

すべり量分布

超大すべり域の面積割合：
4倍すべり域を5%の面積で、
3倍すべり域を10%の面積で設定

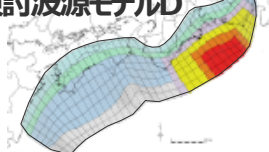
超大すべり域の深さ：
浅部断層の領域

深度	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
40km	1	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0
30km	2	5.0	5.0	4.8	5.2	5.2	4.5	4.5	3.9	3.9	3.9	3.1	3.1	2.7	2.7	2.0
20km	3	11.6	11.5	11.1	11.1	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	5.1	4.0
10km	4	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.4	4.0
0km	5	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	8.2	5.5
0km	6	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	8.2	5.5
0km	7	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	26.0	31.3	32.7	32.7	32.7	24.4	24.4	20.7	16.4
0km	8	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	26.0	31.3	32.7	32.7	32.7	24.4	24.4	20.7	16.4



(広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの
超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

検討波源モデルD

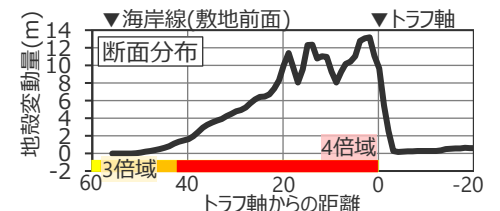
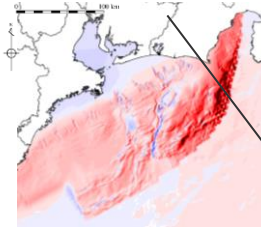


(超大すべり域の深さを広域
モデルと同じとしたモデル)

4倍すべり域を5%の面積で、
3倍すべり域を10%の面積で設定

海溝軸～津波断層域の
概ね1/3の深さの領域

深度	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
40km	1	2.2	2.2	2.1	2.3	2.0	2.0	1.7	1.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.2	1.2	0.9
30km	2	4.4	4.4	4.3	4.6	4.6	4.0	4.0	3.4	3.4	3.4	2.7	2.7	2.4	2.4	1.7
20km	3	11.3	11.2	10.8	11.5	11.5	10.2	10.2	8.6	8.6	8.6	6.8	6.8	6.8	4.8	3.5
10km	4	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.2	3.5
0km	5	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.9	4.8
0km	6	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.9	4.8
0km	7	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.9	4.8
0km	8	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.9	4.8



地殻変動量分布

■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域もしくは基本すべり域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

検討波源モデルDの設定

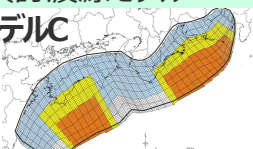
(広域モデルの超大すべり域の深さを反映の考え方：(補足) 水位上昇側の津波評価結果の確認)

- 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCと、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの水位上昇側の津波評価結果(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果※)を以下に示す。
- 検討波源モデルCは、検討波源モデルAと比べて、超大すべり域が深い領域まで設定されていることから、押し波第1波の特に大きい津波の継続時間が相対的に長く、取水槽の水位も大きくなっていることが確認できる。
- 検討波源モデルD(検討波源モデルAに対し、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル)は、取水槽への影響が比較的大きい検討波源モデルCの津波の特徴を反映したうえで、検討波源モデルC、Aよりも取水槽の水位が大きくなっていることを確認した。

※大すべりの位置に関する概略パラメータスタディ結果は、p.37参照

○既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

検討波源モデルC



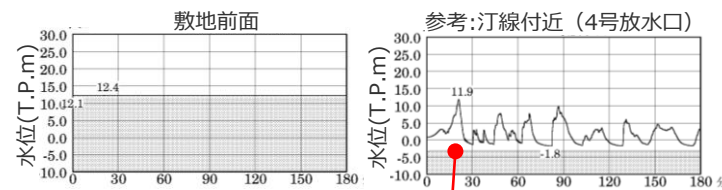
超大すべり域の面積割合：
3倍すべり域を15%の面積で設定

超大すべり域の深さ：
海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域

大すべりの位置に関する概略パラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P. m)					備考
敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
12.4	5.3	7.6	7.6	9.5	東海地域の超大すべり域を東へ60km

取水槽への影響が比較的大きい

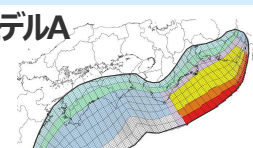


特に大きい津波の継続時間が相対的に長い水位の時刻歴波形

より敷地への影響が大きいモデルを設定

○敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

検討波源モデルA



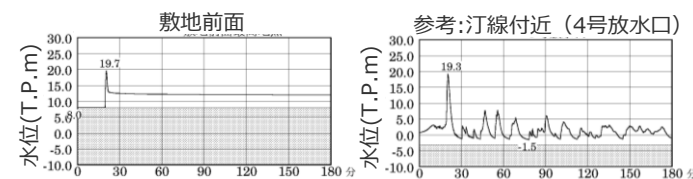
超大すべり域の面積割合：
4倍すべり域を5%の面積で、
3倍すべり域を10%の面積で設定

超大すべり域の深さ：
浅部断層の領域

大すべりの位置に関する概略パラメータスタディ結果

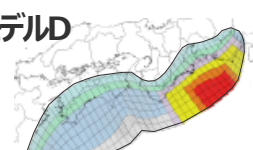
最大上昇水位(T.P. m)					備考
敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の超大すべり域を東へ40km

(広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)



水位の時刻歴波形

検討波源モデルD



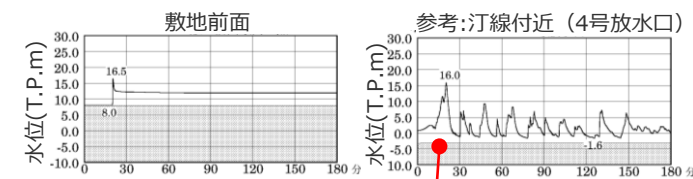
4倍すべり域を5%の面積で、
3倍すべり域を10%の面積で設定

海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域

大すべりの位置に関する概略パラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P. m)					備考
敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
16.5	6.2	8.7	9.3	11.3	東海地域の超大すべり域を東へ60km

取水槽への影響が比較的大きい検討波源モデルCの特徴を反映したうえで、検討波源モデルC、Aよりも取水槽の水位が大きくなっていることを確認



特に大きい津波の継続時間が相対的に長い水位の時刻歴波形

検討波源モデルDの設定

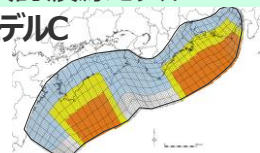
(広域モデルの超大すべり域の深さを反映の考え方：(補足) 水位下降側の津波評価結果の確認)

- 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCと、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの水位下降側の津波評価結果(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果※)を以下に示す。
- 検討波源モデルCは、超大すべり域が検討波源モデルAよりも深い領域まで設定されているが、それによる引き波への影響は小さく、水位低下時間は検討波源モデルAの方が長くなっていることを確認した。
- 検討波源モデルD(検討波源モデルAに対し、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル)は、水位低下時間が、検討波源モデルCよりも長く、検討波源モデルAよりも短くなっていることを確認した。

※大すべりの位置に関する概略パラメータスタディ結果は、p.38参照

○既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

検討波源モデルC

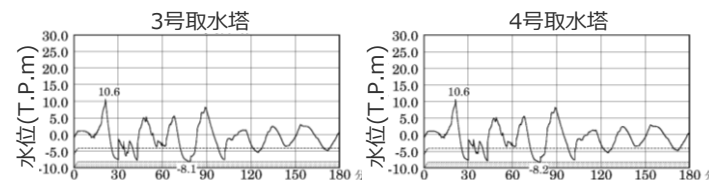


超大すべり域の面積割合：
3倍すべり域を15%の面積で設定

超大すべり域の深さ：
海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域

大すべりの位置に関する概略パラメータスタディ結果

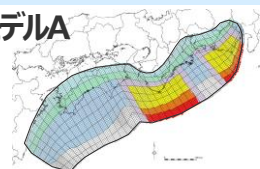
最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
3号取水塔	4号取水塔	
海底面 (11.4min)	海底面 (10.1min)	東海地域の超大すべり域を東へ60km



水位の時刻歴波形

○敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

検討波源モデルA



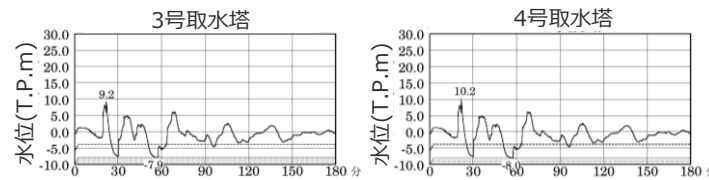
超大すべり域の面積割合：
4倍すべり域を5%の面積で、
3倍すべり域を10%の面積で設定

超大すべり域の深さ：
浅部断層の領域

より敷地への影響が大きいモデルを設定

大すべりの位置に関する概略パラメータスタディ結果

最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
3号取水塔	4号取水塔	
海底面 (12.6min)	海底面 (12.5min)	東海地域の敷地に近い大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離130km

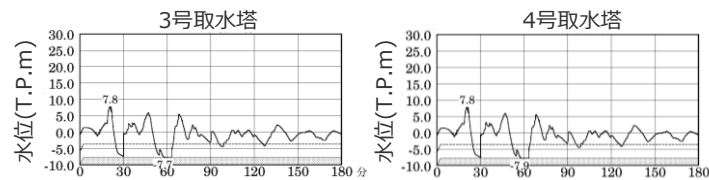


水位の時刻歴波形

(広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

大すべりの位置に関する概略パラメータスタディ結果

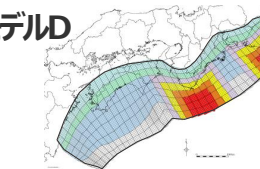
最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
3号取水塔	4号取水塔	
海底面 (12.5min)	海底面 (12.3min)	東海地域の敷地に近い大すべり域基準位置、大すべり域間の距離140km



水位の時刻歴波形

水位低下時間が、検討波源モデルCよりも長く、検討波源モデルAよりも短くなっていることを確認した。

検討波源モデルD



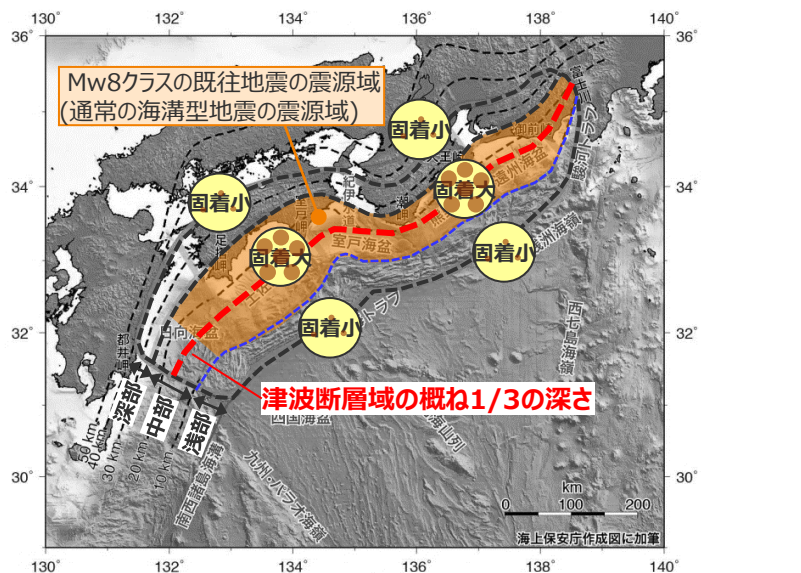
4倍すべり域を5%の面積で、
3倍すべり域を10%の面積で設定

海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域

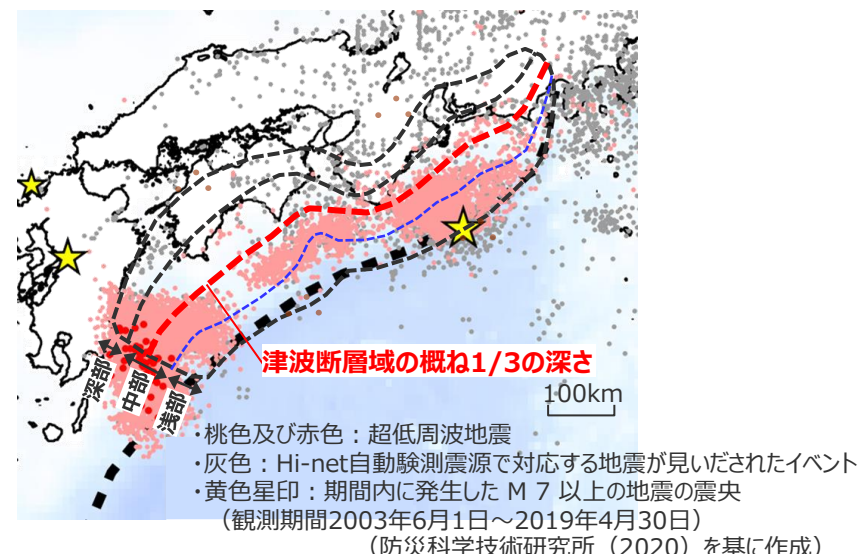
検討波源モデルDの設定

(土木学会(2016)による超大すべり域の設定深さと地震学的知見との関係)

- 南海トラフのプレート境界は、構造、地震活動、地殻変動等の知見に基づき、浅部・中部・深部の3つの領域に分けられるとされている。このうち、中部(深さ約10~25km)の領域は、Mw8クラスの既往地震の震源域(通常海溝型地震の震源域)と対応する固着が強い領域であり、浅部(深さ約10km以浅)の領域は、定期的に発生している浅部超低周波地震等により固着が弱くなっている領域とされる。(小原(2009)、地震調査委員会(2013)、Araki et al.(2017)等)
- 一方、防災科学技術研究所(2020)によると、浅部の領域で発生するとされる浅部超低周波地震は、中部の領域にも一部分布し、Mw8クラスの既往地震の震源域と対応する領域と一部重なり合っている。
- 土木学会(2016)による超大すべり域の設定深さ(海溝軸~津波断層域の概ね1/3の深さの領域)は、超大すべり域の範囲を、浅部の領域を超えてMw8クラスの既往地震の震源域(通常海溝型地震の震源域)と対応する領域の内部まで拡大した深さとなっており、浅部超低周波地震分布を概ね包絡する関係となっている。



南海トラフの領域区分との関係
(地震調査委員会(2013)を基に作成)

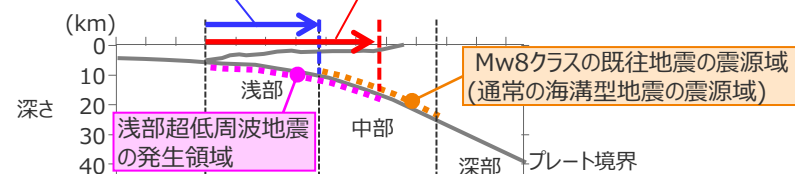


南海トラフの浅部超低周波地震の分布との関係
(観測期間2003年6月1日~2019年4月30日)
(防災科学技術研究所(2020)を基に作成)

南海トラフのプレート境界の科学的知見に基づく領域区分 (地震調査委員会(2013)による)

- 浅部：深さ約10km以浅の領域。
すべりが生じると大きい津波が発生する可能性のある領域。
- 中部：深さ約10~25kmの領域。
Mw8クラスの既往地震の震源域と対応し、固着が強い領域。
- 深部：深さ約25km~40kmの領域。
Mw8クラスの既往地震の震源域の深部から深部低周波微動の発生領域。

浅部断層の領域 (内閣府(2012)による 超大すべり域の設定深さ)
津波断層域の概ね1/3の深さまでの領域 (土木学会(2016)による 超大すべり域の設定深さ)



超大すべり域の設定深さと南海トラフの地震学的知見との関係

検討波源モデルDの設定

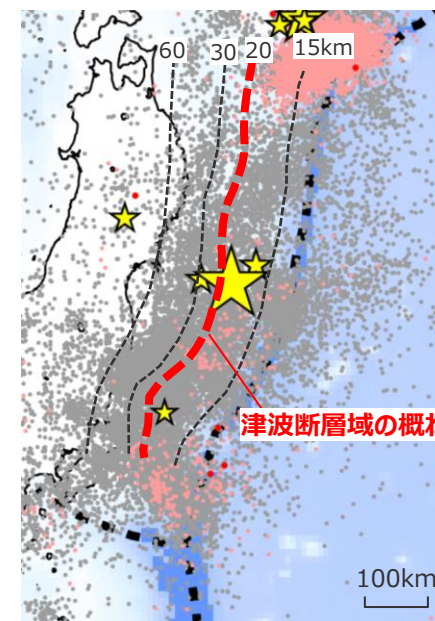
(土木学会(2016)による超大すべり域の設定深さと地震学的知見との関係)

- 国内外のMw9クラスの巨大地震が発生した沈み込み帯において、浅部断層の領域の深さと、津波断層域の概ね1/3の深さとの関係を整理した結果、南海トラフ同様、津波断層域の概ね1/3の深さは、浅部断層の領域を超えて既往地震の震源域（通常海溝型地震の震源域）と対応する領域の内部まで拡大した深さとなっていることを確認した。
- また、観測記録のある日本海溝において、津波断層域の概ね1/3の深さと浅部超低周波地震の分布とを比較した結果、南海トラフ同様、津波断層域の概ね1/3の深さは、浅部超低周波地震分布を概ね包絡する関係となっていることを確認した。

国内外の沈み込み帯における浅部断層の領域の深さとの関係 (km)

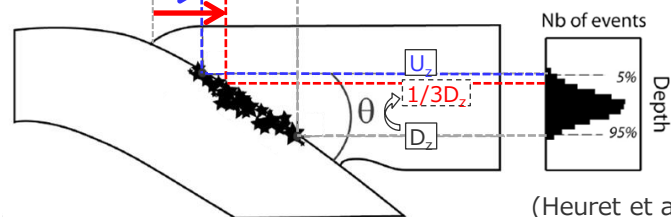
沈み込み帯	過去の巨大地震	浅部断層の領域の深さ (U_z)	津波断層域 (地震発生領域) の概ね1/3の深さ ($1/3D_z$)	地震発生領域の深さ (D_z)
南海トラフ*1	-	10	15	40
日本海溝*2	2011年東北沖地震(Mw9.0)	15	20	60
アンダマン*3	2004年スマトラ沖地震(Mw9.1)	11	17	50
アラスカ*3	1964年アラスカ地震(Mw9.2)	18	19	55
南部チリ*3	1960年チリ地震(Mw9.5)	5	17	50
カムチャッカ*3	1952年カムチャッカ地震(Mw9.0)	11	21	61

- *1 南海トラフの各領域の深さは、地震調査委員会(2013)に基づき、算出
- *2 日本海溝の各領域の深さは、地震調査委員会(2019)に基づき、算出
- *3 国外の沈み込み帯の各領域の深さは、Heuret et al.(2011)によるMw5.5~7クラスの既往地震分布に基づき以下のとおり算出
 - ・浅部断層の領域の深さ(U_z)：既往地震の全体の5%の地震が起きている深さ
 - ・津波断層域 (地震発生領域) の概ね1/3の深さ： $1/3D_z$
 - ・地震発生領域の深さ(D_z)：既往地震の全体の95%の地震が起きている深さ



- ・桃色及び赤色：超低周波地震
 - ・灰色：Hi-net自動検測震源で対応する地震が見いだされたイベント
 - ・黄色星印：期間内に発生した M 7 以上の地震の震央
 - ・プレート境界深度：地震調査委員会(2019) (観測期間2003年6月1日~2019年4月30日)
- (防災科学技術研究所 (2020) を基に作成)
日本海溝の浅部超低周波地震の分布との関係

浅部断層の領域 (内閣府(2012)による 超大すべり域の設定深さ)
津波断層域の概ね1/3の深さまでの領域 (土木学会(2016)による 超大すべり域の設定深さ)



(Heuret et al.(2011)を基に作成)

プレート境界の地震発生領域の幾何学パラメータの定義

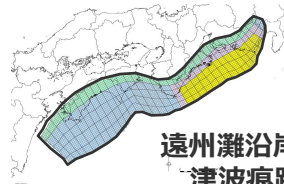
2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルDの設定

■ 検討波源モデルDは、南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、敷地周辺の津波に着目した遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）として設定した。

痕跡再現モデル

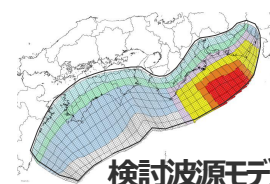
- 歴史記録および津波堆積物に基づき、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映されている南海トラフの津波痕跡高を再現するモデル（Mw8クラス）



遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル

検討波源モデル

- 南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映された痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）



検討波源モデルD

項目	パラメータ設定		設定根拠
	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル		
認識論的 不確かさ	面積	約8万km ²	<ul style="list-style-type: none"> 南海トラフでは、宝永地震等と大きく異なる地震が発生する可能性は低いと考えられるが、不確かさとして南海トラフの波源の広がりを見極めた上で、保守的なスケールに則し、東北沖地震と同等以上の規模の地震を考慮した。 (第1109回 補足5-6章 ③南海トラフの津波堆積物等に関する最新知見の整理 第1109回 補足6-3章 国内外の巨大地震に関する最新の科学的知見の収集・分析) 付加作用が卓越する南海トラフと造構性侵食作用が卓越する東北沖とは浅部のすべり挙動が異なると考えられるが、保守的に東北沖地震（Mw9.1）の特徴を踏まえた浅部の破壊形態も考慮した。 (第1109回 補足6-4 浅部の破壊形態) ライズタイムに着目した東北沖地震の津波インバージョンの結果、ライズタイムを60sとした津波インバージョンでは観測記録を再現できず、ライズタイムを150～200s程度とするのが最も適切であることを確認した。(第1109回 補足6-5章 ライズタイムの設定)
	地震規模	Mw8.8	
	すべり量	約9m	
	ライズタイム (すべり速度)	60s (0.15m/s)	
	浅部の 破壊形態	破壊せず	
	超大すべり域・ 大すべり域の位置	駿河湾～紀伊半島沖 (超大すべり域は無し)	
偶然的 不確かさ	破壊伝播速度	2.0km/s	<ul style="list-style-type: none"> 歴史記録および津波堆積物に基づき、南海トラフの海底地形、構造、地震学的な特徴が反映されている痕跡再現モデル（遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル）に基づき設定した。
	破壊開始点	大すべり域の下端中央	

・すべり量：超大すべり域のすべり量。超大すべり域が無いモデルについては、大すべり域のすべり量 ・すべり速度：(すべり量)/(ライズタイム) ■：検討波源モデルにおいて、不確かさとして保守的に考慮したパラメータ

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルDの設定

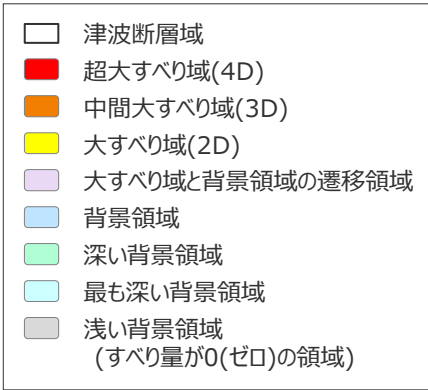
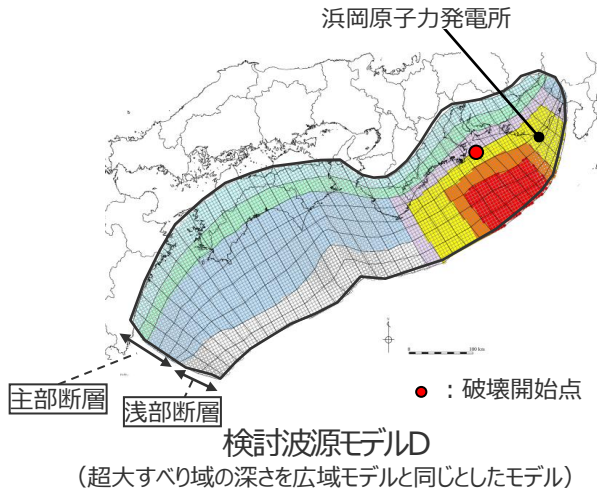
(設定方法)

- 検討波源モデルDの設定フローを以下に示す。
- 検討波源モデルDは、南海トラフおよび国内外の巨大地震に関する最新知見を踏まえて、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（Mw9クラス）として設定した。すべり量分布には、内閣府(2012)によるMw9クラスの地震のすべり量分布の特性化方法（特性化されたすべり量と面積割合の設定方法）を適用した。

検討波源モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-1章を参照。

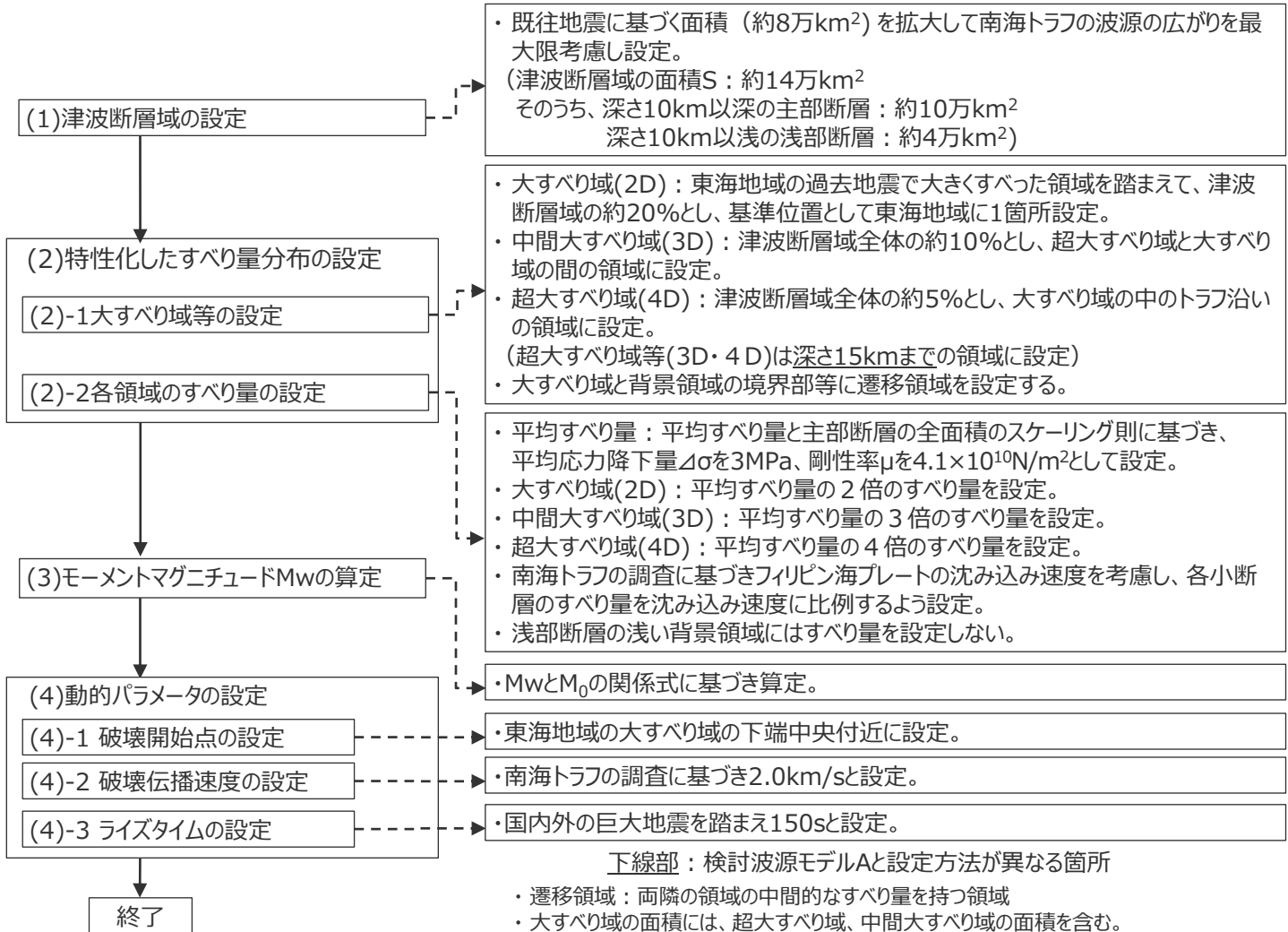
設定フロー

設定方法



(D : 主部断層の平均すべり量)

主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層



2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルDの設定

(大すべり域の位置)

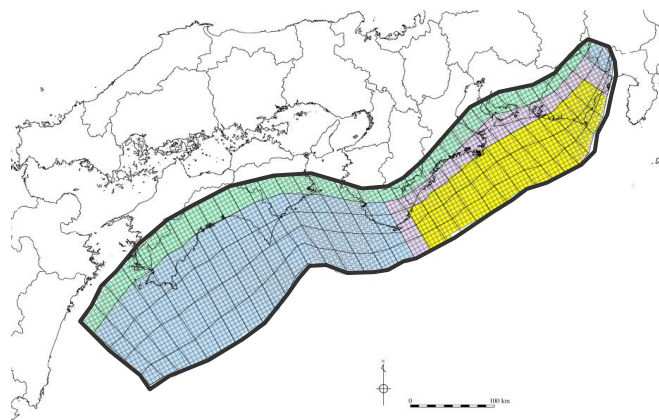
- 検討波源モデルDの大すべり域は、遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルに基づき、トラフ軸付近の浅部断層を含めた領域に設定し、これを基準位置とした。
- なお、基準位置の超大すべり域は大すべり域の中央に配置した。

・大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。(本編2.3章)

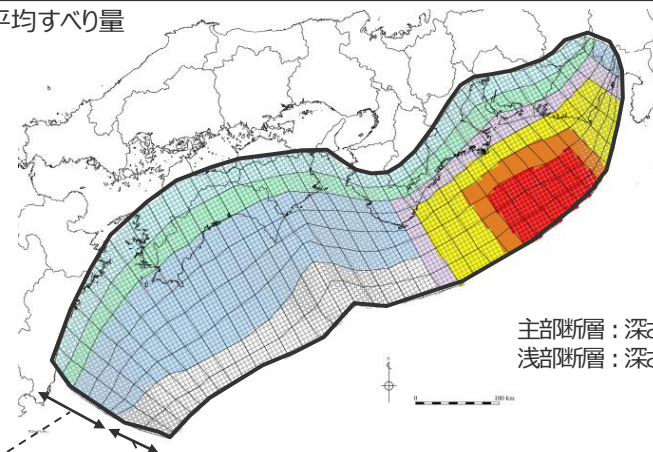
【検討波源モデルDの設定】

- ・大すべり域(2D)は、遠州灘沖～紀伊半島沖の深さ約20kmより浅い側の領域に、津波断層域の全面積の約20%の面積で設定した。
- ・中間大すべり域(3D)は、津波断層域の全面積の約10%の面積で、超大すべり域と大すべり域の間の領域に設定した。
- ・超大すべり域(4D)は、津波断層域の全面積の約5%の面積で、大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域に設定した。

・D：主部断層の平均すべり量



遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル



主部断層：深さ10km以深の断層
浅部断層：深さ10km以浅の断層

主部断層 浅部断層 検討波源モデルD

- 津波断層域 ➔ 144,379km²
- 大すべり域(2D) ➔ 津波断層域の全面積の約20%¹⁾
- 中間大すべり域(3D) ➔ 超大すべり域と大すべり域の間の領域 (津波断層域の全面積の約10%²⁾)
- 超大すべり域(4D) ➔ 大すべり域の中のトラフ軸沿いの領域 (津波断層域の全面積の約5%)

1) 大すべり域の面積には、超大すべり域、中間大すべり域の面積を含む。

2) 中間大すべり域の面積には、超大すべり域の面積を含む。

・検討波源モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-1章を参照。

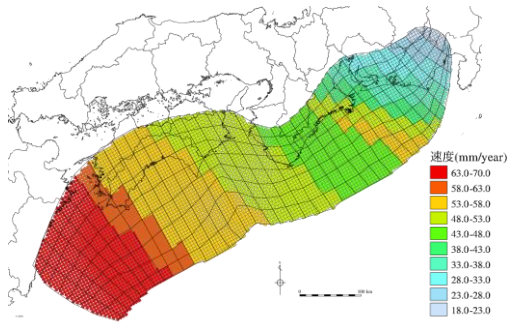
津波断層域
 超大すべり域
 中間大すべり域
 大すべり域
 遷移領域
 背景領域
 深い背景領域
 最も深い背景領域
 浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルDの設定

(すべり量分布の設定方法)

- 検討波源モデルDのすべり量分布の設定については、各小断層のすべり量をフィリピン海プレートの沈み込み速度に比例するよう設定し、超大すべり域には平均すべり量の4倍、中間大すべり域には3倍、大すべり域には2倍のすべり量を設定した。
- 検討波源モデルDのすべり量分布の設定方法は以下のとおり。



(Loveless and Meade(2010)を基に作成)
各小断層の沈み込速度分布

【主部断層のすべり量の設定】

まず、各小断層の平均すべり量 D_i は、フィリピン海プレートの沈み込み速度に比例し、かつ各小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が主部断層のスケール則から求められる地震モーメント M_0 になるように設定。

$$M_0 = \sum M_{0i} = \sum \mu D_i S_i \rightarrow \text{小断層毎のすべり量はプレートの沈み込み速度に比例するよう設定。}^*$$

次に、各小断層の平均すべり量 D_i に対して、以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- | | | | |
|----------------|------|--|-----------------------|
| ① 大すべり域 | 黄色 | : $2D_i$ | } 背景領域と断層下端との境界部の遷移領域 |
| ② 背景領域 | 水色 | : 主部断層 (領域①～⑦) の小断層の地震モーメント M_{0i} の総和が、 M_0 となるすべり量 D_b を設定 | |
| ③ ①・⑥・⑦と②の遷移領域 | 淡紫色 | : $(2D_i + D_b) / 2$ | |
| ④ 深い背景領域 | 緑色 | : $1/2 \times D_b$ | |
| ⑤ 最も深い背景領域 | 浅藍色 | : $1/4 \times D_b$ | |
| ⑥ 超大すべり域 | 赤色 | : $4D_i$ | |
| ⑦ 中間大すべり域 | オレンジ | : $3D_i$ | |

D_i : 各小断層の平均すべり量 D_b : 各背景領域のすべり量(= aD_i , a は定数) S_i : 各小断層の面積
 M_0 : スケール則から算定される主部断層の地震モーメント M_{0i} : 各小断層の地震モーメント

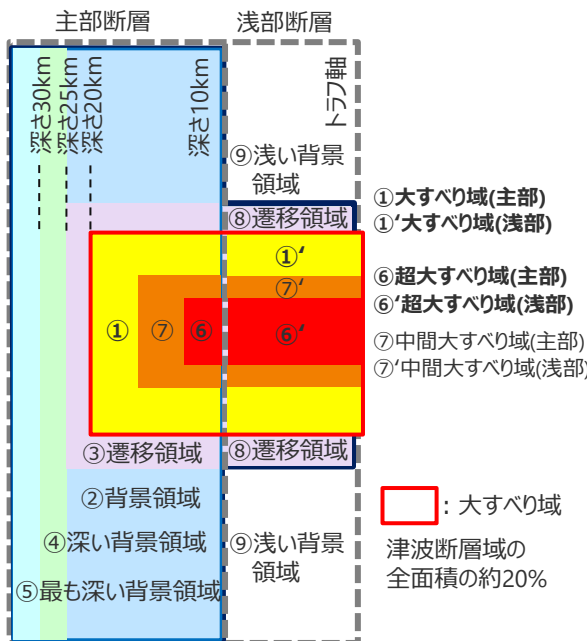
※ 内閣府(2012)と同様、上記のすべり量設定を行うにあたり、フィリピン海プレートの沈み込み速度を考慮した遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルにより歴史記録及び津波堆積物調査等による津波痕跡高の再現性を確認。

【浅部断層のすべり量の設定】

以下の関係を与えて各小断層のすべり量を設定。

- | | | |
|------------|------|----------------------|
| ①' 大すべり域 | 黄色 | : $2D_i$ |
| ⑥' 超大すべり域 | 赤色 | : $4D_i^{1)}$ |
| ⑦' 中間大すべり域 | オレンジ | : $3D_i$ |
| ⑧ ①と⑨の遷移領域 | 淡紫色 | : $(2D_i + D_b) / 2$ |
| ⑨ 浅い背景領域 | 水色 | : 0 (ゼロ) |

① : 大すべり域
津波断層域の全面積の約20%

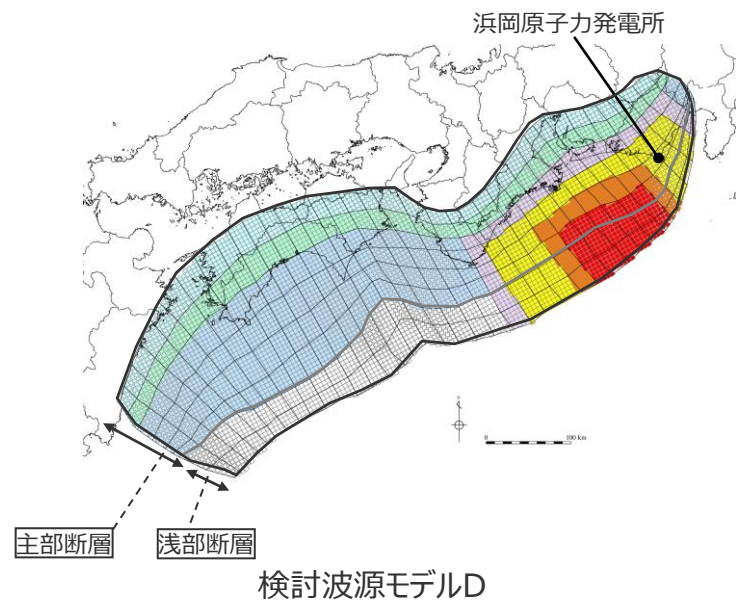


検討波源モデルDによるすべり量分布概念図

1) 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす (内閣府(2012)) とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定している。

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 検討波源モデルDの設定 (すべり量分布の設定)

■ 検討波源モデルDの各小断層のすべり量分布は以下のとおり。



検討波源モデルDのすべり量

最大すべり量 (m)	平均すべり量 (m)
41.7	11.8 m

- 津波断層域
 - 超大すべり域 (平均すべり量の4倍)
 - 中間大すべり域 (平均すべり量の3倍)
 - 大すべり域 (平均すべり量の2倍)
 - 大すべり域と背景領域の遷移領域
 - 背景領域
 - 深い背景領域
 - 最も深い背景領域
 - 浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)
- 津波断層域の全面積の約20%

西 ←

検討波源モデルDの小断層のすべり量分布 (m)

⇒ 東

陸側 ⇄
海溝軸 ⇄

深度40km↓		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	3.3	3.3	3.2	3.2	3.1	3.1	2.8	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.4	2.4	2.4	2.3	2.3	2.3	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.3	2.0	2.0	1.7	1.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.2	1.2	0.9	0.9
20km↓	2	6.6	6.6	6.4	6.4	6.2	6.2	5.7	5.5	5.5	5.3	5.2	5.2	5.0	4.9	4.8	4.8	4.8	4.6	4.6	4.6	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.6	4.6	4.0	4.0	3.4	3.4	3.4	2.7	2.7	2.4	2.4	1.7	
	3	13.3	13.3	12.8	12.8	12.5	12.5	11.3	11.3	11.0	10.7	10.7	10.5	10.1	10.1	9.8	9.8	9.6	9.6	9.3	9.3	9.3	11.3	11.3	11.2	10.8	10.8	11.5	11.5	10.2	10.2	8.6	8.6	8.6	6.8	6.8	4.8	4.8	3.5
10km↓	4	13.3	13.3	12.8	12.8	12.5	12.5	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.5	10.5	10.1	9.8	9.8	9.6	9.6	9.6	9.3	9.3	13.7	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.2	3.5
	5	13.3	13.3	12.8	12.8	12.5	12.5	12.5	11.3	11.3	11.0	10.7	10.7	10.5	10.5	10.1	9.8	9.8	9.6	9.6	9.6	9.3	13.7	18.1	17.9	17.9	25.9	25.9	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	13.8	10.9	10.9	7.9	4.8
0km↓	6	13.3	13.3	12.8	12.8	12.5	12.5	12.5	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.5	10.5	10.1	9.8	9.8	9.8	9.6	9.6	9.3	13.7	18.1	18.1	17.9	26.9	34.6	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	24.4	13.8	13.8	10.9	7.9	4.8
	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.7	18.1	18.1	17.9	26.9	34.6	41.7	41.7	37.0	37.0	24.4	16.3	13.8	10.9	7.9	4.8	
8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.7	18.8	18.1	18.1	26.9	34.6	41.7	41.7	41.7	37.0	27.7	16.3	13.8	10.9	7.9	4.8		

- すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
- 駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす(内閣府(2012))とされるが、敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

2.2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

検討波源モデルDの設定

(断層パラメータ)

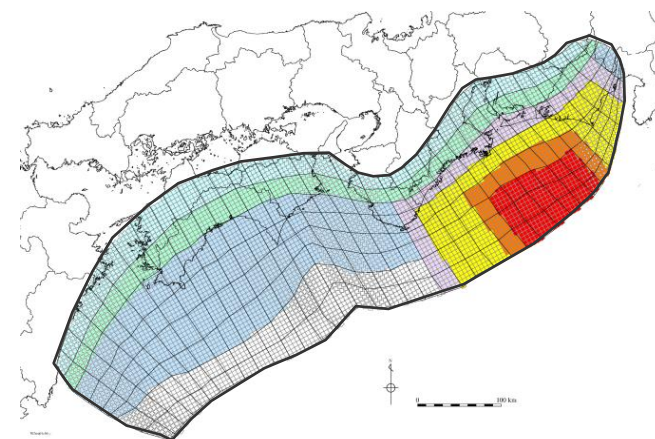
検討波源モデルDの断層パラメータ

項目		設定値
津波断層域全体	面積 (km ²)	144,379
	地震モーメント (Nm)	6.0×10^{22}
	Mw	9.1
	平均応力低下量 (MPa) ※ ¹	3.0
	平均すべり量 (m) ※ ²	11.8
	最大すべり量 (m)	41.7
	剛性率 (N/m ²)	4.1×10^{10}
	破壊伝播速度 (km/s)	2.0
	ライズタイム (s)	150
主部断層	面積 (km ²)	109,725
	地震モーメント (Nm)	4.5×10^{22}
	平均すべり量 (m)	9.9
	最大すべり量 (m)	41.7
浅部断層	面積 (km ²)	34,655
	地震モーメント (Nm)	1.5×10^{22}
	平均すべり量 ※ ³ (m)	26.0
	最大すべり量 (m)	41.7

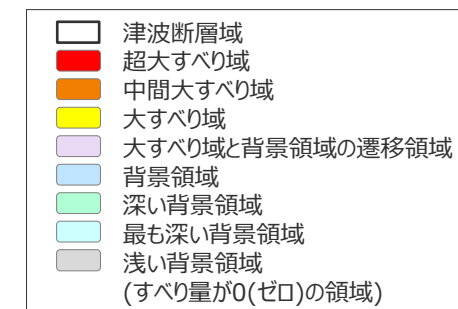
※¹ スケーリング則の対象とした平均応力低下量

※² すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(123,700km²)に基づき算出

※³ すべり量が0m(ゼロ)でない領域の断層面積(13,975km²)に基づき算出



検討波源モデルD



主部断層：深さ10km以深の断層

浅部断層：深さ10km以浅の断層

目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定 (本編1章)

基準断層モデルの設定 (本編2章)

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)

- ・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
- 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)

- ・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

基準断層モデルの設定 (本編2.3章) (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定（検討波源モデルC）。

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

・敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域位置のパラメータスタディ**を実施することにより、**基準断層モデルを設定**。

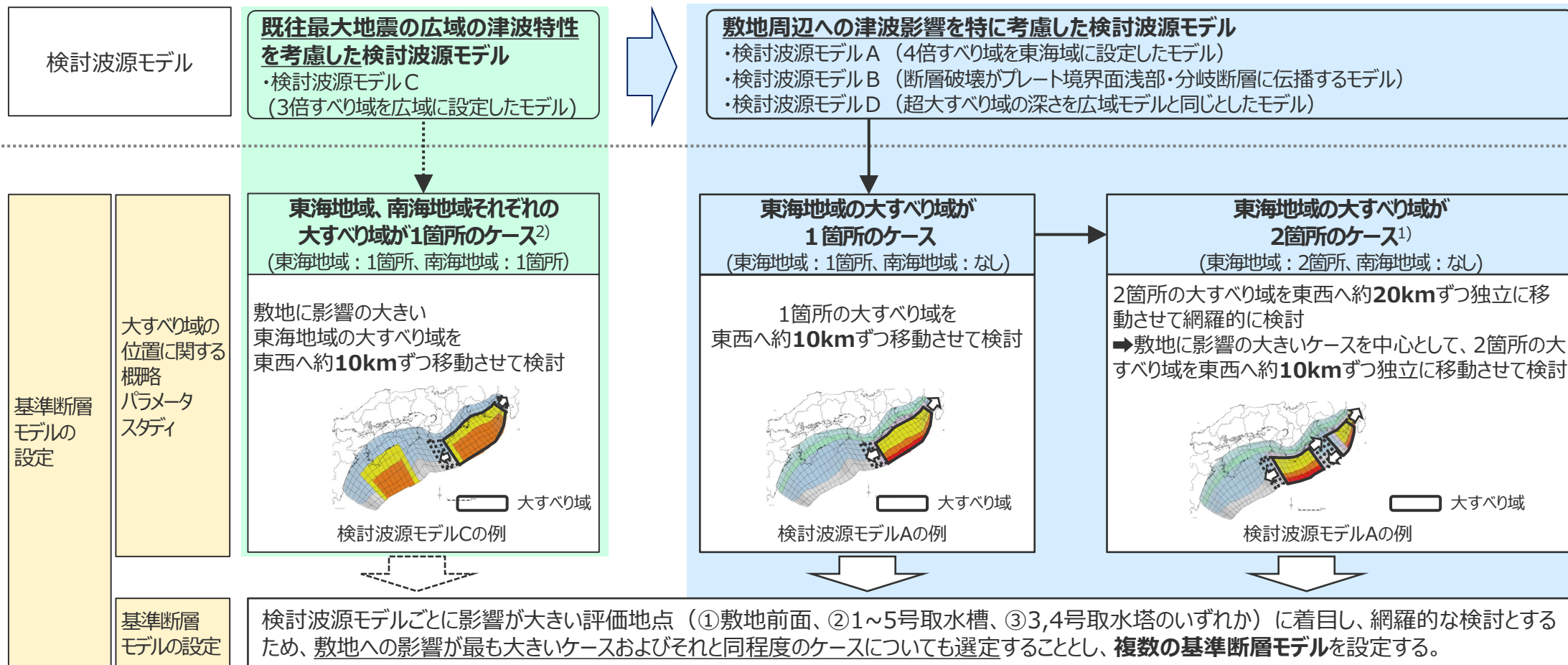
・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える**動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）のパラメータスタディ**を、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、**内閣府の最大クラスモデルとの比較**を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 検討方針

- 設定した複数の検討波源モデル (A~D) に対し、敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域の位置の不確かさを考慮し、大すべり域の位置を東西に約10kmずつ網羅的に移動させたパラメータスタディを破壊開始点の位置が影響しないよう同時破壊の条件で実施する。検討の結果、水位上昇側・下降側ごとに、敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、評価地点 (①敷地前面、②1~5号取水槽、③3,4号取水塔のいずれか) ごとに、複数の基準断層モデルとして設定する。
- パラメータスタディに当たっては、敷地に影響の大きい東海地域の大すべり域が1箇所のケースのほか、大すべり域が2箇所のケースも検討し、それぞれの大すべり域を東西へ約10kmずつ移動させて検討する。

より敷地への影響が大きいモデルを設定



1) 東海地域の大すべり域が2箇所のケースは、東海地域の大すべり域が1箇所のケースの概略パラメータスタディ結果を踏まえて、検討波源モデルA、B-1、Dを対象として実施した。また、大すべり域の位置は、内閣府の最大クラスモデルケース⑧の大すべり域の位置を基準位置とした。
2) Mw9以上の巨大地震の大すべり域の数は1~2個と分析されている (第1109回 補足説明資料6-1章)ことから、広域の津波に着目したモデルでは、大すべり域が東海地域1箇所、南海地域1箇所のケースを検討した。
・概略パラメータスタディモデルの波源モデル図およびすべり量分布を含む断層パラメータはデータ集および第717回、第981回審査会合 机上配布資料に記載。

2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）

概略パラメータスタディ結果一覧

（水位上昇側）

■ 水位上昇側の大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの影響が大きいことを確認し、そのうち敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、基準断層モデルとして設定した。

- ①敷地前面への影響が大きいケース： 基準断層モデル1-1～1-5（検討波源モデルA、大すべり域1箇所の場合）
- ②1～5号取水槽への影響が大きいケース： 基準断層モデル3-1～3-3（検討波源モデルD、大すべり域1箇所の場合）

➤ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

モデル名	大すべり域の数	最大上昇水位(T.P. m)					備考
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルC (3倍すべり域を広域に設定したモデル)	東海地域、 南海地域： 1箇所	12.4	5.3	7.6	7.6	9.5	東海地域の大すべり域を東へ60km

より敷地への影響が大きいモデルを設定

➤ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

検討波源モデルA (4倍すべり域を東海地域に設定したモデル)	東海地域： 1箇所	19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ40km	⇒基準断層モデル1-1
		19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ30km	⇒基準断層モデル1-2
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ20km	⇒基準断層モデル1-3
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ10km	⇒基準断層モデル1-4
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	基準位置	⇒基準断層モデル1-5
検討波源モデルB-1 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層 (東海断層系) に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	10.7	4.6	6.5	6.5	8.4	東海地域の大すべり域を西へ20km	
	東海地域： 2箇所	14.5	3.6	6.2	6.4	8.7	東海地域の敷地に近い大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離100km	
検討波源モデルB-2 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層 (御前崎海脚東部の断層帯) に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	11.1	4.9	6.6	6.4	7.7	東海地域の大すべり域を東へ40km	
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	東海地域： 1箇所	16.4	6.0	8.7	9.3	11.2	東海地域の大すべり域を東へ70km	⇒基準断層モデル3-1
		16.5	6.2	8.7	9.3	11.3	東海地域の大すべり域を東へ60km	⇒基準断層モデル3-2
		16.5	6.1	8.7	9.2	11.2	東海地域の大すべり域を東へ50km	⇒基準断層モデル3-3
	東海地域： 2箇所	15.7	5.0	8.0	7.7	9.5	東海地域の敷地に近い大すべり域を西へ60km移動、大すべり域間の距離80km	

・太字：各評価地点において最も値の大きいケース
・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

■：評価地点における最大上昇水位が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
(赤字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値)

2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）

概略パラメータスタディ結果一覧

（水位下降側）

- 水位下降側の大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの影響が大きいことを確認し、そのうち敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、基準断層モデルとして設定した。
 - ③3、4号取水塔への影響が大きいケース：基準断層モデル2-1～2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所の場合）
基準断層モデル4-1（検討波源モデルD、大すべり域2箇所の場合）

➤ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

モデル名	大すべり域の数	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
		3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルC (3倍すべり域を広域に設定したモデル)	東海地域、南海地域：1箇所	海底面(11.4min)	海底面(10.1min)	東海地域の大すべり域を東へ60km

より敷地への影響が大きいモデルを設定

➤ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

検討波源モデルA (4倍すべり域を東海域に設定したモデル)	東海地域：1箇所	海底面(7.1min)	海底面(6.9min)	東海地域の大すべり域を西へ40km	
	東海地域：2箇所	海底面(12.6min)	海底面(12.5min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離130km	⇒基準断層モデル2-1
		海底面(12.5min)	海底面(12.5min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離140km	⇒基準断層モデル2-2
検討波源モデルB-1 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(東海断層系)に伝播するモデル)	東海地域：1箇所	海底面(5.5min)	海底面(5.5min)	東海地域の大すべり域を西へ10km	
	東海地域：2箇所	海底面(11.9min)	海底面(11.9min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離120km	
検討波源モデルB-2 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(御前崎海脚東部の断層帯)に伝播するモデル)	東海地域：1箇所	海底面(8.7min)	海底面(8.7min)	東海地域の大すべり域を西へ40km	
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	東海地域：1箇所	海底面(9.3min)	海底面(9.2min)	東海地域の大すべり域を西へ10km	
	東海地域：2箇所	海底面(12.5min)	海底面(12.3min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離140km	⇒基準断層モデル4-1

- ・太字：各評価地点において最も値の大きいケース
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮
- ・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

□：評価地点における水位低下時間が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
(青字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値)

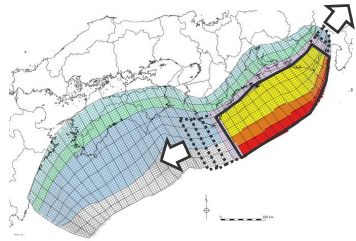
2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位上昇側：検討波源モデルA）

■ 検討波源モデルAについて、概略パラメータスタディを実施して敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

東海地域の大すべり域が1箇所のケース

大すべり域の位置	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
E2.0(東へ40km)*	19.7(19.62)	4.7	7.2	8.0	9.9
E1.5(東へ30km)	19.7(19.61)	4.7	7.2	8.0	9.9
E1.0(東へ20km)	19.6	4.6	7.2	8.0	9.9
E0.5(東へ10km)	19.6	4.6	7.2	8.0	9.9
0(基準位置)	19.6	4.6	7.2	8.0	9.9
W0.5(西へ10km)	19.5	4.6	7.2	8.0	9.9
W1.0(西へ20km)	19.1	4.6	7.2	7.9	9.9
W1.5(西へ30km)	18.1	4.6	7.1	7.8	9.7
W2.0(西へ40km)	15.7	4.3	6.7	7.2	9.1
W2.5(西へ50km)	12.3	4.3	6.3	6.4	8.2
W3.0(西へ60km)	8.7	4.2	4.7	4.7	5.4

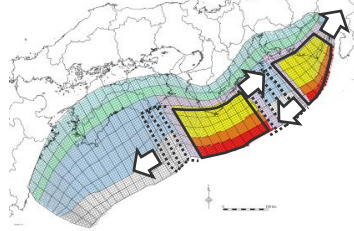
*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
 ・**太字**：検討波源モデルA（大すべり域が1箇所のケース）のうち、敷地前面の最大上昇水位が最も大きいケース
 ■：評価地点における最大上昇水位が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
 （赤字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値）



・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

東海地域の大すべり域が2箇所のケース

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
E2.0(東へ40km)*	20	17.7	4.0	6.7	7.4	9.4
	40	16.4	3.7	6.4	7.1	9.0
	60	15.9	3.7	6.4	7.0	8.9
	80	15.9	3.7	6.4	7.0	8.9
	100	15.9	3.7	6.4	7.0	8.9
	120	15.9	3.7	6.4	7.0	9.0
	140	15.9	3.7	6.4	7.0	9.0
	160	15.9	3.7	6.4	7.0	9.0
E1.0(東へ20km)	20	17.4	3.9	6.5	7.2	9.1
	40	17.0	3.9	6.4	7.1	9.0
	60	17.0	3.9	6.4	7.1	9.0
	80	17.0	3.9	6.4	7.1	9.0
	100	17.0	3.9	6.4	7.1	9.0
	120	17.0	3.9	6.4	7.1	9.0
	140	17.0	4.1	6.4	7.1	9.0
	160	17.0	4.0	6.4	7.1	9.0
0(基準位置)	20	18.1	4.3	6.8	7.5	9.5
	40	18.1	4.3	6.8	7.5	9.5
	60	18.1	4.3	6.8	7.5	9.5
	80	18.1	4.3	6.8	7.5	9.5
	100	18.1	4.3	6.8	7.5	9.5
	120	18.1	4.4	6.8	7.5	9.5
	140	18.1	4.4	6.8	7.5	9.5
	160	18.0	4.3	6.8	7.5	9.5



・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
W1.0(西へ20km)	20	18.7(18.61)	4.6	7.1	7.8	9.8
	40	18.7(18.61)	4.6	7.1	7.9	9.8
	60	18.7(18.62)	4.6	7.1	7.9	9.8
	80	18.7(18.622)	4.6	7.1	7.9	9.8
	100	18.7(18.624)	4.6	7.1	7.9	9.8
	120	18.7(18.622)	4.6	7.2	7.9	9.8
	140	18.7(18.62)	4.6	7.1	7.9	9.8
	160	18.7(18.62)	4.6	7.1	7.9	9.8
W2.0(西へ40km)	20	15.7	4.4	6.7	7.2	9.1
	40	15.7	4.4	6.7	7.2	9.1
	60	15.7	4.4	6.7	7.2	9.2
	80	15.7	4.4	6.8	7.2	9.2
	100	15.7	4.4	7.1	7.2	9.2
	120	15.7	4.4	7.1	7.2	9.2
	140	15.7	4.4	6.9	7.2	9.2
	160	15.7	4.4	6.7	7.2	9.2
W3.0(西へ60km)	20	9.8	4.2	5.8	5.6	6.5
	40	10.7	4.2	6.1	6.1	7.5
	60	12.2	4.2	6.1	6.2	8.0
	80	13.0	4.3	6.5	6.5	8.2
	100	12.4	4.3	6.7	6.6	8.4
	120	12.2	4.2	6.7	6.6	8.6
	140	12.2	4.2	6.6	6.5	8.4
	160	12.2	4.2	6.4	6.4	8.2

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
 ・**太字**：検討波源モデルA（大すべり域が2箇所のケース）のうち、敷地前面の最大上昇水位が最も大きいケース

大すべり域を東西へ20kmずつ移動させて検討した結果、他のケースの影響を下回っていることから、大すべり域を東西へ約10kmずつ移動させる検討を実施せずに、他のケースで代表できると判断した。

他の検討波源モデルと比較して相対的に影響の大きい敷地前面の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。
 ・小数点第一位までの津波評価結果からは、ケースを絞り込めない場合には、さらに小さい行数まで比較し選定した。
 なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

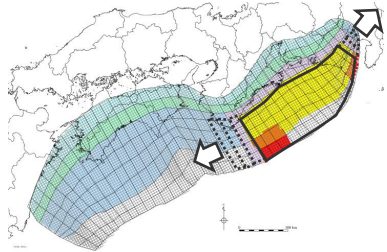
2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位上昇側：検討波源モデルB-1）

■ 検討波源モデルB-1について、概略パラメータスタディを実施して敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

東海地域の大すべり域が1箇所の場合

大すべり域の位置	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
E2.0(東へ40km)*	10.5	4.6	6.5	6.4	8.4
E1.5(東へ30km)	10.5	4.6	6.5	6.4	8.4
E1.0(東へ20km)	10.5	4.6	6.5	6.4	8.4
E0.5(東へ10km)	10.6	4.6	6.5	6.4	8.4
0 (基準位置)	10.6	4.6	6.5	6.4	8.4
W0.5(西へ10km)	10.6	4.6	6.5	6.4	8.4
W1.0(西へ20km)	10.7	4.6	6.5	6.5	8.4
W1.5(西へ30km)	9.9	4.5	6.5	6.3	8.3
W2.0(西へ40km)	8.7	4.4	6.1	6.1	7.2
W2.5(西へ50km)	8.7	4.4	6.1	6.0	7.1
W3.0(西へ60km)	9.7	4.5	5.9	5.8	6.2

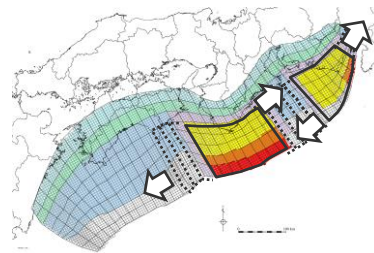
* 超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
 ・太字：検討波源モデルB-1（大すべり域が1箇所のケース）のうち、敷地前面の最大上昇水位が最も大きいケース



・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

東海地域の大すべり域が2箇所の場合

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
E2.0 (東へ40km)*	20	11.5	3.8	5.9	5.9	7.4
	40	12.3	3.6	5.7	6.1	8.3
	60	12.1	3.6	6.1	6.3	8.5
	80	13.2	3.6	6.1	6.3	8.5
	100	14.5	3.6	6.2	6.4	8.7
	120	13.2	3.6	6.4	6.6	8.7
	140	10.1	3.6	6.3	6.2	7.9
	160	9.8	3.6	5.6	5.7	6.9
E1.0 (東へ20km)	20	11.0	4.1	6.0	6.0	7.8
	40	12.9	4.1	6.0	6.1	8.2
	60	13.2	4.1	6.1	6.2	8.1
	80	14.1	4.1	6.2	6.3	8.4
	100	13.6	4.1	6.4	6.5	8.6
	120	10.8	4.1	6.3	6.3	8.1
	140	9.2	4.2	6.0	6.0	7.5
	160	9.2	4.2	6.0	6.0	7.5
0 (基準位置)	20	13.4	4.4	6.3	6.2	8.2
	40	12.4	4.4	6.3	6.2	8.2
	60	13.7	4.4	6.3	6.3	8.2
	80	13.2	4.5	6.3	6.3	8.3
	100	10.3	4.5	6.3	6.3	8.2
	120	9.8	4.5	6.3	6.3	8.2
	140	9.8	4.5	6.3	6.3	8.2
	160	9.8	4.5	6.3	6.3	8.2



・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
W1.0 (西へ20km)	20	10.9	4.6	6.5	6.4	8.4
	40	12.7	4.6	6.5	6.4	8.4
	60	10.8	4.6	6.5	6.4	8.4
	80	10.6	4.6	6.5	6.5	8.4
	100	10.7	4.6	6.5	6.5	8.4
	120	10.7	4.7	6.5	6.5	8.4
	140	10.7	4.7	6.5	6.5	8.4
	160	10.7	4.7	6.6	6.5	8.4
W2.0 (西へ40km)	20	11.6	4.4	6.1	6.1	7.2
	40	9.5	4.5	6.1	6.1	7.3
	60	9.5	4.5	6.1	6.1	7.4
	80	9.4	4.5	6.1	6.1	7.3
	100	9.5	4.5	6.2	6.1	7.3
	120	9.1	4.5	6.2	6.1	7.3
	140	9.3	4.5	6.2	6.2	7.8
	160	9.7	4.5	6.2	6.1	7.8
W3.0 (西へ60km)	20	9.7	4.5	5.8	5.8	6.5
	40	9.0	4.5	5.8	5.8	6.4
	60	8.4	4.5	5.8	5.8	6.1
	80	9.5	4.5	5.8	5.8	6.4
	100	9.6	4.5	6.1	6.1	7.2
	120	9.4	4.5	6.3	6.2	7.6
	140	9.8	4.5	6.3	6.2	7.9
	160	10.9	4.5	6.3	6.2	7.8

* 超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
 ・太字：検討波源モデルB-1（大すべり域が2箇所のケース）のうち、敷地前面の最大上昇水位が最も大きいケース

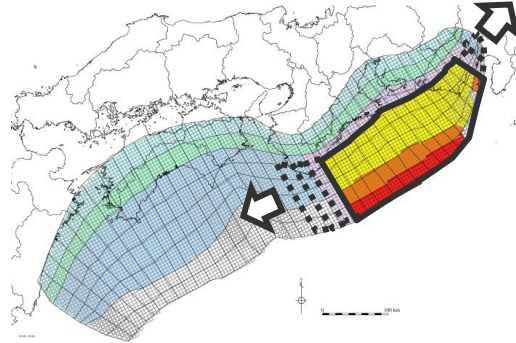
大すべり域を東西へ20kmずつ移動させて検討した結果、他のケースの影響を下回っていることから、大すべり域を東西へ約10kmずつ移動させる検討を実施せずに、他のケースで代表できると判断した。

他の検討波源モデルと比較して相対的に影響の大きい敷地前面の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。
 なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位上昇側：検討波源モデルB-2、C）

■ 検討波源モデルB-2、Cについて、概略パラメータスタディを実施して敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

検討波源モデルB-2 水位上昇側



・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

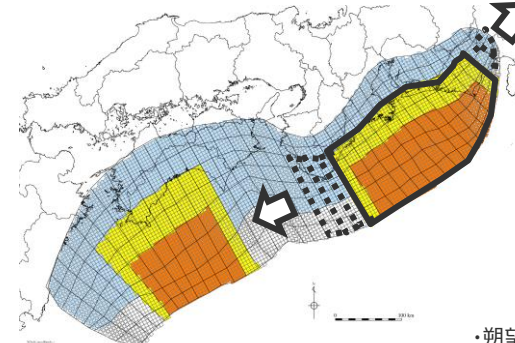
大すべり域の位置	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
E2.0(東へ40km)*	11.1	4.9	6.6	6.4	7.7
E1.5(東へ30km)	9.9	4.8	6.6	6.4	7.7
E1.0(東へ20km)	9.9	4.8	6.6	6.4	7.7
E0.5(東へ10km)	9.9	4.8	6.6	6.4	7.7
0 (基準位置)	9.9	4.8	6.6	6.4	7.7
W0.5(西へ10km)	9.9	4.9	6.6	6.4	7.7
W1.0(西へ20km)	9.9	4.9	6.6	6.4	7.7
W1.5(西へ30km)	9.8	4.8	6.5	6.4	7.6
W2.0(西へ40km)	9.3	4.5	6.4	6.3	8.0
W2.5(西へ50km)	9.0	4.5	6.2	6.2	6.5
W3.0(西へ60km)	8.8	4.7	6.4	6.3	6.8

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

・**太字**：検討波源モデルB-2のうち、敷地前面の最大上昇水位が最も大きいケース

・他の検討波源モデルと比較して相対的に影響の大きい敷地前面の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

検討波源モデルC 水位上昇側



・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

大すべり域の位置	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
E3.0(東へ60km)*	12.4	5.3(5.30)	7.6(7.52)	7.6(7.60)	9.5(9.48)
E2.5(東へ50km)	12.4	5.3(5.29)	7.6(7.51)	7.6(7.59)	9.5(9.47)
E2.0(東へ40km)	12.4	5.3	7.5	7.6	9.5
E1.5(東へ30km)	12.3	5.3	7.5	7.6	9.5
E1.0(東へ20km)	12.3	5.3	7.5	7.6	9.5
E0.5(東へ10km)	12.3	5.3	7.5	7.6	9.5
0 (基準位置)	12.3	5.3	7.5	7.5	9.4
W0.5(西へ10km)	11.5	5.2	7.3	7.2	9.0
W1.0(西へ20km)	10.8	4.7	6.7	6.7	8.5
W1.5(西へ30km)	10.0	4.2	6.1	6.1	7.4
W2.0(西へ40km)	9.8	4.0	6.2	6.1	7.0
W2.5(西へ50km)	9.8	3.9	6.1	6.1	7.2
W3.0(西へ60km)	9.2	3.9	6.1	6.1	7.3
W3.5(西へ70km)	10.2	4.1	6.3	6.1	7.7
W4.0(西へ80km)	11.7	4.2	6.4	6.3	8.0

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

・**太字**：検討波源モデルCのうち、1~5号取水槽の最大上昇水位が最も大きいケース

・他の検討波源モデルと比較して相対的に影響の大きい1~5号取水槽の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。
・小数点第一位までの津波評価結果からでは、ケースを絞り込めない場合には、さらに小さい桁数まで比較し選定した。
なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

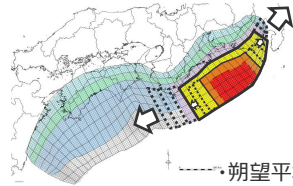
2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位上昇側：検討波源モデルD）

■ 検討波源モデルDについて、概略パラメータスタディを実施して敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

東海地域の大すべり域が1箇所のケース

大すべり域の位置	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
E5.0(東へ100km)*	14.2	5.8	8.3	8.5	10.3
E4.5(東へ90km)	14.6	5.8	8.4	8.8	10.7
E4.0(東へ80km)	15.9	5.9	8.6	9.1	11.1
E3.5(東へ70km)	16.4	6.0	8.7	9.3	11.2
E3.0(東へ60km)	16.5	6.2	8.7	9.3	11.3
E2.5(東へ50km)	16.5	6.1	8.7	9.2	11.2
E2.0(東へ40km)	15.7	5.9	8.5	8.8	10.9
E1.5(東へ30km)	13.8	5.6	8.0	8.2	10.2
E1.0(東へ20km)	12.9	5.3	7.5	7.6	9.5
E0.5(東へ10km)	12.0	4.8	7.0	7.1	9.0
0 (基準位置)	10.7	5.1	6.8	6.7	8.7
W0.5(西へ10km)	10.3	5.2	6.7	6.6	8.6
W1.0(西へ20km)	10.0	5.2	6.8	6.7	8.5
W1.5(西へ30km)	9.6	5.1	6.9	6.6	8.4
W2.0(西へ40km)	11.5	4.9	6.7	6.5	8.2
W2.5(西へ50km)	11.9	4.5	6.4	6.3	7.7
W3.0(西へ60km)	10.6	4.4	5.4	5.3	6.0

* 超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
太字：検討波源モデルD（大すべり域が1箇所のケース）のうち、1～5号取水槽の最大上昇水位が最も大きいケース
 ：評価地点における最大上昇水位が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
 ：赤字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値



----- 朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

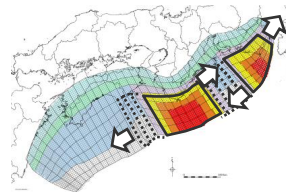
東海地域の大すべり域が2箇所のケース

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
E2.0 (東へ40km)*	20	12.5	4.6	7.0	6.8	8.5
	40	11.6	4.4	6.5	6.4	7.9
	60	15.1	4.3	6.4	6.3	8.5
	80	15.5	4.3	6.7	6.9	9.0
	100	13.8	4.3	6.7	6.7	8.6
	120	14.8	4.3	6.7	6.5	8.4
	140	12.3	4.3	6.5	6.4	8.3
E1.0 (東へ20km)	20	11.7	5.0	7.1	6.9	8.5
	40	15.5	4.9	7.0	6.8	8.4
	60	15.7	4.9	7.0	6.9	8.8
	80	14.4	4.9	7.0	6.8	8.5
	100	14.9	5.0	7.0	6.8	8.5
	120	13.8	5.0	7.0	6.8	8.4
	140	13.7	5.0	7.0	6.8	8.4
0 (基準位置)	20	12.1	5.1	7.2	7.1	8.7
	40	12.6	5.1	7.2	7.1	8.8
	60	12.8	5.1	7.2	7.1	8.9
	80	12.7	5.1	7.2	7.1	9.1
	100	14.5	5.1	7.2	7.1	8.8
	120	12.4	5.1	7.2	7.1	8.7
	140	12.0	5.1	7.2	7.1	8.7
160	12.0	5.1	7.2	7.1	8.7	

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
W1.0 (西へ20km)	20	13.5	4.7	6.7	6.5	8.5
	40	14.1	4.7	6.9	6.8	8.8
	60	12.6	4.8	6.9	6.7	8.9
	80	13.2	4.8	6.7	6.6	8.7
	100	12.9	4.8	6.7	6.5	8.4
	120	11.5	4.8	6.7	6.5	8.4
	140	10.7	4.8	6.7	6.5	8.4
W2.0 (西へ40km)	20	11.0	4.6	6.7	6.5	8.4
	40	11.7	4.7	6.7	6.5	8.5
	60	12.4	4.9	7.3	7.0	8.4
	80	11.1	5.0	7.6	7.2	8.3
	100	11.1	5.0	7.7	7.2	8.8
	120	10.4	4.9	7.4	7.0	8.6
	140	13.8	4.7	7.0	6.7	8.4
W3.0 (西へ60km)	20	14.6	4.7	7.0	6.8	7.9
	40	16.2	4.8	7.3	7.3	8.5
	60	16.1	4.9	7.8	7.7	8.9
	80	15.7	5.0	8.0	7.7	9.5
	100	15.4	4.9	7.8	7.6	9.2
	120	14.8	4.7	7.5	7.2	8.9
	140	14.0	4.6	7.2	6.9	8.6
160	14.0	4.6	6.9	6.9	8.8	

* 超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
太字：検討波源モデルD（大すべり域が2箇所のケース）のうち、1～5号取水槽の最大上昇水位が最も大きいケース

・検討波源モデルD(大すべり域が2箇所のケース)において、「W3.0・距離80km」ケースと「0・距離20～160km」ケースとは、1～5号取水槽の津波影響を代表する観点からケースを絞り込めないが、いずれのケースも検討波源モデルD(大すべり域が1箇所のケース)の津波評価結果より小さく、評価上影響がないため、抜粋するケースは3～5号取水槽の最大上昇水位が大きい「W3.0・距離80km」のケースとした。



----- 朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

大すべり域を東西へ20kmずつ移動させて検討した結果、他のケースの影響を下回っていることから、大すべり域を東西へ約10kmずつ移動させる検討を実施せずに、他のケースで代表できると判断した。

・他の検討波源モデルと比較して相対的に影響の大きい1～5号取水槽の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。
 ・小数点第一位までの津波評価結果からでは、ケースを絞り込めない場合には、さらに小さい行数まで比較し選定した。
 なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

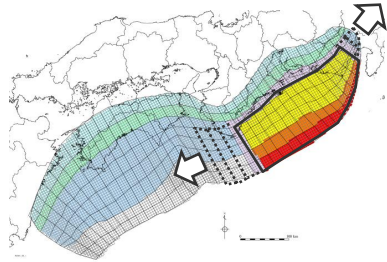
2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位下降側：検討波源モデルA）

■ 検討波源モデルAについて、概略パラメータスタディを実施して敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

東海地域の大すべり域が1箇所のケース

大すべり域の位置	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
E2.0(東へ40km)*	4.4	4.4
E1.5(東へ30km)	4.2	4.2
E1.0(東へ20km)	4.3	4.3
E0.5(東へ10km)	4.3	4.3
0 (基準位置)	4.3	4.3
W0.5(西へ10km)	4.6	4.6
W1.0(西へ20km)	4.5	4.5
W1.5(西へ30km)	4.4	4.4
W2.0(西へ40km)	7.1	6.9
W2.5(西へ50km)	5.1	4.8
W3.0(西へ60km)	5.3	5.2

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
・太字：検討波源モデルA（大すべり域が1箇所のケース）のうち、3,4号取水塔の水位低下時間が最も大きいケース



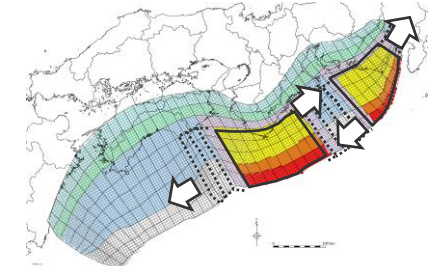
・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

東海地域の大すべり域が2箇所のケース

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
E2.0 (東へ40km)*	20	4.1	4.1
	40	4.0	4.0
	60	5.1	5.2
	80	6.1	6.0
	100	9.2	9.2
	120	12.1	12.1
	140	12.5	12.5
E1.0 (東へ20km)	20	4.6	4.6
	40	6.3	5.7
	60	7.7	7.7
	80	9.3	9.5
	100	12.1	12.1
	120	11.7	11.8
	140	11.6	11.5
0 (基準位置)	20	6.3	6.2
	40	8.7	8.7
	60	12.0	11.9
	80	12.3	12.2
	100	11.9	11.9
	120	11.7	11.6
	140	11.7	11.6
W1.0 (西へ20km)	20	11.3	11.3
	40	11.8	11.7
	60	11.8	11.7
	80	11.5	11.4
	100	11.2	11.2
	120	11.3	11.2
	140	11.4	11.4
W2.0 (西へ40km)	20	11.3	11.3
	40	11.3	11.3
	60	10.5	10.5
	80	10.0	10.0
	100	9.9	9.8
	120	8.1	8.2
	140	6.7	7.2
W3.0 (西へ60km)	20	8.5	8.3
	40	8.1	8.1
	60	7.1	7.0
	80	6.6	6.5
	100	6.5	6.4
	120	7.2	8.1
	140	5.0	5.2
160	6.2	6.2	

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

2箇所の大すべり域を東西へ20kmずつ移動させた全ての検討波源モデルの検討の結果、敷地に影響の大きいケースとして選定。このケースを中心に更に2箇所の大すべり域を東西へ約10kmずつ独立に移動させて敷地への影響を検討。（p.117参照）



・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

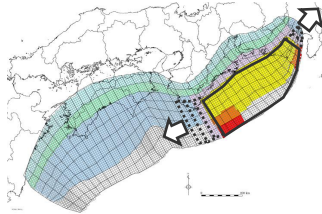
2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位下降側：検討波源モデルB-1）

■ 検討波源モデルB-1について、概略パラメータスタディを実施して敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

東海地域の大すべり域が1箇所のケース

大すべり域の位置	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
E2.0(東へ40km)*	5.2	5.2
E1.5(東へ30km)	5.2	5.2
E1.0(東へ20km)	5.2	5.2
E0.5(東へ10km)	5.2	5.2
0 (基準位置)	5.3	5.2
W0.5(西へ10km)	5.5	5.5
W1.0(西へ20km)	5.5	5.4
W1.5(西へ30km)	5.4	5.4
W2.0(西へ40km)	5.5	5.4
W2.5(西へ50km)	5.1	5.1
W3.0(西へ60km)	5.1	5.1

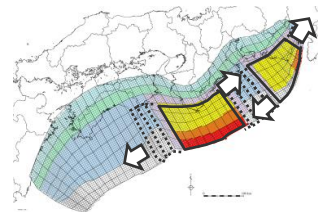
*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
 ・太字：検討波源モデルB-1（大すべり域が1箇所のケース）のうち、3,4号取水塔の水位低下時間が最も大きいケース



・期望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

東海地域の大すべり域が2箇所のケース

敷地に近い 大すべり域の位置	東西の大すべり域間の 距離(km)	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
E2.0 (東へ40km)*	20	5.3	5.4
	40	5.4	5.4
	60	5.5	5.4
	80	5.8	6.2
	100	10.8	10.6
	120	11.9	11.9
	140	11.1	11.1
	160	11.3	11.2
E1.0 (東へ20km)	20	5.6	5.6
	40	6.0	5.9
	60	7.0	6.9
	80	11.1	11.0
	100	10.9	10.8
	120	11.1	11.0
	140	11.4	11.4
	160	11.0	11.0
0 (基準位置)	20	6.6	6.5
	40	8.6	8.6
	60	10.6	10.6
	80	10.2	10.1
	100	10.6	10.5
	120	10.9	10.7
	140	10.4	10.4
	160	10.4	10.4



敷地に近い 大すべり域の位置	東西の大すべり域間の 距離(km)	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
W1.0 (西へ20km)	20	10.3	10.2
	40	10.8	10.8
	60	10.2	10.3
	80	9.6	9.6
	100	9.7	9.7
	120	9.7	9.7
	140	9.4	9.5
	160	9.0	9.0
W2.0 (西へ40km)	20	9.6	9.5
	40	9.3	9.4
	60	8.7	8.7
	80	8.8	8.8
	100	8.8	8.7
	120	8.4	8.5
	140	7.1	7.1
	160	6.2	6.1
W3.0 (西へ60km)	20	7.4	7.4
	40	6.8	6.8
	60	6.4	6.4
	80	5.4	5.4
	100	5.1	5.1
	120	5.1	5.1
	140	5.1	5.1
	160	5.5	5.5

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
 ・太字：検討波源モデルB-1（大すべり域が2箇所のケース）のうち、3,4号取水塔の水位低下時間が最も大きいケース

大すべり域を東西へ20kmずつ移動させて検討した結果、他のケースの影響を下回っていることから、大すべり域を東西へ約10kmずつ移動させる検討を実施せずに、他のケースで代表できると判断した。

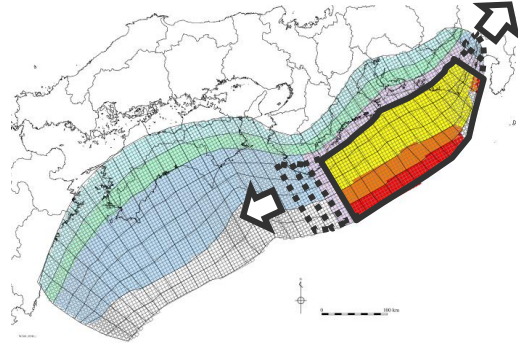
・期望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

・3,4号取水塔の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。
 なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位下降側：検討波源モデルB-2、C）

■ 検討波源モデルB-2,Cについて、概略パラメータスタディを実施して敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

検討波源モデルB-2 水位下降側



大すべり域の位置	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
E2.0(東へ40km)*	7.4	7.3
E1.5(東へ30km)	6.0	6.0
E1.0(東へ20km)	5.3	5.6
E0.5(東へ10km)	6.2	6.3
0 (基準位置)	6.0	6.4
W0.5(西へ10km)	6.1	6.1
W1.0(西へ20km)	6.6	6.6
W1.5(西へ30km)	7.7	7.7
W2.0(西へ40km)	8.7	8.7
W2.5(西へ50km)	8.0	8.0
W3.0(西へ60km)	6.3	6.2

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

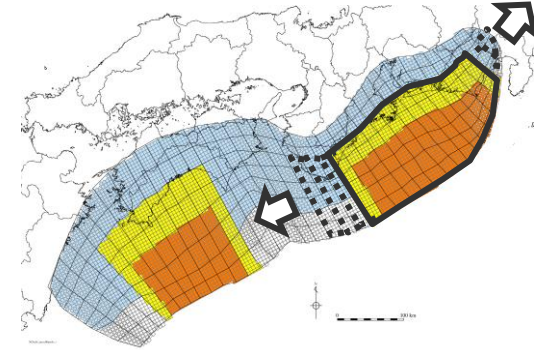
・太字：検討波源モデルB-2のうち、3,4号取水塔の水位低下時間が最も大きいケース

・3,4号取水塔の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。

なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

検討波源モデルC 水位下降側



大すべり域の位置	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
E3.0(東へ60km)*	11.4	10.1
E2.5(東へ50km)	10.4	10.3
E2.0(東へ40km)	9.9	9.9
E1.5(東へ30km)	8.7	8.7
E1.0(東へ20km)	8.1	8.1
E0.5(東へ10km)	8.2	8.2
0 (基準位置)	8.1	8.0
W0.5(西へ10km)	9.2	9.3
W1.0(西へ20km)	10.4	10.4
W1.5(西へ30km)	9.4	9.5
W2.0(西へ40km)	8.9	8.9
W2.5(西へ50km)	7.7	7.7
W3.0(西へ60km)	7.2	7.1
W3.5(西へ70km)	7.1	7.0
W4.0(西へ80km)	7.4	7.3

*超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

・太字：検討波源モデルCのうち、3,4号取水塔の水位低下時間が最も大きいケース

・3,4号取水塔の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。

なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

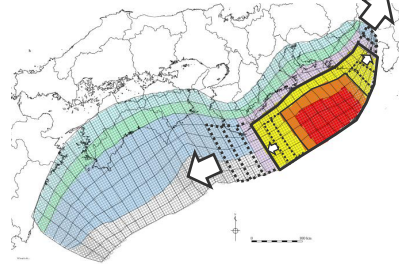
2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位下降側：検討波源モデルD）

■ 検討波源モデルDについて、概略パラメータスタディを実施して敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

東海地域の大すべり域が1箇所のケース

大すべり域の位置	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
E5.0(東へ100km)*	5.1	5.1
E4.5(東へ90km)	5.1	5.1
E4.0(東へ80km)	5.1	5.0
E3.5(東へ70km)	5.1	5.1
E3.0(東へ60km)	5.4	5.5
E2.5(東へ50km)	7.3	7.2
E2.0(東へ40km)	7.9	7.9
E1.5(東へ30km)	8.2	8.2
E1.0(東へ20km)	8.7	8.7
E0.5(東へ10km)	8.3	8.4
0 (基準位置)	8.7	8.8
W0.5(西へ10km)	9.3	9.2
W1.0(西へ20km)	8.9	8.9
W1.5(西へ30km)	7.4	7.5
W2.0(西へ40km)	8.0	8.0
W2.5(西へ50km)	7.3	7.3
W3.0(西へ60km)	6.9	6.9

- * 超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース
- ・太字：検討波源モデルD（大すべり域が1箇所のケース）のうち、3,4号取水塔の水位低下時間が最も大きいケース



・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

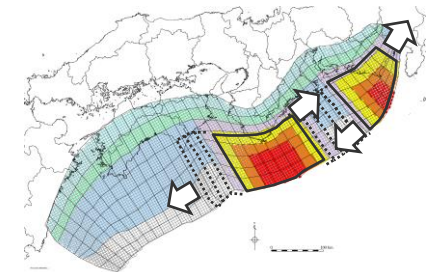
東海地域の大すべり域が2箇所のケース

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
E2.0 (東へ40km)*	20	5.9	5.8
	40	5.4	5.3
	60	4.9	4.6
	80	7.4	7.4
	100	9.1	9.4
	120	11.2	11.1
	140	11.5	11.5
E1.0 (東へ20km)	20	5.1	5.0
	40	6.4	6.4
	60	7.2	7.1
	80	10.0	10.0
	100	11.0	10.9
	120	11.4	11.3
	140	11.9	11.8
0 (基準位置)	20	6.6	6.5
	40	8.0	8.0
	60	10.2	10.2
	80	11.3	11.3
	100	11.5	11.4
	120	12.1	12.0
	140	12.5	12.3
160	11.9	11.7	

*大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

敷地に近い大すべり域の位置	東西の大すべり域間の距離(km)	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
W1.0 (西へ20km)	20	10.7	10.8
	40	11.3	11.4
	60	11.5	11.5
	80	11.6	11.6
	100	11.9	11.9
	120	12.0	11.9
	140	11.6	11.5
W2.0 (西へ40km)	20	10.4	10.6
	40	11.1	11.0
	60	10.9	10.9
	80	11.2	11.2
	100	11.4	11.3
	120	10.8	10.7
	140	9.2	9.0
W3.0 (西へ60km)	20	9.6	9.6
	40	9.7	9.7
	60	8.9	9.0
	80	7.9	7.8
	100	8.0	7.8
	120	8.7	8.6
	140	7.6	7.4
160	7.7	7.5	

2箇所の大すべり域を東西へ20kmずつ移動させた全ての検討波源モデルの検討の結果、敷地に影響の大きいケースとして選定。このケースを中心に更に2箇所の大すべり域を東西へ約10kmずつ独立に移動させて敷地への影響を検討。（次頁参照）



・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

・3,4号取水塔の評価地点に着目し、小数点第一位までの津波評価結果から、津波影響を代表する(その他のケースによる津波影響を包絡する)ケースを選定した。なお、津波評価においては、小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する。

2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 各波源モデルの概略パラメータスタディ結果 （水位下降側：検討波源モデルA、D（大すべり域2箇所10kmずつ移動））

■ 水位下降側の検討のうち、評価地点における水位低下時間の影響が大きい検討波源モデルA、Dの大すべり域が2箇所のケースについて、敷地に影響の大きいケースを中心として、2箇所の大すべり域を東西へ約10kmずつ独立に移動させて検討し、敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定した。

検討波源モデルA：東海地域の大すべり域が2箇所のケース

敷地に近い 大すべり域の位置	東西の大すべり域間 の距離(km)	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
E2.0 (東へ40km)*	120	12.1	12.1
	140	12.5	12.5
	160	11.8	11.9
E1.0 (東へ20km)	100	12.1	12.1
	120	11.7	11.8
	140	11.6	11.5

20km
ずつ移動

E2.0 (東へ40km)*	130	12.6	12.5
	140	12.5	12.5
E1.5 (東へ30km)	120	12.5	12.5
	130	12.4	12.4
	140	11.7	11.7

10km
ずつ移動

* 超大すべり域・大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

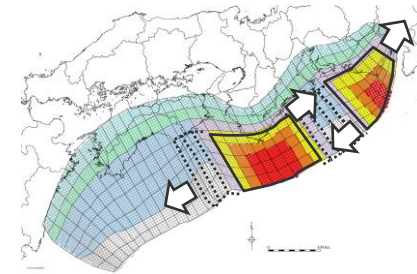
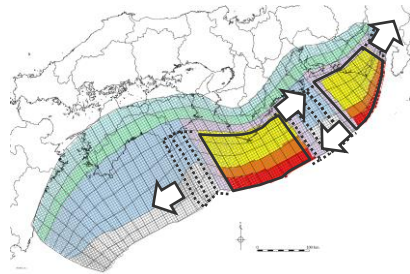
検討波源モデルD：東海地域の大すべり域が2箇所のケース

敷地に近い 大すべり域の位置	東西の大すべり域間 の距離(km)	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
E1.0 (東へ20km)	140	11.9	11.8
	160	12.2	12.1
	120	12.1	12.0
0 (基準位置)	140	12.5	12.3
	160	11.9	11.7
	100	11.9	11.9
W1.0 (西へ20km)	120	12.0	11.9
	140	11.6	11.5

20km
ずつ移動

E0.5 (東へ10km)	140	12.1	11.9
	150	12.3	12.1
	160	12.0	11.9
0 (基準位置)	130	12.3	12.0
	140	12.5	12.3
	150	12.2	12.1
W0.5 (西へ10km)	120	12.1	11.7
	130	12.3	12.0
	140	12.1	11.9

10km
ずつ移動

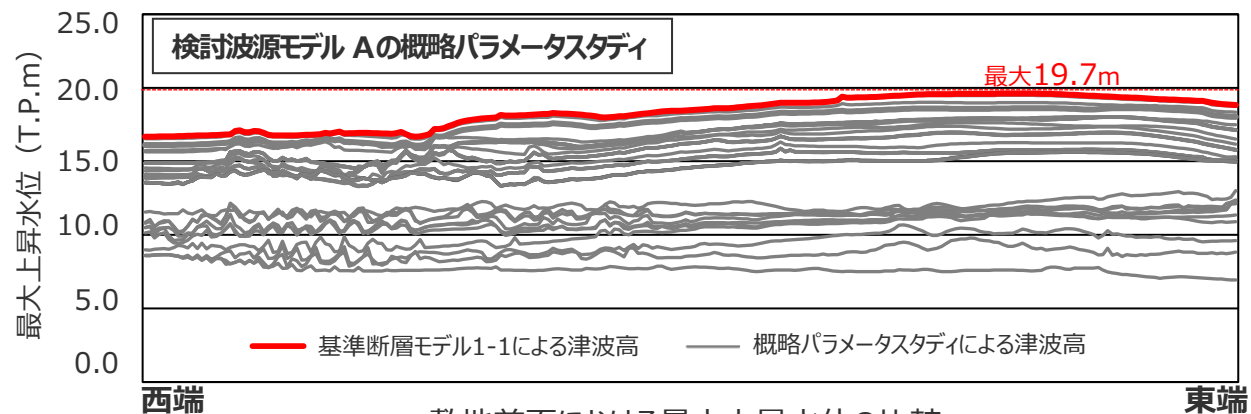
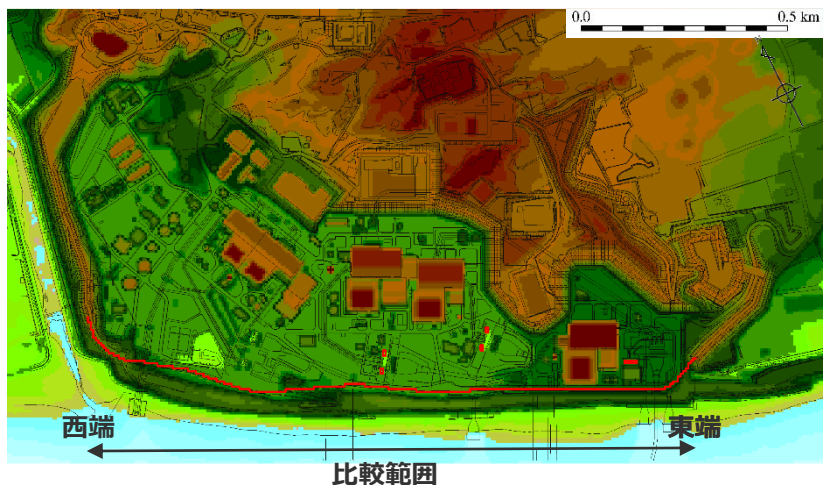


■ : 評価地点における水位低下時間が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
青字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値

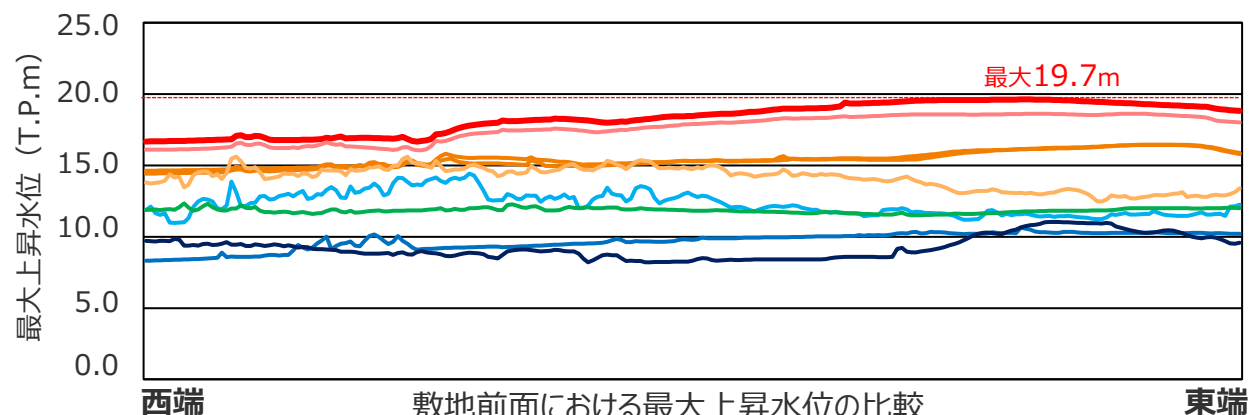
・太字：検討波源モデルA、D（大すべり域が2箇所10kmずつ移動したケース）のうち、3,4号取水塔の水位低下時間が最も大きいケース

・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮

2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 概略パラメータスタディ結果 (大すべり域の位置の不確かさ考慮) (敷地前面における最大上昇水位の比較)



敷地前面における最大上昇水位の比較
(検討波源モデルAの概略パラメータスタディ結果)



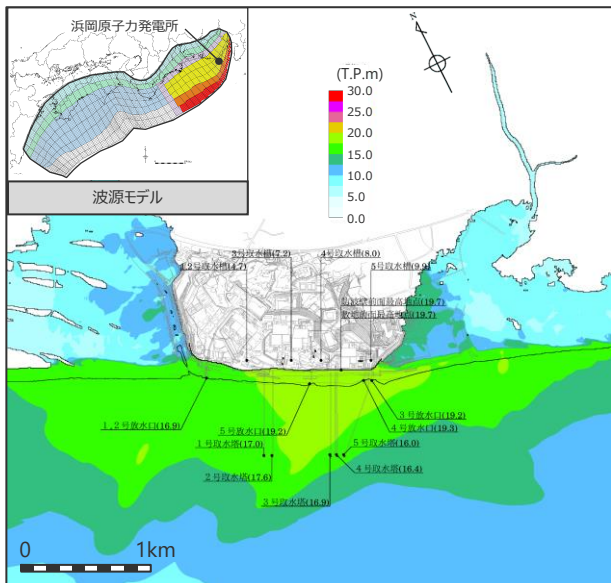
敷地前面における最大上昇水位の比較
(各検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果のうち敷地前面最大ケース)

- 検討波源モデルA(大すべり域1箇所)
- 検討波源モデルA(大すべり域2箇所)
- 検討波源モデルB-1(大すべり域1箇所)
- 検討波源モデルB-1(大すべり域2箇所)
- 検討波源モデルB-2
- 検討波源モデルC
- 検討波源モデルD(大すべり域1箇所)
- 検討波源モデルD(大すべり域2箇所)

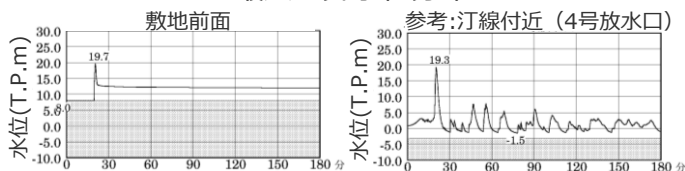
2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 概略パラメータスタディ結果 (大すべり域の位置の不確かさ考慮) (選定した基準断層モデル：水位上昇側)

基準断層モデル1-1

検討波源モデルA (東海地域の大すべり域：1箇所)
大すべり域を東へ40km移動



最大上昇水位分布

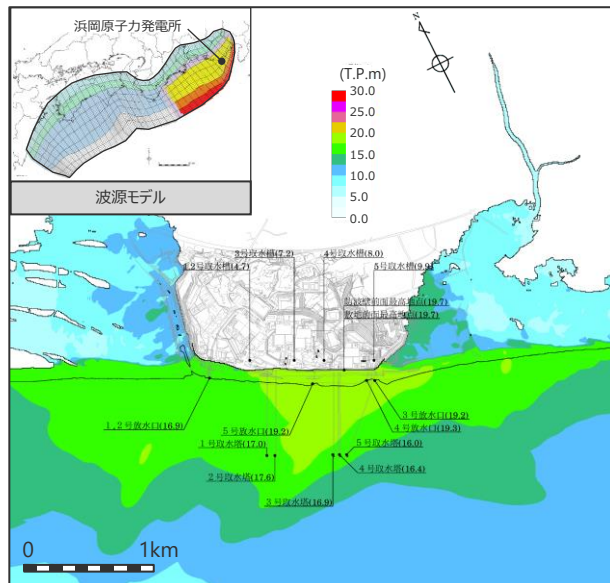


水位の時刻歴波形

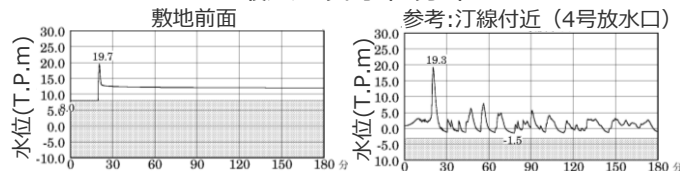
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.7	4.7	7.2	8.0	9.9

基準断層モデル1-2

検討波源モデルA (東海地域の大すべり域：1箇所)
大すべり域を東へ30km移動



最大上昇水位分布

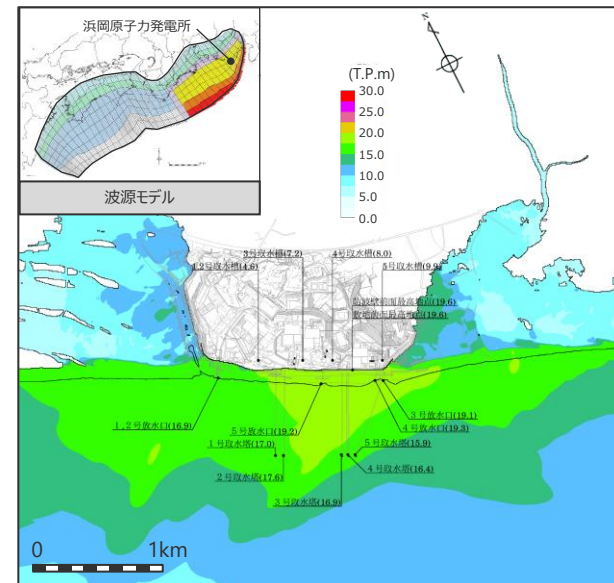


水位の時刻歴波形

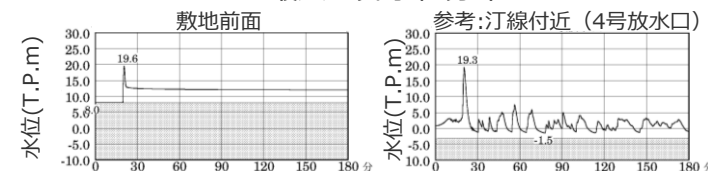
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.7	4.7	7.2	8.0	9.9

基準断層モデル1-3

検討波源モデルA (東海地域の大すべり域：1箇所)
大すべり域を東へ20km移動



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

・網掛け部の上端は当該地点の標高

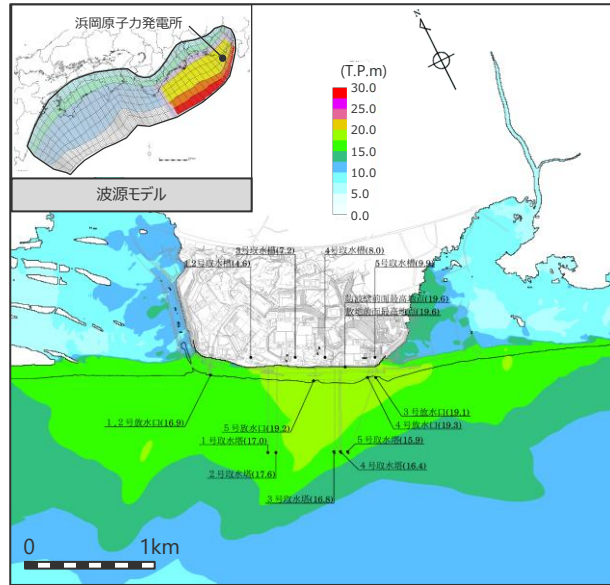
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.6	4.6	7.2	8.0	9.9

・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮

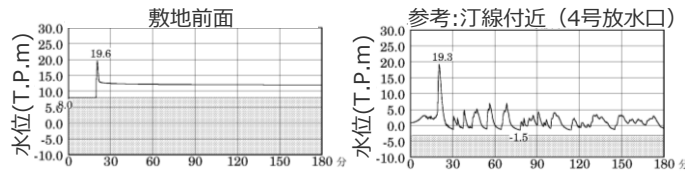
2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 概略パラメータスタディ結果 (大すべり域の位置の不確かさ考慮) (選定した基準断層モデル：水位上昇側)

基準断層モデル1-4

検討波源モデルA (東海地域の大すべり域：1箇所)
大すべり域を東へ10km移動



最大上昇水位分布

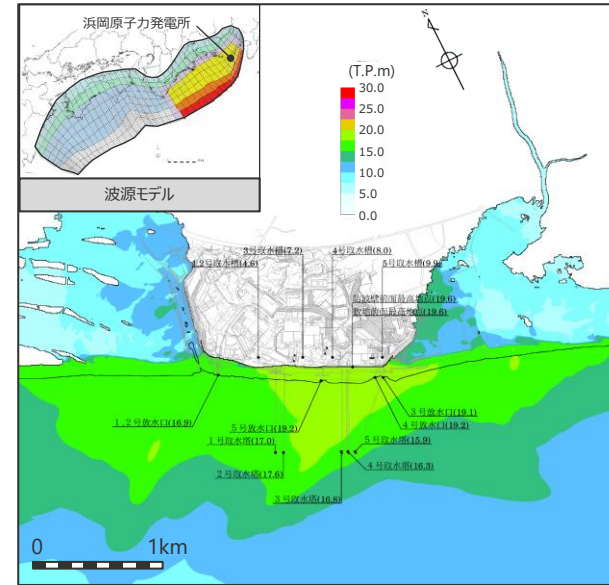


水位の時刻歴波形

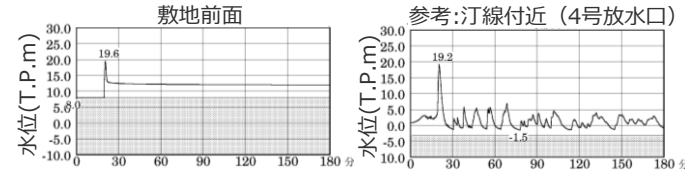
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.6	4.6	7.2	8.0	9.9

基準断層モデル1-5

検討波源モデルA (東海地域の大すべり域：1箇所)
大すべり：基準位置



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.6	4.6	7.2	8.0	9.9

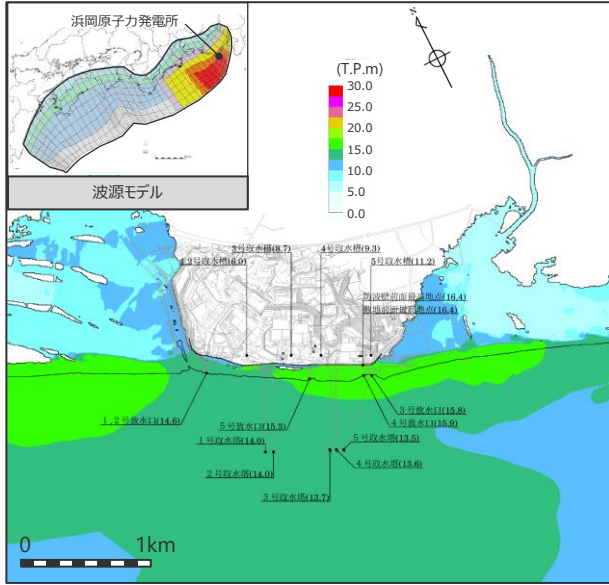
・網掛け部の上端は当該地点の標高

・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

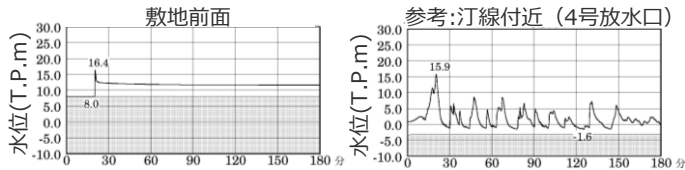
2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 概略パラメータスタディ結果 (大すべり域の位置の不確かさ考慮) (選定した基準断層モデル：水位上昇側)

基準断層モデル3-1

検討波源モデルD (東海地域の大すべり域：1箇所)
大すべり域を東へ70km移動



最大上昇水位分布

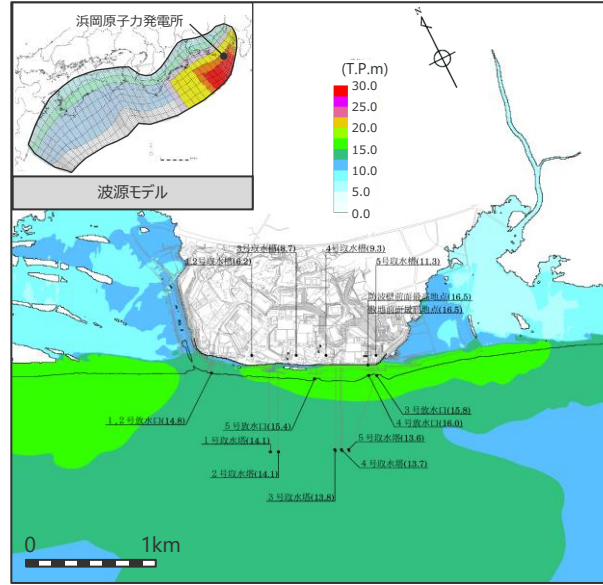


水位の時刻歴波形

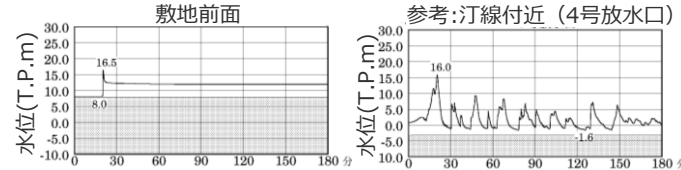
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
16.4	6.0	8.7	9.3	11.2

基準断層モデル3-2

検討波源モデルD (東海地域の大すべり域：1箇所)
大すべり域を東へ60km移動



最大上昇水位分布

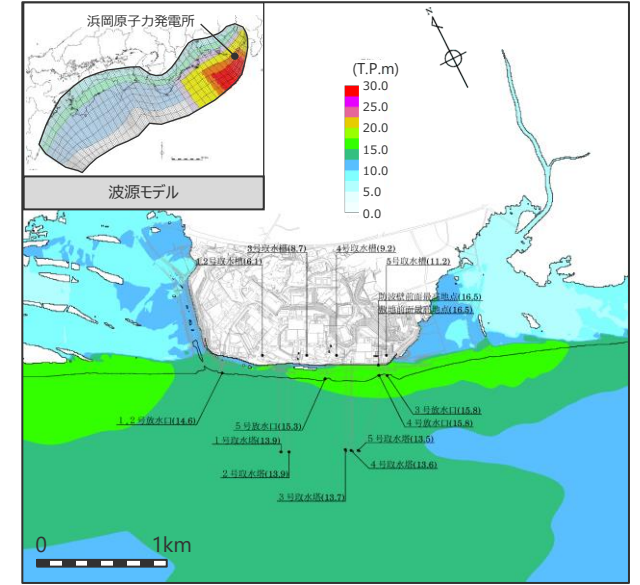


水位の時刻歴波形

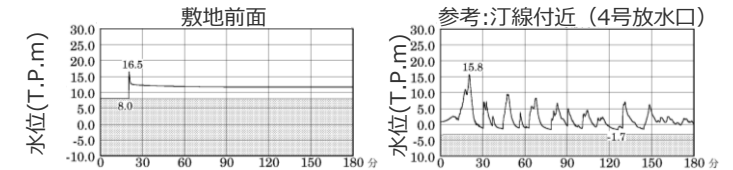
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
16.5	6.2	8.7	9.3	11.3

基準断層モデル3-3

検討波源モデルD (東海地域の大すべり域：1箇所)
大すべり域を東へ50km移動



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

・網掛け部の上端は当該地点の標高

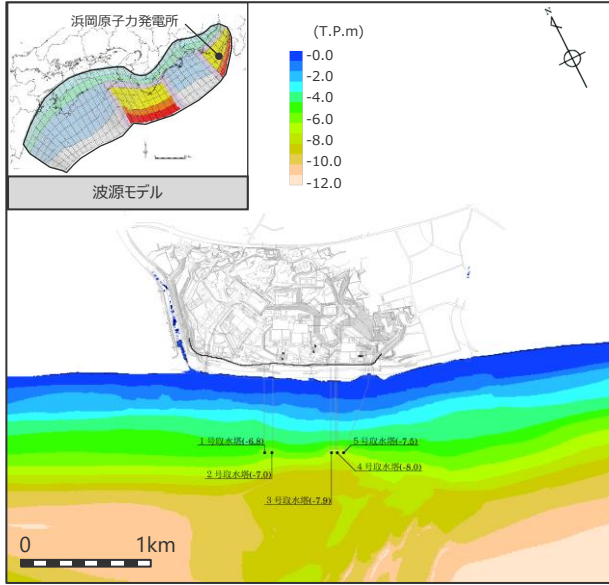
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
16.5	6.1	8.7	9.2	11.2

・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮

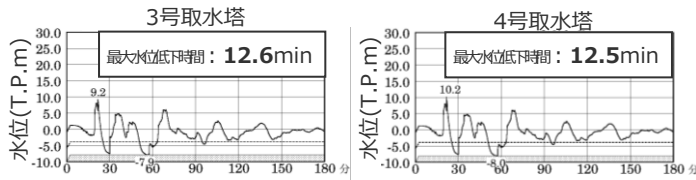
2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 概略パラメータスタディ結果 (大すべり域の位置の不確かさ考慮) (選定した基準断層モデル：水位下降側)

基準断層モデル2-1

検討波源モデルA (東海地域の大すべり域：2箇所)
敷地に近い大すべり域を東へ40km移動
東西の大すべり域間の距離130km



最大下降水位分布

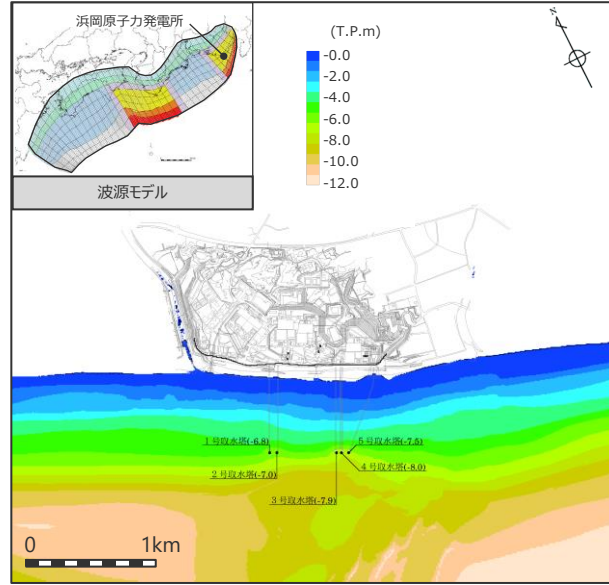


水位の時刻歴波形

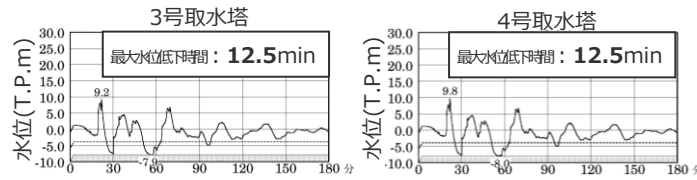
最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.6min)	海底面 (12.5min)

基準断層モデル2-2

検討波源モデルA (東海地域の大すべり域：2箇所)
敷地に近い大すべり域を東へ40km移動
東西の大すべり域間の距離140km



最大下降水位分布

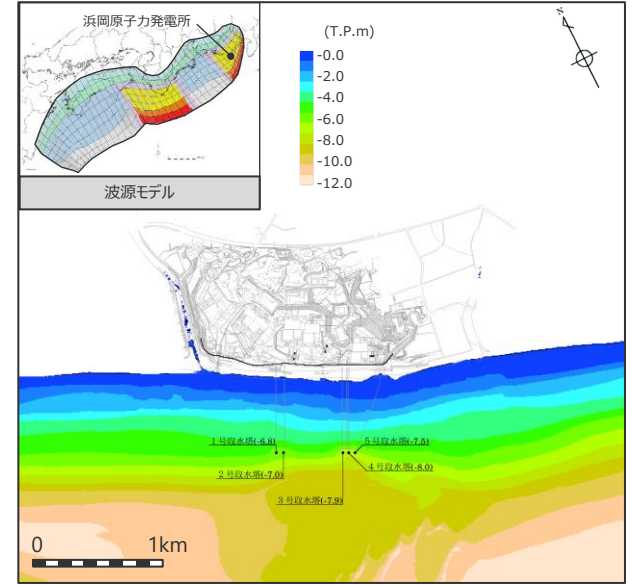


水位の時刻歴波形

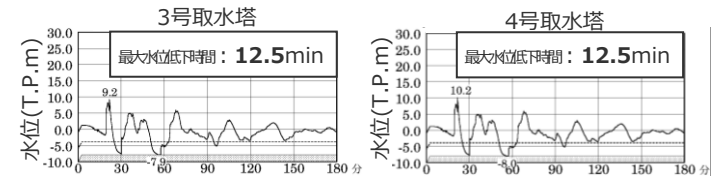
最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.5min)	海底面 (12.5min)

基準断層モデル2-3

検討波源モデルA (東海地域の大すべり域：2箇所)
敷地に近い大すべり域を東へ30km移動
東西の大すべり域間の距離120km



最大下降水位分布



水位の時刻歴波形・網掛け部の上端は当該地点の標高
・点線は取水塔呑口 下端レベル

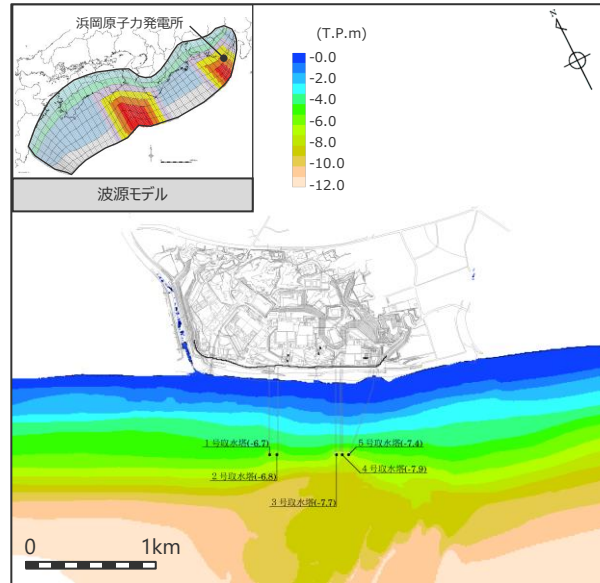
最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.5min)	海底面 (12.5min)

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮
・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

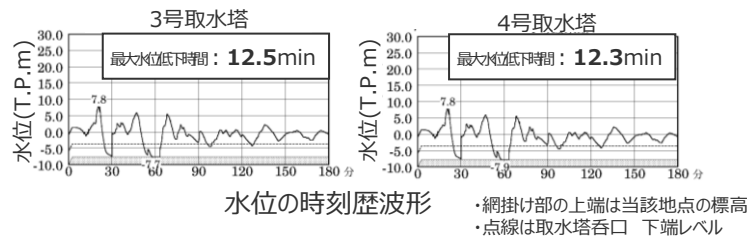
2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 概略パラメータスタディ結果 (大すべり域の位置の不確かさ考慮) (選定した基準断層モデル：水位下降側)

基準断層モデル4-1

検討波源モデルD (東海地域の大すべり域; 2箇所)
敷地に近い大すべり域が基準位置
東西の大すべり域間の距離140km



最大下降水位分布



水位の時刻歴波形

・網掛け部の上端は当該地点の標高
・点線は取水塔呑口 下端レベル

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.5min)	海底面 (12.3min)

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮
・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 概略パラメータスタディ結果一覧 (水位上昇側)

■ 水位上昇側の大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA,Dの影響が大きいことを確認し、そのうち敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、基準断層モデルとして設定した。

- ① 敷地前面への影響が大きいケース： 基準断層モデル1-1～1-5 (検討波源モデルA、大すべり域1箇所のケース)
- ② 1～5号取水槽への影響が大きいケース： 基準断層モデル3-1～3-3 (検討波源モデルD、大すべり域1箇所のケース)

➤ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

モデル名	大すべり域の数	最大上昇水位(T.P. m)					備考
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルC (3倍すべり域を広域に設定したモデル)	東海地域、 南海地域： 1箇所	12.4	5.3	7.6	7.6	9.5	東海地域の大すべり域を東へ60km

より敷地への影響が大きいモデルを設定

➤ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

検討波源モデルA (4倍すべり域を東海地域に設定したモデル)	東海地域： 1箇所	19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ40km	⇒基準断層モデル1-1
		19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ30km	⇒基準断層モデル1-2
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ20km	⇒基準断層モデル1-3
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ10km	⇒基準断層モデル1-4
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	基準位置	⇒基準断層モデル1-5
検討波源モデルB-1 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層 (東海断層系) に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	10.7	4.6	6.5	6.5	8.4	東海地域の大すべり域を西へ20km	
	東海地域： 2箇所	14.5	3.6	6.2	6.4	8.7	東海地域の敷地に近い大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離100km	
検討波源モデルB-2 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層 (御前崎海脚東部の断層帯) に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	11.1	4.9	6.6	6.4	7.7	東海地域の大すべり域を東へ40km	
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	東海地域： 1箇所	16.4	6.0	8.7	9.3	11.2	東海地域の大すべり域を東へ70km	⇒基準断層モデル3-1
		16.5	6.2	8.7	9.3	11.3	東海地域の大すべり域を東へ60km	⇒基準断層モデル3-2
		16.5	6.1	8.7	9.2	11.2	東海地域の大すべり域を東へ50km	⇒基準断層モデル3-3
	東海地域： 2箇所	15.7	5.0	8.0	7.7	9.5	東海地域の敷地に近い大すべり域を西へ60km移動、大すべり域間の距離80km	

・太字：各評価地点において最も値の大きいケース
・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

■：評価地点における最大上昇水位が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
(赤字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値)

2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）

概略パラメータスタディ結果一覧

（水位下降側）

- 水位下降側の大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの影響が大きいことを確認し、そのうち敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、基準断層モデルとして設定した。
 - ③3、4号取水塔への影響が大きいケース： 基準断層モデル2-1～2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所の場合）
基準断層モデル4-1（検討波源モデルD、大すべり域2箇所の場合）

➤ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

モデル名	大すべり域の数	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
		3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルC (3倍すべり域を広域に設定したモデル)	東海地域、南海地域：1箇所	海底面(11.4min)	海底面(10.1min)	東海地域の大すべり域を東へ60km

より敷地への影響が大きいモデルを設定

➤ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

検討波源モデルA (4倍すべり域を東海域に設定したモデル)	東海地域：1箇所	海底面(7.1min)	海底面(6.9min)	東海地域の大すべり域を西へ40km	
	東海地域：2箇所	海底面(12.6min)	海底面(12.5min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離130km	⇒基準断層モデル2-1
		海底面(12.5min)	海底面(12.5min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離140km	⇒基準断層モデル2-2
検討波源モデルB-1 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(東海断層系)に伝播するモデル)	東海地域：1箇所	海底面(5.5min)	海底面(5.5min)	東海地域の大すべり域を西へ10km	
	東海地域：2箇所	海底面(11.9min)	海底面(11.9min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離120km	
検討波源モデルB-2 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(御前崎海脚東部の断層帯)に伝播するモデル)	東海地域：1箇所	海底面(8.7min)	海底面(8.7min)	東海地域の大すべり域を西へ40km	
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	東海地域：1箇所	海底面(9.3min)	海底面(9.2min)	東海地域の大すべり域を西へ10km	
	東海地域：2箇所	海底面(12.5min)	海底面(12.3min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離140km	⇒基準断層モデル4-1

- ・太字：各評価地点において最も値の大きいケース
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮
- ・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

□：評価地点における水位低下時間が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース
(青字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値)

2.3 基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ） 日本海溝の手法を用いたモデルとの比較

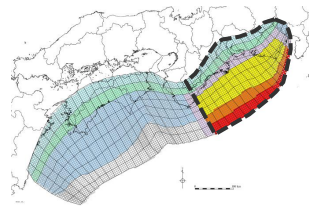
（検討概要）

- 基準断層モデルとして選定した、敷地への影響が大きい検討波源モデルA、Dは、最新知見に照らしてMw9クラスのモデル設定として妥当と考えられる内閣府(2012)の手法を用い、既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの特徴も取り入れて設定したモデルである。
- ここでは、この「検討波源モデルA、D」について、日本海溝で検討されたMw9クラスの津波評価手法を用いて設定した「日本海溝の津波評価手法モデル①～③」のそれぞれと、敷地への影響が支配的である東海地域に着目してすべり量分布、地殻変動量分布の比較を実施し、日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布、地殻変動量分布の特徴が考慮されていることを確認することにより、日本海溝の津波評価手法モデルとの比較を踏まえてもMw9クラスのモデル設定として妥当であることを確認する。
- ここで、日本海溝の津波評価手法モデル①～③は、日本海溝において検討されたMw9クラスの津波評価手法およびパラメータを用いて設定した。なお、検討対象領域が日本海溝ではなく南海トラフとなることを踏まえ、波源域に関連するパラメータ（断層面積、剛性率等）には、南海トラフの知見を反映した。

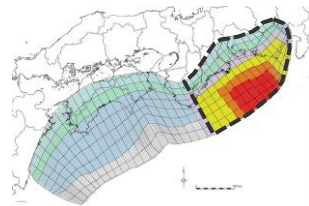
・日本海溝の津波評価手法モデルの設定方法の詳細は、第1109回 補足説明資料6-7章を参照。

基準断層モデルとして選定したMw9クラスの検討波源モデル

- ・敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル
- ・内閣府(2012)により特性化されたMw9クラスの地震のすべり量分布を用いて設定



検討波源モデルA
(敷地周辺の津波影響を特に考慮)



検討波源モデルD
(敷地周辺の津波影響を特に考慮)

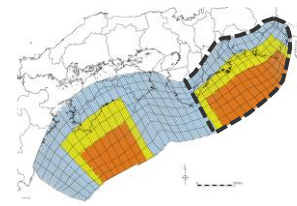
(広域の津波特性を考慮した
検討波源モデルCの超大すべり域の深さを考慮)

- ・大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地への影響が大きく基準断層モデルとして選定した検討波源モデルA、Dを比較対象とする。

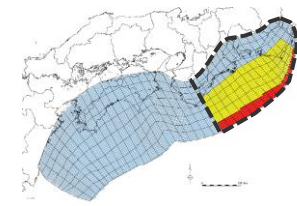
東海地域

日本海溝において検討されたMw9クラスの津波評価手法を用いたモデル

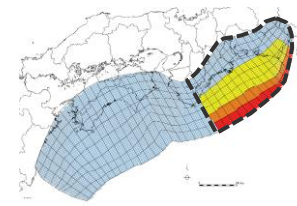
- ・日本海溝で検討されたMw9クラスの津波評価手法を用いて設定



日本海溝の津波評価
手法モデル①
(広域の津波特性を考慮)



日本海溝の津波評価
手法モデル②
(敷地周辺の津波影響を特に考慮)



日本海溝の津波評価
手法モデル③
(敷地周辺の津波影響を特に考慮)

- ・日本海溝において検討されたMw9クラスの津波評価手法およびパラメータを用いて設定した。なお、検討対象領域が日本海溝ではなく南海トラフとなることを踏まえ、波源域に関連するパラメータ（断層面積、剛性率等）には、南海トラフの知見を反映した。

東海地域

比較

敷地への影響が大きい東海地域に着目して、それぞれのすべり量分布、地殻変動量分布の比較を実施し、日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布、地殻変動量分布の特徴が考慮されていることを確認することによりMw9クラスのモデル設定として妥当であることを確認する。

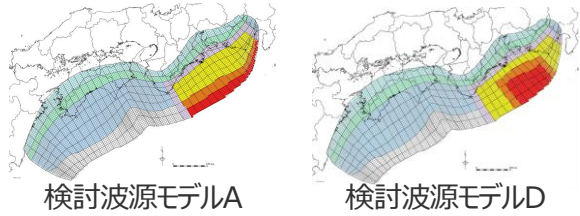
□:津波断層域 ■:4倍すべり域 ■:3倍すべり域 ■:2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域 ■:遷移領域 ■:背景領域もしくは基本すべり域 ■:深い背景領域 ■:最も深い背景領域 ■:浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 日本海溝の手法を用いたモデルとの比較 (断層パラメータ)

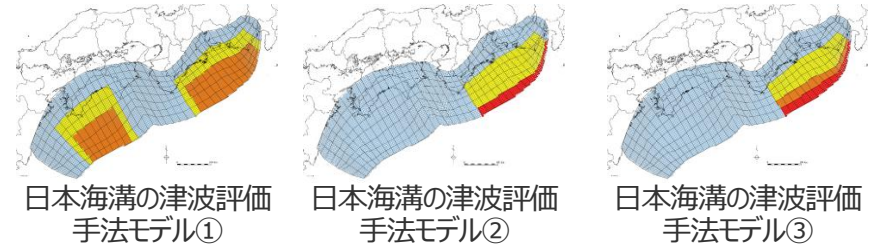
■ 設定した日本海溝の津波評価手法モデル①～③の断層パラメータは、以下のとおり。

・日本海溝の津波評価手法モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-7章を参照。

検討波源モデルのすべり量分布の設定方法



日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布の設定方法



	検討波源モデルA	検討波源モデルD
面積 (km ²)	144,379	144,379
地震モーメント (Nm)	6.2×10 ²²	6.0×10 ²²
Mw	9.1	9.1
平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0	3.0
平均すべり量 (m) ※2	12.1	11.8
最大すべり量 (m) ※3	41.7	41.7
剛性率 (N/m ²)	4.1×10 ¹⁰	4.1×10 ¹⁰

	日本海溝の津波評価手法モデル①	日本海溝の津波評価手法モデル②	日本海溝の津波評価手法モデル③
面積 (km ²)	144,379	144,379	144,379
地震モーメント (Nm)	8.4×10 ²²	6.8×10 ²²	6.8×10 ²²
Mw	9.2	9.2	9.2
平均応力降下量 (MPa) ※1	3.1	3.0	3.0
平均すべり量 (m) ※2	14.2	11.4	11.4
最大すべり量 (m) ※3	36.7	36.5	35.1
剛性率 (N/m ²)	4.1×10 ¹⁰	4.1×10 ¹⁰	4.1×10 ¹⁰

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量
 ※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積に基づき算出
 ※3 東海地域の最大すべり量を記載

・動的パラメータの影響がないすべり量分布および地殻変動量分布を比較することが目的であることから、動的パラメータ (ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点) は記載していない。

■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

2.3 基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 日本海溝の手法を用いたモデルとの比較 (すべり量分布の比較)

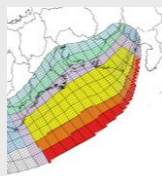
- 検討波源モデルA、Dと日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布について、敷地への影響が支配的である東海地域において比較した結果は以下のとおり。
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dは、日本海溝の津波評価手法モデルと同程度の最大40m程度の超大すべり域のすべり量を考慮している。また、超大すべり域の深さについて、検討波源モデルAは日本海溝の津波評価手法モデル②③の特徴を、検討波源モデルDは日本海溝の津波評価手法モデル①の特徴をそれぞれ考慮している。

検討波源モデルの東海地域のすべり量分布(m)

超大すべり域：

4倍すべり域を5%の面積で、3倍すべり域を10%の面積で 東海地域の超大すべり域の
浅部の領域に設定
最大すべり量：41.7m

検討波源モデルA

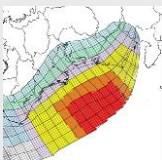


40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0
	2	5.1	5.1	5.0	5.0	4.8	5.2	5.2	4.5	4.5	3.9	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.7	2.7
20km↓	3	10.5	11.6	11.6	11.5	11.1	11.1	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	5.1	5.1
	4	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.4
	5	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	10.9	8.2
10km↓	6	10.5	14.3	18.2	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.2
	7	0.0	14.3	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	16.4	8.2
0km↓	8	0.0	14.3	37.5	36.3	36.3	35.8	34.6	34.6	41.7	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	27.7	21.9	8.2

超大すべり域：

4倍すべり域を5%の面積で、3倍すべり域を10%の面積で 東海地域の超大すべり域の
深い領域まで設定
最大すべり量：41.7m

検討波源モデルD



40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.3	2.0	2.0	1.7	1.7	1.4	1.4	1.4	1.2	1.2	0.9	0.9
	2	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.6	4.6	4.0	4.0	3.4	3.4	3.4	2.7	2.7	2.4	2.4	1.7
20km↓	3	9.3	11.3	11.3	11.2	10.8	10.8	11.5	11.5	10.2	10.2	8.6	8.6	8.6	6.8	6.8	4.8	4.8
	4	9.3	13.7	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.2	3.5
	5	9.3	13.7	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	10.9	7.9	4.8
10km↓	6	9.3	13.7	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	7.9
	7	0.0	13.7	18.1	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	7.9
0km↓	8	0.0	13.7	18.8	18.1	18.1	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	7.9

- ・ 大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。(第1109回 補足説明資料6-7章参照)

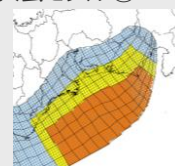
日本海溝の津波評価手法モデルの東海地域のすべり量分布(m)

超大すべり域：

3倍すべり域を15%の面積で
深い領域まで設定

東海地域の超大すべり域の
最大すべり量：36.7m

日本海溝の津波評価
手法モデル①



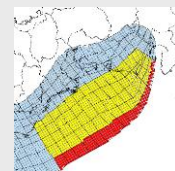
40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4
	2	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4
20km↓	3	3.6	3.5	14.9	14.7	14.2	14.2	15.2	15.2	13.4	13.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	8.0	1.9
	4	3.6	3.5	14.9	14.7	14.7	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	1.9
	5	3.6	3.6	14.9	14.7	14.7	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	1.9
10km↓	6	3.6	3.6	14.9	14.7	14.7	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	1.9
	7	3.8	3.6	14.9	14.7	14.7	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	1.9
0km↓	8	3.8	3.6	14.9	14.7	14.7	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	1.9

超大すべり域：

4倍すべり域を5%の面積で
浅部の領域に設定

東海地域の超大すべり域の
最大すべり量：36.5m

日本海溝の津波評価
手法モデル②

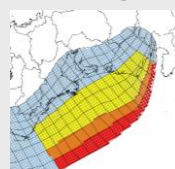


40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	8.4	8.4	8.3	8.3	8.0	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	5.1	5.1	5.1	5.1	4.5	4.5	3.3
	2	8.4	8.4	8.3	8.3	8.0	8.6	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	6.4	6.4	5.1	5.1	4.5	3.3
20km↓	3	8.7	8.4	8.4	8.3	8.0	8.0	8.6	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	6.4	5.1	5.1	4.5	3.3
	4	8.7	8.4	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	12.1	12.1	12.1	12.1	9.6	9.6	4.5
	5	8.7	8.7	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	12.1	9.6	9.6	4.5
10km↓	6	8.7	8.7	15.9	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	4.5
	7	9.0	8.7	15.9	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	4.5
0km↓	8	9.0	8.7	32.8	31.7	31.7	31.3	30.3	30.3	36.5	36.5	36.5	32.3	32.3	28.5	24.2	19.1	4.5

超大すべり域：

4倍すべり域を5%の面積で、3倍すべり域を10%の面積で 東海地域の超大すべり域の
浅部の領域に設定
最大すべり量：35.1m

日本海溝の津波評価
手法モデル③



40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	8.2	8.2	8.1	8.1	7.8	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	5.0	5.0	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2
	2	8.2	8.2	8.1	8.1	7.8	8.4	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	6.3	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2
20km↓	3	8.5	8.2	8.2	8.1	7.8	7.8	8.4	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	6.3	5.0	5.0	4.4	3.2
	4	8.5	8.2	15.3	15.1	15.1	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	11.6	11.6	11.6	11.6	9.2	9.2	4.4
	5	8.5	8.5	15.3	15.1	15.1	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	13.7	11.6	11.6	11.6	9.2	9.2	4.4
10km↓	6	8.5	8.5	15.3	15.3	15.1	15.1	14.6	17.6	17.6	15.6	15.6	13.7	13.7	11.6	11.6	9.2	4.4
	7	8.8	8.5	22.9	22.9	22.6	22.6	21.9	21.9	26.3	26.3	23.4	23.4	20.6	20.6	17.5	13.8	4.4
0km↓	8	8.8	8.5	31.6	30.6	30.6	30.2	29.1	29.1	35.1	35.1	31.1	31.1	31.1	27.4	23.3	18.4	4.4

■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域もしくは基本すべり域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

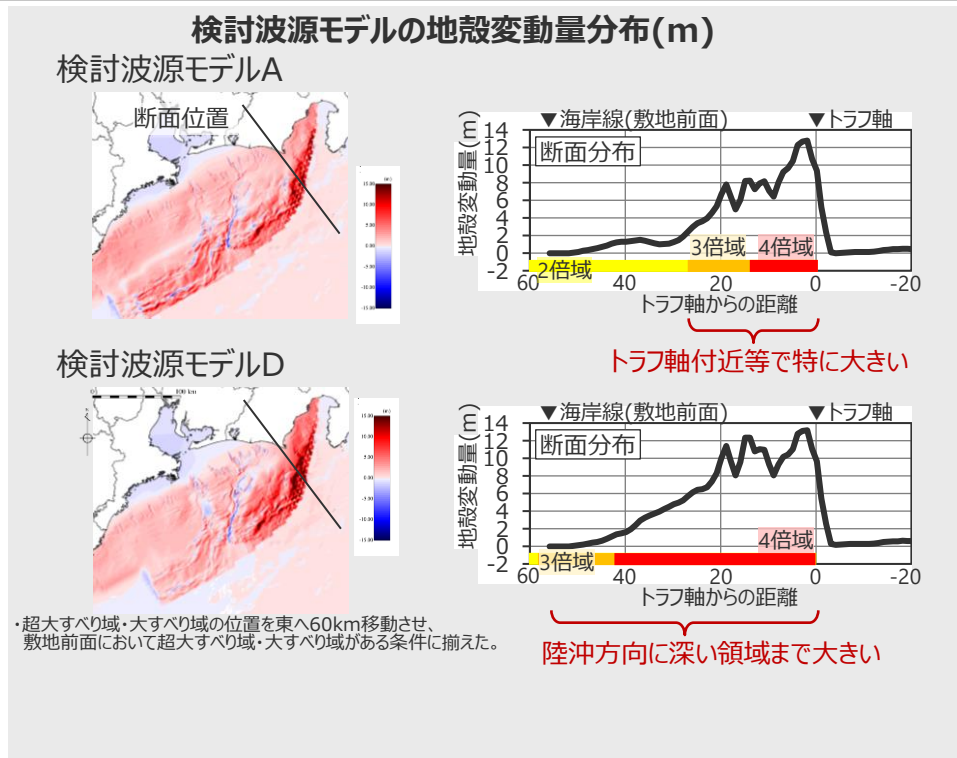
・ すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。

・ 日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布の設定の詳細は、第1109回 補足説明資料6-7を参照。

日本海溝の手法を用いたモデルとの比較

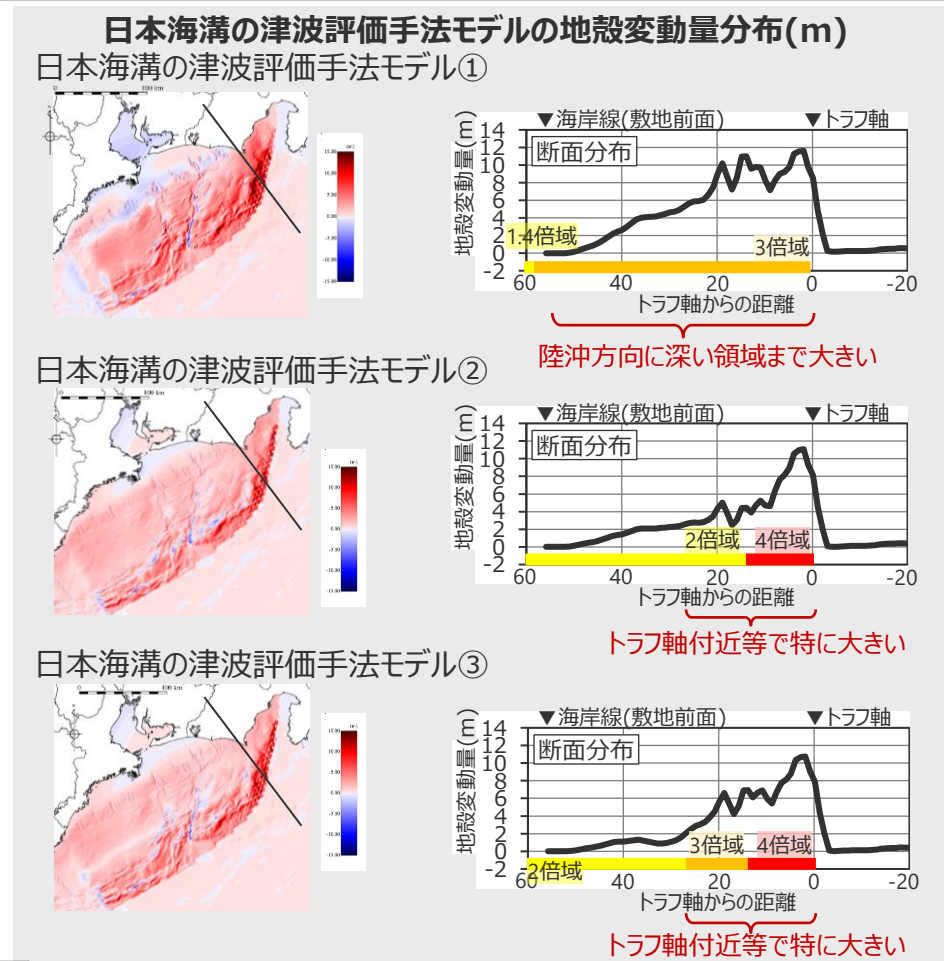
(地殻変動量分布の比較)

- 検討波源モデルA、Dと日本海溝の津波評価手法モデルの地殻変動量分布について、敷地への影響が支配的である東海地域において比較した結果は以下のとおり。
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dは、日本海溝の津波評価手法モデルと同程度の最大10m程度の地殻変動量を考慮している。また、陸沖方向の地殻変動量分布について、検討波源モデルAは日本海溝の津波評価手法モデル②③と同じトラフ軸付近等で特に大きい地殻変動量分布の特徴を、検討波源モデルDは日本海溝の津波評価手法モデル①と同じ陸沖方向に深い領域まで大きい地殻変動量分布の特徴をそれぞれ考慮している。



トラフ軸付近等で特に大きい

陸沖方向に深い領域まで大きい



陸沖方向に深い領域まで大きい

トラフ軸付近等で特に大きい

トラフ軸付近等で特に大きい

- 以上のことから、内閣府(2012)の手法を用い、既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの特徴も取り入れて設定した検討波源モデルA、Dは、日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布、地殻変動量分布の特徴が考慮されていることを確認し、日本海溝の津波評価手法モデルとの比較を踏まえてもMw9クラスのモデル設定として妥当であることを確認した。

日本海溝の手法を用いたモデルとの比較

（比較結果）

- 日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布、地殻変動量分布との比較の結果、以下のことを確認した。
 - ・検討波源モデルは、日本海溝の津波評価手法モデルと同程度の最大すべり量、最大地殻変動量となっていること。
 - ・超大すべり域を設定した深さに関しては、浅い領域に設定した日本海溝の津波評価手法モデル②③は検討波源モデルAと、深い領域まで設定した日本海溝の津波評価手法モデル①は検討波源モデルDとそれぞれ同様の設定となっていること。
 - ・日本海溝の津波評価手法モデル①は陸沖方向に深い領域まで大きな地殻変動量分布となっており、これは検討波源モデルDで同様の影響が考慮されている。また、日本海溝の津波評価手法モデル②③はトラフ軸付近等で特に大きい地殻変動量分布となっており、これは検討波源モデルAで同様の影響が考慮されている。
- ➡ 基準断層モデルのベースとなった検討波源モデルA、Dは、国内外の巨大地震に関する最新知見が反映された内閣府(2012)による南海トラフの最大クラス（Mw9クラス）の波源設定方法を用い、南海トラフの津波痕跡の再現モデルを踏まえて大すべり域を配置するなどし、基準津波の策定のための津波評価の観点から妥当なモデルとして設定している。
この検討波源モデルについて、日本海溝で検討されたMw9クラスの津波評価手法を用いたモデルのすべり量分布等との比較を踏まえても、そのすべり量分布等が東北沖型のMw9クラスのモデル設定として妥当であることを確認した。

・なお、検討波源モデルと日本海溝の津波評価手法モデルはともに、東北沖型のMw9クラスの妥当なモデルとして検討されているものの、両モデルには差異があることを踏まえ、日本海溝の津波評価手法モデルの影響確認として、日本海溝の津波評価手法モデルの概略パラメータスタディ（大すべり域の位置の不確かさ考慮）を実施し、その結果が検討波源モデルによる津波評価結果で代表できることも確認した。（第1109回 補足説明資料6-7章参照）

目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定 (本編1章)

基準断層モデルの設定 (本編2章)

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)

・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)

・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

基準断層モデルの設定 (本編2.3章)
(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルC）。

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

・敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域位置のパラメータスタディを実施することにより、基準断層モデルを設定。

・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）のパラメータスタディを、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、内閣府の最大クラスモデルとの比較を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(検討方針)

- 設定した複数の基準断層モデルに対し、動的パラメータであるライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点に関するパラメータスタディを、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施し、基準断層モデルごとに影響が大きい評価地点に着目して敷地への影響が最も大きいケースを選定する。
- また、パラメータスタディ結果について、パラメータスタディ因子の影響分析を行って、パラメータスタディの順序などが網羅的な検討として妥当であることの確認を行う。

基準断層モデルの設定
(本編2章)

○選定した基準断層モデル

	評価地点	当該地点への影響が大きい基準断層モデル
水位上昇側	①敷地前面	基準断層モデル1-1~1-5(検討波源モデルA)
	②1~5号取水槽	基準断層モデル3-1~3-3(検討波源モデルD)
水位下降側	③3,4号取水塔	基準断層モデル2-1~2-3(検討波源モデルA)
		基準断層モデル4-1(検討波源モデルD)



動的パラメータに関する
パラメータスタディ
(本編3章)

パラメータスタディの
実施

- 検討対象：基準断層モデル
 - 検討項目：動的パラメータの不確かさ（ライズタイム、破壊伝播速度・破壊開始点）
 - 検討手順：Mw9クラスの地震ではライズタイムが津波水位に与える影響が大きいと考えられることを考慮して、まずライズタイムのパラメータスタディを実施し、その結果最も影響の大きいケースに対し破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディを実施。
- 水位下降側については、下記のパラメータスタディの妥当性確認の結果、ライズタイムの影響と破壊伝播速度・破壊開始点の影響が同程度で違いが小さかったことなどから、パラメータスタディ順序により選定ケースが変わる可能性も考慮して、ライズタイムと破壊伝播速度・破壊開始点の組合せのパラメータスタディも実施。
- パラメータの設定条件：（詳細は次頁参照）

ライズタイムのパラメータスタディ : 60~300s



破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディ

- ・破壊伝播速度：0.7~2.5km/s
- ・破壊開始点：大すべり域の周囲6箇所

妥当性確認の結果を踏まえ、水位下降側については、組合せのパラメータスタディを検討手順に反映

影響の大きい
ケースの選定

- ・基準断層モデルごとに影響が大きい評価地点に着目し、敷地への影響が最も大きいケースを選定。

パラメータスタディの
妥当性確認

- ・パラメータスタディ結果について、パラメータスタディ因子の影響分析等を行い、パラメータスタディの順序などの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認する。

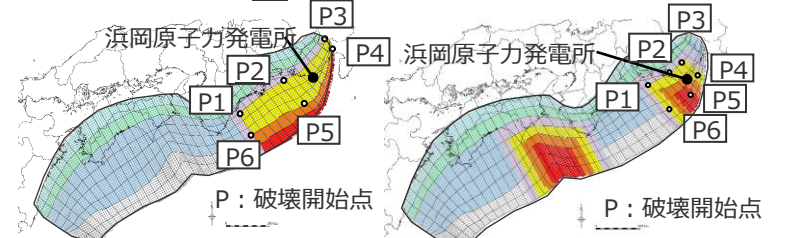
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(設定条件)

- ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点のパラメータは、Mw9クラスの巨大地震の津波インバージョンに基づく知見、南海トラフにおける知見、および内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めた範囲で設定する。
- また、動的パラメータのうち敷地の津波評価に影響の大きいライズタイムについては、上記に加え、国内外のMw8～9クラスの地震のすべり量とライズタイムの組合せの分析も行い、これを考慮する。
- 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディの設定条件は、以下のとおり。

詳細パラメータスタディの設定条件

	設定方法	設定内容
ライズタイム	<ul style="list-style-type: none"> ■ 国内外のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンに基づくライズタイム(150～300s)を考慮する。 ■ また、南海トラフの地震を含む国内外のMw8～9クラスの地震のすべり量とライズタイムの組合せの分析結果に基づき、すべり量に応じたライズタイム(120s)を考慮する。 ■ さらに、国内外の巨大地震・津波の発生事例に対して裕度を持って設定されている、内閣府の最大クラスモデルのすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを考慮する。 <p>→ライズタイムは、60～300sの範囲で設定する。</p> <p>(詳細は、p.136～139参照)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 左記に基づくライズタイム60～300sを考慮し、以下のとおり設定： 60,90,120,<u>150</u>,180,210,240,270,300s (下線は基準ケース)
破壊伝播速度	<ul style="list-style-type: none"> ■ 国内外のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンに基づく破壊伝播速度(0.7～2.0km/s)を考慮する。 ■ また、南海トラフの速度構造から推定される破壊伝播速度(2.5km/s)、内閣府の最大クラスモデルの破壊伝播速度(2.5km/s)を考慮する。 <p>→破壊伝播速度は、0.7～2.5km/sの範囲で設定する。</p> <p>(詳細は、p.140参照)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 左記に基づく破壊伝播速度0.7～2.5km/sを考慮し、以下、5ケースを設定： 0.7、1.0、1.5、<u>2.0</u>、2.5km/s (下線は基準ケース)
破壊開始点	<ul style="list-style-type: none"> ■ 国内外のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンに基づく破壊開始点（大すべり域の周囲）を考慮する。 ■ また、南海トラフの既往地震の破壊開始点（大すべり域の上端に相当）、およびそれを踏まえた内閣府の最大クラスモデルの破壊開始点（大すべり域の上端もしくは下端の中央付近）を考慮する。 <p>→破壊開始点は、大すべり域の周囲（6箇所）に設定する。</p> <p>なお、大すべり域が2箇所のケースについては、敷地と破壊開始点との位置関係を踏まえて、敷地に近い大すべり域の周囲に設定する。</p> <p>(詳細は、p.141参照)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 以下、6地点を設定：P1、P2、P3、P4、P5、P6（下線は基準ケース）  <p>基準断層モデル1-1の例 (検討波源モデルA)</p> <p>基準断層モデル4-1の例 (検討波源モデルD)</p>

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(ライズタイムの設定方針)

①津波評価におけるライズタイムに関する知見

- 津波評価におけるライズタイムに関する知見について整理した。

②-1 国内外のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例

⇒ 近年のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンから推定されるライズタイムはすべり量が大きい小断層ほど長く、大きくすべった領域の小断層のライズタイムは150～300sであることを確認した。

②-2 東北沖地震のライズタイムに関する分析

⇒ 東北沖地震の津波観測波形を対象として、タイムウィンドウの幅・個数を細かく設定して津波のタイムウィンドウインバージョンを実施した結果、東北沖地震のライズタイムとしては150～200s程度が最も適切であるとともに、ライズタイムを60sとした場合の津波インバージョンでは津波観測波形を再現できないことを確認した。

⇒ 東北沖地震の再現モデルについて、すべり量を変更せずにライズタイムを60sと極端に短く設定すると、東北沖地震の津波の周期・波長等の物理特性は失われるとともに、東北沖地震の観測記録の津波高を大幅に上回ることを確認。Mw9クラスの地震に対して内閣府のライズタイムの設定は過大な設定となっていることを確認した。

Mw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例および東北沖地震のライズタイムに関する分析から推定されるライズタイムの設定
: **150～300s**

③Mw8～9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの検討

⇒ 検討波源モデルのライズタイムは、Mw 8～9クラスの地震の津波インバージョン事例を踏まえても概ね保守的な設定となっているが、検討波源モデルのライズタイムを120sとすることにより、これらの地震の初期水位を上回る設定となることを確認した。

Mw8～9クラスの地震の津波インバージョンに基づくライズタイムの保守的な設定
: **120s**

④内閣府の設定したライズタイムに関する検討

⇒ 津波評価に影響の大きい初期水位に着目した検討により、内閣府モデルは、国内外の巨大地震のスケールに基づく平均応力降下量、平均すべり量等のパラメータの保守的な設定を、更に上回る設定となっていることを確認した。

「代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルは、すべり量とライズタイムの組合せを非常に大きく設定することにより、その他のパラメータの津波影響を代表していることを確認した。
(第1109回 補足説明資料5-5,5-6章)

「代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルのライズタイムの設定
: **60s**

(津波評価におけるライズタイムの設定方針)

- 検討波源モデルのライズタイムは、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例および東北沖地震のライズタイムに関する分析結果に基づき設定することとし、推定されたライズタイム150～300sのうち、最も短い150sと設定する。
- 検討波源モデルの詳細パラメータスタディでは、Mw9クラスの巨大地震・津波のライズタイムの推定事例に基づくライズタイム150～300sの他、Mw8～9クラスの地震の津波インバージョンの検討結果に基づき保守的にライズタイム120sを考慮する。
更に、国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の発生事例に限られていることを踏まえ、国内外の巨大地震・津波の発生事例に対してより慎重に裕度を持って、敷地の津波評価に影響の大きいすべり量とライズタイムの組合せを検討することとし、「(B)代表パラメータの検討による方法」により検討された内閣府の最大クラスモデルにおいて他のパラメータの影響を代表するよう非常に大きく設定されているすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを、「(A)各種パラメータの網羅的検討による方法」により検討しているプレート間地震の津波評価のうち検討波源モデルの詳細パラメータスタディにおいて考慮することとした。

(A) 各種パラメータの網羅的検討による方法：各パラメータの不確かさの組合せの科学的知見に基づく網羅的な検討により安全側の評価を行う考え方の方法

(B) 代表パラメータの検討による方法：影響の大きい代表的なパラメータを科学的知見の範囲を超えて非常に大きく設定することにより、その他の現象の津波影響を代表させて安全側の評価を行う考え方の方法

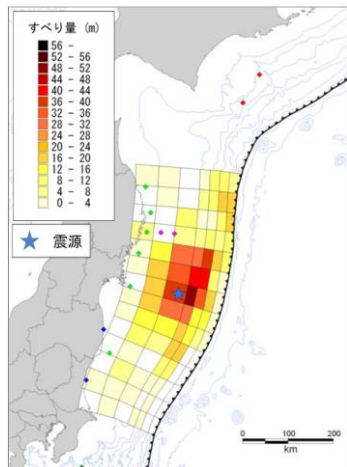
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(ライズタイムの設定に関する知見：国内外のMw9クラスの巨大地震・津波の動的パラメータの推定事例)

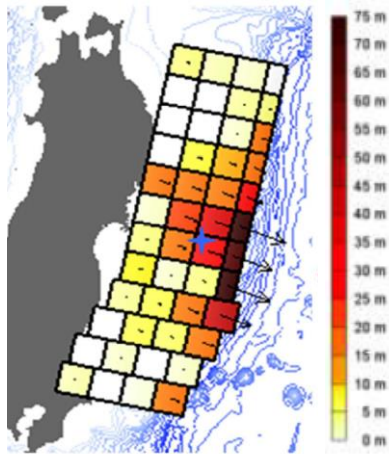
- 検討波源モデルのライズタイムは、国内外の巨大地震の発生事例を踏まえて設定することとし、国内外の巨大地震（Mw9クラスの地震）の津波インバージョンにより推定されたライズタイムのうち最も短い150sと設定した。
- なお、ライズタイムの不確かさについては別途詳細パラメータスタディを実施する。

巨大地震（Mw9クラスの地震）の津波インバージョンにより推定されたライズタイム

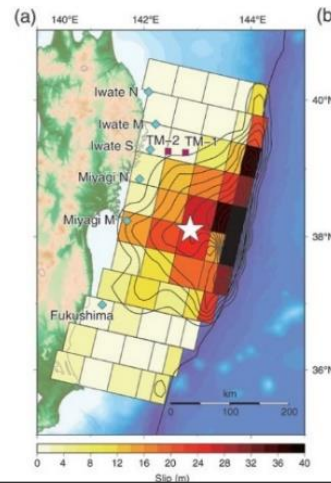
地震名	文献名	ライズタイム
2011年東北沖地震 (Mw9.0)	内閣府(2012b)	300s
	杉野ほか(2013)	300s
	Satake et al.(2013)	150s
2004年スマトラ島沖地震 (Mw9.1)	Hirata et al.(2006)	150s
	Fujii and Satake(2007)	180s



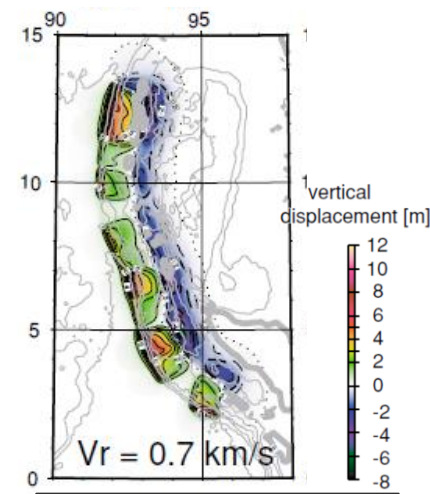
ライズタイム：約300s
内閣府(2012b)



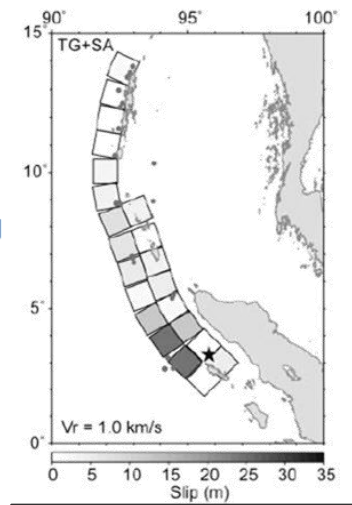
ライズタイム：約300s
杉野ほか(2013)
2011年東北沖地震



ライズタイム：約150s
Satake et al.(2013)



ライズタイム：約150s
Hirata et al.(2006)



ライズタイム：約180s
Fujii and Satake(2007)

2004年スマトラ島沖地震

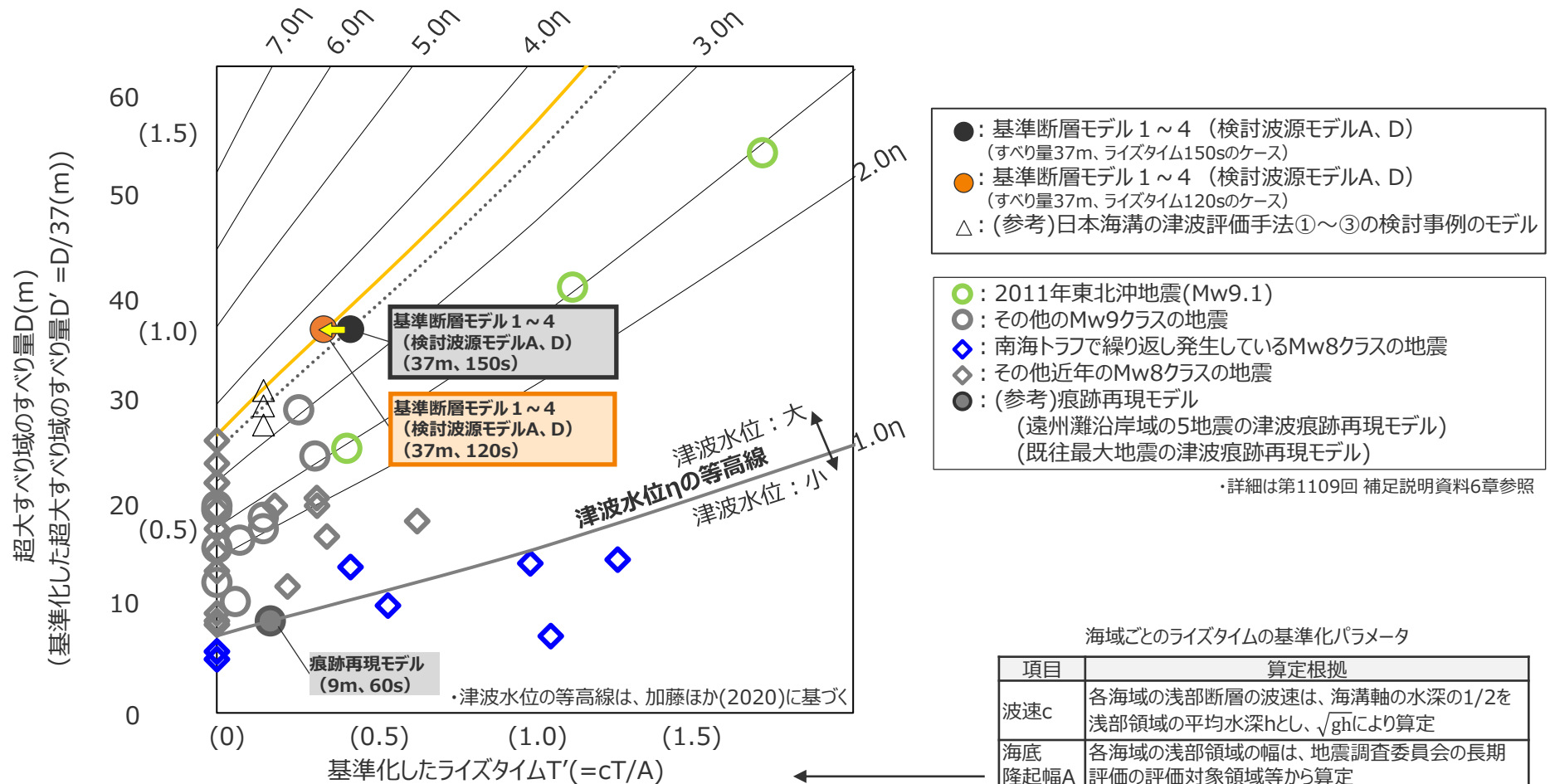
・巨大地震（Mw9クラスの地震）の動的パラメータの詳細は第1109回 補足説明資料6-1章に記載。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(ライズタイムの設定に関する知見：国内外のMw8～9クラスの地震のすべり量とライズタイムの組合せの分析結果)

- ライズタイムの不確かさの考慮について、すべり量とライズタイムとはトレードオフの関係にある¹⁾²⁾ことから、基準断層モデル1～4のすべり量とライズタイムの組合せについて、加藤ほか(2020)に基づき国内外のMw8～9の地震の津波インバージョン結果（計33波源モデル）のすべり量とライズタイムの組合せと比較した。
- その結果、基準断層モデル1～4のライズタイムは、国内外のMw8～9の地震のすべり量とライズタイムの組合せを踏まえても概ね保守的な設定となっているが、ライズタイムを120sとすることにより、これら地震の発生事例を上回る設定となることを確認した。

1) 第1109回 補足説明資料5-6章のうち「内閣府の検討内容の確認結果」 2) 第1109回 補足説明資料5-5章のうち「各パラメータの分析」



- : 基準断層モデル1～4 (検討波源モデルA, D) (すべり量37m、ライズタイム150sのケース)
- : 基準断層モデル1～4 (検討波源モデルA, D) (すべり量37m、ライズタイム120sのケース)
- △: (参考)日本海溝の津波評価手法①～③の検討事例のモデル

- : 2011年東北沖地震(Mw9.1)
- : その他のMw9クラスの地震
- ◇: 南海トラフで繰り返し発生しているMw8クラスの地震
- ◇: その他近年のMw8クラスの地震
- : (参考)痕跡再現モデル (遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル) (既往最大地震の津波痕跡再現モデル)

・詳細は第1109回 補足説明資料6章参照

海域ごとのライズタイムの基準化パラメータ

項目	算定根拠
波速c	各海域の浅部断層の波速は、海溝軸の水深の1/2を浅部領域の平均水深hとし、 \sqrt{gh} により算定
海底隆起幅A	各海域の浅部領域の幅は、地震調査委員会の長期評価の評価対象領域等から算定

T: ライズタイム ・基準化の詳細は第1109回 補足説明資料6章参照

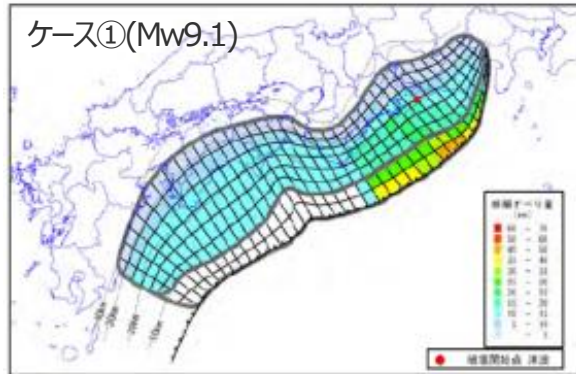
国内外の地震のすべり量とライズタイムの組合せの比較分析結果
(ライズタイムを海域ごとの波速と隆起幅により基準化)

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(ライズタイムの設定に関する知見：内閣府の最大クラスモデルの設定)

- 内閣府(2012)は、南海トラフの最大クラスモデルのライズタイムについて、平均的に利用されている値を参考に、東北沖地震の解析結果も踏まえて、60sと設定している。



○破壊伝播速度及びライズタイム：

破壊伝播速度及びライズタイムについては、平均的に利用されている値を参考に、東北地方太平洋沖地震の解析結果も踏まえ、次のとおりに設定する。なお、東北地方太平洋沖地震では、海溝沿いの破壊伝播速度は、それよりも深い場所に比べ遅いとの解析結果もあるが、トラフ沿いの領域の幅が狭く、5秒程度の差しか見込めないことから、今回の解析では、破壊速度は全域で同じとする。

破壊速度 : 2.5km/s

ライズタイム : 1分

(内閣府(2012)を基に作成)

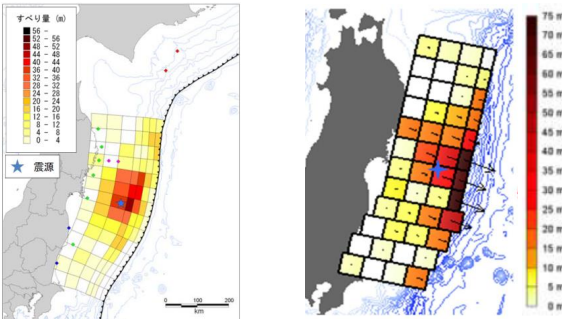
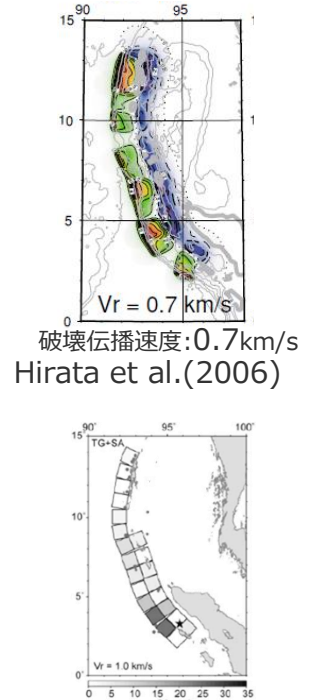
内閣府の最大クラスモデルのライズタイムの設定

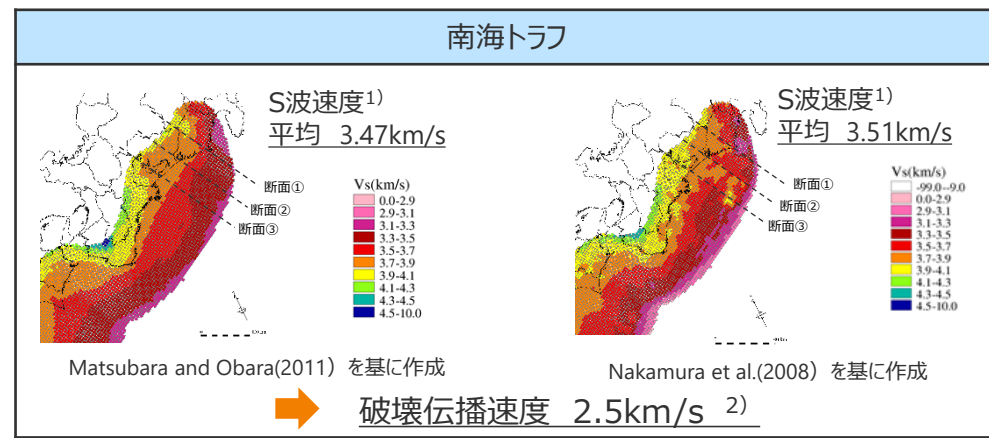
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ (破壊伝播速度の設定に関する知見)

- 国内外のMw9クラスの地震・津波のインバージョン結果のうち、動的パラメータが推定されている2011年東北沖地震および2004年スマトラ島沖地震の破壊伝播速度は0.7~2.0km/sである。
- 南海トラフの速度構造から推定される破壊伝播速度は約2.5km/sである。
- 内閣府(2012)は、南海トラフの最大クラスモデルの破壊伝播速度について、平均的に利用されている値を参考に、東北沖地震の解析結果も踏まえて、2.5km/sと設定している。

国内外のMw9地震のインバージョン結果により推定された破壊伝播速度

沈み込み帯のS波速度構造と、S波速度構造から推定される破壊伝播速度

地震名	2011年東北沖地震 (Mw9.0)	2004年スマトラ島沖地震 (Mw9.1)
波源モデル	 <p>破壊伝播速度: 2.0km/s 内閣府(2012b)</p> <p>破壊伝播速度: 1.5km/s 杉野ほか(2013)</p>	 <p>破壊伝播速度: 0.7km/s Hirata et al.(2006)</p> <p>破壊伝播速度: 1.0km/s Fujii and Satake (2007)</p>
破壊開始点	大きくすべった領域の深い側	大きくすべった領域の周辺



1)各断面(断面①~③)のS波速度の平均値を記載 2) $V_r = 0.72V_s$ より算出 (Geller(1976))

内閣府の最大クラスモデルの破壊伝播速度の設定

○破壊伝播速度及びライズタイム：
破壊伝播速度及びライズタイムについては、平均的に利用されている値を参考に、東北地方太平洋沖地震の解析結果も踏まえ、次のとおりに設定する。なお、東北地方太平洋沖地震では、海溝沿いの破壊伝播速度は、それよりも深い場所に比べ遅いとの解析結果もあるが、トラフ沿いの領域の幅が狭く、5秒程度の差しか見込めないことから、今回の解析では、破壊速度は全域で同じとする。

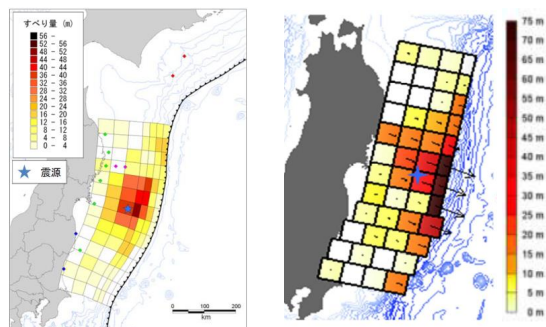
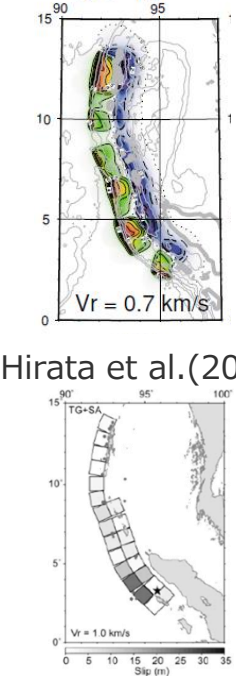
破壊速度 : 2.5km/s
ライズタイム : 1分

(内閣府(2012)を基に作成)

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ (破壊開始点の設定に関する知見)

- 内閣府の最大クラスモデルの破壊開始点は、大すべり域の下端中央（深さ20km付近）に設定されている。
- Mai et al.(2005)等では、破壊開始点は強震動生成域の周辺に位置するとされており、南海トラフの強震動生成域は深さ約20km付近に分布する。
- 国内外のMw9地震のインバージョン結果では破壊開始点は大きくすべった領域の周辺に位置している。

国内外のMw9地震のインバージョン結果により推定された破壊開始点

地震名	2011年東北沖地震 (Mw9.0)	2004年スマトラ島沖地震 (Mw9.1)
波源モデル	 <p>内閣府(2012b) 杉野ほか(2013)</p>	 <p>Hirata et al.(2006)</p>
破壊開始点	大きくすべった領域の深い側 Satake et al.(2013)	大きくすべった領域の周辺 Fujii and Satake (2007)

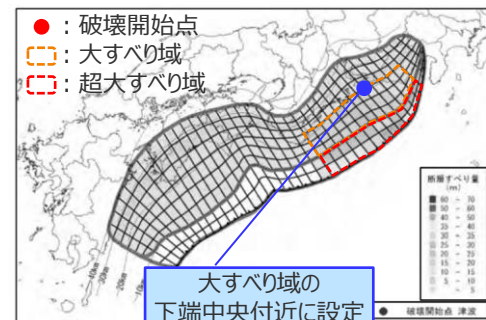
○各検討ケースの津波断層モデルの破壊開始点

基本的な検討ケース（ケース①～ケース⑤）の破壊開始点は、それぞれの検討ケースの大すべり域の中心付近の深さ 20km 付近に設定する。ケース②については、過去の昭和東南海地震、昭和南海地震の破壊開始点の位置を参考にし、強震動計算の破壊開始点と同じ紀伊半島の潮岬沖の場所とする（図 2.4）。

その他派生的な検討ケース（ケース⑥～ケース⑩）は、基本的な検討ケース（ケース①～ケース⑤）の派生タイプとして想定したものである。その他の検討ケースの破壊視点は、基本的な検討ケースの破壊開始点のいずれかを適用することとし、具体的には、各検討ケースについて、それぞれの大すべり域の中心付近にある破壊開始点を選択し、それをその検討ケースの破壊開始点として設定する（図 2.4）。

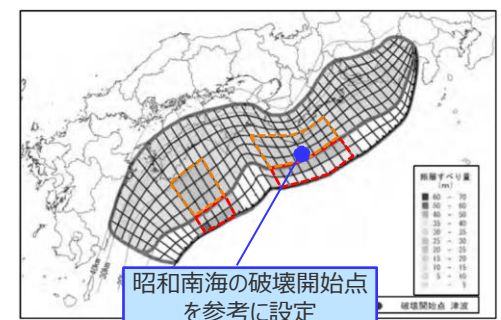
(内閣府(2012)を基に作成)

南海トラフの最大クラスモデルの破壊開始点



【ケース①「駿河湾～紀伊半島沖」に「大すべり域+超大すべり域」を設定】

ケース①



【ケース⑩「三重県南部沖～徳島県沖」と「足摺岬沖」に「大すべり域+超大すべり域」を2箇所設定】

ケース⑩

内閣府（2012）の破壊開始点の設定

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(すべり量とライズタイムの組合せの分析)

検討波源モデルのすべり量とライズタイムの基準化

想定モデル名		超大すべり域 ¹⁾ の すべり量とライズタイム		各海域のパラメータ			基準化した すべり量D' ⁵⁾	基準化した ライズタイムT' ⁶⁾
		すべり量 D (m)	ライズタイム T (s)	海溝軸付近の 平均水深 ²⁾ (m)	浅部領域の 波速 ³⁾ (m/s)	浅部領域の 幅 ⁴⁾ (km)		
検討波源モデル	基準断層モデル1～4 (検討波源モデルA、D) (すべり量37m、ライズタイム150sのケース)	36.8	150	4,000	140	50	1.00	0.42
	基準断層モデル1～4 (検討波源モデルA、D) (すべり量37m、ライズタイム120sのケース)	36.8	120	4,000	140	50	1.00	0.34
	基準断層モデル1～4 (検討波源モデルA、D) (すべり量37m、ライズタイム60sのケース)	36.8	60	4,000	140	50	1.00	0.17
(参考) 日本海溝の 津波評価手法 の検討事例 のモデル	日本海溝の津波評価手法①の検討事例のモデル	27.4	60	6,000	171	70	0.75	0.15
	日本海溝の津波評価手法②の検討事例のモデル	30.7	60	6,000	171	70	0.84	0.15
	日本海溝の津波評価手法③の検討事例のモデル	29.3	60	6,000	171	70	0.80	0.15

- すべり量とライズタイムについては、第1109回 補足説明資料6章に記載。
なお、検討波源モデルDのすべり量とライズタイムの組合せは、検討波源モデルAの数値で代表した。
- 海溝軸付近の平均水深は、海底地形図に基づく。
- 海溝軸付近の平均水深の1/2を海域の平均水深 h_a と考え、 $c = \sqrt{gh_a}$ により算出。
- 南海トラフと日本海溝の浅部領域の幅は、地震調査委員会の長期評価の評価対象領域に基づく。
- $D' = D/36.8(m)$ により算出。
- $T' = c T/A$ により算出。

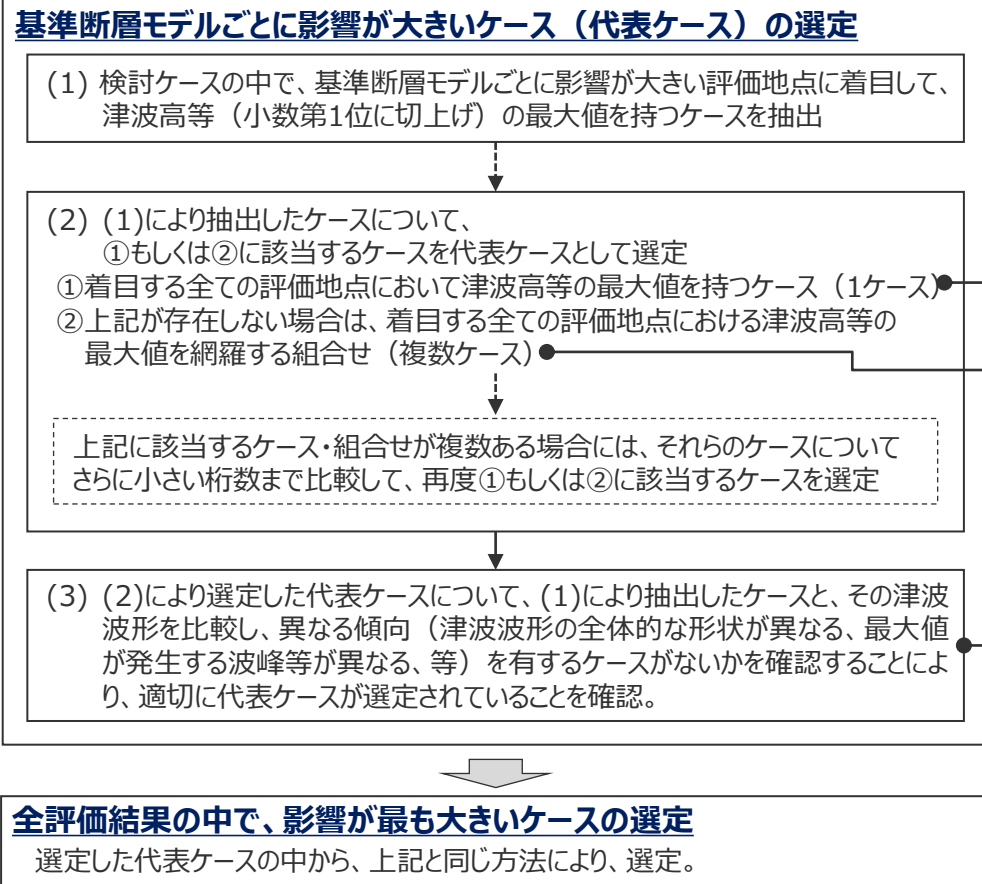
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(敷地への影響が最も大きいケースの選定方法)

- 敷地への影響が最も大きいケースの選定は、基準断層モデルごとに影響が大きい評価地点が異なることを踏まえ、まず基準断層モデルごとに影響が大きいケース（代表ケース）を選定し、次にそれらの中から敷地への影響が最も大きいケースを選定した。
- 選定に当たっては、基準断層モデルごとに影響が大きい評価地点に着目し、着目した全ての評価地点において津波高等の最大値を持つケースもしくはその組合せ（複数ケース）を選定することとし、その際、津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価することを考慮して、最大値を持つケースの選定も小数第一位までの津波高等によって行い、ケースを絞り切れない場合に限り、さらに小さい桁数まで比較した。また、選定したケースについて、その他ケースと津波波形を比較することにより、適切に敷地への津波影響を代表できるケースが選定されていることを確認した。

詳細パラメータスタディによる選定方法



<代表ケースの選定イメージ>

赤字：評価地点毎の最大値

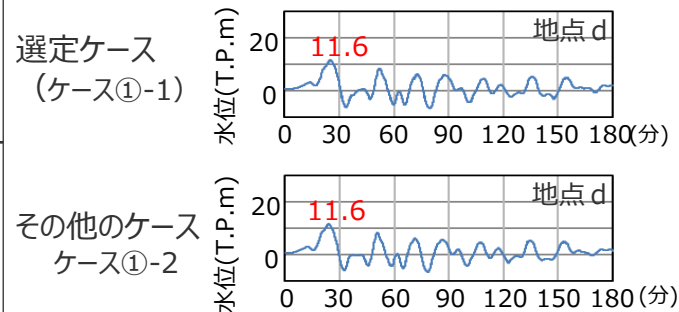
①着目する全ての評価地点において津波高等の最大値を持つケース（1ケース）の例

	着目する評価地点の津波高 (m)				
	地点a	b	c	d	
ケース①-1	6.4	8.9	9.5	11.6	→選定
ケース①-2	6.2	8.8	9.3	11.6	→選定しない

	着目する評価地点の津波高 (m)				
	地点a	b	c	d	
ケース②-1	6.2	8.8	9.3	11.6	→選定
ケース②-2	6.4	8.9	9.5	11.5	→選定

<選定した代表ケースの波形比較イメージ>

異なる傾向を有するケースがないかを確認することにより代表性を確認



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ

(結果一覧)

- 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディの結果は以下のとおり。なお、各基準断層モデルの詳細パラメータスタディ結果の詳細は次頁以降を参照。
 - 敷地前面への影響が大きいケース：基準断層モデル1-1（検討波源モデルA、大すべり域1箇所の場合）
 - 1～5号取水槽への影響が大きいケース：基準断層モデル3-2（検討波源モデルD、大すべり域1箇所の場合）
 - 3、4号取水塔への影響が大きいケース：基準断層モデル2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所の場合）

【水位上昇側】

モデル名		最大上昇水位(T.P. m)					備考
検討波源モデル	基準断層モデル	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルA (4倍すべり域を東海地域に設定したモデル)	基準断層モデル1-1	22.7 (22.65)	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-2	22.7 (22.64)	4.6	7.3	8.1	10.0	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ30km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-3	22.7 (22.61)	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ20km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-4	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ10km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-5	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：基準位置 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	基準断層モデル3-1	19.4	6.4	8.9	9.5	11.6	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.0km/s、破壊開始点 P6
		19.5	6.4	8.9	9.5	11.6	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル3-2	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル3-3	19.3	6.4	8.9	9.5	11.7	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
19.0		6.4	8.9	9.5	11.7	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6	

・朔望平均満潮位T.P. +0.80mを考慮

【水位下降側】

モデル名		最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
検討波源モデル	基準断層モデル	3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルA (4倍すべり域を東海地域に設定したモデル)	基準断層モデル2-1	海底面(13.2min)	海底面(13.2min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km 【詳細パラスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル2-2	海底面(13.3min)	海底面(13.3min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離140km 【詳細パラスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル2-3	海底面(13.6min)	海底面(13.5min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ30km・距離120km 【詳細パラスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P1
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	基準断層モデル4-1	海底面(12.5min)	海底面(12.4min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：基準位置・距離140km 【詳細パラスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P1

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮

・海底面：最大下降水位時に海底面が露出している（水深1m未満である）ことを示す。

□：基準断層モデルごとに影響が大きく着目した評価地点
太字：全評価結果の中で、敷地への影響が最も大きいケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル1-1)

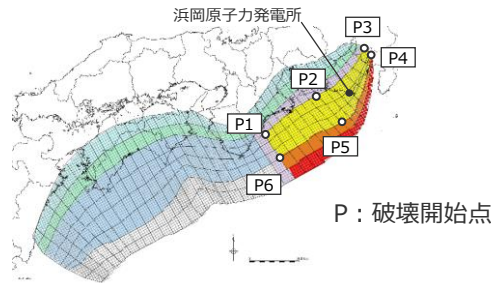
■ 基準断層モデル1-1の詳細パラメータスタディを実施し、敷地前面への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル1-1：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ40km移動させたモデル
- ・津波評価においては保守的に小数第一位に繰り上げて評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	20.6	4.4	7.0	7.8	9.8
90	19.2	4.4	7.0	7.8	9.7
120	18.6	4.4	6.9	7.7	9.6
150	17.4	4.3	6.9	7.6	9.6
180	16.7	4.3	6.9	7.5	9.4
210	15.6	4.3	6.8	7.4	9.3
240	14.5	4.3	6.8	7.2	9.2
270	13.4	4.3	6.7	7.0	9.0
300	12.6	4.3	6.6	6.8	8.7

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	20.6	4.8	7.2	7.9	9.9
	P2	17.1	3.8	6.5	7.1	9.0
	P3	20.1	4.5	7.1	7.8	9.7
	P4	20.5	4.6	7.2	7.9	9.8
	P5	20.2	4.8	7.2	7.9	9.9
	P6	22.3	4.9	7.4	8.3	10.2
1.0	P1	21.3	4.8	7.3	8.1	10.0
	P2	18.2	4.1	6.7	7.4	9.3
	P3	21.3	4.6	7.2	7.9	9.8
	P4	21.7	4.6	7.2	8.0	9.9
	P5	21.1	4.7	7.2	8.0	10.0
	P6	22.5	4.9	7.4	8.3	10.2
1.5	P1	21.5	4.8	7.3	8.1	10.1
	P2	19.8	4.3	6.9	7.7	9.6
	P3	21.9	4.6	7.2	8.0	9.9
	P4	22.2	4.6	7.2	8.0	10.0
	P5	21.8	4.7	7.3	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.4	8.2	10.2
2.0	P1	21.7	4.7	7.3	8.1	10.1
	P2	20.6	4.4	7.0	7.8	9.8
	P3	22.4	4.6	7.2	8.0	10.0
	P4	22.5	4.6	7.3	8.1	10.0
	P5	22.1	4.7	7.3	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2
2.5	P1	21.9	4.7	7.3	8.2	10.1
	P2	21.0	4.4	7.1	7.9	9.9
	P3	22.5	4.6	7.2	8.1	10.0
	P4	22.7	4.6	7.3	8.1	10.1
	P5	22.2	4.7	7.3	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2

・ライズタイム60sとして検討

着目する評価地点における津波高の最大値を持つケースとして選定

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において最も影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

赤枠：基準断層モデル1-1の詳細パラメータスタディの中で、着目する評価地点（敷地前面）における津波高の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル1-2)

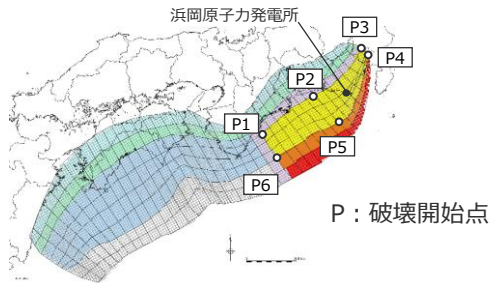
■ 基準断層モデル1-2の詳細パラメータスタディを実施し、敷地前面への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル1-2：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ30km移動させたモデル
- ・津波評価においては保守的に小数第一位に繰り上げて評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	20.5	4.4	7.0	7.8	9.8
90	19.2	4.4	7.0	7.7	9.7
120	18.6	4.4	6.9	7.7	9.6
150	17.4	4.4	6.9	7.6	9.6
180	16.6	4.3	6.9	7.5	9.4
210	15.6	4.3	6.8	7.4	9.3
240	14.5	4.3	6.8	7.2	9.2
270	13.3	4.3	6.7	7.0	9.0
300	12.5	4.3	6.6	6.8	8.7

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	20.8	4.8	7.3	8.0	9.9
	P2	17.0	3.8	6.4	7.0	8.9
	P3	20.0	4.5	7.1	7.8	9.7
	P4	20.5	4.6	7.2	7.9	9.8
	P5	19.9	4.7	7.2	7.8	9.8
	P6	22.4	4.9	7.4	8.3	10.2
1.0	P1	21.4	4.8	7.3	8.1	10.0
	P2	18.1	4.1	6.7	7.4	9.3
	P3	21.1	4.5	7.1	7.9	9.8
	P4	21.6	4.6	7.2	8.0	9.9
	P5	20.8	4.7	7.2	7.9	9.9
	P6	22.5	4.9	7.4	8.3	10.2
1.5	P1	21.6	4.8	7.3	8.1	10.1
	P2	19.7	4.3	6.9	7.7	9.6
	P3	21.9	4.6	7.2	8.0	9.9
	P4	22.2	4.6	7.2	8.0	10.0
	P5	21.6	4.7	7.2	8.0	10.0
	P6	22.4	4.8	7.4	8.2	10.2
2.0	P1	21.7	4.7	7.3	8.1	10.1
	P2	20.5	4.4	7.0	7.8	9.8
	P3	22.3	4.6	7.2	8.0	10.0
	P4	22.5	4.6	7.3	8.1	10.0
	P5	22.0	4.7	7.2	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2
2.5	P1	21.9	4.7	7.3	8.2	10.1
	P2	20.9	4.4	7.1	7.9	9.9
	P3	22.4	4.6	7.2	8.1	10.0
	P4	22.7	4.6	7.3	8.1	10.0
	P5	22.2	4.7	7.3	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2

・ライズタイム60sとして検討

着目する評価地点における津波高の最大値を持つケースとして選定

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において最も影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

赤枠：基準断層モデル1-2の詳細パラメータスタディの中で、着目する評価地点（敷地前面）における津波高の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル1-3)

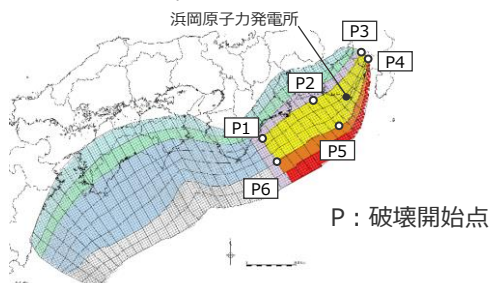
■ 基準断層モデル1-3の詳細パラメータスタディを実施し、敷地前面への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル1-3：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ20km移動させたモデル
- ・津波評価においては保守的に小数第一位に繰り上げて評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	20.5	4.4	7.0	7.8	9.8
90	19.2	4.4	7.0	7.8	9.7
120	18.5	4.4	7.0	7.7	9.7
150	17.4	4.4	6.9	7.6	9.6
180	16.6	4.4	6.9	7.5	9.5
210	15.6	4.4	6.9	7.4	9.3
240	14.5	4.3	6.8	7.2	9.2
270	13.3	4.3	6.7	7.1	9.0
300	12.5	4.3	6.6	6.8	8.8

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	21.0	4.8	7.3	8.0	9.9
	P2	16.9	3.9	6.4	7.0	8.9
	P3	19.7	4.5	7.1	7.8	9.6
	P4	20.4	4.6	7.2	7.9	9.9
	P5	20.1	4.6	7.1	7.8	9.8
	P6	22.4	4.9	7.4	8.3	10.2
1.0	P1	21.5	4.8	7.3	8.1	10.0
	P2	18.2	4.1	6.7	7.4	9.3
	P3	20.8	4.5	7.1	7.9	9.8
	P4	21.6	4.6	7.2	8.0	9.9
	P5	20.8	4.6	7.2	7.9	9.9
	P6	22.5	4.9	7.4	8.3	10.2
1.5	P1	21.6	4.8	7.3	8.1	10.1
	P2	19.7	4.3	6.9	7.7	9.7
	P3	21.7	4.6	7.2	8.0	9.9
	P4	22.2	4.6	7.2	8.0	10.0
	P5	21.6	4.6	7.2	8.0	10.0
	P6	22.3	4.8	7.4	8.2	10.2
2.0	P1	21.8	4.7	7.3	8.1	10.1
	P2	20.5	4.4	7.0	7.8	9.8
	P3	22.2	4.6	7.2	8.0	10.0
	P4	22.5	4.6	7.3	8.1	10.0
	P5	22.0	4.7	7.2	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2
2.5	P1	21.9	4.7	7.3	8.2	10.1
	P2	21.0	4.5	7.1	7.9	9.9
	P3	22.3	4.6	7.2	8.1	10.0
	P4	22.7	4.6	7.3	8.1	10.1
	P5	22.2	4.7	7.2	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2

・ライズタイム60sとして検討

着目する評価地点における津波高の最大値を持つケースとして選定

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において最も影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

赤枠：基準断層モデル1-3の詳細パラメータスタディの中で、着目する評価地点（敷地前面）における津波高の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル1-4)

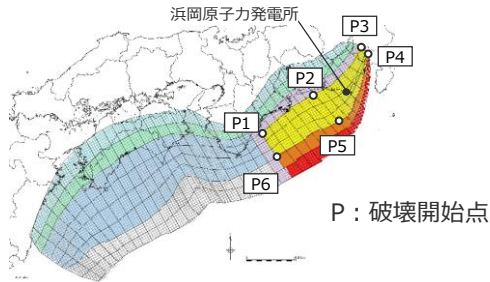
■ 基準断層モデル1-4の詳細パラメータスタディを実施し、敷地前面への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル1-4：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ10km移動させたモデル
- ・津波評価においては保守的に小数第一位に繰り上げて評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	20.5	4.5	7.1	7.8	9.8
90	19.3	4.5	7.0	7.8	9.8
120	18.5	4.4	7.0	7.7	9.7
150	17.4	4.4	6.9	7.6	9.6
180	16.6	4.4	6.9	7.5	9.5
210	15.7	4.4	6.9	7.4	9.4
240	14.5	4.4	6.8	7.3	9.2
270	13.4	4.3	6.7	7.1	9.0
300	12.5	4.3	6.7	6.9	8.8

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	21.0	4.8	7.3	8.0	9.9
	P2	16.9	4.0	6.5	7.0	9.0
	P3	19.4	4.5	7.0	7.7	9.5
	P4	20.3	4.6	7.2	7.9	9.9
	P5	19.9	4.6	7.1	7.8	9.8
	P6	22.4	4.9	7.4	8.3	10.2
1.0	P1	21.6	4.8	7.3	8.1	10.0
	P2	18.3	4.2	6.8	7.4	9.4
	P3	20.6	4.5	7.1	7.9	9.7
	P4	21.5	4.6	7.2	8.0	9.9
	P5	20.7	4.6	7.1	7.9	9.9
	P6	22.5	4.9	7.4	8.3	10.2
1.5	P1	21.7	4.8	7.3	8.1	10.1
	P2	19.8	4.4	7.0	7.7	9.7
	P3	21.6	4.6	7.2	8.0	9.9
	P4	22.2	4.6	7.2	8.0	10.0
	P5	21.5	4.6	7.2	8.0	10.0
	P6	22.4	4.8	7.4	8.2	10.2
2.0	P1	21.7	4.7	7.3	8.1	10.1
	P2	20.5	4.5	7.1	7.8	9.8
	P3	22.0	4.6	7.2	8.0	9.9
	P4	22.4	4.6	7.3	8.1	10.0
	P5	21.9	4.6	7.2	8.1	10.0
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2
2.5	P1	21.9	4.7	7.3	8.2	10.1
	P2	20.9	4.5	7.1	7.9	9.9
	P3	22.2	4.6	7.2	8.1	10.0
	P4	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0
	P5	22.1	4.6	7.2	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2

・ライズタイム60sとして検討

着目する評価地点における津波高の最大値を持つケースとして選定

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において最も影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

赤枠：基準断層モデル1-4の詳細パラメータスタディの中で、着目する評価地点（敷地前面）における津波高の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル1-5)

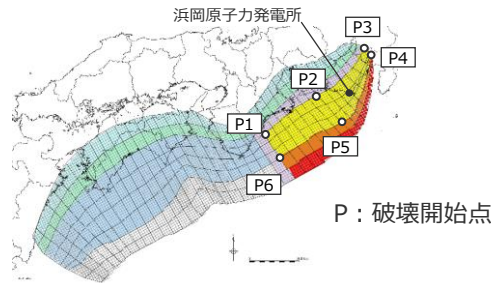
■ 基準断層モデル1-5の詳細パラメータスタディを実施し、敷地前面への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル1-5：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が1箇所のケース）の大すべり域が基準位置のモデル
- ・津波評価においては保守的に小数第一位に繰り上げて評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	20.6	4.5	7.1	7.9	9.9
90	19.5	4.5	7.0	7.8	9.8
120	18.6	4.5	7.0	7.8	9.7
150	17.5	4.5	7.0	7.7	9.7
180	16.6	4.4	6.9	7.6	9.5
210	15.8	4.4	6.9	7.4	9.4
240	14.6	4.4	6.8	7.3	9.3
270	13.5	4.4	6.8	7.1	9.1
300	12.6	4.4	6.7	6.9	8.9

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	21.0	4.8	7.3	8.0	9.9
	P2	16.9	4.0	6.6	7.1	9.0
	P3	18.9	4.4	7.0	7.7	9.5
	P4	20.1	4.6	7.2	7.9	9.9
	P5	20.3	4.6	7.1	7.7	9.7
	P6	22.4	4.9	7.4	8.3	10.2
1.0	P1	21.6	4.8	7.3	8.1	10.0
	P2	18.5	4.3	6.8	7.5	9.4
	P3	20.4	4.5	7.1	7.8	9.7
	P4	21.3	4.6	7.2	8.0	10.0
	P5	21.1	4.6	7.1	7.9	9.9
	P6	22.5	4.9	7.4	8.3	10.2
1.5	P1	21.7	4.8	7.3	8.1	10.1
	P2	19.9	4.4	7.0	7.8	9.7
	P3	21.5	4.6	7.1	7.9	9.9
	P4	22.1	4.6	7.2	8.1	10.0
	P5	21.6	4.6	7.2	8.0	10.0
	P6	22.4	4.8	7.4	8.2	10.2
2.0	P1	21.7	4.7	7.3	8.1	10.1
	P2	20.6	4.5	7.1	7.9	9.9
	P3	21.9	4.6	7.2	8.0	9.9
	P4	22.4	4.6	7.3	8.1	10.0
	P5	22.0	4.6	7.2	8.1	10.0
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2
2.5	P1	21.9	4.7	7.3	8.2	10.1
	P2	21.0	4.5	7.1	8.0	9.9
	P3	22.1	4.6	7.2	8.0	10.0
	P4	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1
	P5	22.2	4.6	7.2	8.1	10.1
	P6	22.3	4.8	7.3	8.2	10.2

・ライズタイム60sとして検討

着目する評価地点における津波高の最大値を持つケースとして選定

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において最も影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（敷地前面）における最大値

赤枠：基準断層モデル1-5の詳細パラメータスタディの中で、着目する評価地点（敷地前面）における津波高の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-1) 1/4

■ 基準断層モデル2-1の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-1：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を130kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.2
90	12.4	12.3
120	12.5	12.5
150	12.4	12.5
180	12.4	12.4
210	12.3	12.3
240	12.1	12.1
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

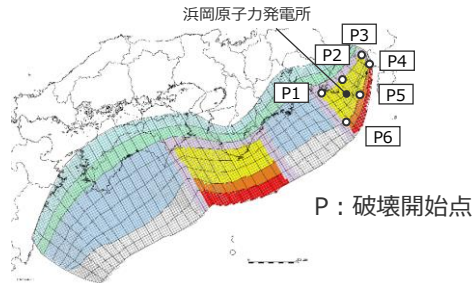
破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.1	13.0
	P2	9.9	9.7
	P3	8.3	8.1
	P4	7.9	7.8
	P5	7.8	7.9
	P6	13.2(13.17)	13.2(13.19)
1.0	P1	12.6	12.5
	P2	12.1	12.0
	P3	11.5	11.4
	P4	11.3	11.2
	P5	10.7	10.5
	P6	13.0	13.0
1.5	P1	13.0	13.0
	P2	12.3	12.2
	P3	12.3	12.2
	P4	12.3	12.2
	P5	12.2	12.1
	P6	12.5	12.5
2.0	P1	13.1	13.1
	P2	12.4	12.3
	P3	12.2	12.2
	P4	12.2	12.2
	P5	12.3	12.2
	P6	12.9	12.9
2.5	P1	13.1	13.1
	P2	12.9	12.8
	P3	12.6	12.7
	P4	12.5	12.5
	P5	12.4	12.4
	P6	13.0	13.0

小数第1位までの水位低下時間から、着目する全ての評価地点において水位低下時間の最大値(表中赤字)を持つケースが3ケース存在(次頁、次々頁参照)
➡小数第2位を確認

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮 (別ページ)

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



P：破壊開始点

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

・ライズタイム90sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値(表中赤字)を持つケースと、その波形を比較する

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-1) 2/4

■ 基準断層モデル2-1の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-1：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を130kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.2
90	12.4	12.3
120	12.5	12.5
150	12.4	12.5
180	12.4	12.4
210	12.3	12.3
240	12.1	12.1
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

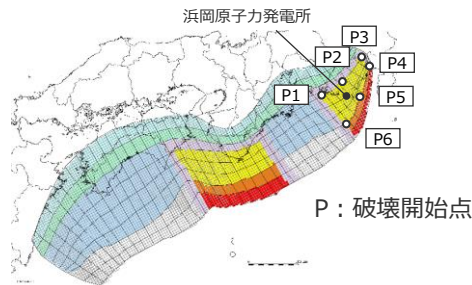
破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.1	13.1
	P2	9.8	9.6
	P3	8.4	8.3
	P4	8.1	8.0
	P5	7.7	7.7
	P6	13.2(13.20)	13.2(13.19)
1.0	P1	12.7	12.7
	P2	12.5	12.3
	P3	11.8	11.6
	P4	11.4	11.1
	P5	10.8	10.6
	P6	12.9	12.9
1.5	P1	12.9	12.9
	P2	12.3	12.2
	P3	12.2	12.2
	P4	12.2	12.2
	P5	12.3	12.3
	P6	12.7	12.7
2.0	P1	13.0	13.0
	P2	12.5	12.5
	P3	12.3	12.3
	P4	12.3	12.2
	P5	12.3	12.2
	P6	12.8	12.8
2.5	P1	13.0	13.0
	P2	12.7	12.7
	P3	12.6	12.6
	P4	12.5	12.5
	P5	12.5	12.5
	P6	13.0	12.9

小数第1位までの水位低下時間から、着目する全ての評価地点において水位低下時間の最大値(表中赤字)を持つケースが3ケース存在(前頁、次頁参照)
→小数第2位を確認

着目する全ての評価地点における水位低下時間の最大値を持つケースとして選定

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮 (別ページ)

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

青字：基準断層モデル2-1の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（3,4号取水塔）において水位低下時間の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

・ライズタイム120sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値(表中赤字)を持つケースと、その波形を比較する

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-1) 3/4

■ 基準断層モデル2-1の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-1：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を130kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.2
90	12.4	12.3
120	12.5	12.5
150	12.4	12.5
180	12.4	12.4
210	12.3	12.3
240	12.1	12.1
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

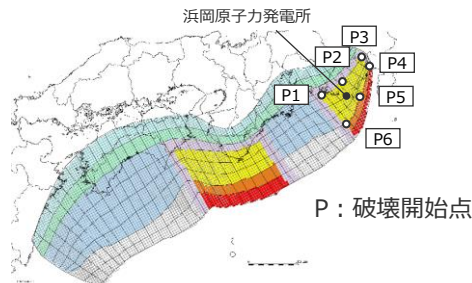
破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.1	13.0
	P2	9.1	9.0
	P3	8.5	8.4
	P4	8.1	8.1
	P5	7.5	7.5
	P6	13.2(13.19)	13.2(13.17)
1.0	P1	12.7	12.7
	P2	12.4	12.4
	P3	12.3	12.2
	P4	12.2	11.9
	P5	11.1	10.9
	P6	12.9	12.8
1.5	P1	12.8	12.8
	P2	12.3	12.3
	P3	12.2	12.2
	P4	12.2	12.2
	P5	12.3	12.3
	P6	12.7	12.7
2.0	P1	12.8	12.7
	P2	12.4	12.5
	P3	12.4	12.3
	P4	12.3	12.3
	P5	12.4	12.3
	P6	12.7	12.7
2.5	P1	12.8	12.7
	P2	12.6	12.6
	P3	12.5	12.5
	P4	12.5	12.4
	P5	12.5	12.5
	P6	12.7	12.7

小数第1位までの水位低下時間から、着目する全ての評価地点において水位低下時間の最大値(表中赤字)を持つケースが3ケース存在(前々頁、前頁参照)
➡小数第2位を確認

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮 (別ページ)

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

・ライズタイム150sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値(表中赤字)を持つケースと、その波形を比較する

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-1) 4/4

■ 基準断層モデル2-1の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-1：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を130kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

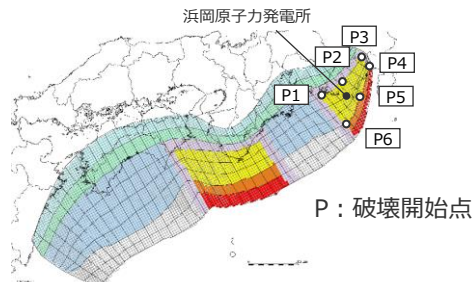
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.2
90	12.4	12.3
120	12.5	12.5
150	12.4	12.5
180	12.4	12.4
210	12.3	12.3
240	12.1	12.1
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.0	13.0
	P2	10.0	9.9
	P3	8.8	8.7
	P4	8.0	7.9
	P5	7.6	7.6
	P6	13.1	13.1
1.0	P1	12.7	12.7
	P2	12.4	12.4
	P3	12.2	12.2
	P4	12.2	12.0
	P5	11.3	11.2
	P6	12.8	12.7
1.5	P1	12.7	12.7
	P2	12.3	12.3
	P3	12.2	12.2
	P4	12.2	12.2
	P5	12.3	12.3
	P6	12.7	12.6
2.0	P1	12.6	12.7
	P2	12.4	12.4
	P3	12.4	12.4
	P4	12.4	12.3
	P5	12.4	12.4
	P6	12.6	12.6
2.5	P1	12.6	12.6
	P2	12.5	12.5
	P3	12.4	12.4
	P4	12.4	12.4
	P5	12.5	12.4
	P6	12.6	12.5

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



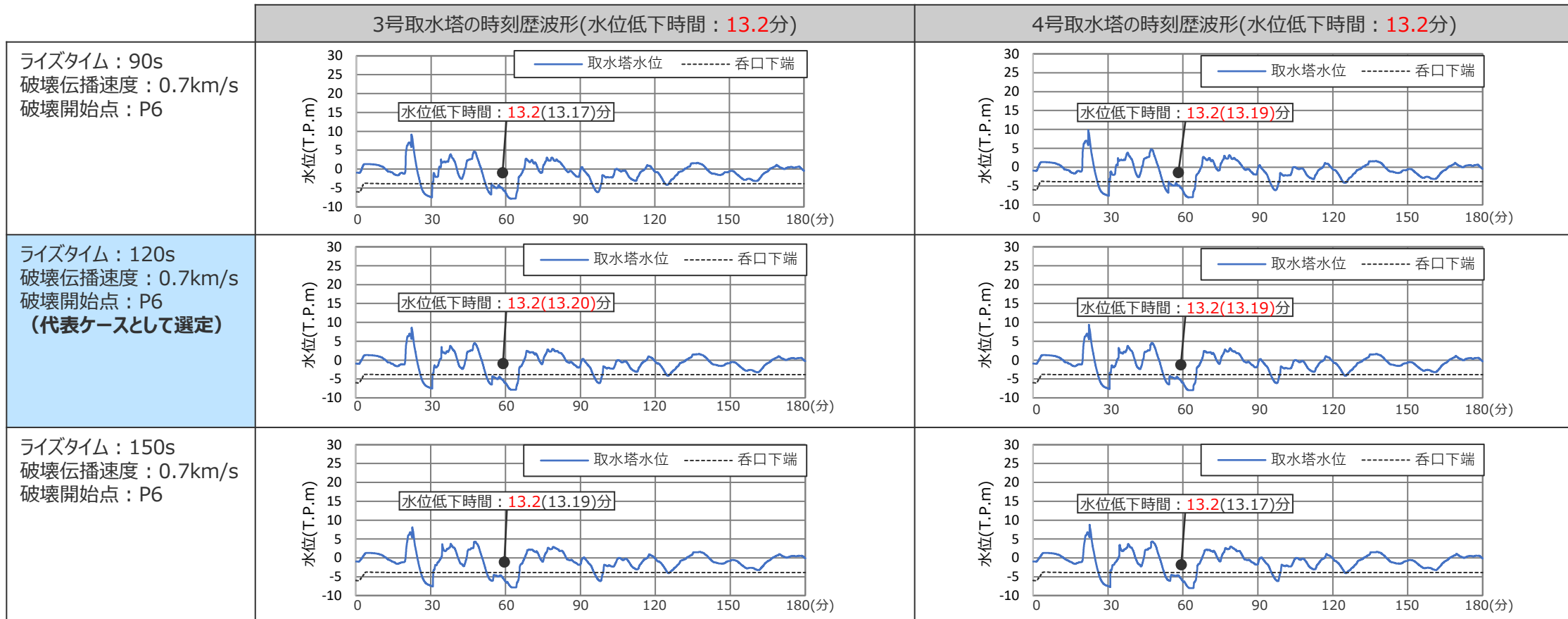
太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

・ライズタイム180sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (基準断層モデル2-1の水位の時刻歴波形)

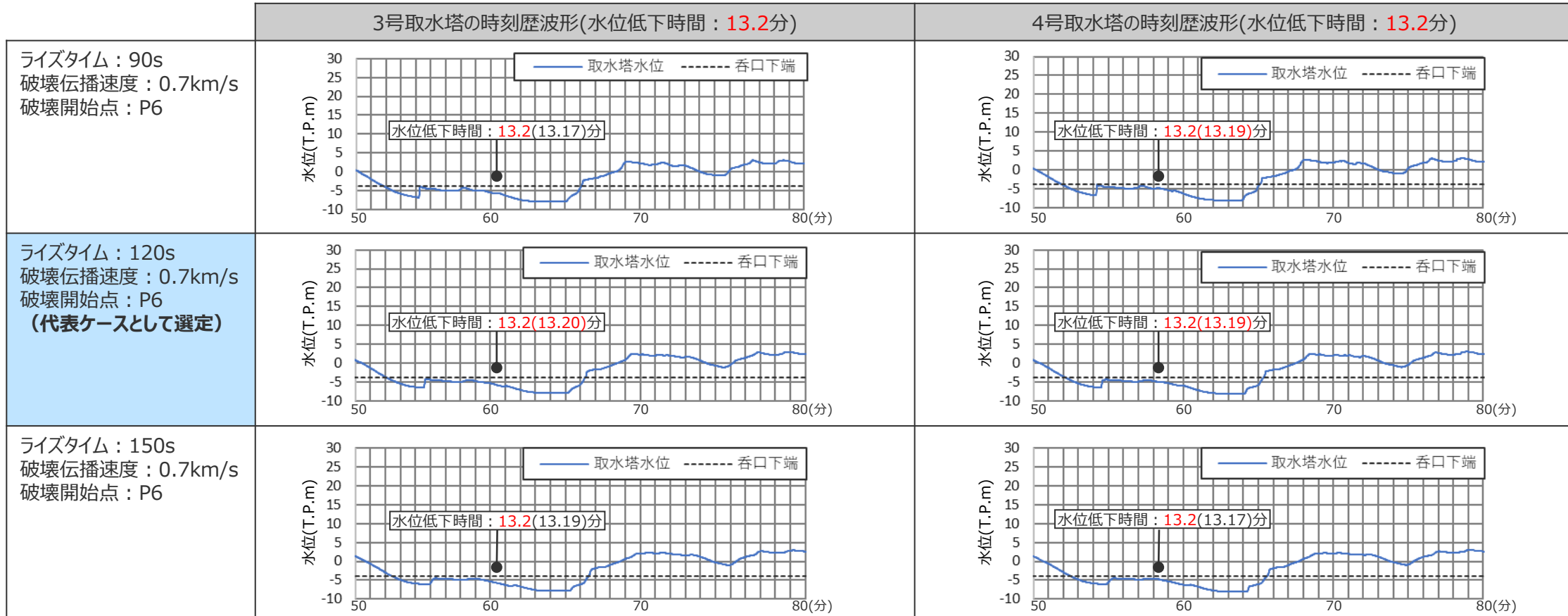
■ 基準断層モデル2-1の詳細パラメータスタディの結果、3,4号取水塔水位低下時間の最大値が同値となる複数のケースについて、これらの水位の時刻歴波形を比較した結果、代表ケースと異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはないことから、選定した代表ケースによって3,4号取水塔への津波影響を代表できると評価した。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

(補足) (基準断層モデル2-1の水位の時刻歴波形 (最大水位低下時間周辺の拡大))

■ 前ページの時刻歴波形について、最大水位低下時間の発生時刻周辺の30分間の波形を拡大して示す。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-2) 1/6

■ 基準断層モデル2-2の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-2：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

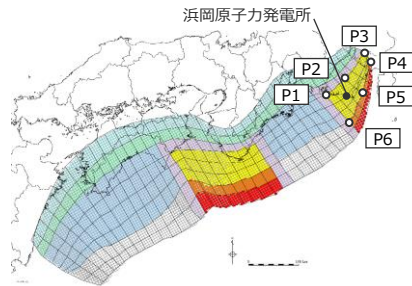
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.4	12.3
90	12.4	12.3
120	12.4	12.3
150	12.4(12.32)	12.4(12.34)
180	12.4(12.34)	12.4(12.34)
210	12.3	12.3
240	12.2	12.2
270	12.0	12.0
300	11.7	11.7

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	12.8	12.7
	P2	9.7	9.6
	P3	8.2	8.1
	P4	7.7	7.7
	P5	7.8	7.8
	P6	13.0	13.0
1.0	P1	12.8	12.8
	P2	11.3	11.1
	P3	10.9	10.5
	P4	10.3	9.9
	P5	10.0	9.7
	P6	13.1	13.0
1.5	P1	12.8	12.8
	P2	12.3	12.2
	P3	12.0	11.9
	P4	12.0	11.9
	P5	11.8	11.7
	P6	12.5	12.5
2.0	P1	13.0	12.9
	P2	12.4	12.3
	P3	12.3	12.2
	P4	12.3	12.2
	P5	12.4	12.2
	P6	12.4	12.2
2.5	P1	13.0	13.0
	P2	12.8	12.7
	P3	12.6	12.6
	P4	12.5	12.4
	P5	12.4	12.3
	P6	12.8	12.7

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

・ライズタイム60sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-2) 2/6

■ 基準断層モデル2-2の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-2：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

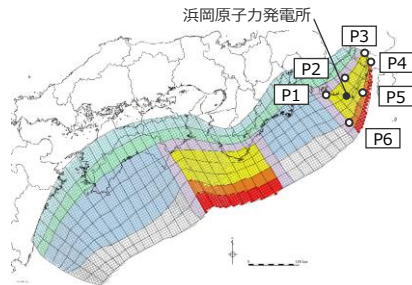
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.4	12.3
90	12.4	12.3
120	12.4	12.3
150	12.4(12.32)	12.4(12.34)
180	12.4(12.34)	12.4(12.34)
210	12.3	12.3
240	12.2	12.2
270	12.0	12.0
300	11.7	11.7

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	12.9	12.8
	P2	9.6	9.3
	P3	8.2	8.2
	P4	7.8	7.8
	P5	7.7	7.8
	P6	13.1	13.1
1.0	P1	12.8	12.7
	P2	11.6	11.4
	P3	10.8	10.5
	P4	10.4	10.0
	P5	10.1	9.8
	P6	13.1	13.0
1.5	P1	12.8	12.7
	P2	12.4	12.3
	P3	12.2	12.2
	P4	12.2	12.0
	P5	12.1	12.0
	P6	12.6	12.5
2.0	P1	13.0	12.9
	P2	12.4	12.3
	P3	12.2	12.2
	P4	12.3	12.2
	P5	12.3	12.3
	P6	12.6	12.6
2.5	P1	13.0	13.0
	P2	12.7	12.7
	P3	12.5	12.5
	P4	12.4	12.4
	P5	12.4	12.3
	P6	12.8	12.8

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

・ライズタイム90sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-2) 3/6

■ 基準断層モデル2-2の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-2：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.4	12.3
90	12.4	12.3
120	12.4	12.3
150	12.4(12.32)	12.4(12.34)
180	12.4(12.34)	12.4(12.34)
210	12.3	12.3
240	12.2	12.2
270	12.0	12.0
300	11.7	11.7

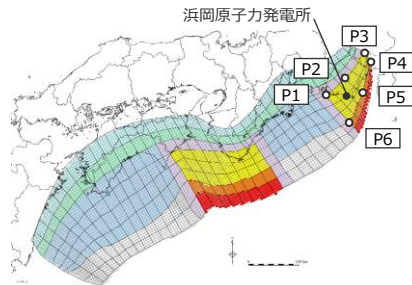
破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.2	13.0
	P2	9.0	8.9
	P3	8.4	8.3
	P4	7.9	7.8
	P5	7.5	7.6
	P6	13.3	13.3
1.0	P1	12.9	12.8
	P2	11.8	11.5
	P3	10.7	10.4
	P4	10.3	9.9
	P5	10.1	9.9
	P6	13.0	13.0
1.5	P1	12.7	12.7
	P2	12.4	12.4
	P3	12.4	12.3
	P4	12.4	12.3
	P5	12.3	12.2
	P6	12.6	12.6
2.0	P1	12.9	12.9
	P2	12.4	12.3
	P3	12.2	12.2
	P4	12.2	12.2
	P5	12.3	12.2
	P6	12.7	12.6
2.5	P1	12.8	12.9
	P2	12.6	12.6
	P3	12.4	12.4
	P4	12.4	12.4
	P5	12.4	12.4
	P6	12.8	12.8

着目する全ての評価地点における水位低下時間の最大値を持つケースとして選定

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

青字：基準断層モデル2-2の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（3,4号取水塔）において水位低下時間の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

・ライズタイム120sとして検討

選定した代表ケースについて、他に着目する評価地点における最大値（表中赤字）を持つケースはないものの、参考として最大値と同程度のケースの波形を比較する

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-2) 4/6

■ 基準断層モデル2-2の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-2：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

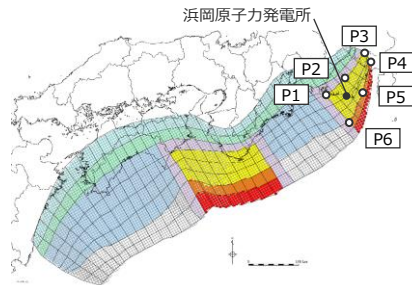
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.4	12.3
90	12.4	12.3
120	12.4	12.3
150	12.4(12.32)	12.4(12.34)
180	12.4(12.34)	12.4(12.34)
210	12.3	12.3
240	12.2	12.2
270	12.0	12.0
300	11.7	11.7

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.2	13.2
	P2	9.0	8.9
	P3	8.4	8.3
	P4	6.4	6.3
	P5	7.3	7.3
	P6	13.2	13.2
1.0	P1	12.8	12.8
	P2	11.9	11.6
	P3	11.0	10.7
	P4	10.3	10.0
	P5	10.1	9.9
	P6	12.9	12.9
1.5	P1	12.7	12.6
	P2	12.4	12.4
	P3	12.4	12.3
	P4	12.4	12.3
	P5	12.5	12.4
	P6	12.6	12.6
2.0	P1	12.7	12.7
	P2	12.4	12.4
	P3	12.3	12.3
	P4	12.3	12.3
	P5	12.4	12.3
	P6	12.6	12.5
2.5	P1	12.6	12.7
	P2	12.5	12.4
	P3	12.4	12.4
	P4	12.4	12.4
	P5	12.4	12.4
	P6	12.6	12.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

・ライズタイム150sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-2) 5/6

■ 基準断層モデル2-2の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

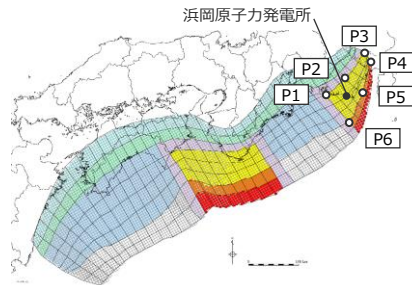
- ・基準断層モデル2-2：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.4	12.3
90	12.4	12.3
120	12.4	12.3
150	12.4(12.32)	12.4(12.34)
180	12.4(12.34)	12.4(12.34)
210	12.3	12.3
240	12.2	12.2
270	12.0	12.0
300	11.7	11.7

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.1	13.1
	P2	9.1	9.0
	P3	8.6	8.5
	P4	7.7	6.4
	P5	7.2	7.1
	P6	13.1	13.1
1.0	P1	12.8	12.7
	P2	12.0	11.9
	P3	11.3	11.2
	P4	10.8	10.6
	P5	10.0	9.9
	P6	12.8	12.8
1.5	P1	12.6	12.6
	P2	12.4	12.4
	P3	12.4	12.3
	P4	12.4	12.3
	P5	12.5	12.4
	P6	12.6	12.5
2.0	P1	12.4	12.5
	P2	12.4	12.4
	P3	12.4	12.4
	P4	12.4	12.4
	P5	12.4	12.4
	P6	12.5	12.4
2.5	P1	12.4	12.4
	P2	12.3	12.3
	P3	12.3	12.3
	P4	12.4	12.4
	P5	12.4	12.4
	P6	12.5	12.4

・ライズタイム180sとして検討

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-2) 6/6

■ 基準断層モデル2-2の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-2：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ40km、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

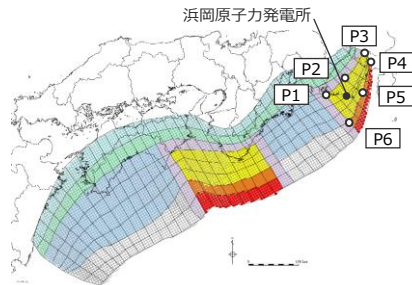
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.4	12.3
90	12.4	12.3
120	12.4	12.3
150	12.4(12.32)	12.4(12.34)
180	12.4(12.34)	12.4(12.34)
210	12.3	12.3
240	12.2	12.2
270	12.0	12.0
300	11.7	11.7

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.1	13.0
	P2	9.8	9.7
	P3	8.6	8.4
	P4	7.7	7.6
	P5	6.8	6.8
	P6	12.8	12.8
1.0	P1	12.7	12.7
	P2	12.1	11.9
	P3	11.5	11.4
	P4	11.3	11.2
	P5	10.1	10.1
	P6	12.7	12.6
1.5	P1	12.5	12.5
	P2	12.5	12.4
	P3	12.5	12.4
	P4	12.5	12.4
	P5	12.5	12.5
	P6	12.4	12.4
2.0	P1	12.2	12.3
	P2	12.3	12.3
	P3	12.3	12.3
	P4	12.4	12.4
	P5	12.4	12.4
	P6	12.4	12.3
2.5	P1	12.1	12.2
	P2	12.2	12.2
	P3	12.2	12.2
	P4	12.3	12.3
	P5	12.3	12.3
	P6	12.3	12.3

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

・ライズタイム210sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (基準断層モデル2-2の水位の時刻歴波形)

■ 基準断層モデル2-2の詳細パラメータスタディの結果、3, 4号取水塔水位低下時間の最大値が同値となるケースはなかったが、参考として最大値と同程度のケースの時刻歴波形を比較して示す。これらの水位の時刻歴波形を比較した結果、代表ケースと異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはないことから、選定した代表ケースによって3,4号取水塔への津波影響を代表できると評価した。

	3号取水塔の時刻歴波形(水位低下時間：13.3分)	4号取水塔の時刻歴波形(水位低下時間：13.3分)
ライズタイム：60s 破壊伝播速度：1.0km/s 破壊開始点：P6		
ライズタイム：90s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P6		
ライズタイム：120s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P6 (代表ケースとして選定)		
ライズタイム：150s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P1		
ライズタイム：150s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P6		
ライズタイム：180s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P1		
ライズタイム：180s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P6		
ライズタイム：210s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P1		

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

(補足) (基準断層モデル2-2の水位の時刻歴波形 (最大水位低下時間周辺の拡大))

■ 前ページの時刻歴波形について、最大水位低下時間の発生時刻周辺の30分間の波形を拡大して示す。

	3号取水塔の時刻歴波形(水位低下時間：13.3分)	4号取水塔の時刻歴波形(水位低下時間：13.3分)
ライズタイム：60s 破壊伝播速度：1.0km/s 破壊開始点：P6		
ライズタイム：90s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P6		
ライズタイム：120s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P6 (代表ケースとして選定)		
ライズタイム：150s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P1		
ライズタイム：150s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P6		
ライズタイム：180s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P1		
ライズタイム：180s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P6		
ライズタイム：210s 破壊伝播速度：0.7km/s 破壊開始点：P1		

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-3) 1/5

■ 基準断層モデル2-3の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-3：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ30km、東西の大すべり域間を120kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

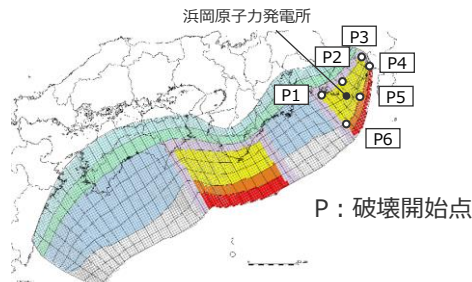
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.3
90	12.5	12.4
120	12.6(12.57)	12.6(12.54)
150	12.6(12.59)	12.6(12.57)
180	12.5	12.5
210	12.2	12.2
240	11.9	12.0
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.4	13.4
	P2	10.7	10.6
	P3	9.6	9.3
	P4	9.0	8.7
	P5	8.9	8.7
	P6	13.3	13.3
1.0	P1	13.4	13.4
	P2	12.2	12.0
	P3	11.6	11.6
	P4	11.4	11.3
	P5	11.5	11.5
	P6	13.1	13.1
1.5	P1	13.4	13.4
	P2	12.4	12.3
	P3	12.4	12.3
	P4	12.4	12.4
	P5	12.4	12.4
	P6	12.3	12.6
2.0	P1	13.4	13.3
	P2	12.2	12.3
	P3	12.2	12.2
	P4	12.2	12.2
	P5	12.3	12.2
	P6	13.2	13.1
2.5	P1	13.3	13.3
	P2	13.2	13.1
	P3	12.9	12.9
	P4	12.4	12.2
	P5	12.3	12.2
	P6	13.2	13.1

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



P: 破壊開始点

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

・ライズタイム60sとして検討

・ライズタイム90sのケースで水位低下時間が最大となったことを踏まえて、水位低下時間のピークを確認できるように検討するライズタイムのケースを拡大し、ライズタイム60sのケースでも破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディを実施した。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-3) 2/5

■ 基準断層モデル2-3の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-3：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ30km、東西の大すべり域間を120kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.3
90	12.5	12.4
120	12.6(12.57)	12.6(12.54)
150	12.6(12.59)	12.6(12.57)
180	12.5	12.5
210	12.2	12.2
240	11.9	12.0
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

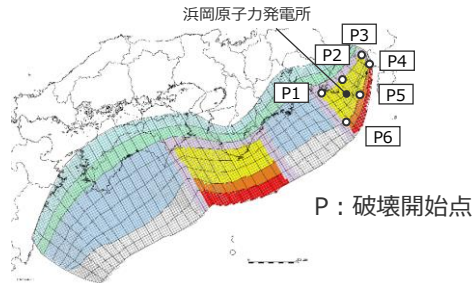
破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.5	13.5
	P2	10.6	10.4
	P3	9.4	9.0
	P4	8.9	8.6
	P5	8.8	8.7
	P6	13.3	13.3
1.0	P1	13.6	13.5
	P2	12.4	12.4
	P3	11.8	11.7
	P4	11.5	11.5
	P5	11.5	11.4
	P6	13.1	13.0
1.5	P1	13.5	13.4
	P2	12.4	12.3
	P3	12.4	12.3
	P4	12.4	12.3
	P5	12.5	12.4
	P6	12.9	12.8
2.0	P1	13.4	13.3
	P2	12.5	12.4
	P3	12.3	12.2
	P4	12.3	12.2
	P5	12.4	12.3
	P6	13.2	13.1
2.5	P1	13.4	13.3
	P2	13.1	13.0
	P3	12.6	12.6
	P4	12.5	12.4
	P5	12.4	12.4
	P6	13.2	13.1

着目する全ての評価地点における水位低下時間の最大値を持つケースとして選定

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



・ライズタイム90sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値（表中**赤字**）を持つケースと、その波形を比較する

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

青：基準断層モデル2-3の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（3,4号取水塔）において水位低下時間の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-3) 3/5

■ 基準断層モデル2-3の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

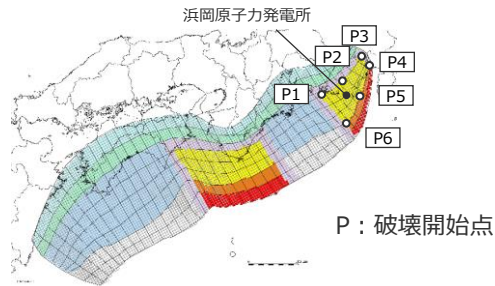
- ・基準断層モデル2-3：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ30km、東西の大すべり域間を120kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.3
90	12.5	12.4
120	12.6(12.57)	12.6(12.54)
150	12.6(12.59)	12.6(12.57)
180	12.5	12.5
210	12.2	12.2
240	11.9	12.0
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.5	13.5
	P2	10.5	10.4
	P3	9.2	8.6
	P4	8.6	8.4
	P5	8.8	8.6
	P6	13.3	13.2
1.0	P1	13.4	13.4
	P2	12.6	12.6
	P3	12.3	12.3
	P4	12.4	12.3
	P5	11.9	11.4
	P6	13.0	13.0
1.5	P1	13.3	13.3
	P2	12.4	12.4
	P3	12.3	12.3
	P4	12.3	12.3
	P5	12.4	12.4
	P6	12.9	12.9
2.0	P1	13.3	13.2
	P2	12.6	12.6
	P3	12.4	12.3
	P4	12.3	12.3
	P5	12.4	12.4
	P6	13.1	13.0
2.5	P1	13.2	13.1
	P2	12.8	12.8
	P3	12.6	12.5
	P4	12.5	12.5
	P5	12.6	12.5
	P6	13.2	13.1

・ライズタイム120sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値（表中**赤字**）を持つケースと、その波形を比較する

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-3) 4/5

■ 基準断層モデル2-3の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-3：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を東へ30km、東西の大すべり域間を120kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

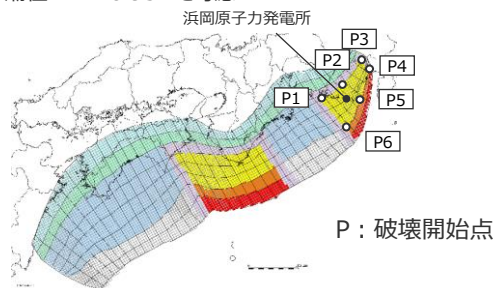
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.3
90	12.5	12.4
120	12.6(12.57)	12.6(12.54)
150	12.6(12.59)	12.6(12.57)
180	12.5	12.5
210	12.2	12.2
240	11.9	12.0
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.5	13.5
	P2	10.9	10.9
	P3	9.0	8.8
	P4	8.6	8.5
	P5	8.7	8.6
	P6	13.3	13.2
1.0	P1	13.2	13.2
	P2	12.6	12.6
	P3	12.4	12.3
	P4	12.1	11.9
	P5	12.1	12.0
	P6	13.0	13.0
1.5	P1	13.1	13.0
	P2	12.5	12.4
	P3	12.3	12.3
	P4	12.3	12.3
	P5	12.4	12.4
	P6	12.8	12.8
2.0	P1	13.0	12.9
	P2	12.6	12.6
	P3	12.4	12.4
	P4	12.3	12.3
	P5	12.4	12.4
	P6	12.9	12.8
2.5	P1	12.9	12.8
	P2	12.7	12.7
	P3	12.5	12.5
	P4	12.5	12.5
	P5	12.6	12.5
	P6	12.8	12.8

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

・ライズタイム150sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値（表中**赤字**）を持つケースと、その波形を比較する

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル2-3) 5/5

■ 基準断層モデル2-3の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル2-3：検討波源モデルA（東海地域の大すべり域が2箇所のケース）の敷地に近い大すべり域を東へ30km、東西の大すべり域間を120kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

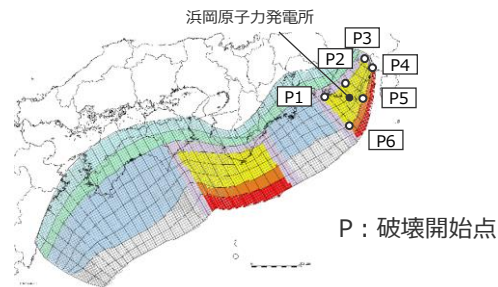
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.3
90	12.5	12.4
120	12.6(12.57)	12.6(12.54)
150	12.6(12.59)	12.6(12.57)
180	12.5	12.5
210	12.2	12.2
240	11.9	12.0
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	13.5	13.5
	P2	11.5	11.3
	P3	9.3	9.2
	P4	8.8	8.8
	P5	8.8	8.6
	P6	13.2	13.2
1.0	P1	13.1	13.1
	P2	12.6	12.6
	P3	12.4	12.2
	P4	12.1	11.9
	P5	12.1	12.0
	P6	12.9	12.9
1.5	P1	12.9	12.9
	P2	12.5	12.5
	P3	12.3	12.3
	P4	12.3	12.3
	P5	12.4	12.4
	P6	12.8	12.8
2.0	P1	12.7	12.7
	P2	12.5	12.5
	P3	12.3	12.3
	P4	12.3	12.3
	P5	12.4	12.4
	P6	12.7	12.7
2.5	P1	12.6	12.6
	P2	12.5	12.5
	P3	12.3	12.4
	P4	12.3	12.4
	P5	12.5	12.5
	P6	12.6	12.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

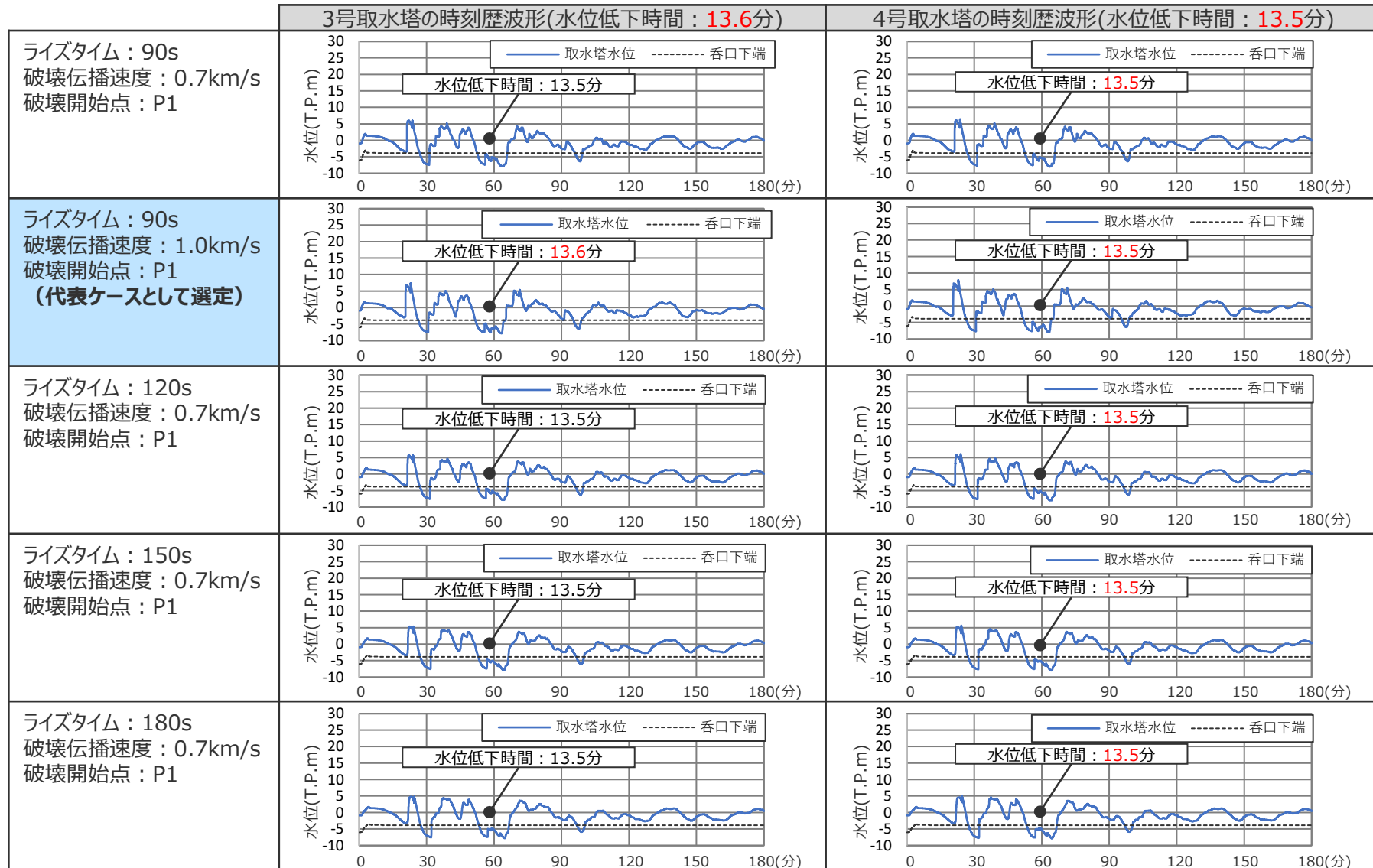
赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

・ライズタイム180sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値（表中赤字）を持つケースと、その波形を比較する（次ページ）

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (基準断層モデル2-3の水位の時刻歴波形)

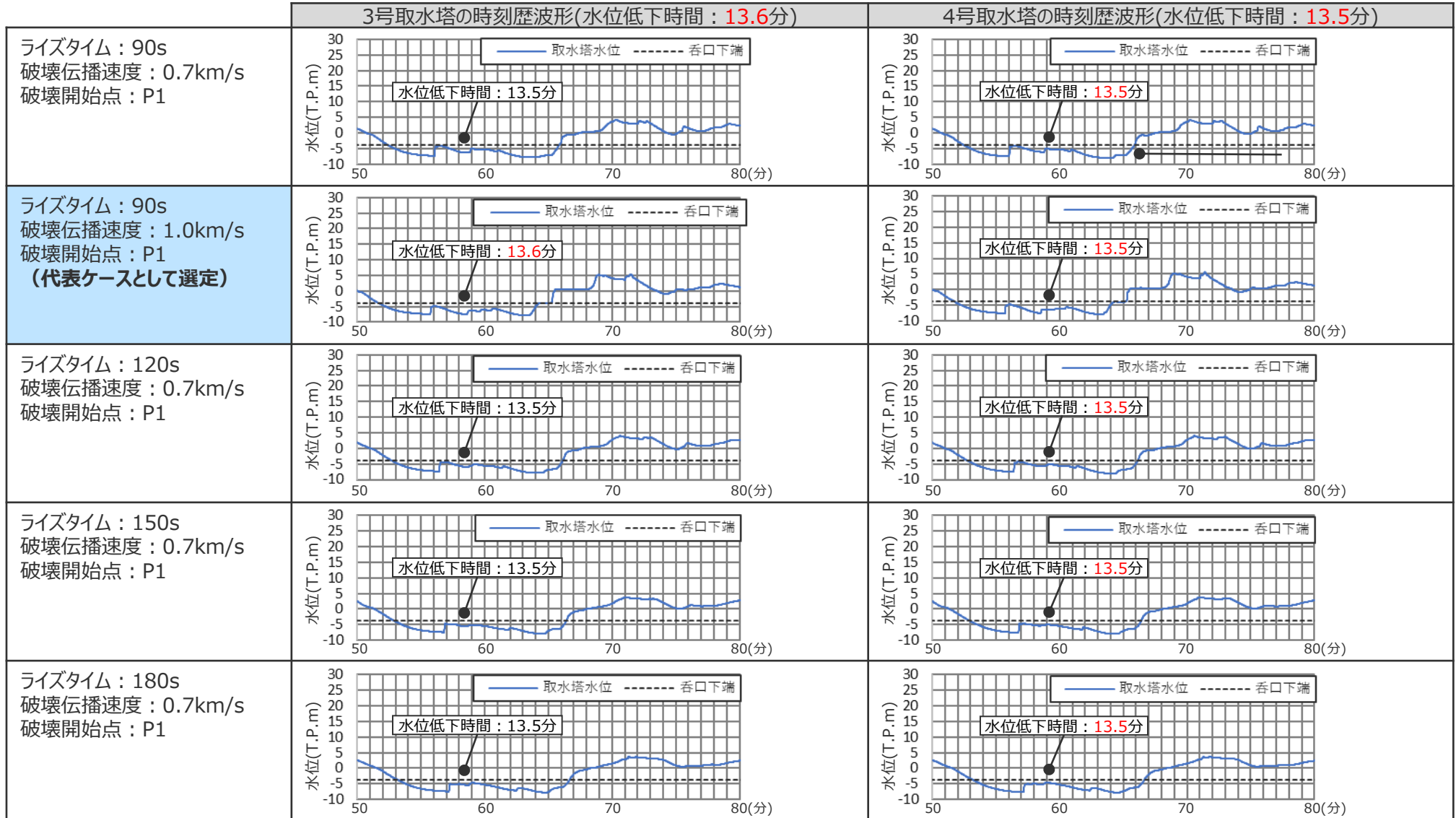
■ 基準断層モデル2-3の詳細パラメータスタディの結果、3,4号取水塔水位低下時間の最大値が同値となる複数のケースについて、これらの水位の時刻歴波形を比較した結果、代表ケースと異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはないことから、選定した代表ケースによって3,4号取水塔への津波影響を代表できると評価した。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

(補足) (基準断層モデル2-3の水位の時刻歴波形 (最大水位低下時間周辺の拡大))

■ 前ページの時刻歴波形について、最大水位低下時間の発生時刻周辺の30分間の波形を拡大して示す。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル3-1)

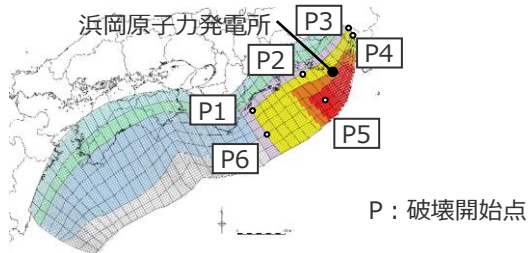
■ 基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル3-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所のケース）の大すべり域を東へ70km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
90	17.0	5.9	8.5	8.8	10.7
120	15.4	5.9	8.4	8.7	10.6
150	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
180	12.9	5.8	8.2	8.4	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.2	5.6	8.0	8.0	9.9
270	12.0	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.8	5.5	7.8	7.7	9.6

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	15.9	6.0	8.5	8.8	11.0
	P2	14.2	5.4	7.6	7.6	9.1
	P3	19.0	5.8	8.3	8.8	9.9
	P4	19.8	5.9	8.4	8.9	10.1
	P5	16.4	5.9	8.5	8.9	11.1
	P6	18.7	6.2	8.8	9.3	11.6
1.0	P1	17.3	6.0	8.7	9.1	11.3
	P2	16.1	5.7	8.1	8.2	9.9
	P3	19.3	5.9	8.5	9.0	10.4
	P4	19.9	5.9	8.6	9.1	10.5
	P5	17.2	6.0	8.6	9.2	11.3
	P6	19.1	6.2	8.8	9.4	11.6
1.5	P1	18.1	6.2	8.8	9.3	11.4
	P2	17.3	5.9	8.4	8.7	10.5
	P3	20.0	6.0	8.6	9.2	10.7
	P4	20.3	6.0	8.7	9.3	10.9
	P5	18.3	6.1	8.7	9.3	11.4
	P6	19.5	6.3	8.9	9.5	11.6
2.0	P1	18.7	6.2	8.8	9.4	11.4
	P2	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
	P3	20.4	6.0	8.7	9.3	10.9
	P4	20.6	6.0	8.7	9.3	11.0
	P5	18.9	6.2	8.8	9.4	11.4
	P6	19.4	6.4(6.31)	8.9(8.86)	9.5(9.49)	11.6(11.59)
2.5	P1	19.2	6.3	8.8	9.4	11.5
	P2	19.0	6.0	8.6	9.1	10.9
	P3	20.5	6.0	8.7	9.3	11.0
	P4	20.8	6.1	8.8	9.4	11.1
	P5	19.3	6.2	8.8	9.4	11.5
	P6	19.5	6.4(6.32)	8.9(8.86)	9.5(9.50)	11.6(11.57)

・ライズタイム60sとして検討

小数第1位までの津波高から、着目する全ての評価地点において津波高の最大値(表中赤字)を持つケースが2ケース存在
→小数第2位を確認

着目する全ての評価地点における津波高の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値(表中赤字)を持つケースと、その波形を比較する(次ページ)

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点(1~5号取水槽)における最大値

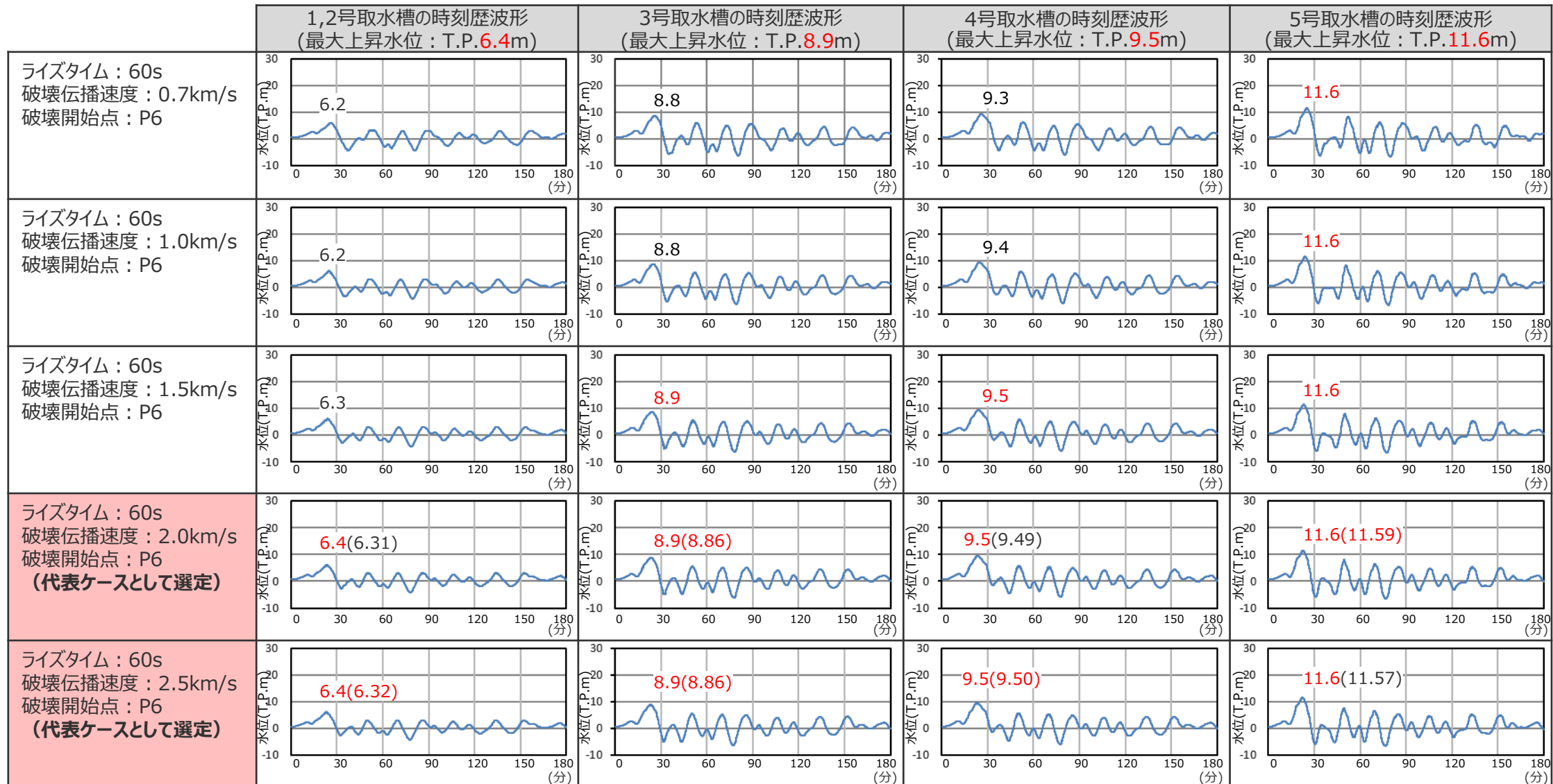
点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において最も影響の大きいケース(破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる)

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点(1~5号取水槽)における最大値

赤枠：基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点(1~5号取水槽)における津波高の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル3-1の時刻歴波形比較)

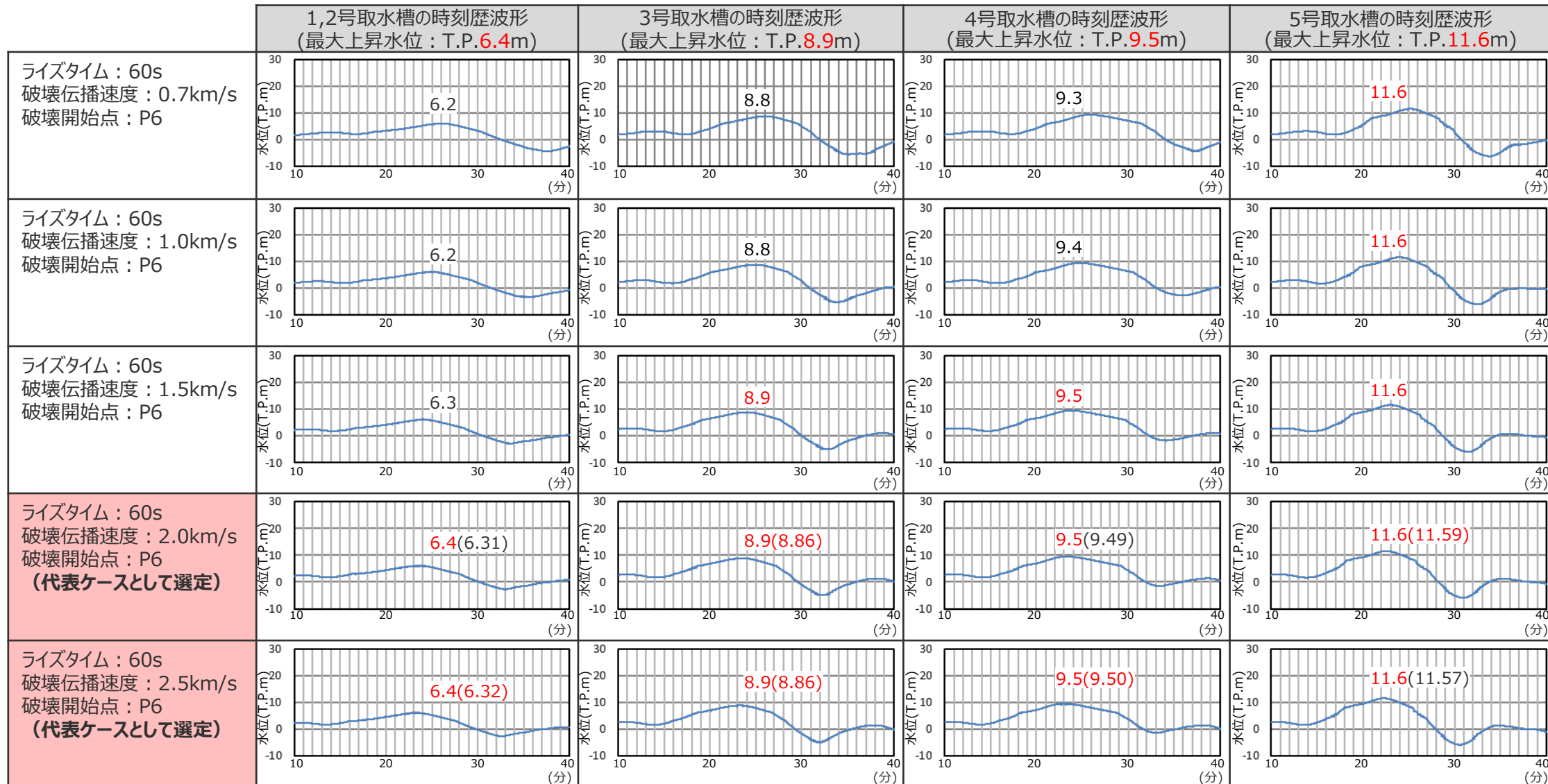
■ 基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディの結果、1~5号取水槽水位の最大値が同値となる複数のケースについて、これらの水位の時刻歴波形を比較した結果、代表ケースと異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはないことから、選定した代表ケースによって1~5号取水槽への津波影響を代表できると評価した。



各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

(補足) (水位上昇側：基準断層モデル3-1の時刻歴波形比較 (最大上昇水位周辺の拡大))

■ 前ページの時刻歴波形について、最大上昇水位の発生時刻周辺の30分間の波形を拡大して示す。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル3-2)

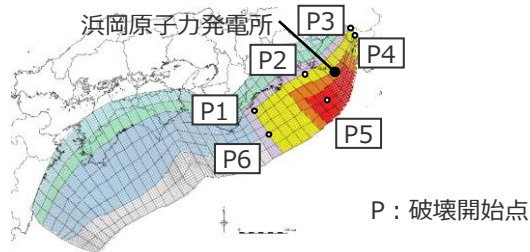
■ 基準断層モデル3-2の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル3-2：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ60km移動させたモデル
- ・津波評価においては保守的に小数第一位に繰り上げて評価する。

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.7	6.0	8.6	9.0	10.8
90	17.3	6.0	8.5	8.9	10.7
120	15.6	5.9	8.5	8.8	10.6
150	14.2	5.9	8.4	8.6	10.5
180	13.1	5.8	8.3	8.5	10.4
210	12.5	5.8	8.2	8.3	10.2
240	12.3	5.7	8.1	8.1	10.0
270	12.1	5.6	7.9	7.9	9.8
300	11.9	5.6	7.8	7.8	9.6

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	16.7	6.2	8.7	9.1	11.2
	P2	14.5	5.4	7.7	7.7	9.2
	P3	18.8	5.8	8.3	8.7	9.9
	P4	19.6	5.9	8.4	8.9	10.1
	P5	16.6	5.9	8.5	9.0	11.1
	P6	19.5	6.4	8.9	9.6	11.8
1.0	P1	17.9	6.2	8.8	9.3	11.4
	P2	16.3	5.7	8.1	8.3	10.0
	P3	19.1	5.9	8.5	9.0	10.4
	P4	19.8	5.9	8.6	9.1	10.5
	P5	17.4	6.0	8.7	9.2	11.3
	P6	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8
1.5	P1	18.7	6.3	8.9	9.4	11.5
	P2	17.5	5.9	8.4	8.8	10.6
	P3	20.0	6.0	8.7	9.2	10.8
	P4	20.3	6.0	8.7	9.3	10.9
	P5	18.5	6.2	8.8	9.4	11.4
	P6	20.0	6.4	9.0	9.6	11.7
2.0	P1	19.0	6.4	8.9	9.5	11.5
	P2	18.7	6.0	8.6	9.0	10.8
	P3	20.4	6.0	8.7	9.3	11.0
	P4	20.6	6.1	8.8	9.4	11.0
	P5	19.1	6.2	8.8	9.4	11.5
	P6	19.9	6.4	9.0	9.6	11.7
2.5	P1	19.5	6.4	8.9	9.5	11.5
	P2	19.4	6.0	8.7	9.1	11.0
	P3	20.6	6.1	8.8	9.4	11.1
	P4	20.8	6.2	8.8	9.4	11.1
	P5	19.5	6.3	8.8	9.5	11.5
	P6	19.8	6.4	9.0	9.6	11.7

着目する全ての評価地点における津波高の最大値を持つケースとして選定

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において最も影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

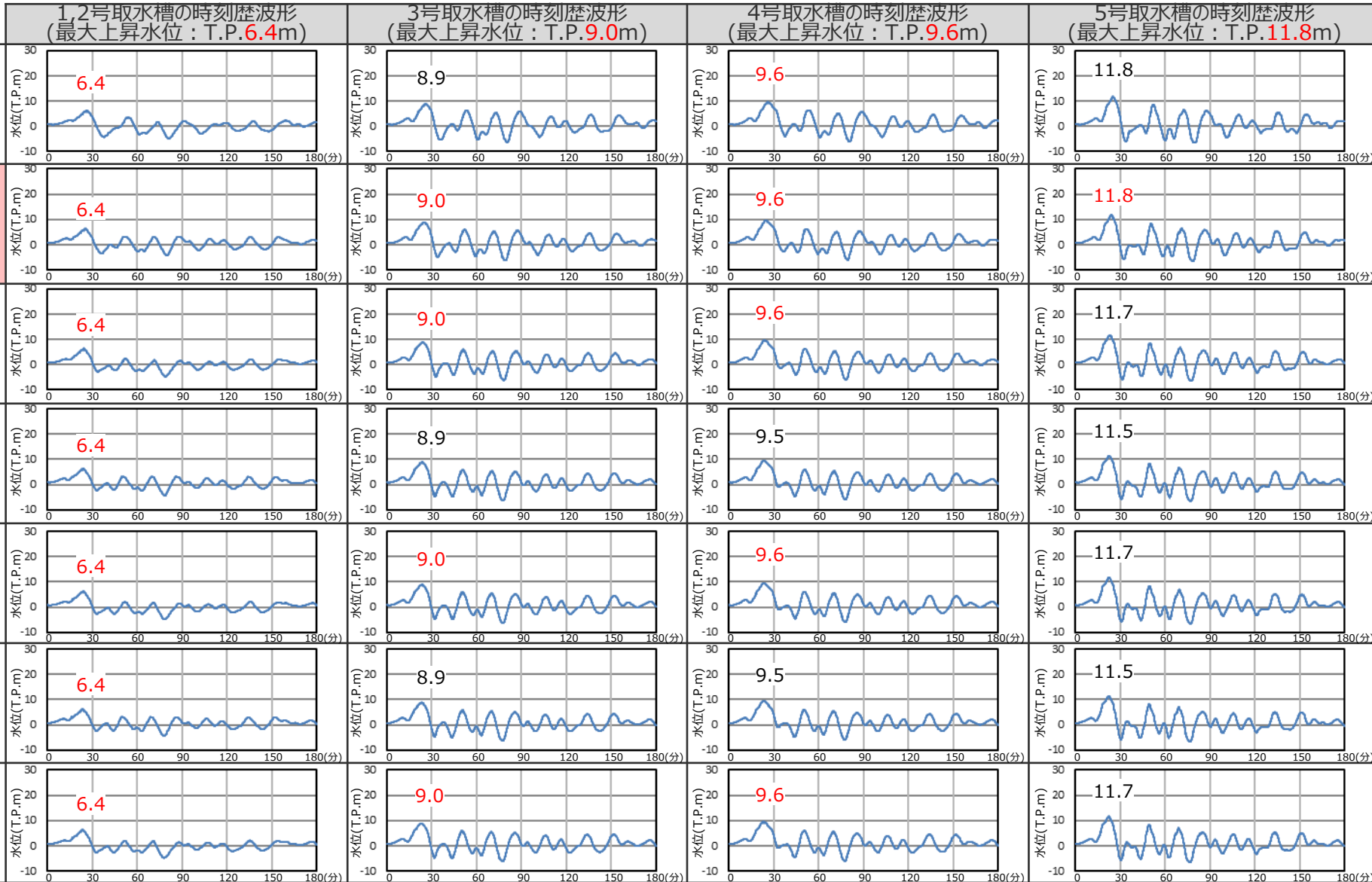
赤字：基準断層モデル3-2の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（1~5号取水槽）において津波高の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

・ライズタイム60sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値（表中赤字）を持つケースと、その波形を比較する（次ページ）

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル3-2の時刻歴波形比較)

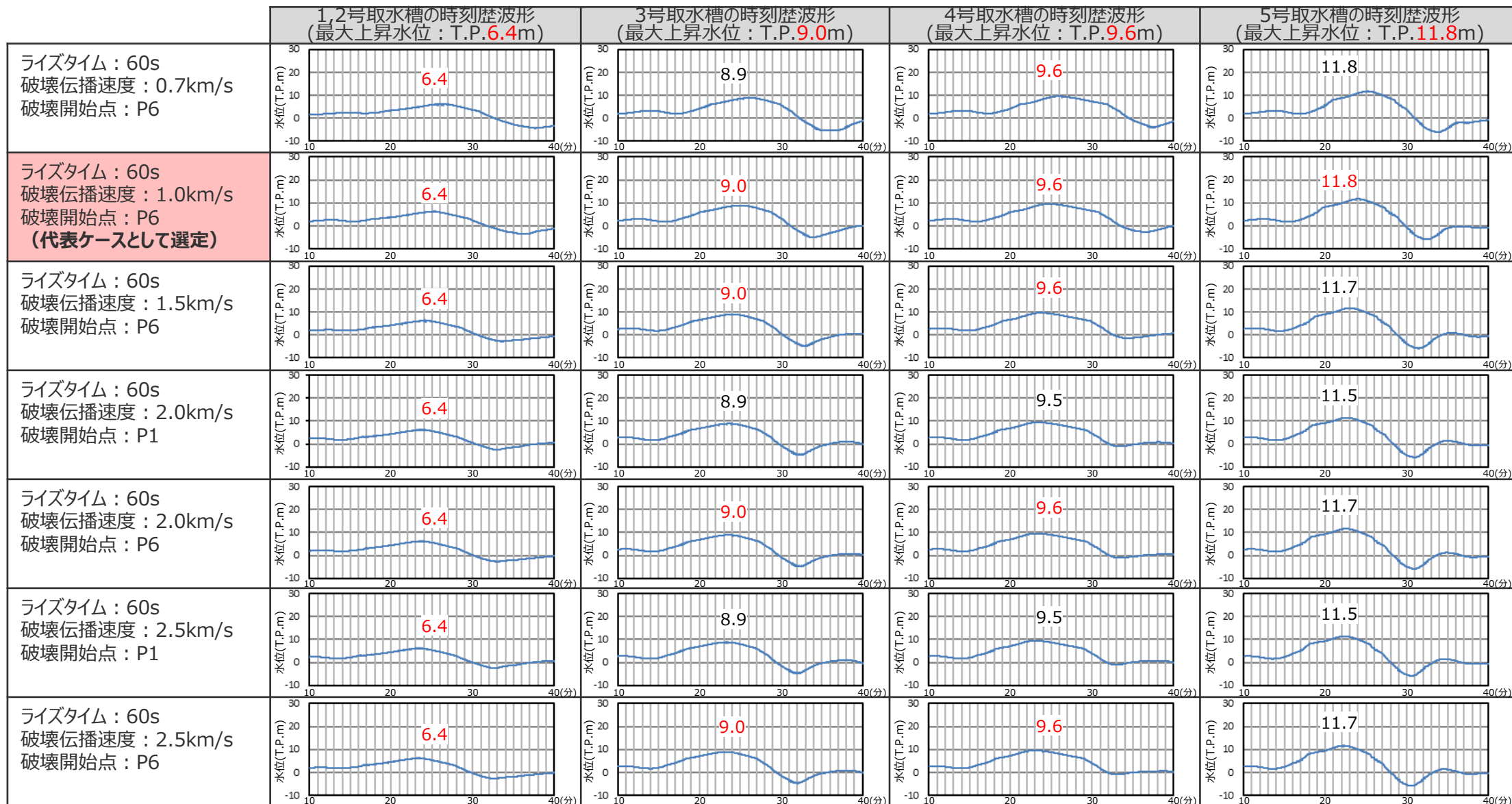
■ 基準断層モデル3-2の詳細パラメータスタディの結果、1~5号取水槽水位の最大値が同値となる複数のケースについて、これらの水位の時刻歴波形を比較した結果、代表ケースと異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはないことから、選定した代表ケースによって1~5号取水槽への津波影響を代表できると評価した。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

(補足) (水位上昇側：基準断層モデル3-2の時刻歴波形比較 (最大上昇水位周辺の拡大))

■ 前ページの時刻歴波形について、最大上昇水位の発生時刻周辺の30分間の波形を拡大して示す。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル3-3)

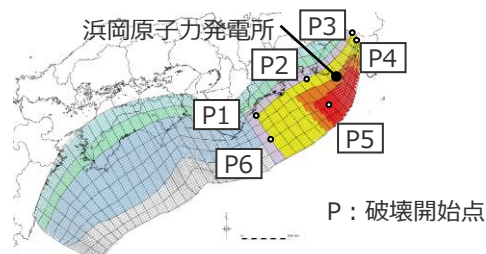
■ 基準断層モデル3-3の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル3-3：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ50km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	17.8	6.0	8.5	8.9	10.6
90	16.5	5.9	8.5	8.8	10.5
120	15.1	5.9	8.4	8.6	10.4
150	14.0	5.8	8.3	8.5	10.3
180	13.0	5.8	8.2	8.3	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.1	5.7	8.0	8.0	9.9
270	11.8	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.6	5.5	7.8	7.7	9.5

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	16.5	6.2	8.7	9.0	11.2
	P2	14.2	5.4	7.6	7.6	9.0
	P3	18.8	5.7	8.2	8.6	9.7
	P4	19.6	5.8	8.3	8.8	9.9
	P5	15.9	5.9	8.5	8.8	10.9
	P6	19.3	6.4(6.37)	8.9(8.88)	9.5(9.49)	11.7(11.70)
1.0	P1	17.2	6.2	8.8	9.2	11.3
	P2	16.0	5.7	8.1	8.2	9.7
	P3	19.2	5.9	8.4	8.9	10.2
	P4	19.7	5.9	8.5	9.0	10.3
	P5	16.8	6.0	8.6	9.1	11.1
	P6	19.0	6.4(6.39)	8.9(8.90)	9.5(9.50)	11.7(11.63)
1.5	P1	18.0	6.3	8.8	9.3	11.3
	P2	17.1	5.9	8.4	8.7	10.4
	P3	20.0	5.9	8.6	9.1	10.6
	P4	20.3	6.0	8.6	9.2	10.7
	P5	17.9	6.1	8.7	9.2	11.2
	P6	19.1	6.4	8.9	9.5	11.6
2.0	P1	18.6	6.3	8.9	9.4	11.3
	P2	17.8	6.0	8.5	8.9	10.6
	P3	20.4	6.0	8.7	9.2	10.8
	P4	20.6	6.0	8.7	9.2	10.9
	P5	18.6	6.2	8.8	9.3	11.3
	P6	19.1	6.4	8.9	9.5	11.5
2.5	P1	19.0	6.3	8.9	9.4	11.3
	P2	18.5	6.0	8.6	9.0	10.8
	P3	20.5	6.0	8.7	9.2	10.9
	P4	20.8	6.0	8.7	9.3	11.0
	P5	18.9	6.2	8.8	9.3	11.3
	P6	19.4	6.4	8.9	9.5	11.5

・ライズタイム60sとして検討

小数第1位までの津波高から、着目する全ての評価地点において津波高の最大値(表中赤字)を持つケースが2ケース存在
→小数第2位を確認

着目する全ての評価地点における津波高の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値(表中赤字)を持つケースと、その波形を比較する(次ページ)

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点(1~5号取水槽)における最大値

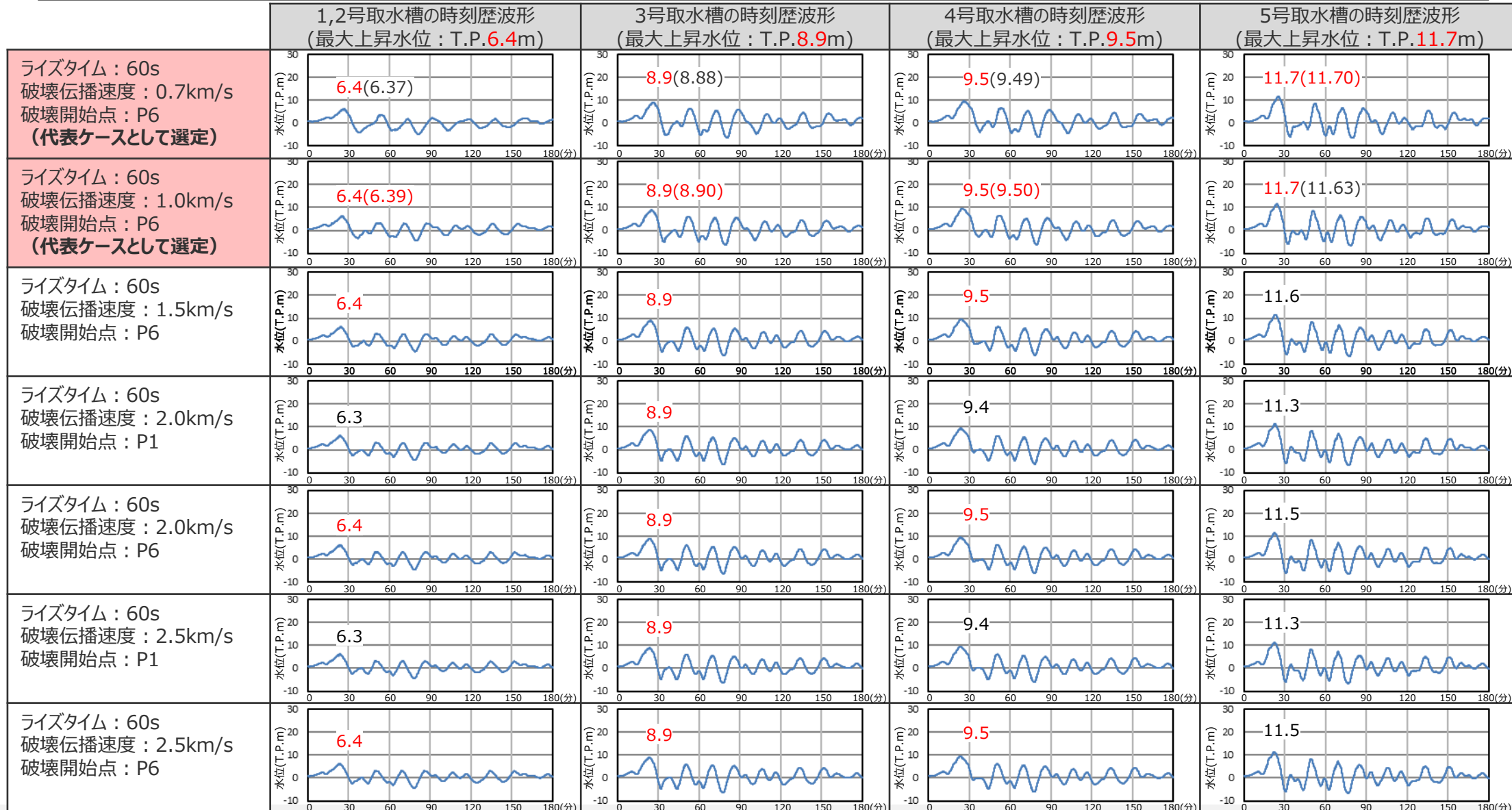
点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において最も影響の大きいケース(破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる)

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点(1~5号取水槽)における最大値

赤枠：基準断層モデル3-3の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点(1~5号取水槽)における津波高の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル3-3の時刻歴波形比較)

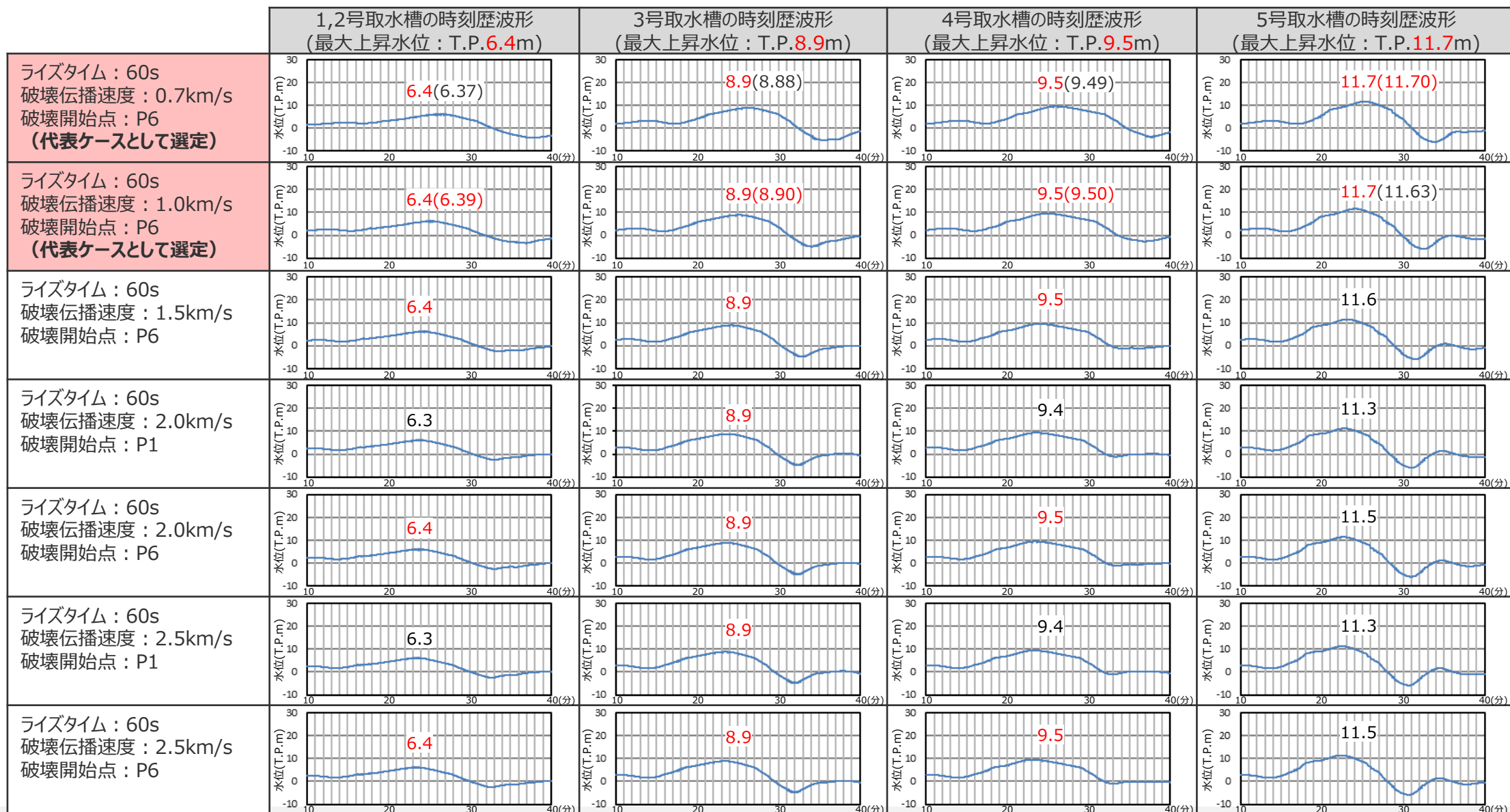
■ 基準断層モデル3-3の詳細パラメータスタディの結果、1~5号取水槽水位の最大値が同値となる複数のケースについて、これらの水位の時刻歴波形を比較した結果、代表ケースと異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはないことから、選定した代表ケースによって1~5号取水槽への津波影響を代表できると評価した。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

(補足) (水位上昇側：基準断層モデル3-3の時刻歴波形比較 (最大上昇水位周辺の拡大))

■ 前ページの時刻歴波形について、最大上昇水位の発生時刻周辺の30分間の波形を拡大して示す。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル4-1) 1/3

■ 基準断層モデル4-1の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル4-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が2箇所のケース）の敷地に近い大すべり域を基準位置、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

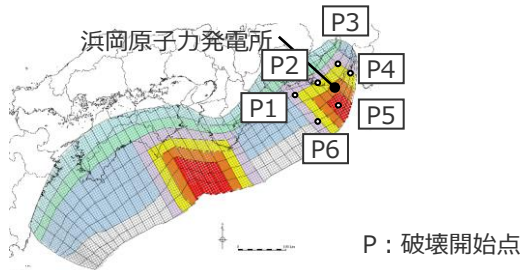
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.3	12.2
90	12.2	12.1
120	12.2	12.0
150	12.1	11.9
180	12.0	11.8
210	11.8	11.7
240	11.7	11.5
270	11.4	11.3
300	11.2	11.1

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	12.2	12.1
	P2	9.8	9.8
	P3	9.1	9.0
	P4	8.8	8.7
	P5	9.4	9.3
	P6	9.9	10.0
1.0	P1	12.3	12.2
	P2	11.3	11.2
	P3	10.6	10.5
	P4	9.5	9.5
	P5	10.0	9.9
	P6	11.7	11.6
1.5	P1	12.5(12.42)	12.4(12.32)
	P2	12.0	11.8
	P3	11.6	11.5
	P4	11.3	11.2
	P5	11.6	11.4
	P6	12.0	11.9
2.0	P1	12.5(12.45)	12.4(12.31)
	P2	12.3	12.2
	P3	12.0	11.8
	P4	11.8	11.7
	P5	11.9	11.8
	P6	12.2	12.1
2.5	P1	12.5(12.45)	12.4(12.32)
	P2	12.4	12.2
	P3	12.2	12.1
	P4	12.1	11.9
	P5	12.1	12.0
	P6	12.3	12.1

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



小数第1位までの水位低下時間から、着目する全ての評価地点において水位低下時間の最大値(表中赤字)を持つケースが4ケース存在(別ページ)
→小数第2位を確認

・ライズタイム60sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値(表中赤字)を持つケースと、その波形を比較する

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

青：基準断層モデル4-1の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（3,4号取水塔）における水位低下時間の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル4-1) 2/3

■ 基準断層モデル4-1の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

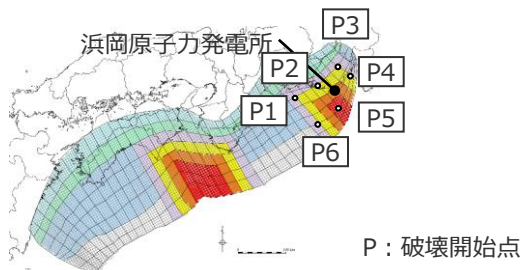
- ・基準断層モデル4-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が2箇所の場合）の敷地に近い大すべり域を基準位置、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.3	12.2
90	12.2	12.1
120	12.2	12.0
150	12.1	11.9
180	12.0	11.8
210	11.8	11.7
240	11.7	11.5
270	11.4	11.3
300	11.2	11.1

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	12.2	12.1
	P2	9.8	9.7
	P3	9.1	9.0
	P4	8.7	8.7
	P5	9.4	9.4
	P6	10.2	10.1
1.0	P1	12.3	12.2
	P2	11.4	11.2
	P3	10.6	10.5
	P4	9.5	9.5
	P5	10.1	10.0
	P6	11.7	11.5
1.5	P1	12.4	12.3
	P2	12.0	11.8
	P3	11.6	11.4
	P4	11.3	11.2
	P5	11.5	11.4
	P6	12.0	11.9
2.0	P1	12.5	12.3
	P2	12.2	12.1
	P3	12.0	11.8
	P4	11.8	11.6
	P5	11.9	11.7
	P6	12.2	12.1
2.5	P1	12.5(12.47)	12.4(12.32)
	P2	12.3	12.2
	P3	12.1	12.0
	P4	12.0	11.9
	P5	12.1	12.0
	P6	12.3	12.1

小数第1位までの水位低下時間から、着目する全ての評価地点において水位低下時間の最大値(表中赤字)を持つケースが4ケース存在(別ページ)
→小数第2位を確認

着目する全ての評価地点における水位低下時間の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定

・ライズタイム90sとして検討

選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値(表中赤字)を持つケースと、その波形を比較する

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

青字：基準断層モデル4-1の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（3,4号取水塔）における水位低下時間の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位下降側：基準断層モデル4-1) 3/3

■ 基準断層モデル4-1の詳細パラメータスタディを実施し、3,4号取水塔の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

- ・基準断層モデル4-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が2箇所のケース）の敷地に近い大すべり域を基準位置、東西の大すべり域間を140kmとしたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

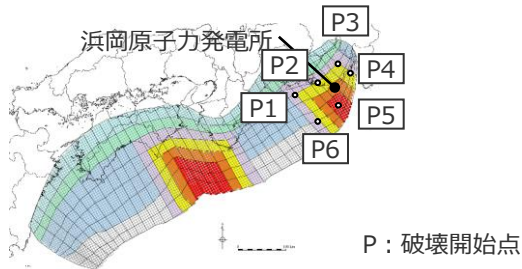
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.3	12.2
90	12.2	12.1
120	12.2	12.0
150	12.1	11.9
180	12.0	11.8
210	11.8	11.7
240	11.7	11.5
270	11.4	11.3
300	11.2	11.1

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	水位低下時間(min)	
		3号取水塔	4号取水塔
0.7	P1	12.2	12.1
	P2	9.7	9.7
	P3	9.0	9.0
	P4	8.6	8.6
	P5	9.4	9.4
	P6	10.4	10.3
1.0	P1	12.3	12.2
	P2	11.4	11.2
	P3	10.6	10.5
	P4	9.6	9.5
	P5	10.1	10.1
	P6	11.7	11.6
1.5	P1	12.4	12.2
	P2	12.0	11.8
	P3	11.6	11.4
	P4	11.3	11.2
	P5	11.6	11.5
	P6	12.0	11.9
2.0	P1	12.4	12.3
	P2	12.2	12.0
	P3	11.9	11.8
	P4	11.7	11.6
	P5	11.9	11.7
	P6	12.2	12.0
2.5	P1	12.5	12.3
	P2	12.3	12.1
	P3	12.1	11.9
	P4	12.0	11.8
	P5	12.0	11.9
	P6	12.3	12.1

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（3,4号取水塔）における最大値

・ライズタイム120sとして検討

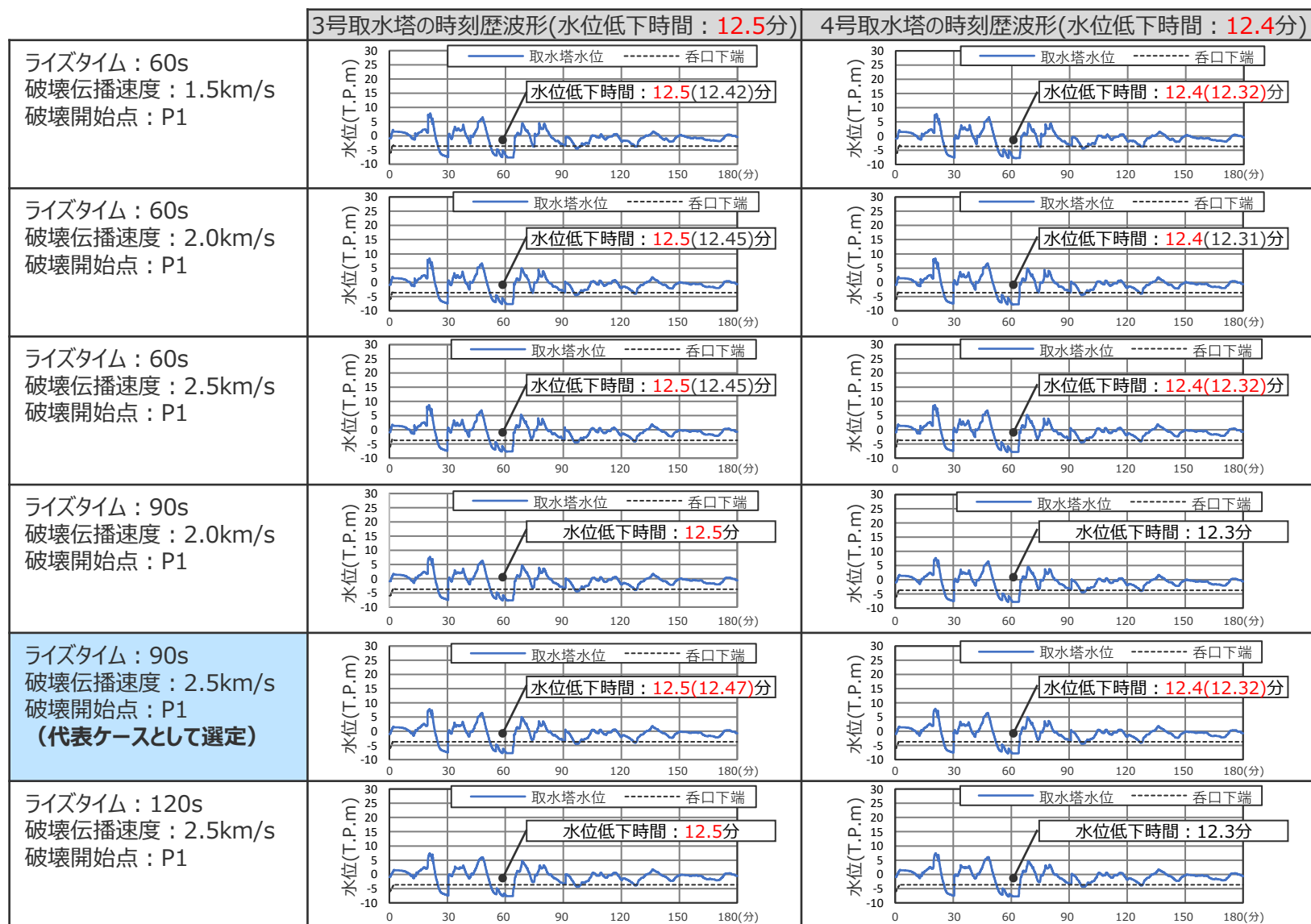
選定した代表ケースについて、着目する評価地点における最大値（表中赤字）を持つケースと、その波形を比較する（次ページ）

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

(基準断層モデル4-1の水位の時刻歴波形)

■ 基準断層モデル4-1の詳細パラメータスタディの結果、各評価地点の中で最大ケースが複数あるものについて、これらの水位の時刻歴波形を比較した結果、代表ケースと異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはないことから、選定した代表ケースによって3,4号取水塔への津波影響を代表できると評価した。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

(補足) (基準断層モデル4-1の水位の時刻歴波形 (最大水位低下時間周辺の拡大))

■ 前ページの時刻歴波形について、最大水位低下時間の発生時刻周辺の30分間の波形を拡大して示す。

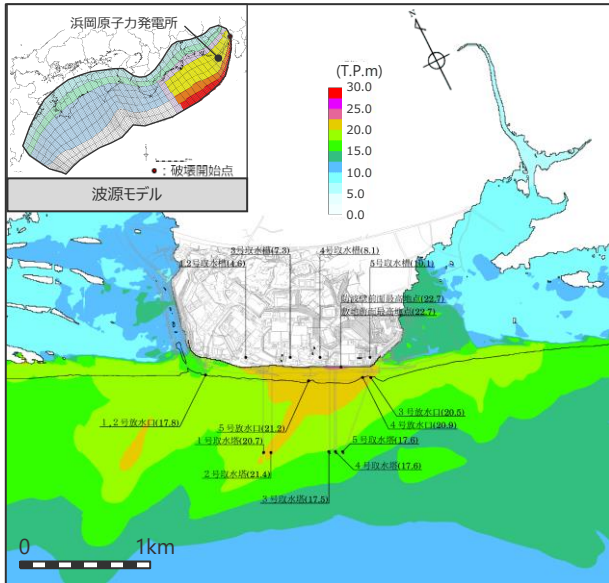
	3号取水塔の時刻歴波形(水位低下時間：12.5分)	4号取水塔の時刻歴波形(水位低下時間：12.4分)
ライズタイム：60s 破壊伝播速度：1.5km/s 破壊開始点：P1		
ライズタイム：60s 破壊伝播速度：2.0km/s 破壊開始点：P1		
ライズタイム：60s 破壊伝播速度：2.5km/s 破壊開始点：P1		
ライズタイム：90s 破壊伝播速度：2.0km/s 破壊開始点：P1		
ライズタイム：90s 破壊伝播速度：2.5km/s 破壊開始点：P1 (代表ケースとして選定)		
ライズタイム：120s 破壊伝播速度：2.5km/s 破壊開始点：P1		

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 詳細パラメータスタディ結果 (選定ケース) (水位上昇側 : 基準断層モデル1-1,1-2,1-3)

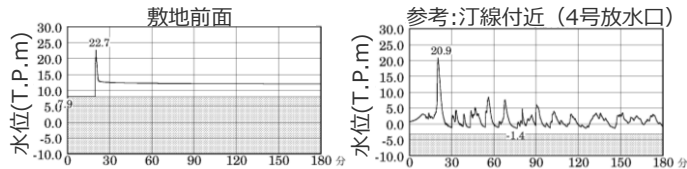
基準断層モデル1-1 : 検討波源モデルA 東海地域の大すべり域 : 1箇所
(大すべり域の位置 : 東へ40km移動)

ライブタイム60s

破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

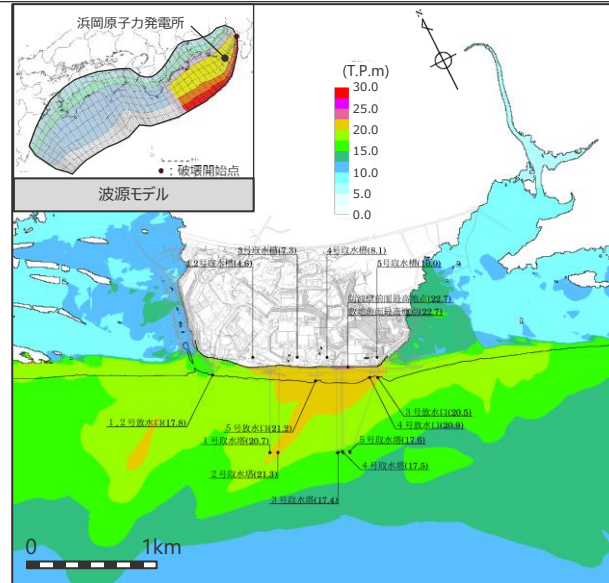
最大上昇水位(T.P.m)

敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
22.7	4.6	7.3	8.1	10.1

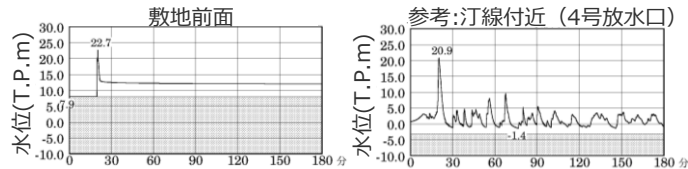
基準断層モデル1-2 : 検討波源モデルA 東海地域の大すべり域 : 1箇所
(大すべり域の位置 : 東へ30km移動)

ライブタイム60s

破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

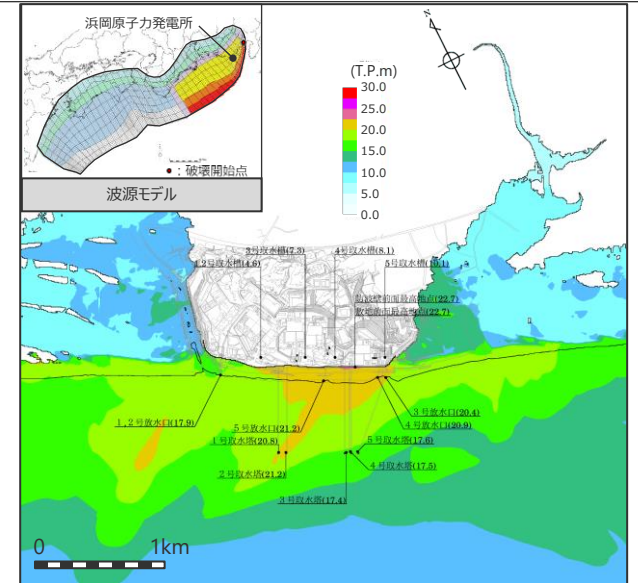
最大上昇水位(T.P.m)

敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
22.7	4.6	7.3	8.1	10.0

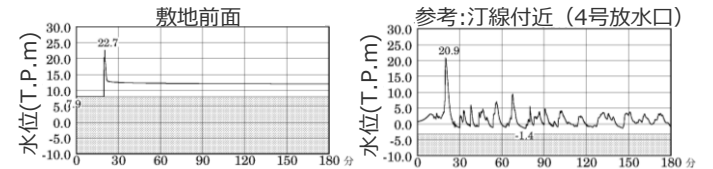
基準断層モデル1-3 : 検討波源モデルA 東海地域の大すべり域 : 1箇所
(大すべり域の位置 : 東へ20km移動)

ライブタイム60s

破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

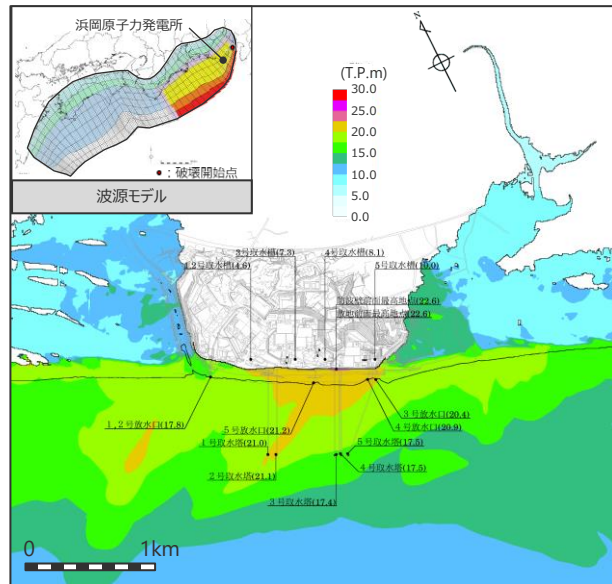
最大上昇水位(T.P.m)

敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
22.7	4.6	7.3	8.1	10.1

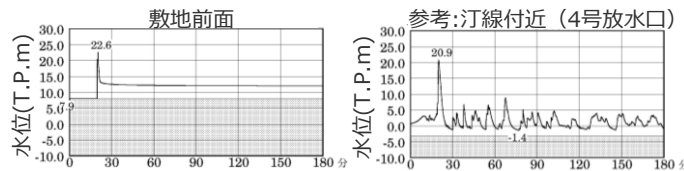
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 詳細パラメータスタディ結果 (選定ケース) (水位上昇側：基準断層モデル1-4,1-5)

基準断層モデル1-4：検討波源モデルA 東海地域の大すべり域：1箇所
(大すべり域の位置：東へ10km移動)

ライブタイム60s
破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

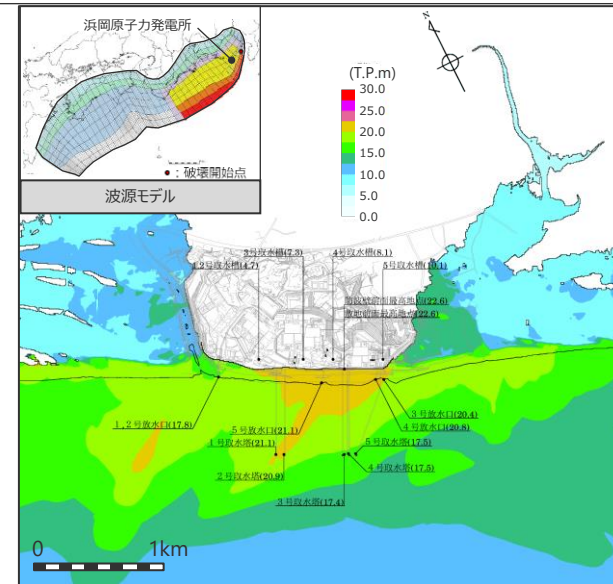
- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

最大上昇水位(T.P.m)

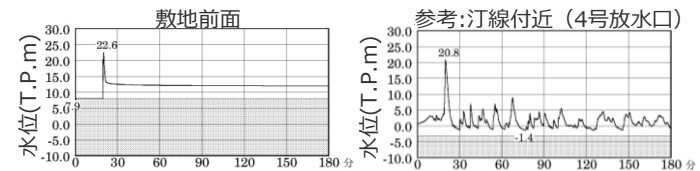
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
22.6	4.6	7.3	8.1	10.0

基準断層モデル1-5：検討波源モデルA 東海地域の大すべり域：1箇所
(大すべり域の位置：基準位置)

ライブタイム60s
破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

最大上昇水位(T.P.m)

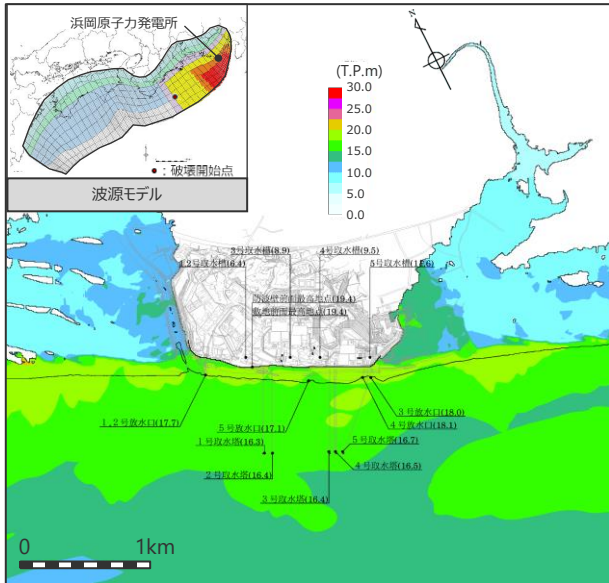
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
22.6	4.6	7.3	8.1	10.1

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 詳細パラメータスタディ結果 (選定ケース) (水位上昇側 : 基準断層モデル3-1,3-2)

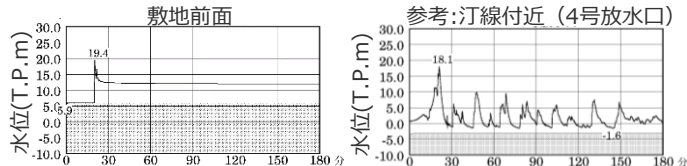
基準断層モデル3-1 : 検討波源モデルD 東海地域の大小すべり域 : 1箇所
(大小すべり域の位置 : 東へ70km移動)

ライブタイム60s

破壊伝播速度2.0km/s, 破壊開始点P6



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

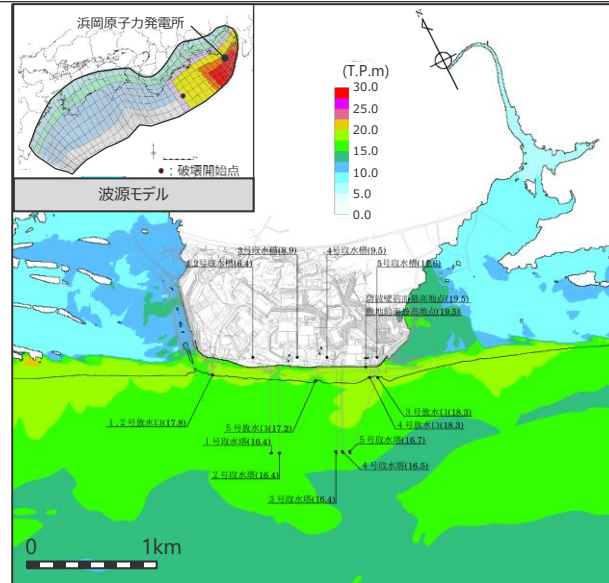
- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.4	6.4	8.9	9.5	11.6

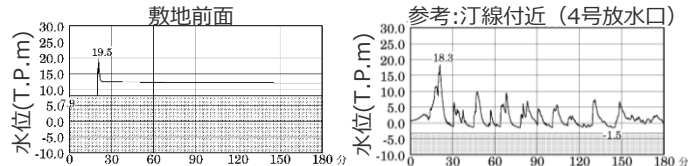
基準断層モデル3-1 : 検討波源モデルD 東海地域の大小すべり域 : 1箇所
(大小すべり域の位置 : 東へ70km移動)

ライブタイム60s

破壊伝播速度2.5km/s, 破壊開始点P6



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

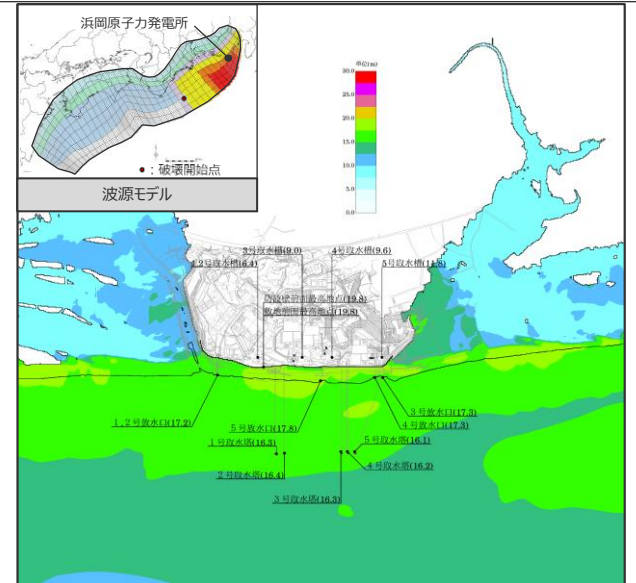
- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.5	6.4	8.9	9.5	11.6

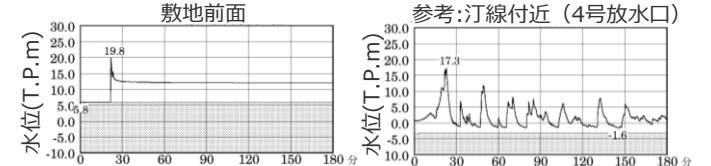
基準断層モデル3-2 : 検討波源モデルD 東海地域の大小すべり域 : 1箇所
(大小すべり域の位置 : 東へ60km移動)

ライブタイム60s

破壊伝播速度1.0km/s, 破壊開始点P6



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設置して解析を実施

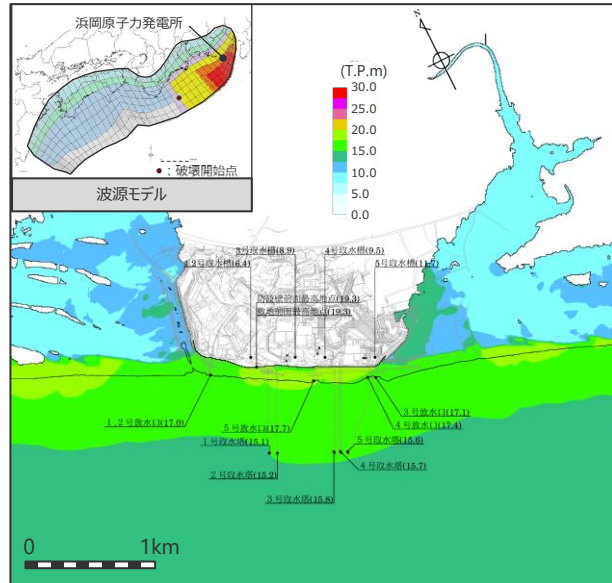
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.8	6.4	9.0	9.6	11.8

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 詳細パラメータスタディ結果 (選定ケース) (水位上昇側：基準断層モデル3-3)

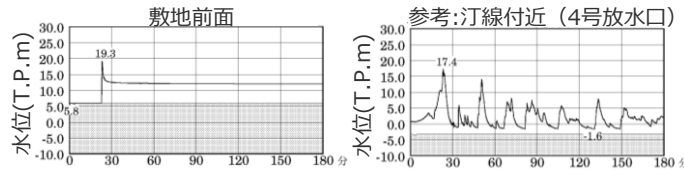
基準断層モデル3-3：検討波源モデルD 東海地域の大すべり域：1箇所
(大すべり域の位置：東へ50km移動)

ライブタイム60s

破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

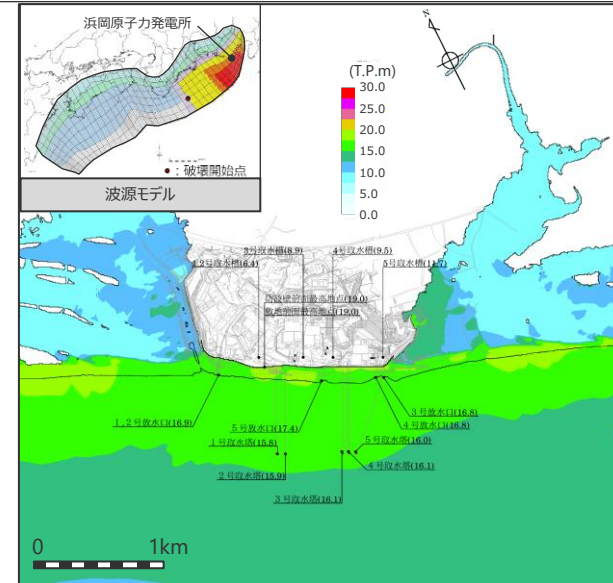
最大上昇水位(T.P.m)

敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.3	6.4	8.9	9.5	11.7

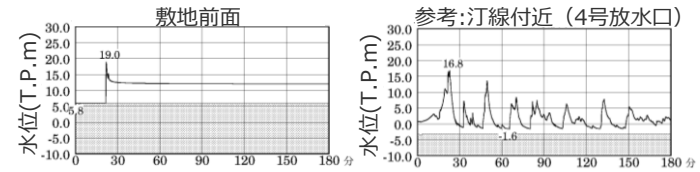
基準断層モデル3-3：検討波源モデルD 東海地域の大すべり域：1箇所
(大すべり域の位置：東へ50km移動)

ライブタイム60s

破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・防波壁の高さを無限大として解析を実施

最大上昇水位(T.P.m)

敷地 前面	1・2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽
19.0	6.4	8.9	9.5	11.7

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 詳細パラメータスタディ結果 (選定ケース) (水位下降側：基準断層モデル2-1,2-2,2-3)

基準断層モデル2-1：検討波源モデルA 東海地域の大すべり域：2箇所
(敷地に近い大すべり域：東へ40km移動、東西の大すべり域間：130km)

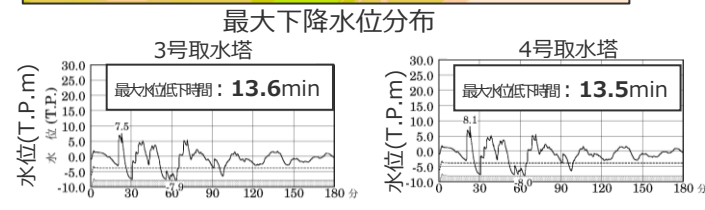
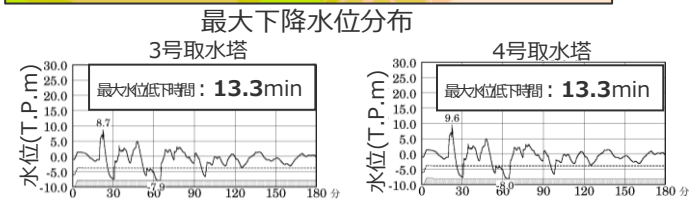
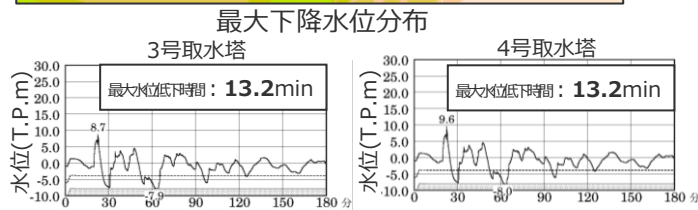
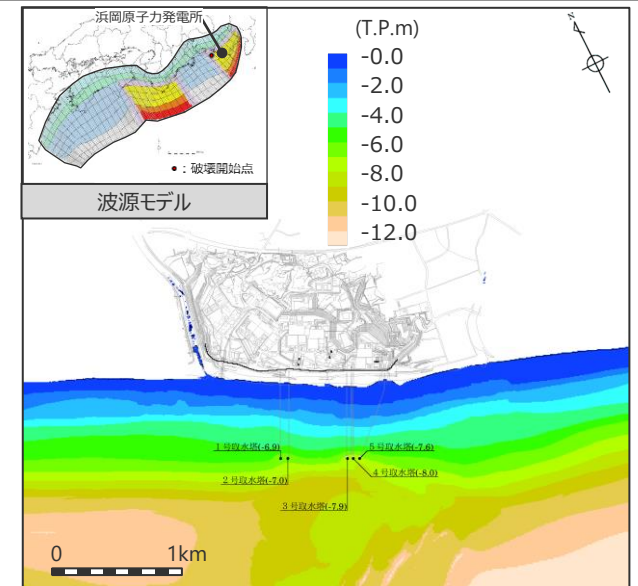
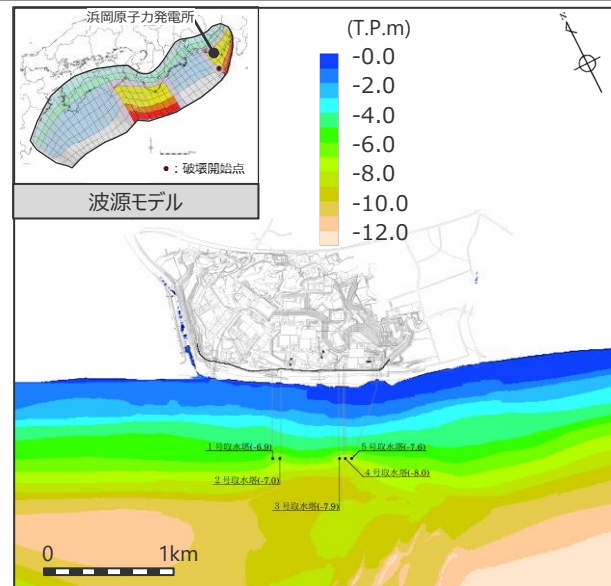
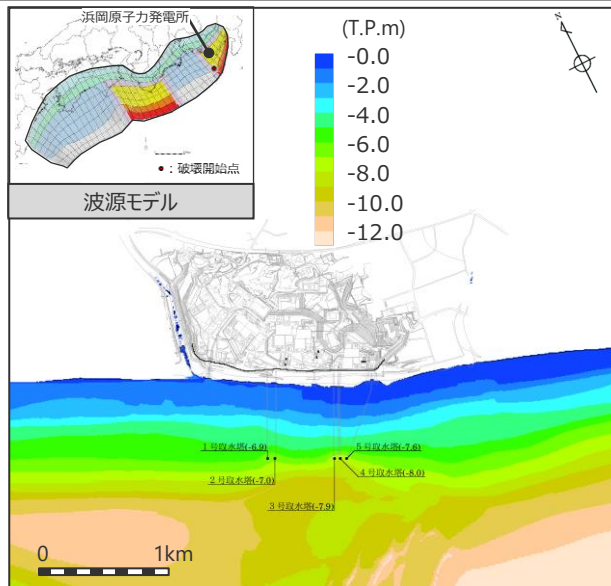
基準断層モデル2-2：検討波源モデルA 東海地域の大すべり域：2箇所
(敷地に近い大すべり域：東へ40km移動、東西の大すべり域間：140km)

基準断層モデル2-3：検討波源モデルA 東海地域の大すべり域：2箇所
(敷地に近い大すべり域：東へ30km移動、東西の大すべり域間：120km)

ライズタイム120s
破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6

ライズタイム120s
破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6

ライズタイム90s
破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P1



・網掛け部の上端は当該地点の標高
・点線は取水塔呑口 下端レベル

・網掛け部の上端は当該地点の標高
・点線は取水塔呑口 下端レベル

・網掛け部の上端は当該地点の標高
・点線は取水塔呑口 下端レベル

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面	海底面
(13.2min)	(13.2min)

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面	海底面
(13.3min)	(13.3min)

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面	海底面
(13.6min)	(13.5min)

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮
・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している
(水深1m未満である)ことを示す。

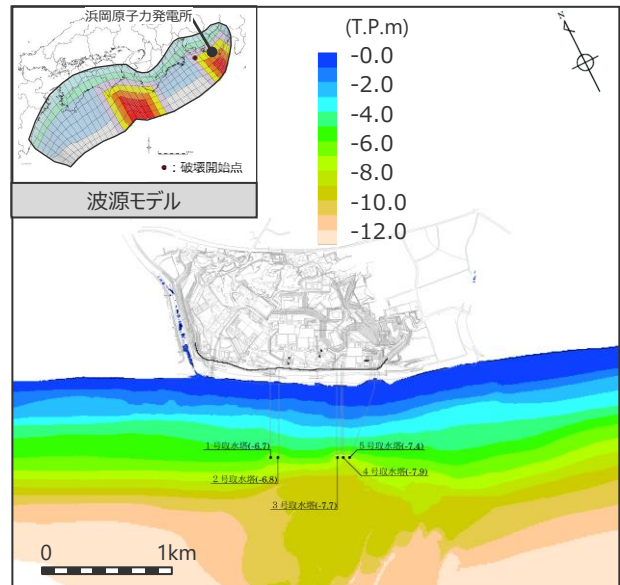
・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮
・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している
(水深1m未満である)ことを示す。

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮
・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している
(水深1m未満である)ことを示す。

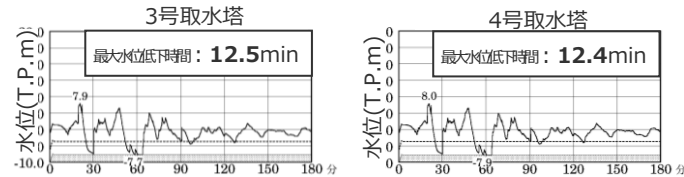
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 詳細パラメータスタディ結果 (選定ケース) (水位下降側 : 基準断層モデル4-1)

基準断層モデル4-1 : 検討波源モデルD 東海地域の大きすべり域 : 2箇所
(敷地に近い大きすべり域 : 基準位置、東西の大きすべり域間 : 140km)

ライブタイム90
破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P1



最大下降水位分布

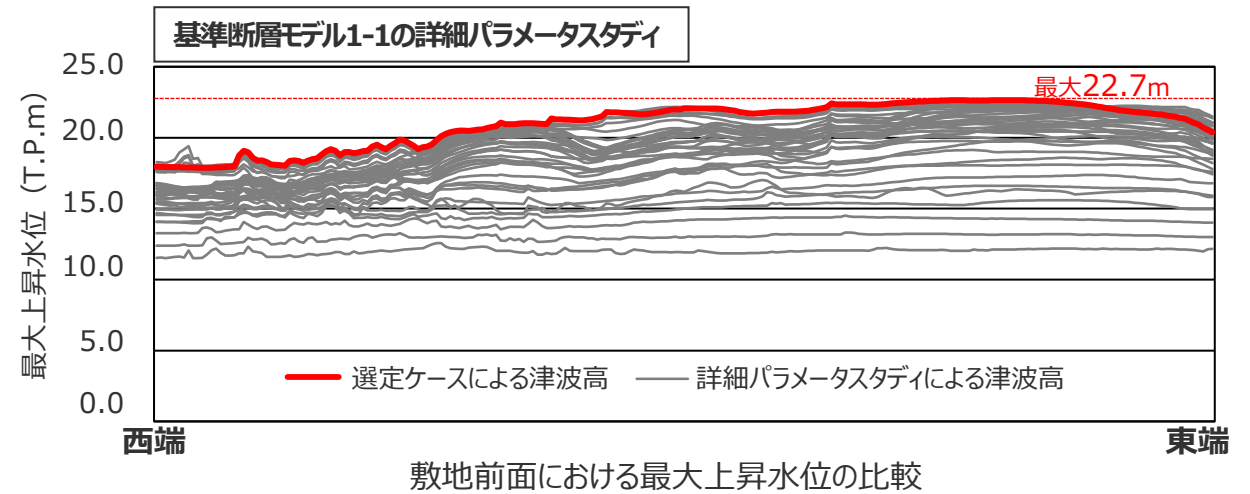


水位の時刻歴波形
・網掛け部の上端は当該地点の標高
・点線は取水塔呑口 下端レベル

最大下降水位(T.P. m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (12.5min)	海底面 (12.4min)

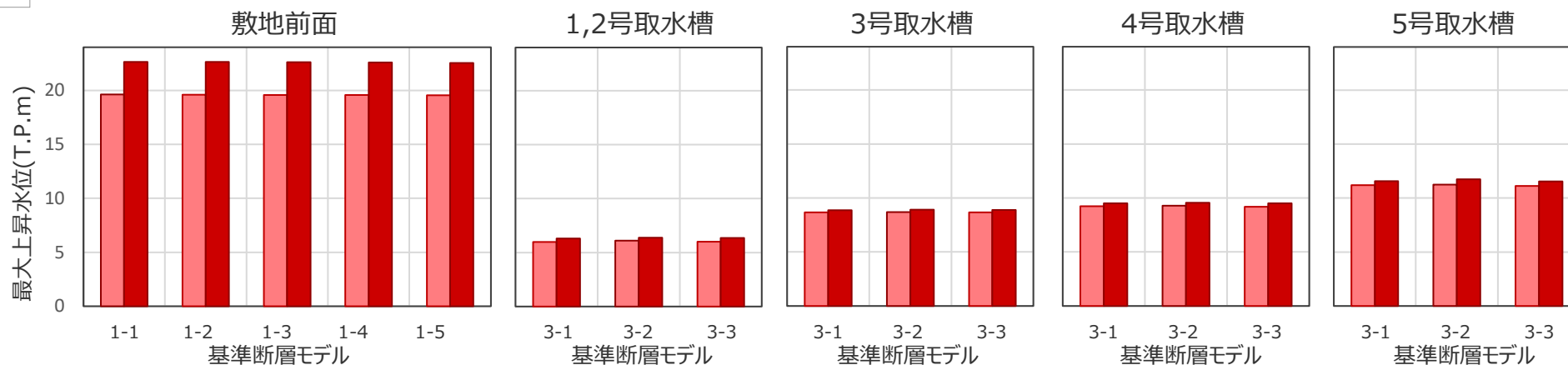
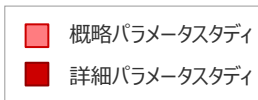
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮
- ・海底面 : 最大下降水位時に海底面がほぼ露出している (水深1m未満である) ことを示す。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 詳細パラメータスタディ結果 (敷地前面における最大上昇水位の比較)



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 概略・詳細パラメータスタディ結果の分析 (水位上昇側)

- 概略パラメータスタディ（同時破壊）による津波評価結果と、詳細パラメータスタディ（破壊伝播を考慮）による津波評価結果を比較した結果は以下のとおり。
- 選定したいずれの基準断層モデルでも、詳細パラメータスタディによる水位の増分が同程度で違いが見られないことを確認することにより、概略パラメータスタディの段階で選定した基準断層モデルが適切であることを確認した。



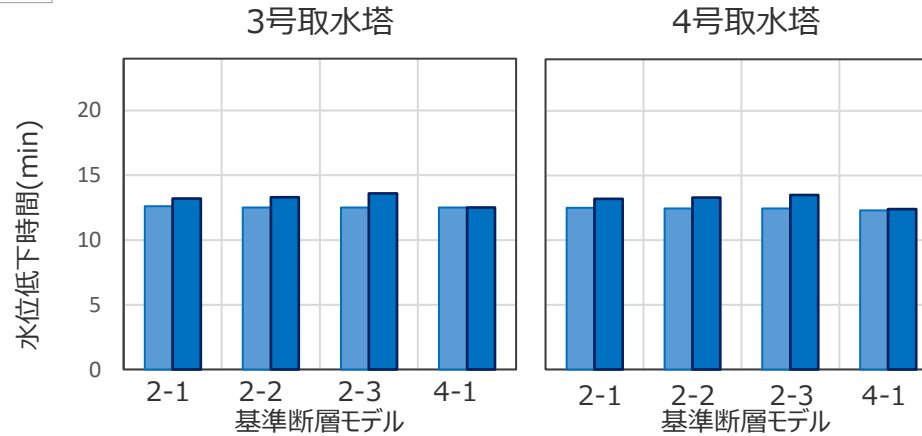
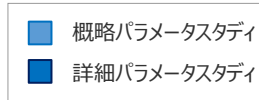
モデル名	最大上昇水位(T.P.m)					最大上昇水位(T.P.m)			最大上昇水位(T.P.m)			最大上昇水位(T.P.m)			最大上昇水位(T.P.m)		
	基準断層モデル 1-1	基準断層モデル 1-2	基準断層モデル 1-3	基準断層モデル 1-4	基準断層モデル 1-5	基準断層モデル 3-1	基準断層モデル 3-2	基準断層モデル 3-3	基準断層モデル 3-1	基準断層モデル 3-2	基準断層モデル 3-3	基準断層モデル 3-1	基準断層モデル 3-2	基準断層モデル 3-3	基準断層モデル 3-1	基準断層モデル 3-2	基準断層モデル 3-3
概略パラメータスタディ (同時破壊の条件で検討)	19.7 (19.62)	19.7 (19.61)	19.6	19.6	19.6	6.0	6.2	6.1	8.7 (8.67)	8.7 (8.70)	8.7 (8.66)	9.3 (9.24)	9.3 (9.30)	9.2	11.2	11.3	11.2
詳細パラメータスタディ (動的パラメータを考慮した条件で検討)	22.7 (22.65)	22.7 (22.64)	22.7 (22.61)	22.6	22.6	6.4 (6.32)	6.4 (6.39)	6.4 (6.39)	8.9	9.0	8.9	9.5	9.6	9.5	11.6	11.8	11.7

・太字：モデルごとに着目した評価地点において津波影響を代表するケース
(津波評価では小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価することを踏まえて、代表ケースを選定)
・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

概略パラメータスタディによる津波評価結果と詳細パラメータスタディによる津波評価結果の比較

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 概略・詳細パラメータスタディ結果の分析 (水位下降側)

- 概略パラメータスタディ（同時破壊）による津波評価結果と、詳細パラメータスタディ（破壊伝播を考慮）による津波評価結果を比較した結果は以下のとおり。
- 選定したいずれの基準断層モデルでも、詳細パラメータスタディによる水位低下時間の増分が同程度で違いが見られないことを確認することにより、概略パラメータスタディの段階で選定した基準断層モデルが適切であることを確認した。



モデル名	水位低下時間(min)				水位低下時間(min)			
	基準断層モデル 2-1	基準断層モデル 2-2	基準断層モデル 2-3	基準断層モデル 4-1	基準断層モデル 2-1	基準断層モデル 2-2	基準断層モデル 2-3	基準断層モデル 4-1
概略パラメータスタディ (同時破壊の条件で検討)	12.6 (12.52)	12.5 (12.45)	12.5 (12.49)	12.5	12.5 (12.50)	12.5 (12.45)	12.5 (12.47)	12.3
詳細パラメータスタディ (動的パラメータを考慮した条件で検討)	13.2	13.3	13.6	12.5	13.2	13.3	13.5	12.4

- ・太字：モデルごとに着目した評価地点において津波影響を代表するケース
(津波評価では小数点第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価することを踏まえて、代表ケースを選定)
- ・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮

概略パラメータスタディによる津波評価結果と詳細パラメータスタディによる津波評価結果の比較

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (検討方針)

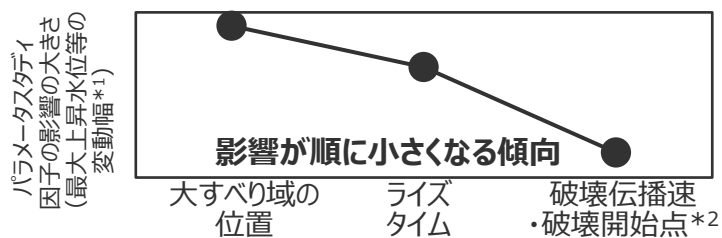
- 概略・詳細パラメータスタディ結果について、パラメータスタディ因子の影響分析を行い、各パラメータスタディ因子が津波評価に与える影響がパラメータスタディを実施した順（大すべり域の位置、ライズタイム、破壊伝播速度・破壊開始点の順）に小さくなる傾向を確認することにより、パラメータスタディの順序などの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認する。
- また、上記分析の結果、パラメータスタディ因子の影響が同程度で違いが小さい場合には、それらのパラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わる可能性もあることを考慮し、当該因子の組合せのパラメータスタディによる検討（組合せ検討）を実施したうえで、組合せ検討の結果に基づいて津波高等の最大ケースが押さえられていることを確認することにより、パラメータスタディの実施方法の妥当性を確認する。

○パラメータスタディ因子の影響分析のフロー

➤ パラメータスタディ因子の影響分析

評価地点（水位上昇側：敷地前面、1～5号取水槽、水位下降側：3,4号取水塔）ごとに、当該地点への影響が大きい基準断層モデルのパラメータスタディ結果に基づいて、各パラメータスタディ因子が津波評価に与える影響の大きさ（最大上昇水位等の変動幅）を分析する。

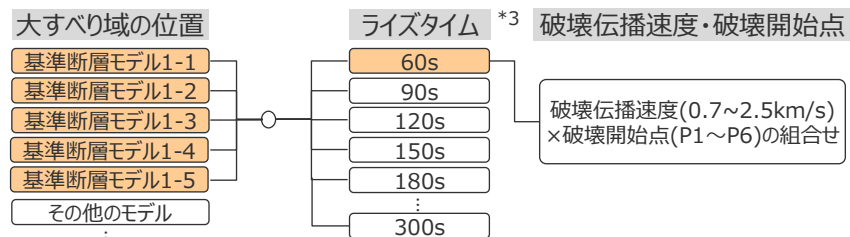
➤ パラメータスタディ因子の影響が順に小さくなる傾向を確認した場合



- ・より影響が大きい因子から順にパラメータスタディが行われている。
- ➔パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。(組合せ検討は実施しない。)

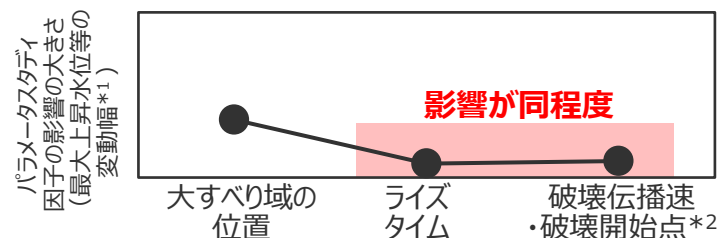
＜パラメータスタディの実施方法＞

基本的な検討での選定ケース



影響が大きい複数ケースを選定 最も影響の大きいケースを選定 最も影響の大きいケースを選定

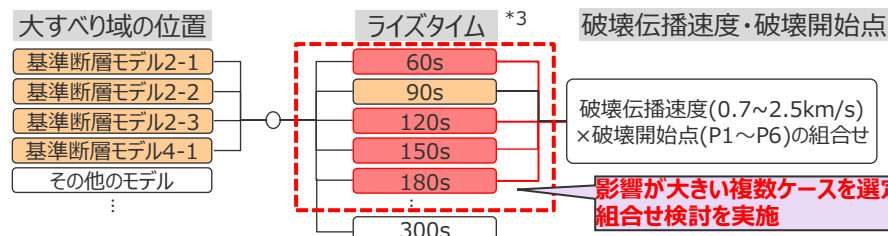
➤ パラメータスタディ因子の影響が同程度であることを確認した場合



- ・パラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わる可能性もあることを考慮し、当該因子の組合せのパラメータスタディによる検討（組合せ検討）を実施し、組合せ検討の結果に基づいて津波高等の最大ケースが押さえられていることを確認。
- ➔パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。

＜パラメータスタディの実施方法＞

基本的な検討での選定ケース
組合せ検討での選定ケース



影響が大きい複数ケースを選定 影響が大きい複数ケースを選定 最も影響の大きいケースを選定

*1 パラメータスタディ結果に基づく (最大値-最小値)/2 *2 破壊伝播速度と破壊開始点の変動幅のうち、値が大きい破壊開始点の変動幅を記載。

*3 組合せ検討での選定ケースは、基準断層モデルにより異なるため、この図では敷地への影響が最も大きい基準断層モデルの場合のものを記載。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (検討結果)

■パラメータスタディ因子の影響分析とパラメータスタディの妥当性確認の結果は以下のとおり。

評価地点		当該地点への影響が大きい基準断層モデル	パラメータスタディ因子の影響分析	パラメータスタディの妥当性確認
水位 上昇側	敷地 前面	基準断層モデル 1-1~1-5 (検討波源モデルA)	<p>最大上昇水位の変動幅*1 (m)</p> <p>→p.196</p> <p>影響が順に小さくなる傾向</p> <p>大すべり域の位置 ライズタイム 破壊伝播速度・破壊開始点*2</p> <p>敷地前面</p>	<p>→p.196</p> <p>・より影響が大きい因子から順にパラメータスタディが行われている。 →パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。 (組合せ検討は実施しない。)</p> <p><パラメータスタディの実施方法></p> <p>大すべり域の位置 ライズタイム*3 破壊伝播速度・破壊開始点</p> <p>基準断層モデル1-1 基準断層モデル1-2 基準断層モデル1-3 基準断層モデル1-4 基準断層モデル1-5 その他のモデル</p> <p>60s 90s 120s 150s 180s 300s</p> <p>破壊伝播速度(0.7~2.5km/s) ×破壊開始点(P1~P6)の組合せ</p>
	取水槽	基準断層モデル 3-1~3-3 (検討波源モデルD)	<p>最大上昇水位の変動幅*1 (m)</p> <p>→p.197</p> <p>影響が同程度</p> <p>大すべり域の位置 ライズタイム 破壊伝播速度・破壊開始点*2</p> <p>4号取水槽の例</p>	<p>→p.203</p> <p>・当該因子の組合せ検討を実施。 ・その結果、組合せ検討をせずとも、津波高等の最大ケースが押さえられていることを確認。 →パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。</p> <p><パラメータスタディの実施方法></p> <p>大すべり域の位置 ライズタイム*3 破壊伝播速度・破壊開始点</p> <p>基準断層モデル3-1 基準断層モデル3-2 基準断層モデル3-3 その他のモデル</p> <p>60s 90s 120s 150s 180s 300s</p> <p>破壊伝播速度(0.7~2.5km/s) ×破壊開始点(P1~P6)の組合せ</p> <p>影響が大きい複数ケースを選定し、組合せ検討を実施</p>
	取水塔	基準断層モデル 2-1~2-3 (検討波源モデルA) 基準断層モデル4-1 (検討波源モデルD)	<p>水位低下時間の変動幅*1 (min)</p> <p>→p.198</p> <p>影響が同程度</p> <p>大すべり域の位置 ライズタイム 破壊伝播速度・破壊開始点*2</p> <p>3号取水塔の例</p>	<p>→p.204</p> <p>・当該因子の組合せ検討を実施。 ・その結果、組合せ検討を行うことによって、水位低下時間の最大ケースが押さえられていることを確認*。 →パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。</p> <p>※妥当性確認の結果を踏まえ、水位下降側については、組合せのパラメータスタディを検討手順に反映した。 (詳細パラメータスタディの検討方針(p.43)参照)</p> <p><パラメータスタディの実施方法></p> <p>大すべり域の位置 ライズタイム*3 破壊伝播速度・破壊開始点</p> <p>基準断層モデル2-1 基準断層モデル2-2 基準断層モデル2-3 基準断層モデル4-1 その他のモデル</p> <p>60s 90s 120s 150s 180s 300s</p> <p>破壊伝播速度(0.7~2.5km/s) ×破壊開始点(P1~P6)の組合せ</p> <p>影響が大きい複数ケースを選定し、組合せ検討を実施</p>

基本的な検討での選定ケース
組合せ検討での選定ケース

*1 パラメータスタディ結果に基づく(最大値-最小値)/2

*2 破壊伝播速度と破壊開始点の変動幅のうち、値が大きい破壊開始点の変動幅を記載。

*3 組合せ検討での選定ケースは、基準断層モデルにより異なるため、この図では敷地への影響が最も大きい基準断層モデルの場合のものを記載。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認

(パラメータスタディ因子の影響分析：敷地前面 基準断層モデル1-1~1-5 (検討波源モデルA))

- 水位上昇側の敷地前面の津波水位に与える影響について、敷地前面への影響が大きい基準断層モデル1-1~1-5の評価結果を分析した。
- 基準断層モデル1-1~1-5の敷地前面に関するパラメータスタディでは、大すべり域の位置の影響が支配的となっている。
- また、ライズタイムの影響は破壊伝播速度・破壊開始点の影響より大きいとともに、ライズタイムが短いほど津波水位が大きくなる関係は、破壊伝播速度・破壊開始点に依らない¹⁾ことから、水位上昇側のパラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わることはなく、敷地に最も影響の大きいケースを選定できていると評価した。

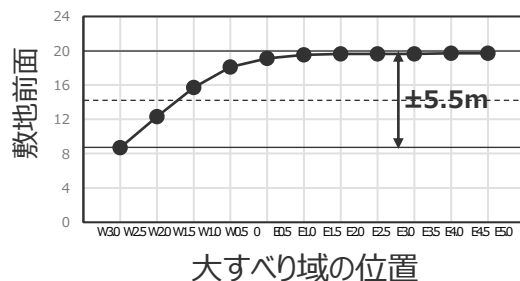
・ここでは、敷地への影響が最も大きいケース（基準断層モデル1-1）を掲載。その他のケースについても同様の傾向となることを確認。

1)本編3章、第1109回 補足説明資料6-5章参照

概略パラメータスタディ	
項目	考察
大すべり域の位置	○ 大すべり域の位置を西側へ移動すると津波高は小さくなる。

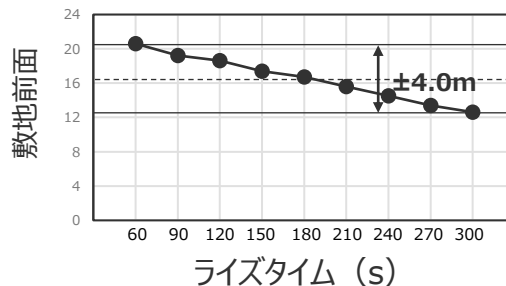
詳細パラメータスタディ				
項目	考察		項目	考察
ライズタイム	○ ライズタイムが短いほど津波高は大きくなる。		破壊伝播速度	○ 破壊伝播速度・破壊開始点の変化による変動幅は、ライズタイムの変化による変動幅より小さい。
			破壊開始点	

最大上昇水位 (T.P.m)

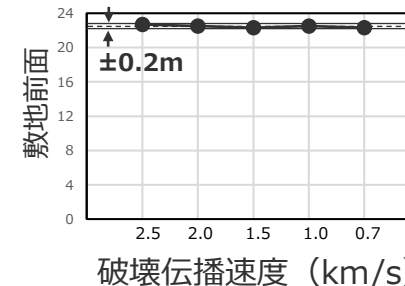


大すべり域の位置

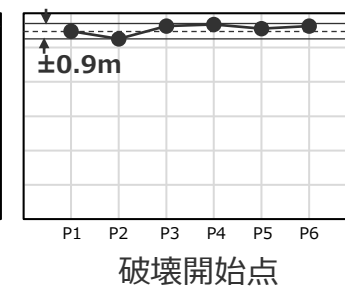
・変動幅は、(最大値 - 最小値) / 2より算出。



ライズタイム (s)



破壊伝播速度 (km/s)



破壊開始点

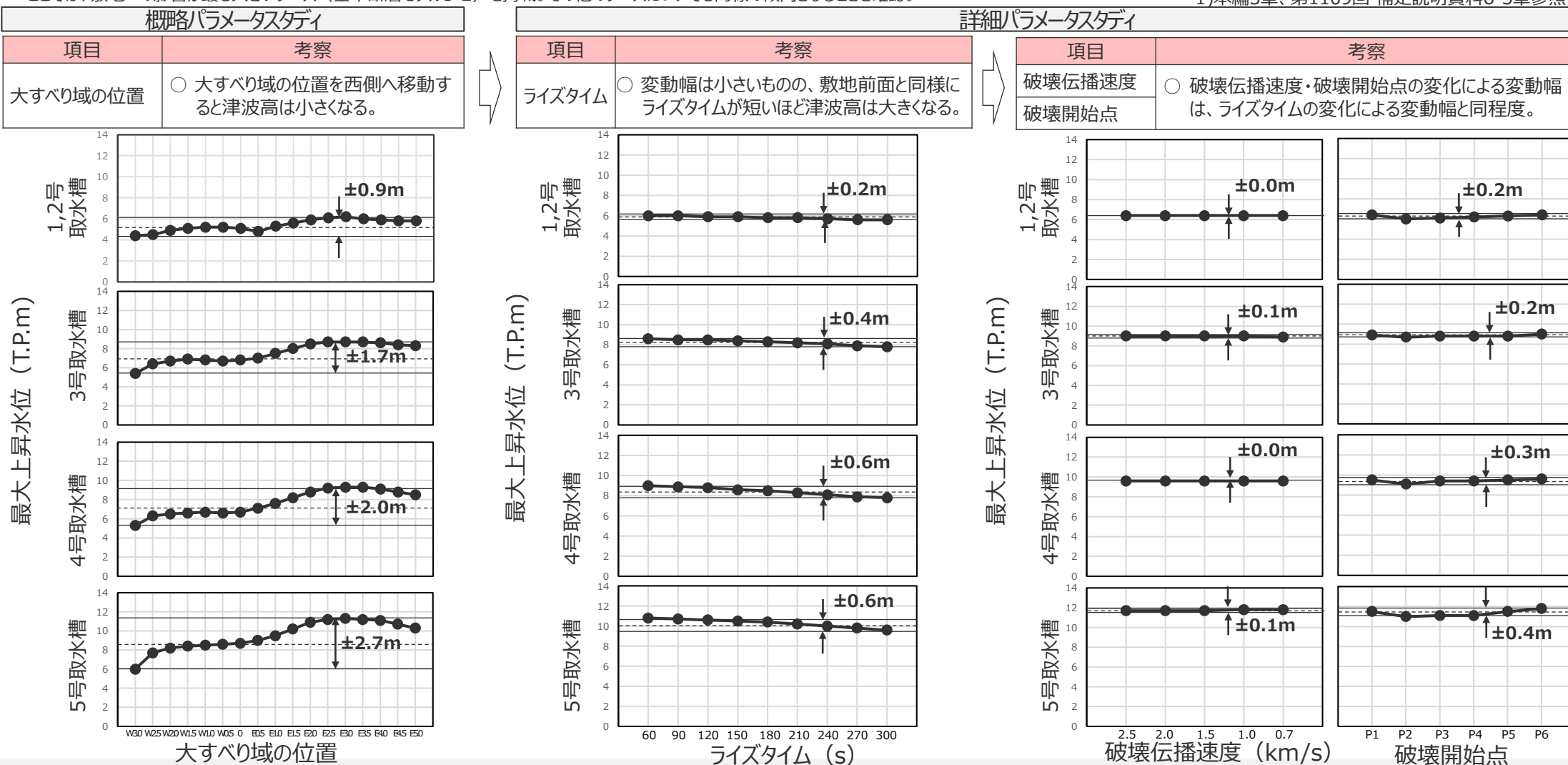
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認

(パラメータスタディ因子の影響分析：取水槽 基準断層モデル3-1~3-3 (検討波源モデルD))

- 水位上昇側の取水槽の津波水位に与える影響について、取水槽への影響が大きい基準断層モデル3-1~3-3の評価結果を分析した。
- 基準断層モデル3-1~3-3の取水槽に関するパラメータスタディでは、大すべり域の位置の影響が支配的となっている。
- また、ライズタイムの影響と破壊伝播速度・破壊開始点の影響は同程度であるが、ライズタイムが短いほど津波水位が大きくなる関係は、破壊伝播速度・破壊開始点に依らない¹⁾ことから、水位上昇側のパラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わることはなく、敷地に最も影響の大きいケースを選定できていると考えられるが、念のためパラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わる可能性もあることを考慮し、当該因子の組合せのパラメータスタディによる検討（組合せ検討）を実施し、組合せ検討の結果に基づいて津波高の最大ケースが押さえられていることを確認する。

・ここでは、敷地への影響が最も大きいケース（基準断層モデル3-2）を掲載。その他のケースについても同様の傾向となることを確認。

1)本編3章、第1109回 補足説明資料6-5章参照



・変動幅は、(最大値-最小値) / 2より算出。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認

(パラメータスタディ因子の影響分析：取水塔 基準断層モデル2-1~2-3,4-1 (検討波源モデルA,D))

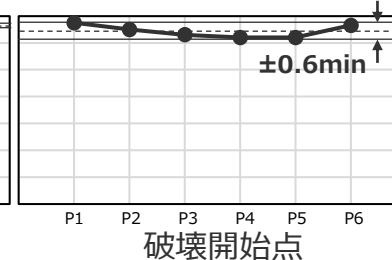
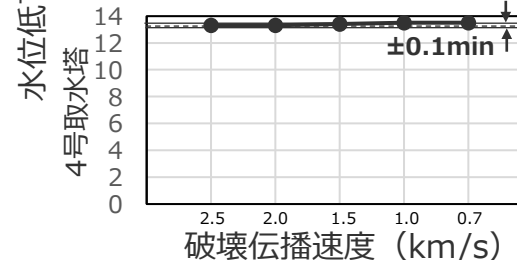
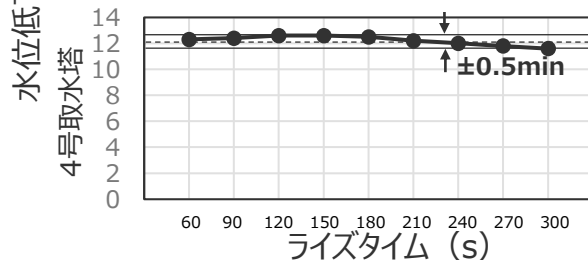
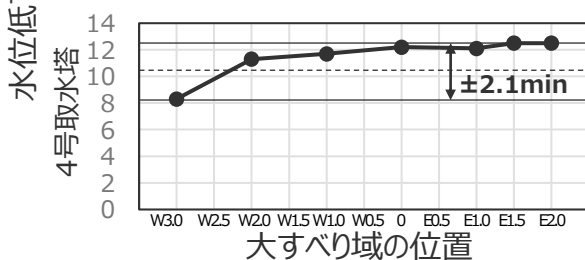
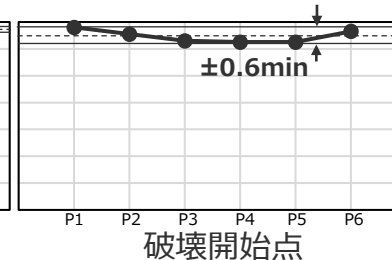
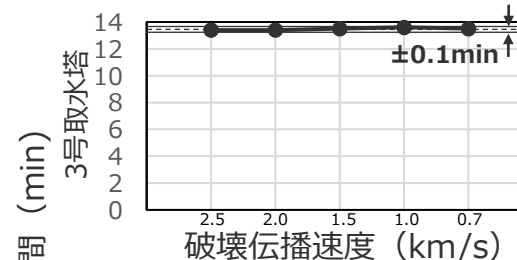
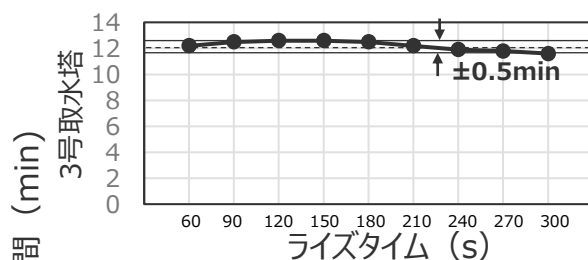
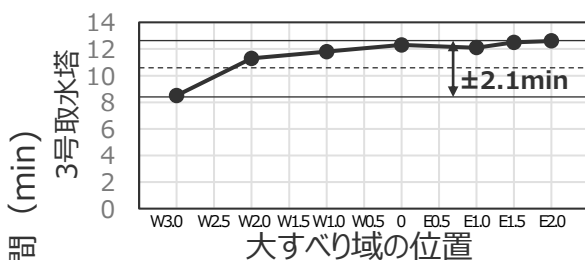
- 水位下降側の取水塔の水位低下時間に与える影響について、取水塔への影響が大きい基準断層モデル2-1~2-3,4-1の評価結果を分析した。
- 基準断層モデル2-1~2-3,4-1の取水塔に関するパラメータスタディでは、大すべり域の位置の影響が支配的となっている。
- 一方、ライズタイムの影響と破壊伝播速度・破壊開始点の影響は同程度で違いが小さいとともに、ライズタイムが水位低下時間に与える影響と、破壊伝播速度・破壊開始点が水位低下時間に与える影響との関係が明確でないことから、パラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わる可能性もあることを考慮し、当該因子の組合せのパラメータスタディによる検討（組合せ検討）を実施し、組合せ検討の結果に基づいて水位低下時間の最大ケースが押さえられていることを確認する。

・ここでは、敷地への影響が最も大きいケース（基準断層モデル2-3）を掲載。その他のケースについても同様の傾向となることを確認。

概略パラメータスタディ	
項目	考察
大すべり域の位置	○ 東側の大すべり域の位置が西に行くにつれ水位低下時間は短くなる。

詳細パラメータスタディ	
項目	考察
ライズタイム	○ ライズタイムが60sから150s程度までは水位低下時間が漸増し、その後150s程度から300sまでは漸減する。

詳細パラメータスタディ	
項目	考察
破壊伝播速度 破壊開始点	○ 破壊伝播速度・破壊開始点の変化による変動幅は、ライズタイムの変化による変動幅と同程度。



・変動幅は、(最大値 - 最小値) / 2 より算出。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各パラメータスタディ因子の津波水位への影響分析 (補足 基準断層モデル1-1の変動幅に関するデータ)

● 大すべり域の位置のパラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P.m)

概略
パラメータ
スタディ

大すべり域の位置※1	W3.0	W2.5	W2.0	W1.5	W1.0	W0.5	0	E0.5	E1.0	E1.5	E2.0	①最大値	②最小値	変動幅
敷地前面	8.7	12.3	15.7	18.1	19.1	19.5	19.6	19.6	19.6	19.7	19.7	19.7	8.7	±5.5
1,2号取水槽	4.2	4.3	4.3	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	4.2	±0.3
3号取水槽	4.7	6.3	6.7	7.1	7.2	7.2	7.2	7.2	7.2	7.2	7.2	7.2	4.7	±1.3
4号取水槽	4.7	6.4	7.2	7.8	7.9	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	4.7	±1.7
5号取水槽	5.4	8.2	9.1	9.7	9.9	9.9	9.9	9.9	9.9	9.9	9.9	9.9	5.4	±2.3

※1 W3.0:西へ60km、W2.5:西へ50km、W2.0:西へ40km、W1.5:西へ30km、W1.0:西へ20km、W0.5:西へ10km、0:基準位置、E0.5:東へ10km、E1.0:東へ20km、E1.5:東へ30km、E2.0:東へ40km それぞれ大すべり域位置を移動させたケース

● ライズタイムのパラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P.m)

詳細
パラメータ
スタディ

ライズタイム	60s	90s	120s	150s	180s	210s	240s	270s	300s	①最大値	②最小値	変動幅
敷地前面	20.6	19.2	18.6	17.4	16.7	15.6	14.5	13.4	12.6	20.6	12.6	±4.0
1,2号取水槽	4.4	4.4	4.4	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	±0.1
3号取水槽	7.0	7.0	6.9	6.9	6.9	6.8	6.8	6.7	6.6	7.0	6.6	±0.2
4号取水槽	7.8	7.8	7.7	7.6	7.5	7.4	7.2	7.0	6.8	7.8	6.8	±0.5
5号取水槽	9.8	9.7	9.6	9.6	9.4	9.3	9.2	9.0	8.7	9.8	8.7	±0.6

● 破壊伝播速度のパラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P.m)

破壊伝播速度※2	2.5km/s	2.0km/s	1.5km/s	1.0km/s	0.7km/s	①最大値	②最小値	変動幅
敷地前面	22.7	22.5	22.3	22.5	22.3	22.7	22.3	±0.2
1,2号取水槽	4.8	4.8	4.8	4.9	4.9	4.9	4.8	±0.1
3号取水槽	7.3	7.3	7.4	7.4	7.4	7.4	7.3	±0.1
4号取水槽	8.2	8.2	8.2	8.3	8.3	8.3	8.2	±0.1
5号取水槽	10.2	10.2	10.2	10.2	10.2	10.2	10.2	±0.0

● 破壊開始点のパラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P.m)

破壊開始点※3	P1	P2	P3	P4	P5	P6	①最大値	②最小値	変動幅
敷地前面	21.9	21.0	22.5	22.7	22.2	22.5	22.7	21.0	±0.9
1,2号取水槽	4.8	4.4	4.6	4.6	4.8	4.9	4.9	4.4	±0.3
3号取水槽	7.3	7.1	7.2	7.3	7.3	7.4	7.4	7.1	±0.2
4号取水槽	8.2	7.9	8.1	8.1	8.1	8.3	8.3	7.9	±0.2
5号取水槽	10.1	9.9	10.0	10.1	10.1	10.2	10.2	9.9	±0.2

・変動幅は、(①-②) / 2より算出。

※2 表中の2.5～0.7km/sの値は、それぞれの破壊伝播速度におけるパラメータスタディの結果の最大値 ※3 表中のP1～P6の値は、それぞれの破壊開始点におけるパラメータスタディの結果の最大値

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各パラメータスタディ因子の津波水位への影響分析 (補足 基準断層モデル3-2の変動幅に関するデータ)

● 大すべり域の位置のパラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P.m)

概略 パラメータ スタディ	大すべり域の位置※1	W3.0	W2.5	W2.0	W1.5	W1.0	W0.5	0	E0.5	E1.0	E1.5	E2.0	E2.5	E3.0	E3.5	E4.0	E4.5	E5.0	①最大値	②最小値	変動幅
	敷地前面		10.6	11.9	11.5	9.6	10.0	10.3	10.7	12.0	12.9	13.8	15.7	16.5	16.5	16.4	15.9	14.6	14.2	16.5	9.6
1,2号取水槽		4.4	4.5	4.9	5.1	5.2	5.2	5.1	4.8	5.3	5.6	5.9	6.1	6.2	6.0	5.9	5.8	5.8	6.2	4.4	±0.9
3号取水槽		5.4	6.4	6.7	6.9	6.8	6.7	6.8	7.0	7.5	8.0	8.5	8.7	8.7	8.7	8.6	8.4	8.3	8.7	5.4	±1.7
4号取水槽		5.3	6.3	6.5	6.6	6.7	6.6	6.7	7.1	7.6	8.2	8.8	9.2	9.3	9.3	9.1	8.8	8.5	9.3	5.3	±2.0
5号取水槽		6.0	7.7	8.2	8.4	8.5	8.6	8.7	9.0	9.5	10.2	10.9	11.2	11.3	11.2	11.1	10.7	10.3	11.3	6.0	±2.7

※1 W3.0:西へ60km、W2.5:西へ50km、W2.0:西へ40km、W1.5:西へ30km、W1.0:西へ20km、W0.5:西へ10km、0:基準位置、E0.5:東へ10km、E1.0:東へ20km、E1.5:東へ30km、E2.0:東へ40km、E2.5:東へ50km、E3.0:東へ60km、E3.5:東へ70km、E4.0:東へ80km、E4.5:東へ90km、E5.0:東へ100km それぞれ大すべり域位置を移動させたケース

● ライズタイムのパラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P.m)

詳細 パラメータ スタディ	ライズタイム	60s	90s	120s	150s	180s	210s	240s	270s	300s	①最大値	②最小値	変動幅
	敷地前面		18.7	17.3	15.6	14.2	13.1	12.5	12.3	12.1	11.9	18.7	11.9
1,2号取水槽		6.0	6.0	5.9	5.9	5.8	5.8	5.7	5.6	5.6	6.0	5.6	±0.2
3号取水槽		8.6	8.5	8.5	8.4	8.3	8.2	8.1	7.9	7.8	8.6	7.8	±0.4
4号取水槽		9.0	8.9	8.8	8.6	8.5	8.3	8.1	7.9	7.8	9.0	7.8	±0.6
5号取水槽		10.8	10.7	10.6	10.5	10.4	10.2	10.0	9.8	9.6	10.8	9.6	±0.6

● 破壊伝播速度のパラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P.m)

詳細 パラメータ スタディ	破壊伝播速度※2	2.5km/s	2.0km/s	1.5km/s	1.0km/s	0.7km/s	①最大値	②最小値	変動幅
	敷地前面		20.8	20.6	20.3	19.8	19.6	20.8	19.6
1,2号取水槽		6.4	6.4	6.4	6.4	6.4	6.4	6.4	±0.0
3号取水槽		9.0	9.0	9.0	9.0	8.9	9.0	8.9	±0.1
4号取水槽		9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	9.6	±0.0
5号取水槽		11.7	11.7	11.7	11.8	11.8	11.8	11.7	±0.1

● 破壊開始点のパラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P.m)

詳細 パラメータ スタディ	破壊開始点※3	P1	P2	P3	P4	P5	P6	①最大値	②最小値	変動幅
	敷地前面		19.5	19.4	20.6	20.8	19.5	20.0	20.8	19.4
1,2号取水槽		6.4	6.0	6.1	6.2	6.3	6.4	6.4	6.0	±0.2
3号取水槽		8.9	8.7	8.8	8.8	8.8	9.0	9.0	8.7	±0.2
4号取水槽		9.5	9.1	9.4	9.4	9.5	9.6	9.6	9.1	±0.3
5号取水槽		11.5	11.0	11.1	11.1	11.5	11.8	11.8	11.0	±0.4

※2 表中の2.5～0.7km/sの値は、それぞれの破壊伝播速度におけるパラメータスタディの結果の最大値 ※3 表中のP1～P6の値は、それぞれの破壊開始点におけるパラメータスタディの結果の最大値
・変動幅は、(①-②)/2より算出。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各パラメータスタディ因子の津波水位への影響分析 (補足 基準断層モデル2-3の変動幅に関するデータ)

概略
パラメータ
スタディ

● 大すべり域の位置のパラメータスタディ結果 (東側の大すべり域位置の計算結果の最大値を記載) 水位低下時間(min)

大すべり域の位置※1	W3.0	W2.5	W2.0	W1.5	W1.0	W0.5	0	E0.5	E1.0	E1.5	E2.0	①最大値	②最小値	変動幅
3号取水塔	8.5	-	11.3	-	11.8	-	12.3	-	12.1	12.5	12.6	12.6	8.5	±2.1
4号取水塔	8.3	-	11.3	-	11.7	-	12.2	-	12.1	12.5	12.5	12.5	8.3	±2.1

※1 W3.0:西へ60km、W2.5:西へ50km、W2.0:西へ40km、W1.5:西へ30km、W1.0:西へ20km、W0.5:西へ10km、0:基準位置、E0.5:東へ10km、E1.0:東へ20km、E1.5:東へ30km、E2.0:東へ40km それぞれ大すべり域位置を移動させたケース

詳細
パラメータ
スタディ

● ライズタイムのパラメータスタディ結果 水位低下時間(min)

ライズタイム	60s	90s	120s	150s	180s	210s	240s	270s	300s	①最大値	②最小値	変動幅
3号取水塔	12.2	12.5	12.6	12.6	12.5	12.2	11.9	11.8	11.6	12.6	11.6	±0.5
4号取水塔	12.3	12.4	12.6	12.6	12.5	12.2	12.0	11.8	11.6	12.6	11.6	±0.5

● 破壊伝播速度のパラメータスタディ結果 水位低下時間(min)

破壊伝播速度※2	2.5km/s	2.0km/s	1.5km/s	1.0km/s	0.7km/s	①最大値	②最小値	変動幅
3号取水塔	13.4	13.4	13.5	13.6	13.5	13.6	13.4	±0.1
4号取水塔	13.3	13.3	13.4	13.5	13.5	13.5	13.3	±0.1

● 破壊開始点のパラメータスタディ結果 水位低下時間(min)

破壊開始点※3	P1	P2	P3	P4	P5	P6	①最大値	②最小値	変動幅
3号取水塔	13.6	13.1	12.6	12.5	12.5	13.3	13.6	12.5	±0.6
4号取水塔	13.5	13.0	12.6	12.4	12.4	13.3	13.5	12.4	±0.6

※2 表中の2.5～0.7km/sの値は、それぞれの破壊伝播速度におけるパラメータスタディの結果の最大値

※3 表中のP1～P6の値は、それぞれの破壊開始点におけるパラメータスタディの結果の最大値

・変動幅は、(①-②) / 2より算出。

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

パラメータスタディの妥当性確認

(取水槽、取水塔に関する組合せ検討：検討範囲)

- 水位上昇側の取水槽、水位下降側の取水塔に関するライズタイムと破壊伝播速度・破壊開始点の組合せ検討では、基準断層モデルごとに、ライズタイムのパラメータスタディの結果、影響が大きい複数のライズタイムのケースを選定し、それぞれのライズタイムのケースに対してさらに破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディによる検討を実施する。
- 組合せ検討において選定するライズタイムのケースは以下のとおり。
(組合せ検討の結果、津波高等の最大値が確認できるまでライズタイムのケースを拡大して検討する。)

- ■：基本的な検討での選定ケース
(ライズタイムのパラメータスタディの結果、敷地への影響が最も大きいケース)
- ■：組合せ検討での選定ケース
(ライズタイムのパラメータスタディの結果、敷地への影響が大きいケース)

【水位上昇側】 取水槽に関するライズタイムのパラメータスタディ結果と、組合せ検討での選定ケース
基準断層モデル3-1

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
90	17.0	5.9	8.5	8.8	10.7
120	15.4	5.9	8.4	8.7	10.6
150	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
180	12.9	5.8	8.2	8.4	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.2	5.6	8.0	8.0	9.9
270	12.0	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.8	5.5	7.8	7.7	9.6

基準断層モデル3-2

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.7	6.0	8.6	9.0	10.8
90	17.3	6.0	8.5	8.9	10.7
120	15.6	5.9	8.5	8.8	10.6
150	14.2	5.9	8.4	8.6	10.5
180	13.1	5.8	8.3	8.5	10.4
210	12.5	5.8	8.2	8.3	10.2
240	12.3	5.7	8.1	8.1	10.0
270	12.1	5.6	7.9	7.9	9.8
300	11.9	5.6	7.8	7.8	9.6

基準断層モデル3-3

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	17.8	6.0	8.5	8.9	10.6
90	16.5	5.9	8.5	8.8	10.5
120	15.1	5.9	8.4	8.6	10.4
150	14.0	5.8	8.3	8.5	10.3
180	13.0	5.8	8.2	8.3	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.1	5.7	8.0	8.0	9.9
270	11.8	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.6	5.5	7.8	7.7	9.5

【水位下降側】 取水塔に関するライズタイムのパラメータスタディ結果と、組合せ検討での選定ケース
基準断層モデル2-1

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.2
90	12.4	12.3
120	12.5	12.5
150	12.4	12.5
180	12.4	12.4
210	12.3	12.3
240	12.1	12.1
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

基準断層モデル2-2

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.4	12.3
90	12.4	12.3
120	12.4	12.3
150	12.4(12.32)	12.4(12.34)
180	12.4(12.34)	12.4(12.34)
210	12.3	12.3
240	12.2	12.2
270	12.0	12.0
300	11.7	11.7

基準断層モデル2-3

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.3
90	12.5	12.4
120	12.6(12.57)	12.6(12.54)
150	12.6(12.59)	12.6(12.57)
180	12.5	12.5
210	12.2	12.2
240	11.9	12.0
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

基準断層モデル4-1

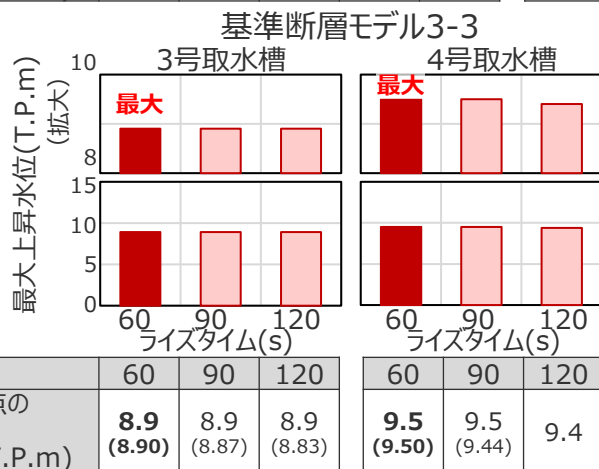
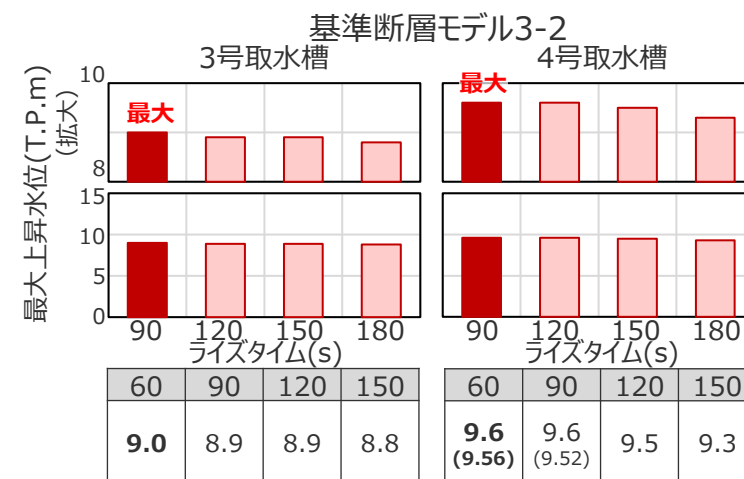
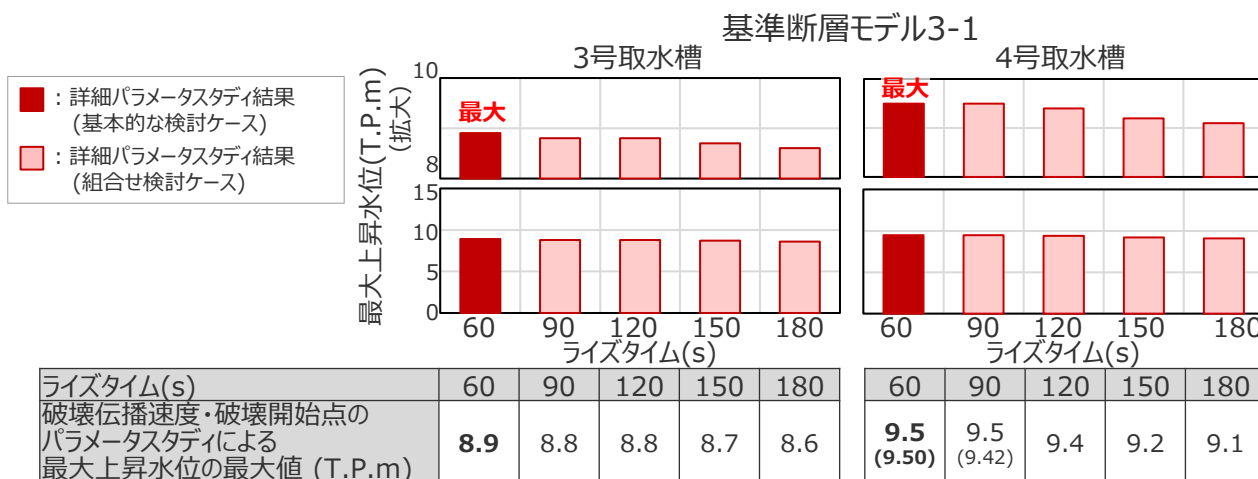
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.3	12.2
90	12.2	12.1
120	12.2	12.0
150	12.1	11.9
180	12.0	11.8
210	11.8	11.7
240	11.7	11.5
270	11.4	11.3
300	11.2	11.1

太字：ライズタイムのパラメータスタディの中で、着目する評価地点における最大値

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認

(取水槽に関する組合せ検討：水位上昇側(基準断層モデル3-1~3-3))

- 水位上昇側の取水槽に関する組合せ検討では、基準断層モデルごとに、影響が大きい複数のライズタイムのケースを選定し、それぞれのライズタイムのケースに対してさらに破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディによる検討を実施した。
- その結果、組合せ検討によって選定ケースが変わらず、また、津波高の最大ケースが押さえられていることを確認したことから、取水槽に関するパラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当と評価した。



組合せ検討によって選定ケースが変わらず、
また、津波高の最大ケースが押さえられていることを確認

- ・基準断層モデルのライズタイムごとに、影響の大きいケースの数値を記載。(このうち、**太字**は、基準断層モデルごとに、影響の大きいケース)
- ・ここでは3,4号取水槽の結果を掲載。他号機の取水槽に関しても同様に選定されるケースが変わらないことを再確認した。
- ・全ケースの評価結果は、本編資料3章に掲載。

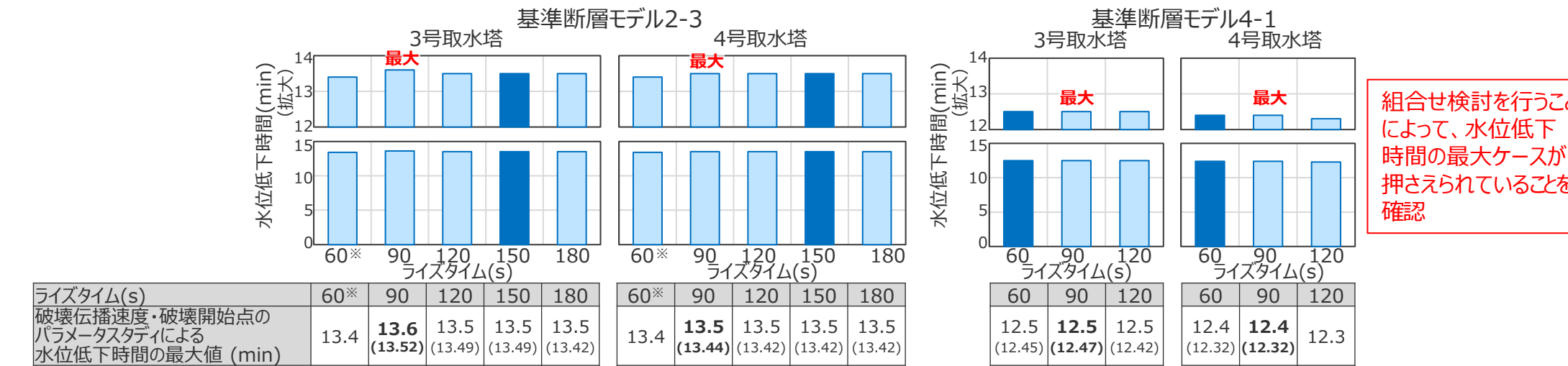
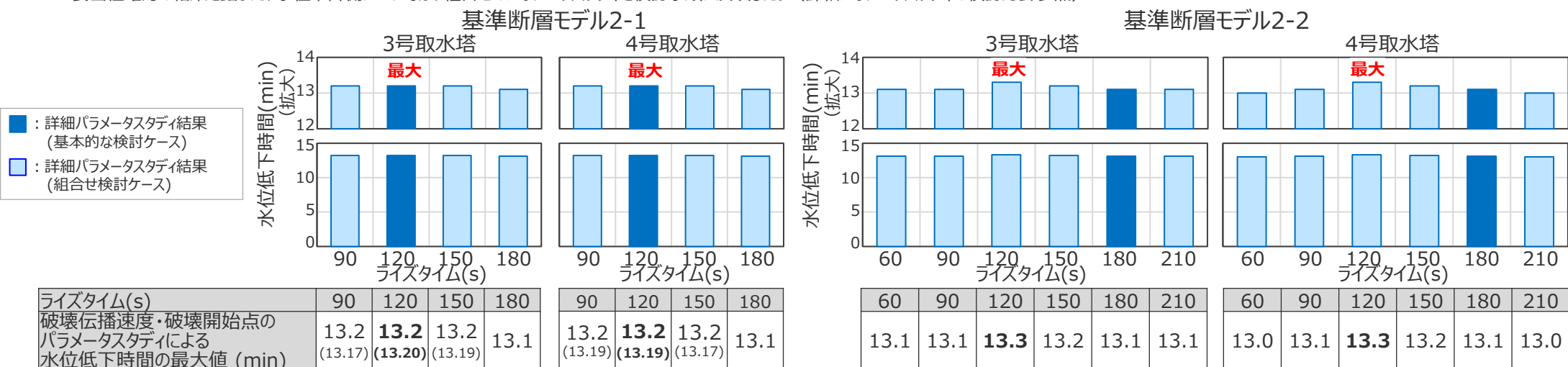
水位上昇側：取水槽のパラメータスタディ因子の分析結果を踏まえた影響確認 (基準断層モデル3-1~3-3)

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認

(取水塔に関する組合せ検討：水位下降側(基準断層モデル2-1~2-3,4-1))

- 水位下降側の取水塔に関する組合せ検討では、基準断層モデルごとに、影響が大きい複数のライズタイムのケースを選定し、それぞれのライズタイムのケースに対して破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディによる検討を実施した。
- その結果、組合せ検討によって選定ケースが変更となったが、水位低下時間の最大ケースが押えられていることを確認したことから、取水塔に関するパラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当と評価した。

・妥当性確認の結果を踏まえ、水位下降側については、組合せのパラメータスタディを検討手順に反映した。(詳細パラメータスタディの検討方針参照)



組合せ検討を行うことによって、水位低下時間の最大ケースが押えられていることを確認

※ ライズタイム90sのケースで水位低下時間が最大となったことを踏まえて、水位低下時間のピークが確認できるよう検討するライズタイムのケースを拡大し、ライズタイム60sのケースでも破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディを実施した。
 ・基準断層モデルのライズタイムごとに、影響の大きいケースの数値を記載。(このうち、**太字**は、基準断層モデルごとに、影響の大きいケース)
 ・全ケースの評価結果は、本編資料3章に掲載。

水位下降側：取水塔のパラメータスタディ因子の分析結果を踏まえた追加検討(基準断層モデル2-1~2-3,4-1)

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-1(1/5))

■ 基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

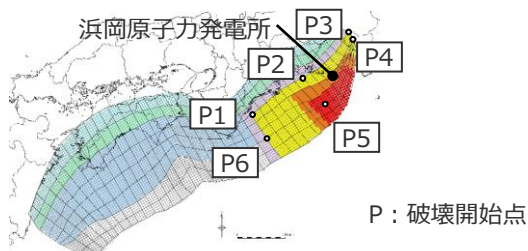
- ・基準断層モデル3-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ70km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
90	17.0	5.9	8.5	8.8	10.7
120	15.4	5.9	8.4	8.7	10.6
150	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
180	12.9	5.8	8.2	8.4	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.2	5.6	8.0	8.0	9.9
270	12.0	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.8	5.5	7.8	7.7	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



P：破壊開始点

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

赤枠：基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（1~5号取水槽）における津波高の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定した代表ケース

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	15.9	6.0	8.5	8.8	11.0
	P2	14.2	5.4	7.6	7.6	9.1
	P3	19.0	5.8	8.3	8.8	9.9
	P4	19.8	5.9	8.4	8.9	10.1
	P5	16.4	5.9	8.5	8.9	11.1
	P6	18.7	6.2	8.8	9.3	11.6
1.0	P1	17.3	6.0	8.7	9.1	11.3
	P2	16.1	5.7	8.1	8.2	9.9
	P3	19.3	5.9	8.5	9.0	10.4
	P4	19.9	5.9	8.6	9.1	10.5
	P5	17.2	6.0	8.6	9.2	11.3
	P6	19.1	6.2	8.8	9.4	11.6
1.5	P1	18.1	6.2	8.8	9.3	11.4
	P2	17.3	5.9	8.4	8.7	10.5
	P3	20.0	6.0	8.6	9.2	10.7
	P4	20.3	6.0	8.7	9.3	10.9
	P5	18.3	6.1	8.7	9.3	11.4
	P6	19.5	6.3	8.9	9.5	11.6
2.0	P1	18.7	6.2	8.8	9.4	11.4
	P2	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
	P3	20.4	6.0	8.7	9.3	10.9
	P4	20.6	6.0	8.7	9.3	11.0
	P5	18.9	6.2	8.8	9.4	11.4
	P6	19.4	6.4(6.31)	8.9(8.86)	9.5(9.49)	11.6(11.59)
2.5	P1	19.2	6.3	8.8	9.4	11.5
	P2	19.0	6.0	8.6	9.1	10.9
	P3	20.5	6.0	8.7	9.3	11.0
	P4	20.8	6.1	8.8	9.4	11.1
	P5	19.3	6.2	8.8	9.4	11.5
	P6	19.5	6.4(6.32)	8.9(8.86)	9.5(9.50)	11.6(11.57)

・ライズタイム60sとして検討

小数第1位までの津波高から、着目する全ての評価地点において津波高の最大値（表中赤字）を持つケースが2ケース存在
→小数第2位を確認

着目する全ての評価地点における津波高の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-1(2/5))

■ 基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

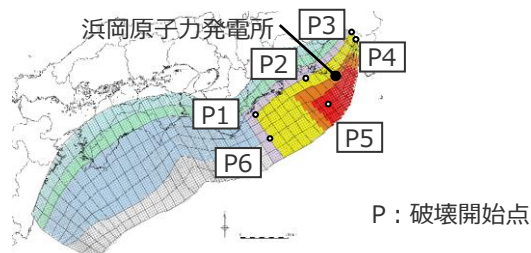
- ・基準断層モデル3-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ70km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
90	17.0	5.9	8.5	8.8	10.7
120	15.4	5.9	8.4	8.7	10.6
150	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
180	12.9	5.8	8.2	8.4	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.2	5.6	8.0	8.0	9.9
270	12.0	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.8	5.5	7.8	7.7	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	15.3	6.0	8.5	8.7	10.9
	P2	13.0	5.4	7.6	7.5	9.0
	P3	18.2	5.8	8.3	8.6	9.7
	P4	19.0	5.9	8.4	8.8	10.0
	P5	15.4	5.8	8.5	8.8	11.0
	P6	17.3	6.1	8.7	9.2	11.5
1.0	P1	16.0	6.0	8.6	9.0	11.2
	P2	14.7	5.7	8.0	8.1	9.8
	P3	18.5	5.9	8.5	8.9	10.2
	P4	19.1	5.9	8.5	9.0	10.4
	P5	16.1	5.9	8.6	9.1	11.2
	P6	17.9	6.2	8.8	9.4	11.6
1.5	P1	17.0	6.0	8.7	9.2	11.3
	P2	15.8	5.8	8.3	8.6	10.4
	P3	19.2	5.9	8.6	9.1	10.6
	P4	19.6	6.0	8.6	9.1	10.7
	P5	17.4	6.0	8.7	9.2	11.3
	P6	18.0	6.2	8.8	9.4	11.6
2.0	P1	17.7	6.2	8.8	9.3	11.4
	P2	17.0	5.9	8.5	8.8	10.7
	P3	19.6	6.0	8.7	9.2	10.8
	P4	19.9	6.0	8.7	9.2	10.9
	P5	18.2	6.0	8.7	9.3	11.4
	P6	18.2	6.3	8.8	9.5	11.6
2.5	P1	18.4	6.2	8.8	9.4	11.4
	P2	17.9	6.0	8.6	9.0	10.8
	P3	19.8	6.0	8.7	9.2	10.9
	P4	20.1	6.0	8.7	9.3	11.0
	P5	18.6	6.1	8.8	9.3	11.4
	P6	18.6	6.3	8.8	9.5	11.5

・ライズタイム90sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-1(3/5))

■ 基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

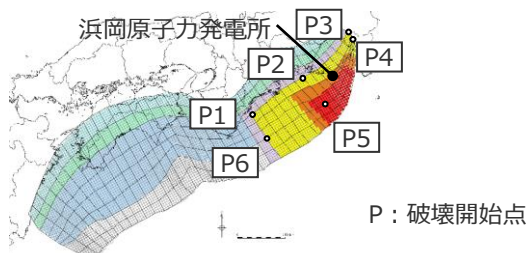
- ・基準断層モデル3-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ70km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
90	17.0	5.9	8.5	8.8	10.7
120	15.4	5.9	8.4	8.7	10.6
150	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
180	12.9	5.8	8.2	8.4	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.2	5.6	8.0	8.0	9.9
270	12.0	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.8	5.5	7.8	7.7	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	14.4	5.9	8.4	8.6	10.8
	P2	11.9	5.3	7.5	7.4	8.9
	P3	16.5	5.7	8.2	8.5	9.6
	P4	17.3	5.8	8.3	8.6	9.8
	P5	14.3	5.8	8.4	8.7	10.8
	P6	16.0	6.1	8.7	9.1	11.3
1.0	P1	15.0	6.0	8.6	8.9	11.0
	P2	13.3	5.6	8.0	8.0	9.6
	P3	17.0	5.8	8.4	8.7	10.1
	P4	17.6	5.9	8.5	8.8	10.2
	P5	15.0	5.9	8.5	9.0	11.0
	P6	16.2	6.2	8.7	9.3	11.4
1.5	P1	15.8	6.0	8.7	9.1	11.2
	P2	14.7	5.8	8.3	8.4	10.3
	P3	17.5	5.9	8.5	8.9	10.5
	P4	17.9	5.9	8.6	9.0	10.6
	P5	15.7	6.0	8.6	9.1	11.2
	P6	16.5	6.2	8.8	9.3	11.4
2.0	P1	16.4	6.0	8.7	9.2	11.2
	P2	15.4	5.9	8.4	8.7	10.6
	P3	17.8	5.9	8.6	9.0	10.7
	P4	18.0	6.0	8.6	9.1	10.8
	P5	16.4	6.0	8.7	9.2	11.2
	P6	16.9	6.2	8.8	9.4	11.4
2.5	P1	16.8	6.1	8.7	9.3	11.3
	P2	16.1	5.9	8.5	8.8	10.7
	P3	17.9	6.0	8.6	9.1	10.8
	P4	18.1	6.0	8.7	9.2	10.9
	P5	16.8	6.0	8.7	9.2	11.3
	P6	17.2	6.2	8.8	9.4	11.4

・ライズタイム120sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-1(4/5))

■ 基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

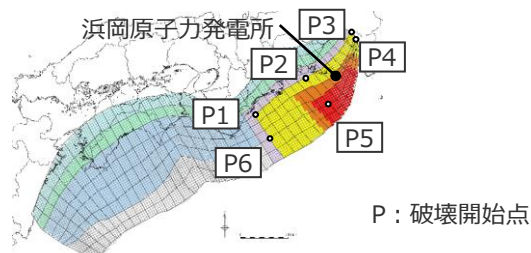
- ・基準断層モデル3-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ70km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
90	17.0	5.9	8.5	8.8	10.7
120	15.4	5.9	8.4	8.7	10.6
150	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
180	12.9	5.8	8.2	8.4	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.2	5.6	8.0	8.0	9.9
270	12.0	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.8	5.5	7.8	7.7	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	13.4	5.9	8.3	8.5	10.6
	P2	11.2	5.3	7.5	7.2	8.7
	P3	14.9	5.7	8.1	8.2	9.4
	P4	15.4	5.8	8.2	8.4	9.7
	P5	13.4	5.8	8.3	8.6	10.7
	P6	15.0	6.1	8.6	9.0	11.2
1.0	P1	14.2	6.0	8.5	8.8	10.9
	P2	12.6	5.6	7.9	7.8	9.5
	P3	15.1	5.8	8.3	8.5	9.9
	P4	15.6	5.8	8.4	8.6	10.1
	P5	14.0	5.8	8.5	8.8	10.9
	P6	15.2	6.0	8.7	9.1	11.3
1.5	P1	14.4	6.0	8.6	9.0	11.0
	P2	13.6	5.7	8.2	8.3	10.2
	P3	15.5	5.9	8.4	8.7	10.4
	P4	15.9	5.9	8.5	8.8	10.5
	P5	14.3	5.9	8.5	9.0	11.0
	P6	15.1	6.1	8.7	9.2	11.3
2.0	P1	14.7	6.0	8.6	9.1	11.1
	P2	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
	P3	15.8	5.9	8.5	8.9	10.6
	P4	16.0	5.9	8.5	8.9	10.7
	P5	14.7	5.9	8.6	9.1	11.1
	P6	15.2	6.0	8.7	9.2	11.3
2.5	P1	15.1	6.0	8.6	9.1	11.1
	P2	14.5	5.9	8.4	8.7	10.6
	P3	15.9	5.9	8.5	9.0	10.7
	P4	16.1	5.9	8.6	9.0	10.8
	P5	15.0	6.0	8.6	9.1	11.1
	P6	15.5	6.0	8.7	9.2	11.3

・ライズタイム150sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-1(5/5))

■ 基準断層モデル3-1の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

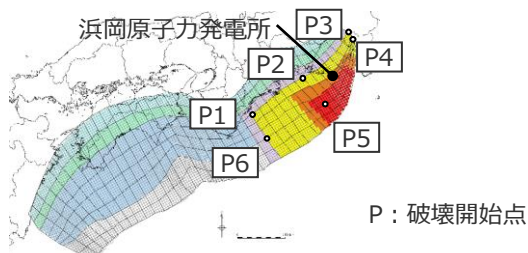
- ・基準断層モデル3-1：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ70km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.2	5.9	8.5	8.9	10.8
90	17.0	5.9	8.5	8.8	10.7
120	15.4	5.9	8.4	8.7	10.6
150	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
180	12.9	5.8	8.2	8.4	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.2	5.6	8.0	8.0	9.9
270	12.0	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.8	5.5	7.8	7.7	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

.....：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	13.1	5.9	8.2	8.3	10.4
	P2	10.5	5.3	7.4	7.0	8.5
	P3	13.8	5.6	8.0	8.0	9.3
	P4	14.6	5.7	8.1	8.2	9.5
	P5	13.1	5.7	8.3	8.4	10.5
	P6	14.4	6.0	8.5	8.9	11.0
1.0	P1	13.4	5.9	8.4	8.6	10.7
	P2	11.6	5.5	7.8	7.6	9.4
	P3	14.0	5.7	8.2	8.3	9.8
	P4	14.6	5.8	8.3	8.4	10.0
	P5	13.4	5.8	8.4	8.7	10.7
	P6	14.4	6.0	8.6	9.0	11.1
1.5	P1	13.9	6.0	8.5	8.8	10.9
	P2	12.4	5.7	8.1	8.1	10.1
	P3	14.3	5.8	8.3	8.5	10.3
	P4	14.6	5.8	8.4	8.6	10.4
	P5	13.9	5.9	8.4	8.8	10.8
	P6	14.3	6.0	8.6	9.0	11.1
2.0	P1	14.0	5.9	8.5	8.9	10.9
	P2	12.9	5.8	8.2	8.4	10.3
	P3	14.4	5.9	8.4	8.7	10.5
	P4	14.7	5.8	8.4	8.8	10.6
	P5	13.9	5.9	8.5	8.9	10.9
	P6	14.2	6.0	8.6	9.1	11.1
2.5	P1	14.0	5.9	8.5	8.9	11.0
	P2	13.1	5.8	8.3	8.5	10.5
	P3	14.5	5.9	8.4	8.8	10.6
	P4	14.7	5.9	8.5	8.8	10.7
	P5	14.0	5.9	8.5	8.9	10.9
	P6	14.2	6.0	8.6	9.1	11.1

・ライズタイム180sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-2(1/4))

■ 基準断層モデル3-2の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

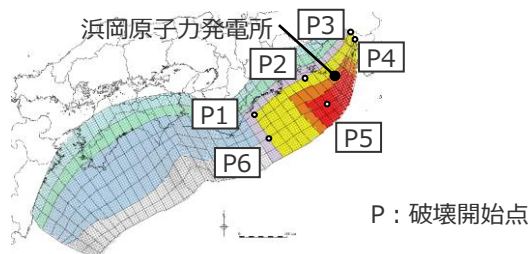
- ・基準断層モデル3-2：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ60km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.7	6.0	8.6	9.0	10.8
90	17.3	6.0	8.5	8.9	10.7
120	15.6	5.9	8.5	8.8	10.6
150	14.2	5.9	8.4	8.6	10.5
180	13.1	5.8	8.3	8.5	10.4
210	12.5	5.8	8.2	8.3	10.2
240	12.3	5.7	8.1	8.1	10.0
270	12.1	5.6	7.9	7.9	9.8
300	11.9	5.6	7.8	7.8	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・期望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	16.7	6.2	8.7	9.1	11.2
	P2	14.5	5.4	7.7	7.7	9.2
	P3	18.8	5.8	8.3	8.7	9.9
	P4	19.6	5.9	8.4	8.9	10.1
	P5	16.6	5.9	8.5	9.0	11.1
	P6	19.5	6.4	8.9	9.6	11.8
1.0	P1	17.9	6.2	8.8	9.3	11.4
	P2	16.3	5.7	8.1	8.3	10.0
	P3	19.1	5.9	8.5	9.0	10.4
	P4	19.8	5.9	8.6	9.1	10.5
	P5	17.4	6.0	8.7	9.2	11.3
	P6	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8
1.5	P1	18.7	6.3	8.9	9.4	11.5
	P2	17.5	5.9	8.4	8.8	10.6
	P3	20.0	6.0	8.7	9.2	10.8
	P4	20.3	6.0	8.7	9.3	10.9
	P5	18.5	6.2	8.8	9.4	11.4
	P6	20.0	6.4	9.0	9.6	11.7
2.0	P1	19.0	6.4	8.9	9.5	11.5
	P2	18.7	6.0	8.6	9.0	10.8
	P3	20.4	6.0	8.7	9.3	11.0
	P4	20.6	6.1	8.8	9.4	11.0
	P5	19.1	6.2	8.8	9.4	11.5
	P6	19.9	6.4	9.0	9.6	11.7
2.5	P1	19.5	6.4	8.9	9.5	11.5
	P2	19.4	6.0	8.7	9.1	11.0
	P3	20.6	6.1	8.8	9.4	11.1
	P4	20.8	6.2	8.8	9.4	11.1
	P5	19.5	6.3	8.8	9.5	11.5
	P6	19.8	6.4	9.0	9.6	11.7

着目する全ての評価地点における津波高の最大値を持つケースとして選定

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

赤枠：基準断層モデル3-2の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（1~5号取水槽）において津波高の最大値を持つケースとして選定した代表ケース

・ライズタイム60sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-2(2/4))

■ 基準断層モデル3-2の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

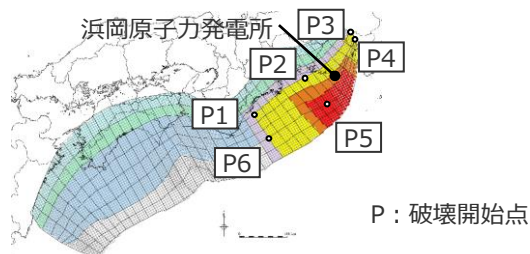
- ・基準断層モデル3-2：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ60km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.7	6.0	8.6	9.0	10.8
90	17.3	6.0	8.5	8.9	10.7
120	15.6	5.9	8.5	8.8	10.6
150	14.2	5.9	8.4	8.6	10.5
180	13.1	5.8	8.3	8.5	10.4
210	12.5	5.8	8.2	8.3	10.2
240	12.3	5.7	8.1	8.1	10.0
270	12.1	5.6	7.9	7.9	9.8
300	11.9	5.6	7.8	7.8	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・期望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	15.9	6.2	8.6	9.0	11.1
	P2	13.3	5.4	7.7	7.6	9.1
	P3	18.0	5.8	8.3	8.6	9.7
	P4	18.7	5.8	8.4	8.8	9.9
	P5	15.5	5.9	8.5	8.9	11.0
	P6	18.3	6.4	8.9	9.5	11.7
1.0	P1	16.6	6.1	8.7	9.2	11.3
	P2	15.0	5.7	8.1	8.2	9.9
	P3	18.4	5.9	8.5	8.9	10.2
	P4	18.9	5.9	8.5	9.0	10.4
	P5	16.3	6.0	8.6	9.1	11.2
	P6	18.6	6.4	8.9	9.5	11.7
1.5	P1	17.2	6.2	8.8	9.3	11.4
	P2	16.0	5.9	8.4	8.7	10.5
	P3	19.1	5.9	8.6	9.1	10.6
	P4	19.5	6.0	8.6	9.1	10.7
	P5	17.6	6.1	8.7	9.3	11.4
	P6	18.6	6.4	8.9	9.5	11.7
2.0	P1	17.9	6.3	8.8	9.4	11.5
	P2	17.3	6.0	8.5	8.9	10.7
	P3	19.5	6.0	8.7	9.2	10.8
	P4	19.8	6.0	8.7	9.2	10.9
	P5	18.4	6.2	8.8	9.4	11.4
	P6	18.4	6.4	8.9	9.6	11.6
2.5	P1	18.5	6.3	8.8	9.4	11.5
	P2	18.1	6.0	8.6	9.0	10.9
	P3	19.8	6.0	8.7	9.2	10.9
	P4	20.0	6.1	8.7	9.3	11.0
	P5	18.8	6.2	8.8	9.4	11.4
	P6	18.8	6.4	8.9	9.6	11.6

・ライズタイム90sとして検討

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-2(3/4))

■ 基準断層モデル3-2の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

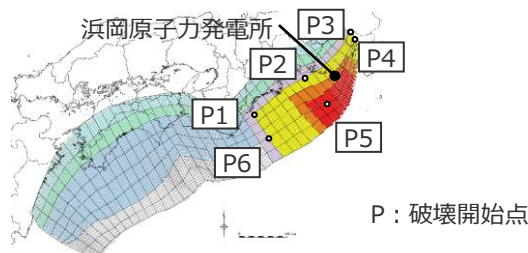
- ・基準断層モデル3-2：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ60km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.7	6.0	8.6	9.0	10.8
90	17.3	6.0	8.5	8.9	10.7
120	15.6	5.9	8.5	8.8	10.6
150	14.2	5.9	8.4	8.6	10.5
180	13.1	5.8	8.3	8.5	10.4
210	12.5	5.8	8.2	8.3	10.2
240	12.3	5.7	8.1	8.1	10.0
270	12.1	5.6	7.9	7.9	9.8
300	11.9	5.6	7.8	7.8	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・期望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	15.0	6.1	8.6	8.9	11.0
	P2	12.2	5.4	7.6	7.5	9.0
	P3	16.3	5.7	8.2	8.4	9.6
	P4	17.1	5.8	8.3	8.6	9.8
	P5	14.4	5.8	8.4	8.8	10.9
	P6	16.8	6.3	8.9	9.4	11.6
1.0	P1	15.4	6.1	8.7	9.1	11.2
	P2	13.5	5.7	8.0	8.0	9.7
	P3	16.9	5.8	8.4	8.7	10.1
	P4	17.4	5.9	8.5	8.8	10.2
	P5	15.1	5.9	8.6	9.0	11.1
	P6	16.9	6.4	8.9	9.4	11.6
1.5	P1	16.2	6.2	8.7	9.3	11.3
	P2	14.8	5.8	8.3	8.5	10.3
	P3	17.4	5.9	8.5	8.9	10.5
	P4	17.8	5.9	8.6	9.0	10.6
	P5	15.8	6.0	8.7	9.2	11.2
	P6	16.8	6.3	8.9	9.5	11.6
2.0	P1	16.7	6.2	8.8	9.3	11.3
	P2	15.6	5.9	8.5	8.8	10.6
	P3	17.7	5.9	8.6	9.0	10.7
	P4	18.0	6.0	8.6	9.1	10.8
	P5	16.5	6.0	8.7	9.3	11.3
	P6	17.1	6.3	8.8	9.5	11.5
2.5	P1	17.0	6.2	8.8	9.4	11.4
	P2	16.2	5.9	8.5	8.9	10.8
	P3	17.9	6.0	8.6	9.1	10.8
	P4	18.1	6.0	8.7	9.2	10.9
	P5	16.9	6.1	8.7	9.3	11.3
	P6	17.4	6.3	8.8	9.5	11.5

・ライズタイム120sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-2(4/4))

■ 基準断層モデル3-2の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

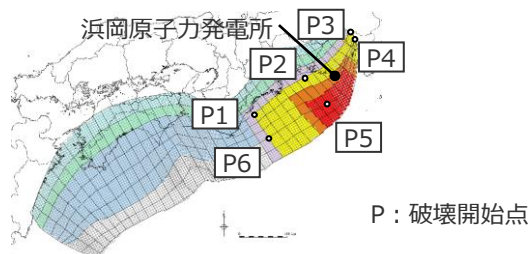
- ・基準断層モデル3-2：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ60km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.7	6.0	8.6	9.0	10.8
90	17.3	6.0	8.5	8.9	10.7
120	15.6	5.9	8.5	8.8	10.6
150	14.2	5.9	8.4	8.6	10.5
180	13.1	5.8	8.3	8.5	10.4
210	12.5	5.8	8.2	8.3	10.2
240	12.3	5.7	8.1	8.1	10.0
270	12.1	5.6	7.9	7.9	9.8
300	11.9	5.6	7.8	7.8	9.6

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・期望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	14.1	6.0	8.5	8.7	10.8
	P2	11.6	5.4	7.5	7.3	8.8
	P3	14.7	5.7	8.1	8.2	9.4
	P4	15.3	5.8	8.2	8.4	9.6
	P5	13.4	5.8	8.4	8.7	10.7
	P6	15.7	6.3	8.8	9.3	11.4
1.0	P1	14.5	6.1	8.6	9.0	11.0
	P2	12.8	5.6	8.0	7.9	9.6
	P3	15.0	5.8	8.3	8.5	9.9
	P4	15.4	5.8	8.4	8.6	10.0
	P5	14.2	5.9	8.5	8.9	10.9
	P6	15.4	6.3	8.8	9.3	11.4
1.5	P1	14.7	6.0	8.7	9.1	11.1
	P2	13.7	5.8	8.3	8.3	10.3
	P3	15.5	5.9	8.4	8.7	10.4
	P4	15.8	5.9	8.5	8.8	10.4
	P5	14.4	5.9	8.6	9.1	11.1
	P6	15.3	6.2	8.8	9.3	11.4
2.0	P1	15.0	6.1	8.7	9.2	11.2
	P2	14.2	5.9	8.4	8.6	10.5
	P3	15.7	5.9	8.5	8.9	10.6
	P4	16.0	5.9	8.6	9.0	10.7
	P5	14.7	6.0	8.6	9.1	11.1
	P6	15.5	6.2	8.8	9.3	11.4
2.5	P1	15.3	6.1	8.7	9.2	11.2
	P2	14.6	5.9	8.5	8.8	10.7
	P3	15.9	5.9	8.6	9.0	10.8
	P4	16.1	5.9	8.6	9.1	10.8
	P5	15.1	6.0	8.6	9.2	11.2
	P6	15.7	6.2	8.8	9.3	11.3

・ライズタイム150sとして検討

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-3(1/3))

■ 基準断層モデル3-3の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

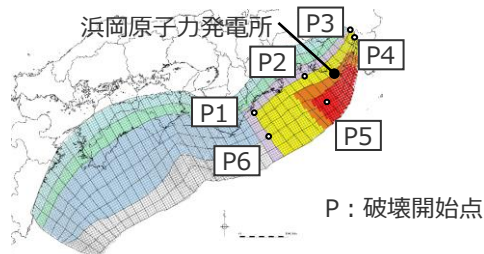
- ・基準断層モデル3-3：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ50km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	17.8	6.0	8.5	8.9	10.6
90	16.5	5.9	8.5	8.8	10.5
120	15.1	5.9	8.4	8.6	10.4
150	14.0	5.8	8.3	8.5	10.3
180	13.0	5.8	8.2	8.3	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.1	5.7	8.0	8.0	9.9
270	11.8	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.6	5.5	7.8	7.7	9.5

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	16.5	6.2	8.7	9.0	11.2
	P2	14.2	5.4	7.6	7.6	9.0
	P3	18.8	5.7	8.2	8.6	9.7
	P4	19.6	5.8	8.3	8.8	9.9
	P5	15.9	5.9	8.5	8.8	10.9
	P6	19.3	6.4(6.37)	8.9(8.88)	9.5(9.49)	11.7(11.70)
1.0	P1	17.2	6.2	8.8	9.2	11.3
	P2	16.0	5.7	8.1	8.2	9.7
	P3	19.2	5.9	8.4	8.9	10.2
	P4	19.7	5.9	8.5	9.0	10.3
	P5	16.8	6.0	8.6	9.1	11.1
	P6	19.0	6.4(6.39)	8.9(8.90)	9.5(9.50)	11.7(11.63)
1.5	P1	18.0	6.3	8.8	9.3	11.3
	P2	17.1	5.9	8.4	8.7	10.4
	P3	20.0	5.9	8.6	9.1	10.6
	P4	20.3	6.0	8.6	9.2	10.7
	P5	17.9	6.1	8.7	9.2	11.2
	P6	19.1	6.4	8.9	9.5	11.6
2.0	P1	18.6	6.3	8.9	9.4	11.3
	P2	17.8	6.0	8.5	8.9	10.6
	P3	20.4	6.0	8.7	9.2	10.8
	P4	20.6	6.0	8.7	9.2	10.9
	P5	18.6	6.2	8.8	9.3	11.3
	P6	19.1	6.4	8.9	9.5	11.5
2.5	P1	19.0	6.3	8.9	9.4	11.3
	P2	18.5	6.0	8.6	9.0	10.8
	P3	20.5	6.0	8.7	9.2	10.9
	P4	20.8	6.0	8.7	9.3	11.0
	P5	18.9	6.2	8.8	9.3	11.3
	P6	19.4	6.4	8.9	9.5	11.5

・ライズタイム60sとして検討

小数第1位までの津波高から、着目する全ての評価地点において津波高の最大値（表中赤字）を持つケースが2ケース存在
→小数第2位を確認

着目する全ての評価地点における津波高の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

赤枠：基準断層モデル3-3の詳細パラメータスタディの中で、着目する全ての評価地点（1~5号取水槽）における津波高の最大値を網羅するケースの組み合わせとして選定した代表ケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-3(2/3))

■ 基準断層モデル3-3の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

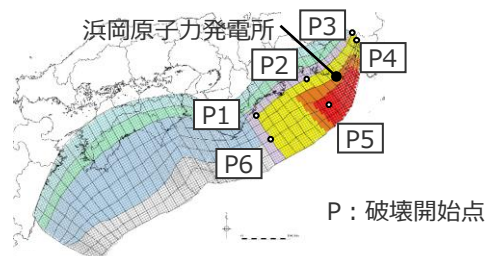
- ・基準断層モデル3-3：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ50km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	17.8	6.0	8.5	8.9	10.6
90	16.5	5.9	8.5	8.8	10.5
120	15.1	5.9	8.4	8.6	10.4
150	14.0	5.8	8.3	8.5	10.3
180	13.0	5.8	8.2	8.3	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.1	5.7	8.0	8.0	9.9
270	11.8	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.6	5.5	7.8	7.7	9.5

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	15.8	6.2	8.6	9.0	11.1
	P2	12.8	5.4	7.6	7.5	9.0
	P3	17.9	5.7	8.2	8.5	9.5
	P4	18.8	5.8	8.3	8.6	9.8
	P5	15.0	5.9	8.4	8.7	10.8
	P6	18.0	6.4(6.38)	8.9(8.87)	9.5(9.44)	11.7(11.63)
1.0	P1	16.1	6.2	8.7	9.1	11.2
	P2	14.5	5.7	8.0	8.1	9.6
	P3	18.4	5.8	8.4	8.7	10.0
	P4	18.9	5.9	8.5	8.9	10.2
	P5	15.6	6.0	8.6	9.0	11.0
	P6	18.0	6.4	8.9	9.5	11.6
1.5	P1	16.6	6.2	8.8	9.3	11.3
	P2	15.5	5.8	8.3	8.6	10.2
	P3	18.9	5.9	8.5	8.9	10.4
	P4	19.3	5.9	8.6	9.0	10.5
	P5	16.7	6.0	8.7	9.2	11.2
	P6	17.9	6.4	8.9	9.5	11.5
2.0	P1	17.2	6.3	8.8	9.3	11.3
	P2	16.5	5.9	8.5	8.8	10.5
	P3	19.2	5.9	8.6	9.1	10.6
	P4	19.5	6.0	8.6	9.1	10.7
	P5	17.5	6.0	8.7	9.2	11.2
	P6	17.7	6.4	8.9	9.5	11.5
2.5	P1	17.8	6.3	8.8	9.3	11.3
	P2	17.4	6.0	8.6	8.9	10.7
	P3	19.3	6.0	8.7	9.1	10.8
	P4	19.6	6.0	8.7	9.2	10.8
	P5	17.9	6.1	8.7	9.3	11.2
	P6	18.0	6.4	8.9	9.5	11.5

・ライズタイム90sとして検討

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ パラメータスタディの妥当性確認 (取水槽に関する組合せ検討：基準断層モデル3-3(3/3))

■ 基準断層モデル3-3の詳細パラメータスタディを実施し、1~5号取水槽の各評価地点への影響が最も大きいケースを選定した。

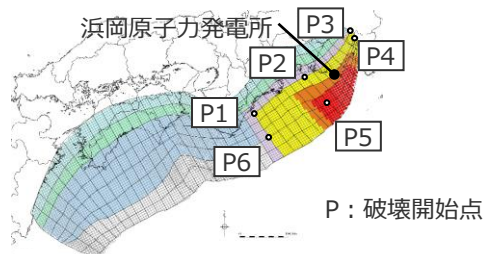
- ・基準断層モデル3-3：検討波源モデルD（東海地域の大すべり域が1箇所の場合）の大すべり域を東へ50km移動させたモデル
- ・津波評価では小数第一位に切り上げて保守的に津波高等を評価する

ライズタイムの不確かさ考慮

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	17.8	6.0	8.5	8.9	10.6
90	16.5	5.9	8.5	8.8	10.5
120	15.1	5.9	8.4	8.6	10.4
150	14.0	5.8	8.3	8.5	10.3
180	13.0	5.8	8.2	8.3	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.1	5.7	8.0	8.0	9.9
270	11.8	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.6	5.5	7.8	7.7	9.5

破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮（別ページ）

- ・朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P2として検討



破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮

破壊伝播速度(km/s)	破壊開始点	最大上昇水位(T.P.m)				
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
0.7	P1	14.9	6.2	8.6	8.9	11.0
	P2	11.9	5.4	7.5	7.4	8.9
	P3	16.3	5.7	8.1	8.3	9.4
	P4	17.2	5.7	8.2	8.5	9.6
	P5	13.9	5.8	8.4	8.6	10.7
	P6	16.6	6.4	8.9	9.4	11.5
1.0	P1	15.2	6.2	8.7	9.1	11.1
	P2	13.2	5.7	8.0	8.0	9.5
	P3	16.8	5.8	8.3	8.6	9.9
	P4	17.4	5.8	8.4	8.7	10.0
	P5	14.4	5.9	8.5	8.9	10.9
	P6	16.4	6.4	8.9	9.4	11.5
1.5	P1	15.7	6.1	8.7	9.2	11.2
	P2	14.5	5.8	8.3	8.4	10.1
	P3	17.2	5.9	8.5	8.8	10.3
	P4	17.6	5.9	8.5	8.9	10.4
	P5	15.1	6.0	8.6	9.0	11.1
	P6	16.3	6.3	8.8	9.4	11.4
2.0	P1	16.1	6.2	8.7	9.2	11.2
	P2	15.1	5.9	8.4	8.6	10.4
	P3	17.4	5.9	8.5	8.9	10.5
	P4	17.7	5.9	8.6	9.0	10.6
	P5	15.9	6.0	8.7	9.1	11.1
	P6	16.6	6.3	8.8	9.4	11.4
2.5	P1	16.5	6.2	8.7	9.3	11.2
	P2	15.7	5.9	8.5	8.8	10.6
	P3	17.5	5.9	8.6	9.0	10.7
	P4	17.8	6.0	8.6	9.0	10.7
	P5	16.3	6.0	8.7	9.2	11.2
	P6	16.9	6.3	8.8	9.4	11.4

・ライズタイム120sとして検討

太字：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

点線：「ライズタイムの不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点において影響の大きいケース（破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮の基準となる）

赤字：「破壊伝播速度、破壊開始点の不確かさ考慮」の中で、着目する評価地点（1~5号取水槽）における最大値

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 詳細パラメータスタディ (結果一覧(再掲))

- 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディの結果は以下のとおり。
 - 敷地前面への影響が大きいケース：基準断層モデル1-1（検討波源モデルA、大すべり域1箇所の場合）
 - 1～5号取水槽への影響が大きいケース：基準断層モデル3-2（検討波源モデルD、大すべり域1箇所の場合）
 - 3、4号取水塔への影響が大きいケース：基準断層モデル2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所の場合）

【水位上昇側】

モデル名		最大上昇水位(T.P. m)					備考
検討波源モデル	基準断層モデル	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルA (4倍すべり域を東海域に設定したモデル)	基準断層モデル1-1	22.7 (22.65)	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-2	22.7 (22.64)	4.6	7.3	8.1	10.0	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ30km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-3	22.7 (22.61)	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ20km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-4	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ10km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-5	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：基準位置 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	基準断層モデル3-1	19.4	6.4	8.9	9.5	11.6	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.0km/s、破壊開始点 P6
		19.5	6.4	8.9	9.5	11.6	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル3-2	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル3-3	19.3	6.4	8.9	9.5	11.7	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
19.0		6.4	8.9	9.5	11.7	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6	

・朔望平均満潮位T.P. +0.80mを考慮

【水位下降側】

モデル名		最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
検討波源モデル	基準断層モデル	3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルA (4倍すべり域を東海域に設定したモデル)	基準断層モデル2-1	海底面(13.2min)	海底面(13.2min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km 【詳細パラスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル2-2	海底面(13.3min)	海底面(13.3min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離140km 【詳細パラスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル2-3	海底面(13.6min)	海底面(13.5min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ30km・距離120km 【詳細パラスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P1
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	基準断層モデル4-1	海底面(12.5min)	海底面(12.4min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：基準位置・距離140km 【詳細パラスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P1

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮

・海底面：最大下降水位時に海底面が露出している（水深1m未満である）ことを示す。

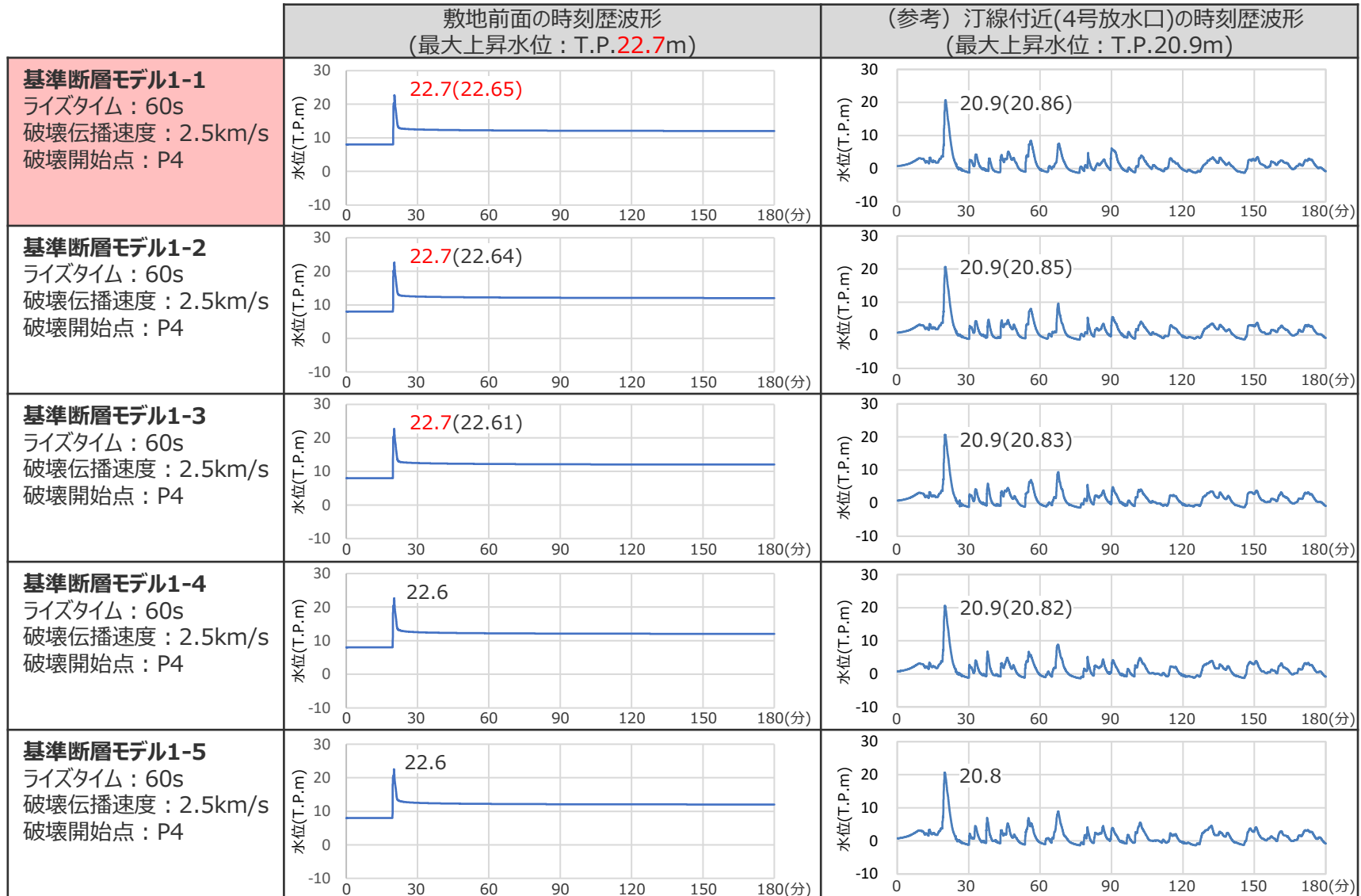
□：基準断層モデルごとに影響が大きく着目した評価地点
太字：全評価結果の中で、敷地への影響が最も大きいケース

3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果

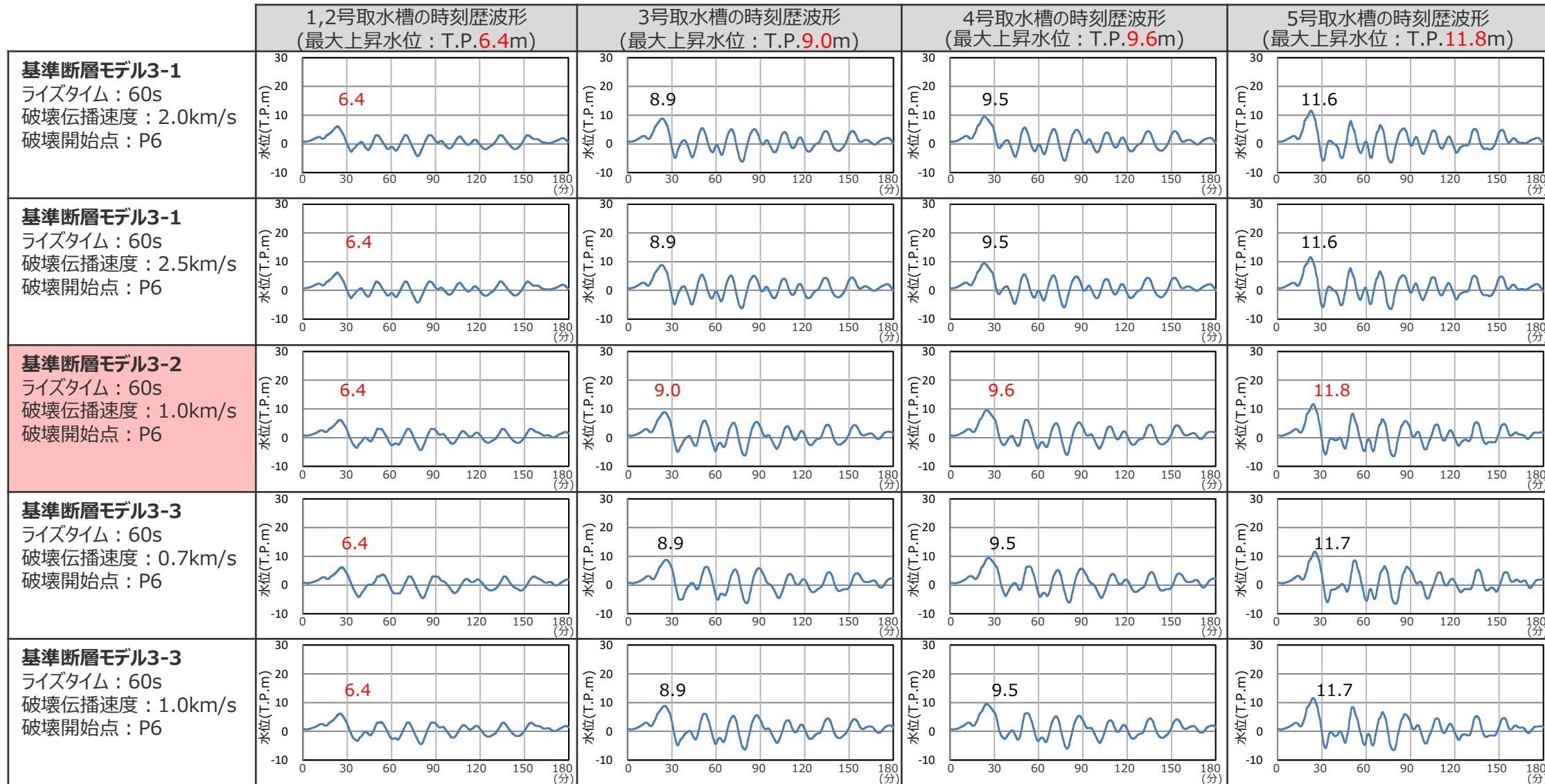
(水位上昇側：基準断層モデル1-1~1-5の時刻歴波形比較)

■ 選定した代表ケースについて津波波形を比較した結果、異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはなく、水位上昇側の敷地前面への津波影響は基準断層モデル1-1により代表できることを確認した。



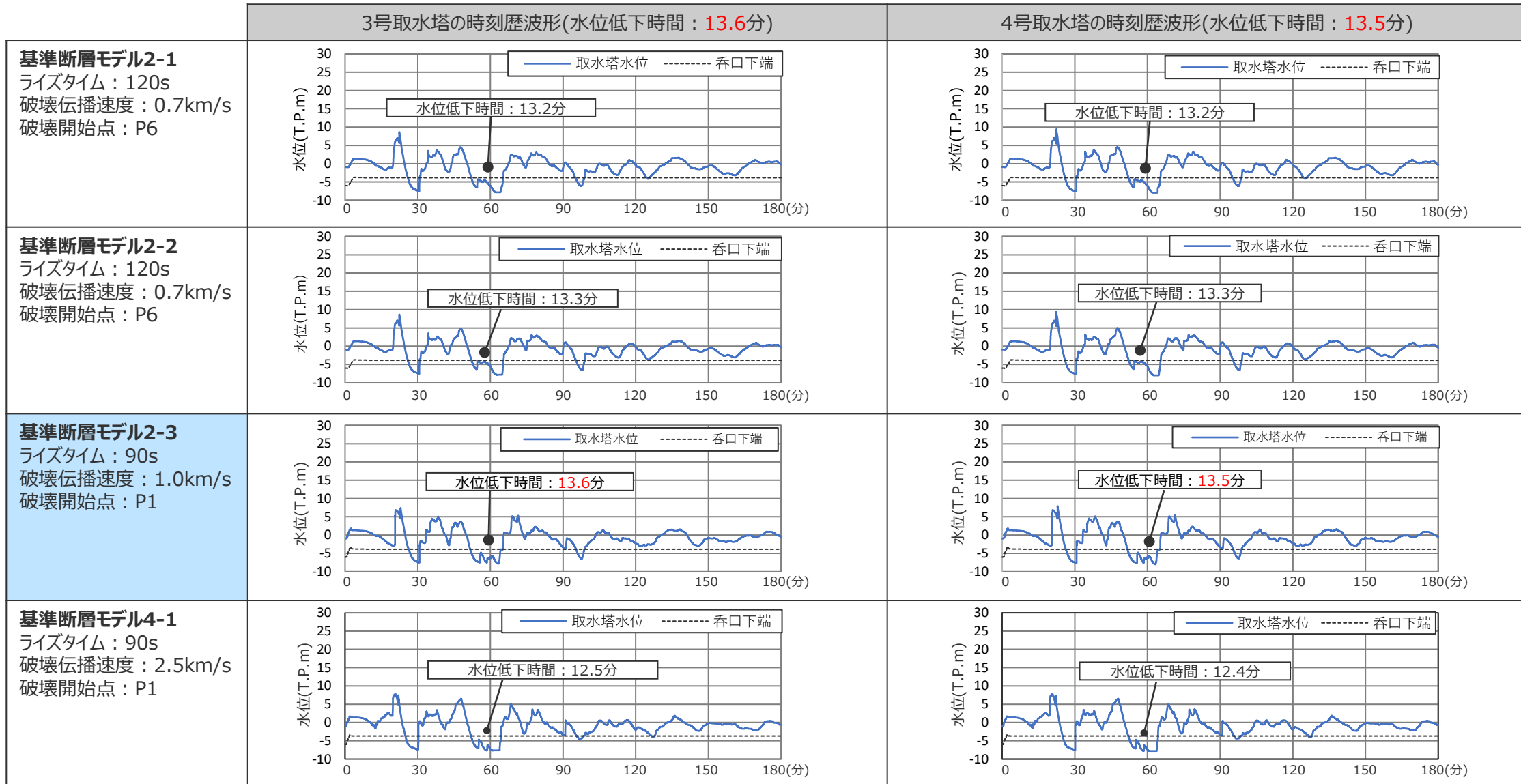
3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (水位上昇側：基準断層モデル3-1~3-3の時刻歴波形比較)

■ 選定した代表ケースについて津波波形を比較した結果、異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはなく、水位上昇側の1～5号取水槽への津波影響は基準断層モデル3-2により代表できることを確認した。



3 動的パラメータに関するパラメータスタディ 各波源モデルの詳細パラメータスタディ結果 (基準断層モデル2-1~2-3、4-1の水位の時刻歴波形)

■ 選定した代表ケースについて津波波形を比較した結果、異なる傾向（津波波形の全体的な形状が異なる、最大値が発生する波峰等が異なる、等）を有するケースはなく、水位下降側の3, 4号取水塔への津波影響は基準断層モデル2-3により代表できることを確認した。



目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定 (本編1章)

基準断層モデルの設定 (本編2章)

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)

・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)

・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
→敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

基準断層モデルの設定 (本編2.3章)
(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)
(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルC）。

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

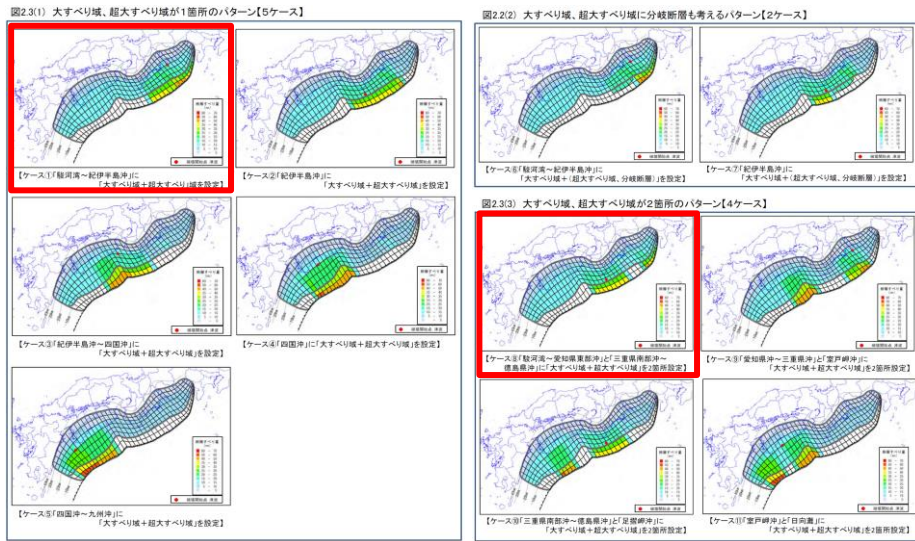
・敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域位置のパラメータスタディを実施することにより、基準断層モデルを設定。

・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）のパラメータスタディを、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、内閣府の最大クラスモデルとの比較を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

4 内閣府の最大クラスモデルとの比較分析 検討方針

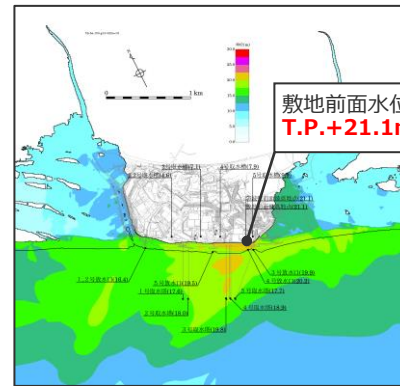
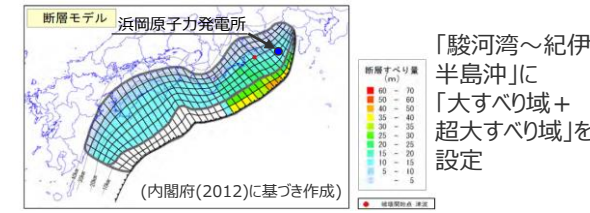
- 内閣府「南海トラフの巨大地震モデル検討会」では2011年東北沖地震発生後、中央防災会議「東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会報告」（平成23年9月28日）の「あらゆる可能性を考慮した最大クラスの巨大な地震・津波を検討していくべき」との提言を受け、最大クラスの津波の推計を行った結果、11ケースの最大クラスの波源モデルを設定している。
- 11ケースの最大クラスの波源モデルによる敷地の津波評価の結果、敷地への影響が大きいケースは、水位上昇側はケース①、水位下降側はケース⑧である。
- ここでは、敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデル（ケース①：水位上昇側、ケース⑧：水位下降側）と、内閣府(2012)の手法を用いて設定した検討波源モデルAについてパラメータ設定と津波評価結果を比較し、敷地への影響の観点から、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めた検討になっていることを確認することにより、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認する。



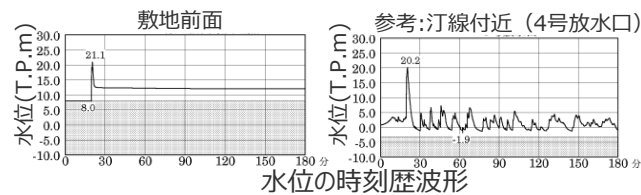
(内閣府(2012))

内閣府の最大クラスモデルの波源モデル（ケース①～⑪）

水位上昇側
【基本的な検討ケース】ケース①



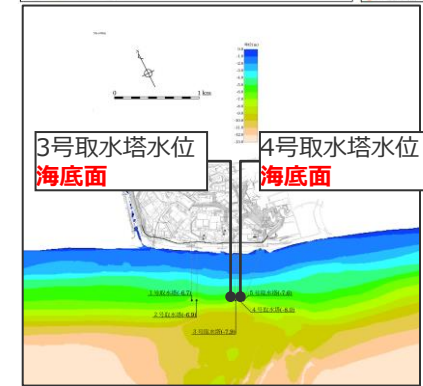
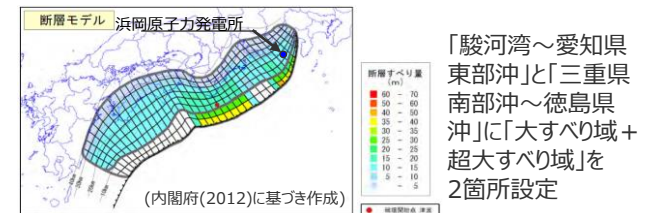
最大上昇水位分布



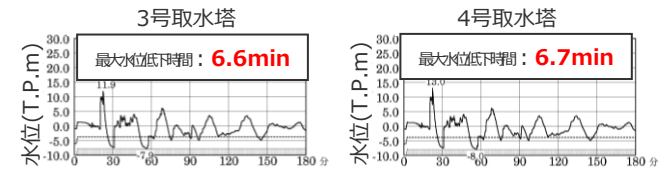
敷地前面 水位の時刻歴波形

- ・ 朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・ 網掛け部の上端は当該地点の標高

水位下降側
【派生的な検討ケース】ケース⑧



最大下降水位分布



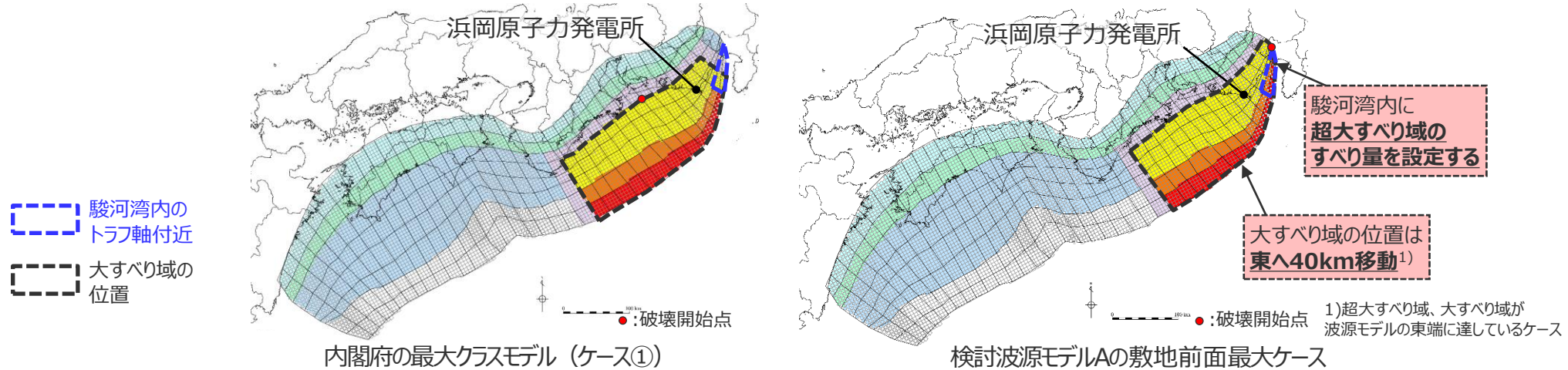
水位の時刻歴波形

- ・ 朔望平均干潮位T.P.-0.93mを考慮
- ・ 海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

(水位上昇側)

- 内閣府の最大クラスモデルと、検討波源モデルAのうち敷地前面津波高が最大となったケース（基準断層モデル1-1）とのパラメータ設定の違いは以下のとおり。
- 水位上昇側において敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデル（ケース①）に対して、検討波源モデルAの敷地前面最大ケースは、動的パラメータである破壊開始点の他、駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していること、超大すべり域・大すべり域を移動させていることにより、敷地への影響の観点から、より幅広く不確かさを考慮したモデルとなっていることを確認した。



項目		内閣府の最大クラスモデル（ケース①）	検討波源モデルAの敷地前面最大ケース (敷地への影響の観点から検討)
駿河湾内のすべり量の設定		超大すべり域のすべり量を設定しない	超大すべり域のすべり量を設定する
超大すべり域・大すべり域の位置		基準位置 (駿河湾～紀伊半島沖)	東へ40km移動¹⁾ (東西100km程度の範囲で10kmずつ移動させたうちの最大ケース)
動的パラメータ	ライズタイム	60s	60s (60～300sのうち最大ケース)
	破壊伝播速度	2.5km/s	2.5km/s (0.7～2.5km/sのうち最大ケース)
	破壊開始点	大すべり域の下端中央	大すべり域の上端東側 (大すべり域の周囲6箇所のうち最大ケース)
敷地前面津波高(T.P.+m)		21.1	22.7

■:4倍すべり域 ■:3倍すべり域 ■:2倍すべり域 ■:遷移領域 ■:背景領域 ■:深い背景領域 ■:最も深い背景領域 ■:浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

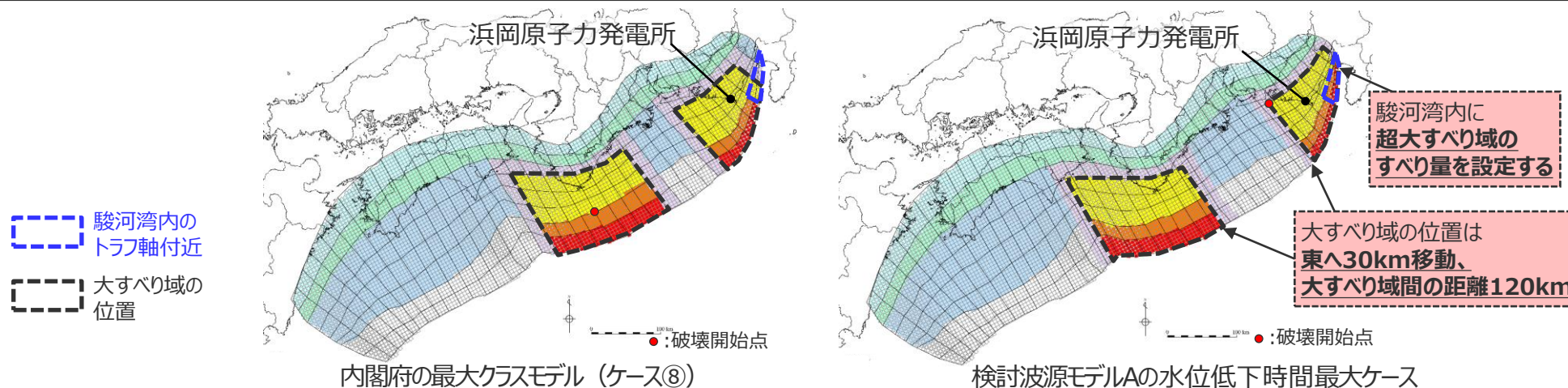
・赤太字は内閣府の最大クラスモデルと異なる設定
・() 内はパラメータスタディにおける設定範囲

4 内閣府の最大クラスモデルとの比較分析

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

(水位下降側)

- 内閣府の最大クラスモデルと、検討波源モデルAのうち取水塔の水位低下時間が最大となったケース（基準断層モデル2-3）とのパラメータ設定の違いは以下のとおり。
- 水位下降側において敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデル（ケース⑧）に対して、検討波源モデルAの水位低下時間最大ケースは、動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）の他、駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していること、超大すべり域・大すべり域を移動させていることにより、敷地への影響の観点から、より幅広く不確かさを考慮したモデルとなっていることを確認した。



項目		内閣府の最大クラスモデル (ケース⑧)	検討波源モデルAの水位低下時間最大ケース (敷地への影響の観点から検討)
駿河湾内のすべり量の設定		超大すべり域のすべり量を設定しない	超大すべり域のすべり量を設定する
超大すべり域・大すべり域の位置		基準位置、大すべり域間の距離60km (「駿河湾～愛知県東部沖」、「三重県南部沖～徳島県沖」)	東へ30km移動、大すべり域間の距離120km (東西100km程度の範囲で独立に10kmずつ移動させたうちの最大ケース)
動的パラメータ	ライズタイム	60s	90s (60～300sのうち最大ケース)
	破壊伝播速度	2.5km/s	1.0km/s (0.7～2.5km/sのうち最大ケース)
	破壊開始点	大すべり域の上端中央 (昭和東南海地震、昭和南海地震の破壊開始点の位置を参考に設定)	大すべり域の下端西側 (大すべり域の周囲6箇所のうち最大ケース)
取水塔水位低下時間		6.7min	13.6min

■:4倍すべり域 ■:3倍すべり域 ■:2倍すべり域 ■:遷移領域 ■:背景領域 ■:深い背景領域 ■:最も深い背景領域 ■:浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

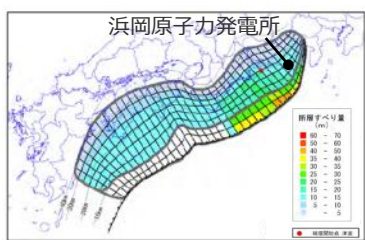
・赤太字は内閣府の最大クラスモデルと異なる設定
・()内はパラメータスタディにおける設定範囲

最大クラスモデルのすべり量分布との比較

(水位上昇側)

- 内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルAの敷地前面最大ケースのすべり量分布を比較して示す。
- 検討波源モデルAでは、内閣府の最大クラスモデルに対して、敷地への影響の観点から、①駿河湾内のトラフ軸付近に超大すべり域のすべり量を設定するとともに、②超大すべり域・大すべり域の位置を東へ40km移動させている。

内閣府の最大クラスモデル (ケース①)



波源モデル

各小断層のすべり量 (m)

深度40kmL	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30kmL	1	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.1	3.0	3.0	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0
	2	7.5	7.5	7.3	7.3	7.1	7.1	6.4	6.2	6.0	5.9	5.9	5.7	5.6	5.4	5.4	5.2	5.2	5.1	5.1	5.0	5.0	4.8	5.2	5.2	4.5	4.5	3.9	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.7	2.7	2.0		
20kmL	3	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	12.1	11.8	11.4	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	10.5	11.6	11.6	11.5	11.1	11.1	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	6.3	6.3	4.0
	4	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.4	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	10.5	14.1	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.6	4.0
	5	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	10.5	14.6	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	10.9	7.6	5.5	
10kmL	6	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	10.5	14.6	18.2	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	7.6	5.5
	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.6	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	10.9	7.6	5.5
0kmL	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.6	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	10.9	7.6	5.5

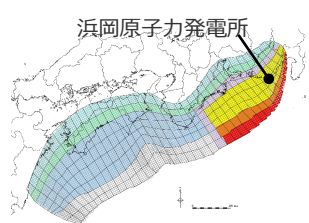
② 大すべり域の位置は 紀伊半島沖～駿河湾(基準位置)

① 駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定しない¹⁾

駿河湾内のトラフ軸付近

(内閣府(2012)に基づき作成)

検討波源モデルAの敷地前面最大ケース



波源モデル

各小断層のすべり量 (m)

深度40kmL	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30kmL	1	3.8	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6	3.3	3.2	3.1	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.6	2.3	2.3	2.0	2.0	1.6	1.6	1.6	1.6	1.4	1.4	1.0	1.0
	2	7.6	7.6	7.4	7.4	7.2	7.2	6.5	6.3	6.3	6.2	6.0	6.0	5.8	5.7	5.5	5.5	5.3	5.3	5.2	5.2	5.1	5.1	4.9	5.3	5.3	4.6	4.6	3.9	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.8	2.8	2.0	
20kmL	3	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	11.6	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	10.3	10.3	11.5	11.1	11.1	11.9	11.9	10.5	10.5	8.9	8.9	8.9	7.0	7.0	6.3	4.6
	4	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	7.1	
	5	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	9.8		
10kmL	6	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	10.3	14.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	9.8	9.8	
	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	26.9	26.9	25.9	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.1	16.4	14.7	14.7	
0kmL	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	26.9	26.9	25.9	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.1	16.4	14.7	14.7	

② 大すべり域の位置は 東へ40km移動

① 駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定する¹⁾

駿河湾内のトラフ軸付近

1)内閣府(2012)では「駿河湾内のトラフ軸付近の領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10km の位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす」とされるが、検討波源モデルでは敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量ではなく超大すべり域のすべり量を設定した。

■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域) ■ :大すべり域以上の領域

4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 まとめ

- 敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルAについて、パラメータ設定と津波評価結果を比較した。
- その結果、敷地の津波評価が、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めた検討になっていること、そのうえで敷地への影響の観点からより幅広く不確かさを考慮したものとなっていることから、敷地のプレート間地震の津波評価は妥当であることを確認した。

プレート間地震の津波評価（南海トラフのMw9クラスのプレート間地震の津波評価）

○すべり量分布

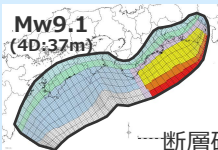
既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル
 広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定
 ↳ 3倍すべり域を広域に設定した場合

より敷地への影響が大きいモデルを設定

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定

- ↳ 断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合※
- ↳ 断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播する場合
- ↳ 超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合



※内閣府(2012)によるすべり量分布に対して、駿河湾内にも超大すべり域のすべり量を考慮

断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合の例

D:平均すべり量（括弧内の数値は、面積割合）

オレンジ太字：内閣府の最大クラスモデル（ケース①）のパラメータ

○パラメータスタディ

超大すべり域・大すべり域の位置	・東西約10kmごとに移動 (駿河湾～紀伊半島沖を含む) ・大すべり域：1箇所、2箇所
ライズタイム	・60s～300s
破壊伝播速度	・0.7～2.5km/s
破壊開始点	・大すべり域の周囲の6地点 (大すべり域の下端中央を含む)

・パラメータスタディは、国内外の巨大地震・津波に基づく知見を踏まえて段階的に実施。

○津波評価結果

敷地 前面	最大上昇水位 (T.P.m)			
	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
22.7	4.6	7.3	8.1	10.1
19.8	6.4	9.0	9.6	11.8

(上段：プレート境界面浅部に伝播する場合、大すべり域1箇所)
 (下段：超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合、大すべり域1箇所)

水位低下時間	
3号取水塔	4号取水塔
13.6min	13.5min

(プレート境界面浅部に伝播する場合、大すべり域2箇所)

(参考)

内閣府の最大クラスモデルの津波評価結果

敷地 前面	最大上昇水位 (T.P.m)			
	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
21.1	4.6	7.1	7.9	9.9

水位低下時間	
3号取水塔	4号取水塔
6.6min	6.7min

4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (補足) 最大クラスモデルのパラメータ設定との違いによる津波評価への影響確認 (影響確認のために設定した波源モデル)

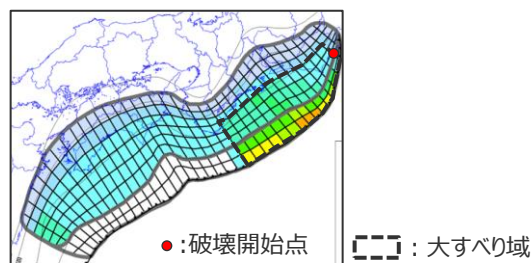
- 内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルAの敷地前面最大ケースのパラメータ設定の違いによる影響を定量的に確認する。
- ここで、検討波源モデルAの敷地前面最大ケースのすべり量分布において、①駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していること、②超大すべり域・大すべり域の位置を東へ40km移動させていることによる影響をそれぞれ確認するため、検討波源モデルAに関する津波評価では、①②の設定を以下のとおりステップを踏んで考慮した3つの波源モデルを設定した。

内閣府の最大クラスモデル (ケース①) に関する津波評価			
モデル	破壊開始点	駿河湾内のすべり量の設定	超大すべり域・大すべり域の位置
内閣府の最大クラスモデル	大すべり域の下端中央 (P2)	超大すべり域のすべり量を設定しない	基準位置

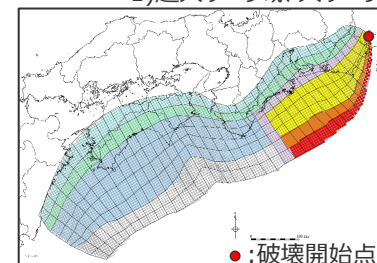
- ・ **赤字**は内閣府の最大クラスモデルそのものと異なる設定
- ・ 内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルAの敷地前面最大ケースとで共通となるその他のパラメータは、そのまま設定
- ・ 内閣府の最大クラスモデル、および、内閣府の最大クラスモデルと同等のモデル対して、破壊開始点を振った検討結果は、第1109回 補足説明資料6-1章参照

検討波源モデルAに関する津波評価			
モデル	破壊開始点	駿河湾内のすべり量の設定	超大すべり域・大すべり域の位置
内閣府の最大クラスモデルと同等のモデル	大すべり域の下端中央 (P2)	超大すべり域のすべり量を設定しない	基準位置
内閣府の最大クラスモデルと同等のモデル (破壊開始点をP4に変更) (①②を考慮しないモデル)	大すべり域の上端東側 (P4)	超大すべり域のすべり量を設定しない	基準位置
検討波源モデルA (①のみ考慮したモデル)	大すべり域の上端東側 (P4)	超大すべり域のすべり量を設定する (①)	基準位置
検討波源モデルAの敷地前面最大ケース (①②を考慮したモデル)	大すべり域の上端東側 (P4)	超大すべり域のすべり量を設定する (①)	東へ40km移動¹⁾ (②)

1) 超大すべり域、大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース



内閣府の最大クラスモデル (破壊開始点をP4に変更)

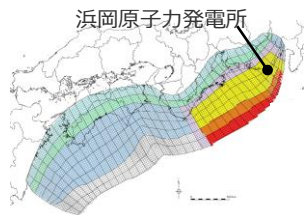


検討波源モデルAの敷地前面最大ケース (破壊開始点P4)

4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (補足) 最大クラスモデルのパラメータ設定との違いによる津波評価への影響確認 (影響確認のために設定した波源モデルのすべり量分布)

■ 検討波源モデルAに関する津波評価において設定した波源モデルのすべり量分布を以下に示す。

○内閣府の最大クラスモデルと同等のモデル (①②を考慮しないモデル)



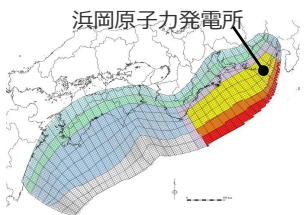
各小断層のすべり量 (m)

深度40kmL		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30kmL	1	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.1	3.0	3.0	3.0	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0
	2	7.5	7.5	7.3	7.3	7.1	7.1	6.4	6.2	6.2	6.0	5.9	5.9	5.7	5.6	5.4	5.4	5.4	5.2	5.2	5.2	5.1	5.1	5.0	5.0	4.8	5.2	5.2	4.5	4.5	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.7	2.7	2.0	
20kmL	3	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	12.1	11.8	11.4	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	10.5	10.5	11.6	11.6	11.5	11.1	11.1	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	5.1	5.1	4.0
	4	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.4	4.0
10kmL	5	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	8.2	5.5
	6	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	14.3	18.2	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.2	5.5
0kmL	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	10.9	8.2	5.5	
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	10.9	8.2	5.5	

・ なお、前々頁の内閣府の最大クラスモデルそのものと比較すると、遷移領域のすべり量の数値が若干異なるが、津波評価への影響がないことを確認済。(第1109回 補足説明資料6-1章参照)

駿河湾内の
トラフ軸付近

○検討波源モデルA (①のみ考慮したモデル)



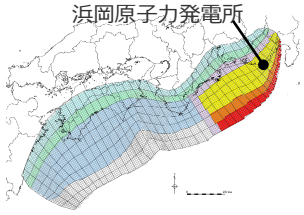
各小断層のすべり量 (m)

深度40kmL		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30kmL	1	3.8	3.8	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.1	3.0	3.0	3.0	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0
	2	7.5	7.5	7.3	7.3	7.1	7.1	6.4	6.2	6.2	6.0	5.9	5.9	5.7	5.6	5.4	5.4	5.4	5.2	5.2	5.2	5.1	5.1	5.0	5.0	4.8	5.2	5.2	4.5	4.5	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.7	2.7	2.0	
20kmL	3	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	12.1	11.8	11.4	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.5	10.5	10.5	11.6	11.6	11.5	11.1	11.1	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	5.1	5.1	4.0
	4	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.4	4.0
10kmL	5	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.1	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	8.2	5.5
	6	15.0	15.0	14.5	14.5	14.1	14.1	14.1	12.8	12.8	12.4	12.4	12.1	11.8	11.8	11.4	11.1	11.1	10.8	10.8	10.8	10.5	14.3	18.2	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.2	5.5
0kmL	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	10.9	8.2	5.5	
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	10.9	8.2	5.5	

① 駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定する

駿河湾内の
トラフ軸付近

○検討波源モデルAの敷地前面最大ケース (①②を考慮したモデル)



各小断層のすべり量 (m)

深度40kmL		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30kmL	1	3.8	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6	3.3	3.2	3.1	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.6	2.3	2.3	2.0	2.0	1.6	1.6	1.6	1.6	1.4	1.4	1.0	1.0
	2	7.6	7.6	7.4	7.4	7.2	7.2	6.5	6.3	6.3	6.2	6.0	6.0	5.8	5.7	5.5	5.5	5.5	5.3	5.3	5.3	5.2	5.1	5.1	4.9	5.3	5.3	4.6	4.6	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.8	2.8	2.0		
20kmL	3	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.3	12.3	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.7	10.3	10.3	11.5	11.1	11.1	11.9	11.9	10.5	10.5	8.9	8.9	8.9	7.0	7.0	6.3	6.3	4.6	
	4	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	7.1	
10kmL	5	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	14.1	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	9.8	9.8	
	6	15.3	15.3	14.8	14.8	14.4	14.4	13.1	13.1	12.6	12.6	12.3	12.3	12.0	12.0	11.6	11.3	11.3	11.0	11.0	10.7	10.7	10.3	14.1	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	9.8	9.8	
0kmL	7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	26.9	26.9	25.9	25.9	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	16.4	14.7	14.7	
	8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.1	26.9	26.9	25.9	25.9	25.9	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	16.4	14.7	14.7	

② 大すべり域の位置は東へ40km移動

① 駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定する

駿河湾内の
トラフ軸付近

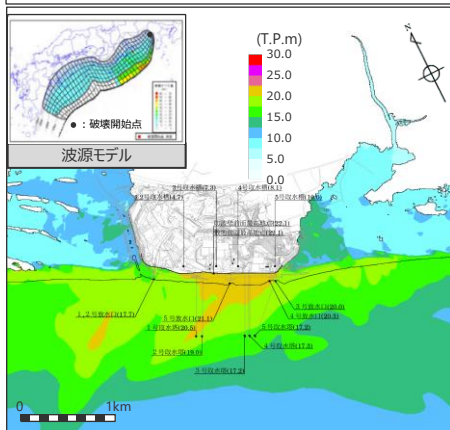
① 駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定
② 超大すべり域・大すべり域の位置を東へ40km移動

■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域) ■ :大すべり域以上の領域

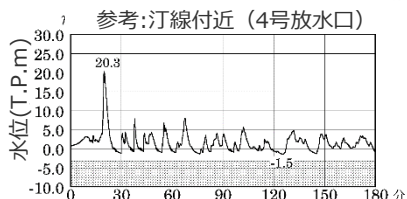
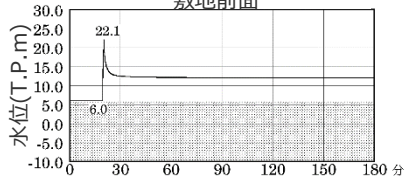
4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (補足) 最大クラスモデルのパラメータ設定との違いによる津波評価への影響確認 (津波評価結果の比較(1/2))

- 内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルAに関する、破壊開始点の条件を揃えた津波評価の分析結果を以下に示す。
- 検討波源モデルAの敷地前面最大ケースの敷地前面の津波高：T.P. + 22.7mは、内閣府の最大クラスモデル（破壊開始点：大すべり域の下端中央(P2)）から破壊開始点を大すべり域の上端東側(P4)とした内閣府の最大クラスモデルと同等のすべり量分布のモデルの津波高T.P. + 22.1mに対して、①駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していることによる影響：+0.5mと、②超大すべり域・大すべり域の位置を東へ40km移動させていることによる影響：+0.1mを考慮することにより、浜岡敷地への津波影響の観点から、より幅広く不確かさを考慮していることを確認した。

内閣府の最大クラスモデル（ケース①）に関する津波評価
破壊開始点をP4に変更



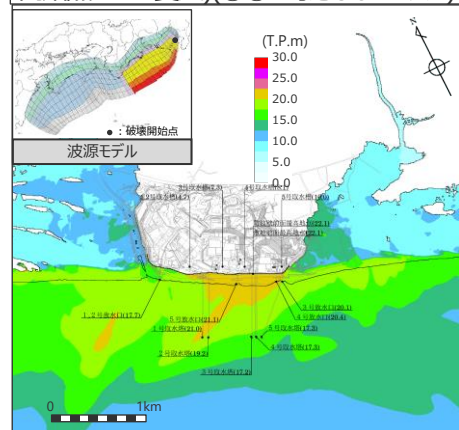
最大上昇水位分布
敷地前面



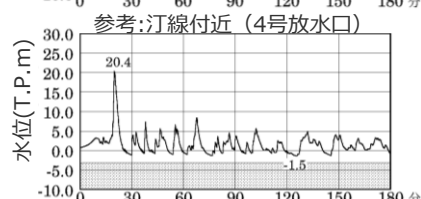
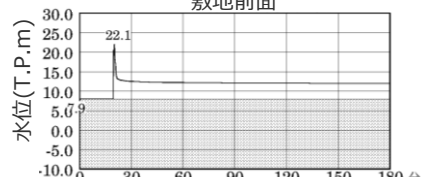
水位の時刻歴波形

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
22.1	4.7	7.3	8.1	10.0

内閣府の最大クラスモデルと同等のモデル(破壊開始点をP4に変更)(①②を考慮しないモデル)



最大上昇水位分布
敷地前面

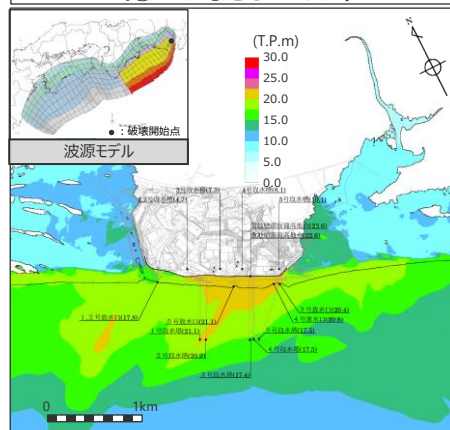


水位の時刻歴波形

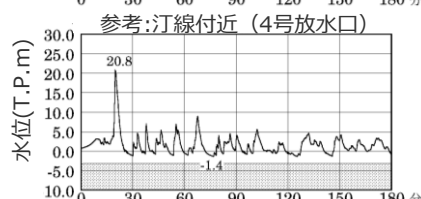
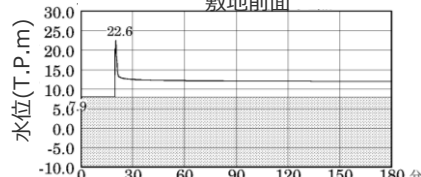
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
22.1	4.7	7.3	8.1	10.0

検討波源モデルAに関する津波評価

検討波源モデルA (①のみ考慮したモデル)



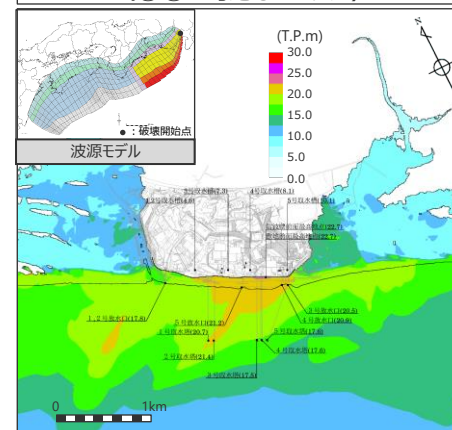
最大上昇水位分布
敷地前面



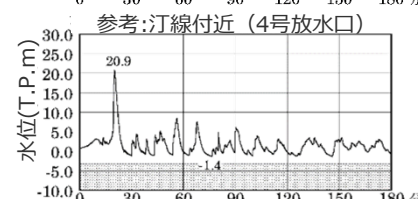
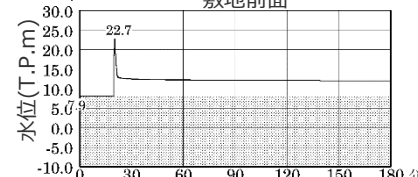
水位の時刻歴波形

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
22.6	4.7	7.3	8.1	10.1

検討波源モデルAの敷地前面最大ケース (①②を考慮したモデル)



最大上昇水位分布
敷地前面



水位の時刻歴波形

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
22.7	4.6	7.3	8.1	10.1

4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (補足) 最大クラスモデルのパラメータ設定との違いによる津波評価への影響確認 (津波評価結果の比較(2/2))

- 内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルAのうち敷地前面津波高が最大となったケースとのパラメータ設定の違いを比較して示すとともに、両者の破壊開始点の条件を揃えて津波評価を実施し、すべり量分布の設定の違いが評価結果に与える影響について定量的な分析を行った。
- その結果、内閣府の最大クラスモデルに対して、検討波源モデルAの敷地前面最大ケースは、破壊開始点の他、駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していること、超大すべり域・大すべり域を移動させていることにより、敷地への影響の観点から、より幅広く不確かさを考慮したモデルとなっていることを確認した。

内閣府の最大クラスモデル (ケース①) に関する津波評価

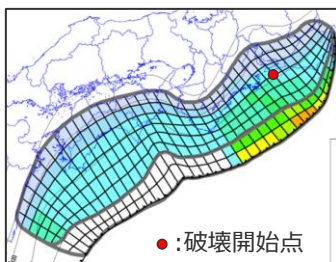
モデル	破壊開始点	駿河湾内のすべり量の設定	超大すべり域・大すべり域の位置	敷地前面津波高 (T.P.+m)
内閣府の最大クラスモデル	大すべり域の下端中央 (P2)	超大すべり域のすべり量を設定しない	基準位置	21.1

- ・ **赤字**は内閣府の最大クラスモデルそのものと異なる設定
- ・ 内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルAの敷地前面最大ケースとで共通となるその他のパラメータは、そのまま設定。
- ・ 内閣府の最大クラスモデル、および、内閣府の最大クラスモデルと同等のモデルに対して、破壊開始点を振った検討結果は、第1109回 補足説明資料6-1章参照

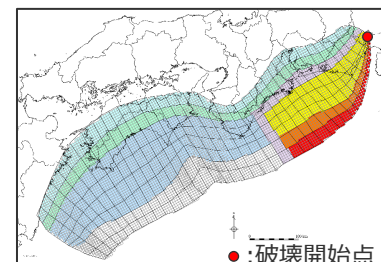
検討波源モデルAに関する津波評価

モデル	破壊開始点	駿河湾内のすべり量の設定	超大すべり域・大すべり域の位置	敷地前面津波高 (T.P.+m)
内閣府の最大クラスモデルと同等のモデル	大すべり域の下端中央 (P2)	超大すべり域のすべり量を設定しない	基準位置	21.1
内閣府の最大クラスモデルと同等のモデル (破壊開始点をP4に変更) (①②を考慮しないモデル)	大すべり域の上端東側 (P4)	超大すべり域のすべり量を設定しない	基準位置	22.1
検討波源モデルA (①のみ考慮したモデル)	大すべり域の上端東側 (P4)	超大すべり域のすべり量を設定する (①)	基準位置	22.6
検討波源モデルAの敷地前面最大ケース (①②を考慮したモデル)	大すべり域の上端東側 (P4)	超大すべり域のすべり量を設定する (①)	東へ40km移動¹⁾ (②)	22.7

1) 超大すべり域、大すべり域が波源モデルの東端に達しているケース

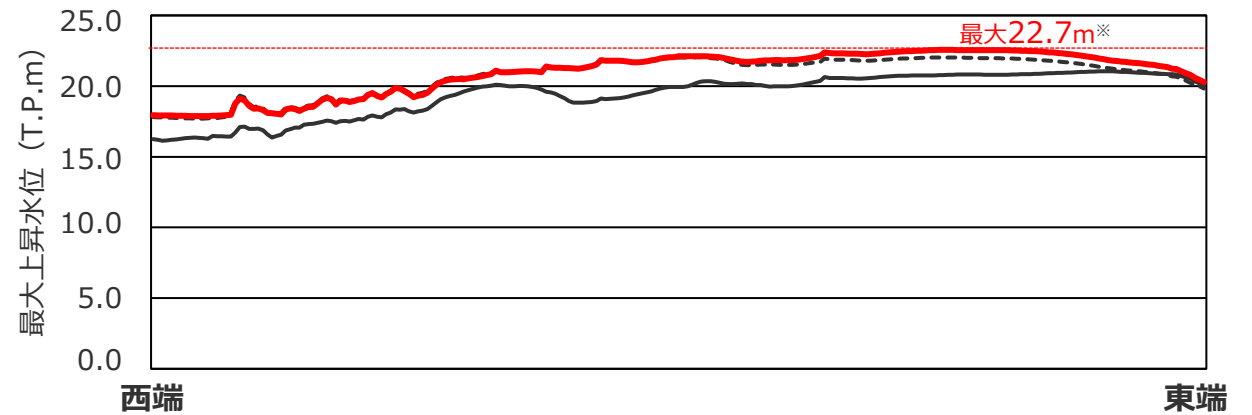
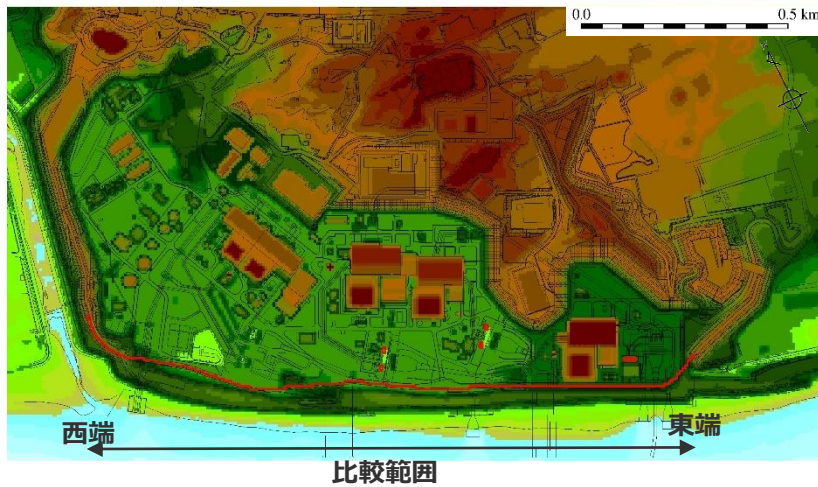


内閣府の最大クラスモデル (ケース①)



検討波源モデルAの敷地前面最大ケース

4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (補足) 最大クラスモデルのパラメータ設定との違いによる津波評価への影響確認 (敷地前面における最大上昇水位の比較)



敷地前面における最大上昇水位の比較

※防波壁の高さを無限大として解析を実施

- 検討波源モデルの津波評価結果
(検討波源モデルAの敷地前面最大ケース：破壊開始点は大すべり域の上端東側(P4))
- - - 内閣府の最大クラスモデルの津波評価結果
(最大クラスモデル(ケース①)：破壊開始点を大すべり域の上端東側(P4)に変更)
- 内閣府の最大クラスモデルの津波評価結果
(最大クラスモデル(ケース①)：破壊開始点は大すべり域の下端中央(P2))

目次

[プレート間地震の津波評価]

1	検討対象地震の選定	11
2	基準断層モデルの設定	19
2.1	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	33
2.1.1	既往最大地震の津波痕跡再現モデルの検討	36
2.1.2	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定	47
2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	55
2.2.1	遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルの検討	59
2.2.2	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定	76
2.3	基準断層モデルの設定（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ）	105
3	動的パラメータに関するパラメータスタディ	132
4	内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認	221
5	プレート間地震の津波評価結果まとめ	234

5 プレート間地震の津波評価結果まとめ

プレート間地震の津波評価結果

■ プレート間地震の津波評価結果は以下のとおり。敷地前面の最大上昇水位はT.P.+22.7m、3、4号取水塔の水位低下時間は13.6minとなった。

【検討波源モデルの津波評価結果】

(水位上昇側)

波源モデル	最大上昇水位(T.P. m) *1					備考
	敷地 前面	1,2号 取水塔	3号 取水塔	4号 取水塔	5号 取水塔	
基準断層モデル1-1(検討波源モデルA)	22.7(22.65)	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-2(検討波源モデルA)	22.7(22.64)	4.6	7.3	8.1	10.0	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ30km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-3(検討波源モデルA)	22.7(22.61)	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ20km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-4(検討波源モデルA)	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ10km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-5(検討波源モデルA)	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：基準位置 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル3-1(検討波源モデルD)	19.4	6.4	8.9	9.5	11.6	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P6
	19.5	6.4	8.9	9.5	11.6	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル3-2(検討波源モデルD)	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル3-3(検討波源モデルD)	19.3	6.4	8.9	9.5	11.7	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
	19.0	6.4	8.9	9.5	11.7	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細/バスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6

*1 水位上昇側：朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮

(水位下降側)

波源モデル	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
	3号取水塔	4号取水塔	
基準断層モデル2-1(検討波源モデルA)	海底面(13.2min)	海底面(13.2min)	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km 【詳細/バスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル2-2(検討波源モデルA)	海底面(13.3min)	海底面(13.3min)	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離140km 【詳細/バスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル2-3(検討波源モデルA)	海底面(13.6min)	海底面(13.5min)	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ30km・距離120km 【詳細/バスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P1
基準断層モデル4-1(検討波源モデルD)	海底面(12.5min)	海底面(12.4min)	【概略/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：基準位置・距離140km 【詳細/バスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P1

*1 水位下降側：朔望平均干潮位T.P.-0.93mを考慮

*2 海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している(水深1m未満である)ことを示す。

参考：行政機関等による津波評価

(水位上昇側)

波源モデル	最大上昇水位(T.P. m)					備考
	敷地 前面	1,2号 取水塔	3号 取水塔	4号 取水塔	5号 取水塔	
内閣府の最大クラスモデル(ケース①)	21.1	4.6	7.1	7.9	9.9	ケース①
土木学会(2016)モデル	13.0	4.5	6.2	6.3	8.1	大すべり域の位置：東側モデル 破壊開始点 P5

(水位下降側)

波源モデル	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
	3号取水塔	4号取水塔	
内閣府の最大クラスモデル(ケース⑧)	海底面(6.6min)	海底面(6.7min)	ケース⑧
土木学会(2016)モデル	海底面(7.4min)	海底面(7.3min)	大すべり域の位置：東側モデル 破壊開始点 P2

*1 防波壁および3~5号取水塔溢水防止壁の高さを無限大として解析を実施。また、1・2号取水塔周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。

□：基準断層モデルごとに 影響が大きく着目した評価地点

太字：全評価結果の中で、敷地への影響が最も大きいケース

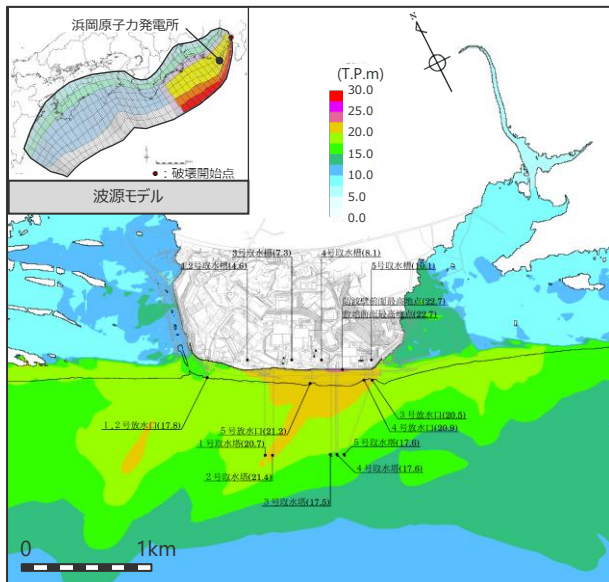
*2 行政機関等による津波評価の詳細は、第1109回 補足説明資料5章を参照。

5 プレート間地震の津波評価結果まとめ プレート間地震の津波評価結果

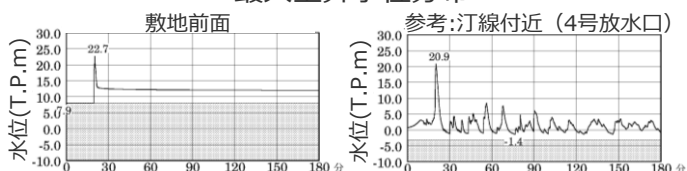
水位上昇側

基準断層モデル1-1

検討波源モデル A 大すべり域の数：東海地域1箇所
大すべり域の位置：東へ40km移動
ライスタイム60s
破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

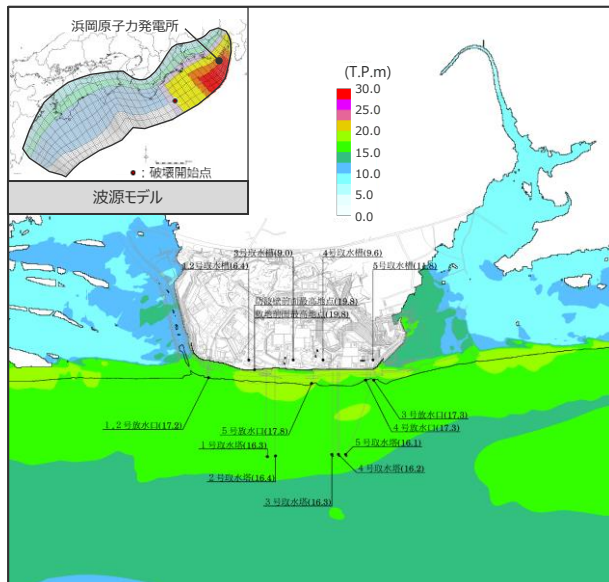
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
22.7 ^{*1}	4.6	7.3	8.1	10.1

*1 防波壁の高さを無限大として解析を実施。今後、基準津波の確定後、必要な対策を実施していく。

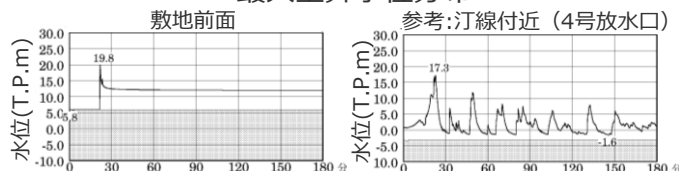
*2 1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。なお、括弧内の数値は、取水路の設備対策（1号取水路出口流路の縮小(流路面積1.0m²)・2号取水路出口流路の閉塞）を実施した場合における解析結果。

基準断層モデル3-2

検討波源モデル D 大すべり域の数：東海地域1箇所
大すべり域の位置：東へ60km移動
ライスタイム60s
破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6



最大上昇水位分布



水位の時刻歴波形

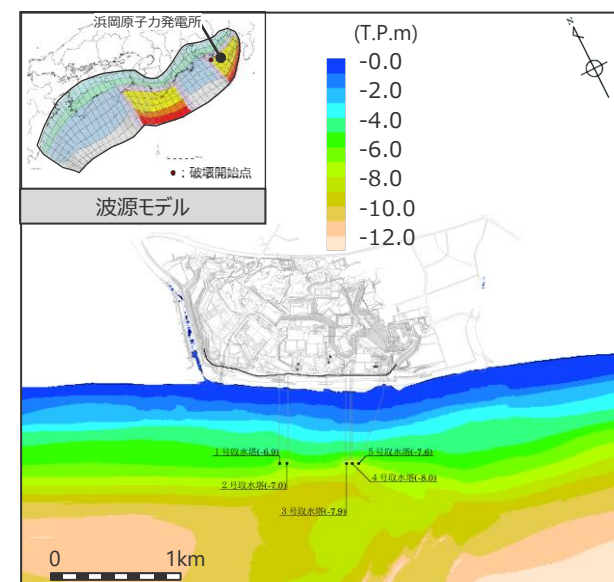
- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
19.8	6.4 ^{*2} (3.1)	9.0	9.6	11.8

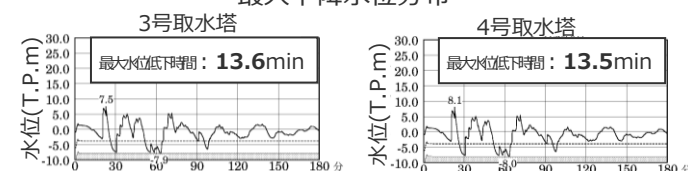
水位下降側

基準断層モデル2-3

検討波源モデル A 大すべり域の数：東海地域2箇所
大すべり域の位置：敷地に近い大すべり域を東へ30km移動・大すべり域間の距離120km、
ライスタイム 90s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P1



最大下降水位分布



水位の時刻歴波形・網掛け部の上端は当該地点の標高

- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮
- ・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

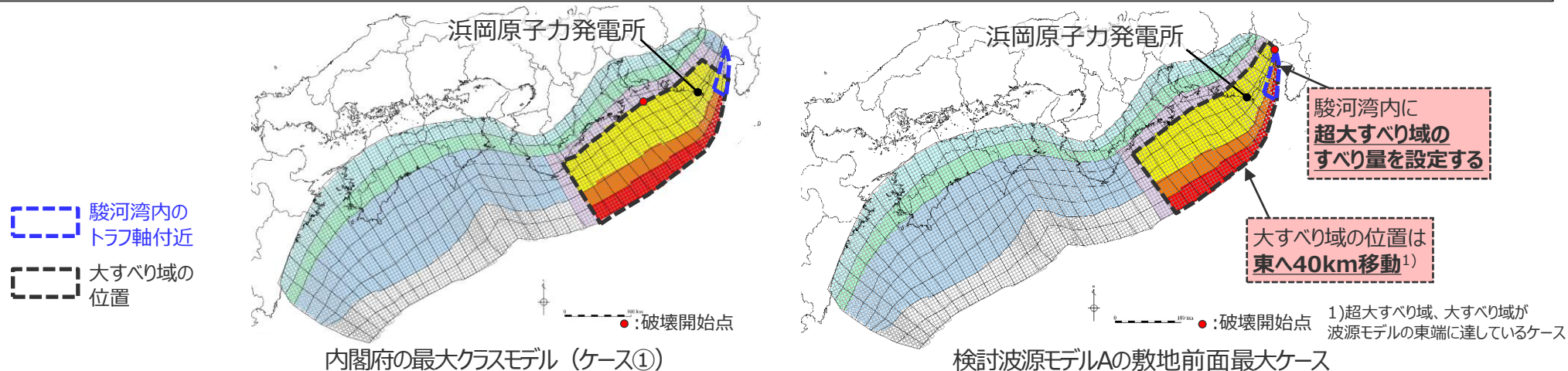
最大下降水位(T.P.m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (13.6min)	海底面 (13.5min)

5 プレート間地震の津波評価結果まとめ

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

(水位上昇側：検討波源モデルAの敷地前面最大ケースの分析)

- 内閣府の最大クラスモデルと、検討波源モデルAのうち敷地前面津波高が最大となったケース（基準断層モデル1-1）とのパラメータ設定の違いは以下のとおり。
- 水位上昇側において敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデル（ケース①）に対して、検討波源モデルAの敷地前面最大ケースは、動的パラメータである破壊開始点の他、駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していること、超大すべり域・大すべり域を移動させていることにより、敷地への影響の観点から、より幅広く不確かさを考慮したモデルとなっていることを確認した。



項目		内閣府の最大クラスモデル（ケース①）	検討波源モデルAの敷地前面最大ケース (敷地への影響の観点から検討)
駿河湾内のすべり量の設定		超大すべり域のすべり量を設定しない	超大すべり域のすべり量を設定する
超大すべり域・大すべり域の位置		基準位置 (駿河湾～紀伊半島沖)	東へ40km移動¹⁾ (東西100km程度の範囲で10kmずつ移動させたうちの最大ケース)
動的パラメータ	ライズタイム	60s	60s (60～300sのうち最大ケース)
	破壊伝播速度	2.5km/s	2.5km/s (0.7～2.5km/sのうち最大ケース)
	破壊開始点	大すべり域の下端中央	大すべり域の上端東側 (大すべり域の周囲6箇所のうち最大ケース)
敷地前面津波高(T.P.+m)		21.1	22.7

■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

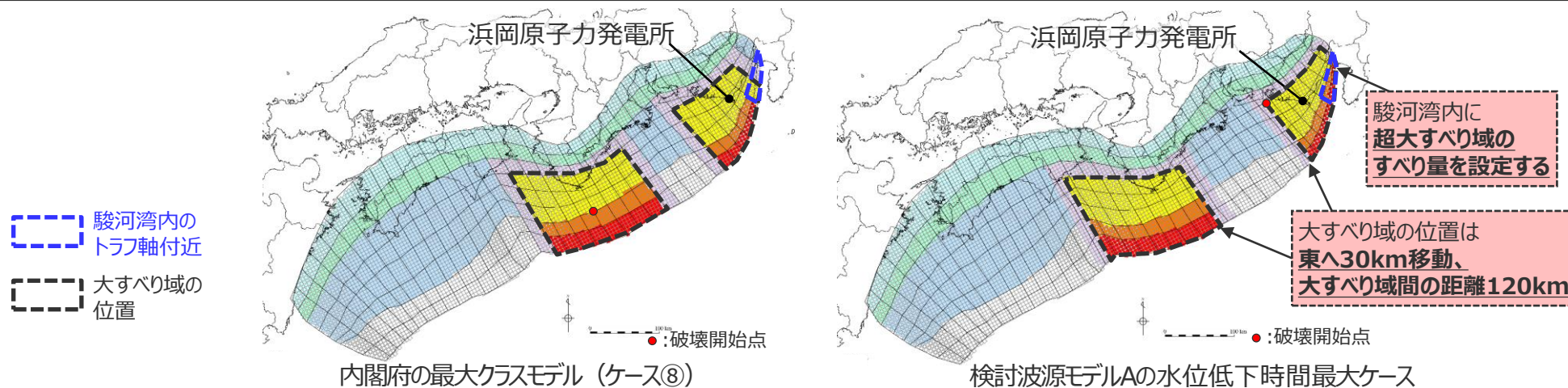
・赤太字は内閣府の最大クラスモデルと異なる設定
・() 内はパラメータスタディにおける設定範囲

5 プレート間地震の津波評価結果まとめ

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

(水位下降側：検討波源モデルAの水位低下時間最大ケースの分析)

- 内閣府の最大クラスモデルと、検討波源モデルAのうち取水塔の水位低下時間が最大となったケース（基準断層モデル2-3）とのパラメータ設定の違いは以下のとおり。
- 水位下降側において敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデル（ケース⑧）に対して、検討波源モデルAの水位低下時間最大ケースは、動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）の他、駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していること、超大すべり域・大すべり域を移動させていることにより、敷地への影響の観点から、より幅広く不確かさを考慮したモデルとなっていることを確認した。



項目		内閣府の最大クラスモデル（ケース⑧）	検討波源モデルAの水位低下時間最大ケース (敷地への影響の観点から検討)
駿河湾内のすべり量の設定		超大すべり域のすべり量を設定しない	超大すべり域のすべり量を設定する
超大すべり域・大すべり域の位置		基準位置、大すべり域間の距離60km (「駿河湾～愛知県東部沖」、「三重県南部沖～徳島県沖」)	東へ30km移動、大すべり域間の距離120km (東西100km程度の範囲で独立に10kmずつ移動させたうちの最大ケース)
動的パラメータ	ライズタイム	60s	90s (60～300sのうち最大ケース)
	破壊伝播速度	2.5km/s	1.0km/s (0.7～2.5km/sのうち最大ケース)
	破壊開始点	大すべり域の上端中央 (昭和東南海地震、昭和南海地震の破壊開始点の位置を参考に設定)	大すべり域の下端西側 (大すべり域の周囲6箇所のうち最大ケース)
取水塔水位低下時間		6.7min	13.6min

■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

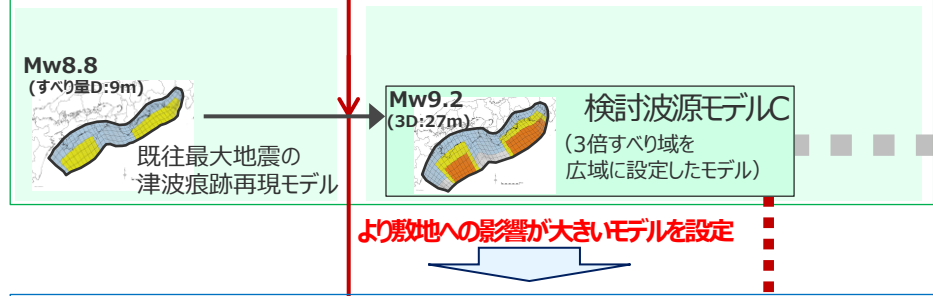
・ **赤字**は内閣府の最大クラスモデルと異なる設定
 ・ () 内はパラメータスタディにおける設定範囲

5 プレート間地震の津波評価結果まとめ プレート間地震の津波評価の検討フロー

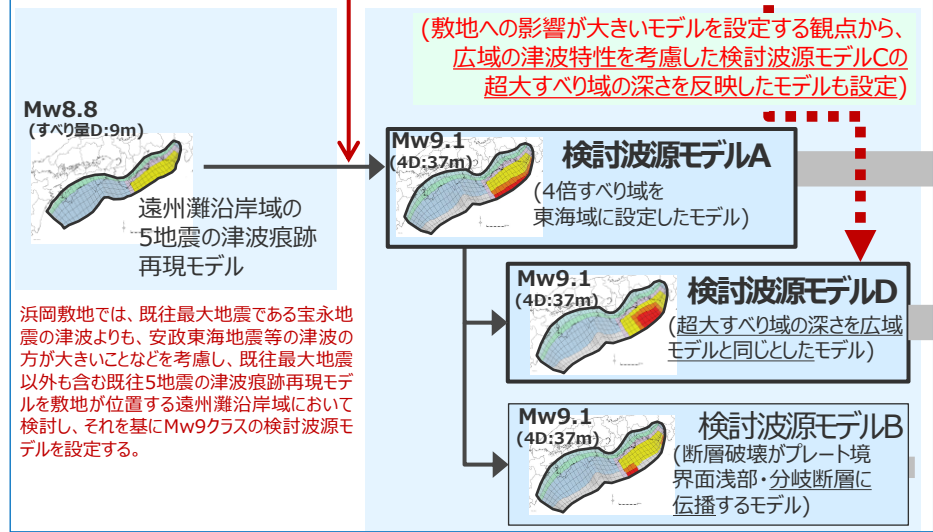
基準断層モデルの設定 2章

東北沖地震において巨大津波が発生した要因③⑥を反映
 ③地震規模 ⑥浅部の破壊形態

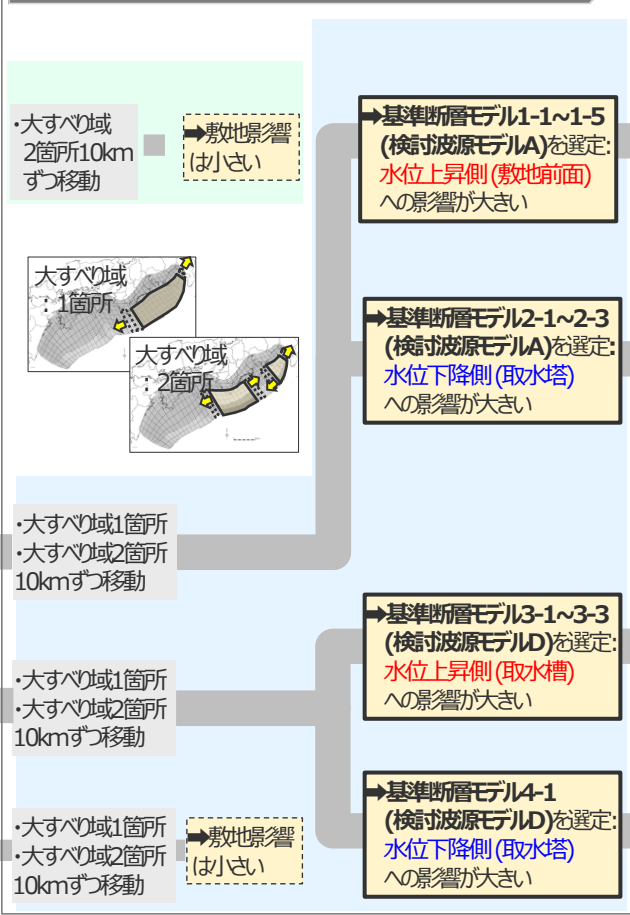
既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定) 2.1章



敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定) 2.2章



基準断層モデルの設定 (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 2.3章



動的パラメータに関するパラメータスタディ 3章 (動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

最も影響の大きいケース

基準断層モデル1-1 (Mw9.1, すべり量37m, ライズタイム60s, 破壊伝播速度2.5km/s, 破壊開始点P4)

敷地前面	取水槽				
	1,2号	3号	4号	5号	
22.7 ^{*1}	4.6	7.3	8.1	10.1	

基準断層モデル2-3 (Mw9.1, すべり量37m, ライズタイム90s, 破壊伝播速度1.0km/s, 破壊開始点P1)

3号取水塔		4号取水塔	
13.6min		13.5min	

基準断層モデル3-2 (Mw9.1, すべり量37m, ライズタイム60s, 破壊伝播速度1.0km/s, 破壊開始点P6)

敷地前面	取水槽				
	1,2号	3号	4号	5号	
19.8	6.4 ^{*2} (3.1)	9.0	9.6	11.8	

基準断層モデル4-1 (Mw9.1, すべり量37m, ライズタイム60s, 破壊伝播速度0.7~2.5km/s, 破壊開始点P1~P6)

敷地前面	取水槽				
	1,2号	3号	4号	5号	
21.1	4.6	7.1	7.9	9.9	

*1 防波壁の高さを無限大として解析を実施。今後、基準津波の確定後、必要な対策を実施していく。
 *2 1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。なお、括弧内の数値は、取水路の設備対策を実施した場合における解析結果。(1号取水路出口流路の縮小(流路面積1.0m²)・2号取水路出口流路の閉塞)

- 津波断層域
- 4倍すべり域
- 3倍すべり域
- 大すべり域
- 背景領域
- 深い背景領域
- 最も深い背景領域
- 遷移領域
- 浅い背景領域
- (すべり量が0(ゼロ)の領域)

・D: 平均すべり量
 ・各波源モデルには、内閣府(2012)による約5kmメッシュの津波断層面を用いた。

日本海溝の手法を用いたモデルとの比較
 基準断層モデルとして選定した検討波源モデルについて、日本海溝の手法を用いたすべり量分布等との比較も行い、東北沖型のモデル設定としての妥当性確認を実施。

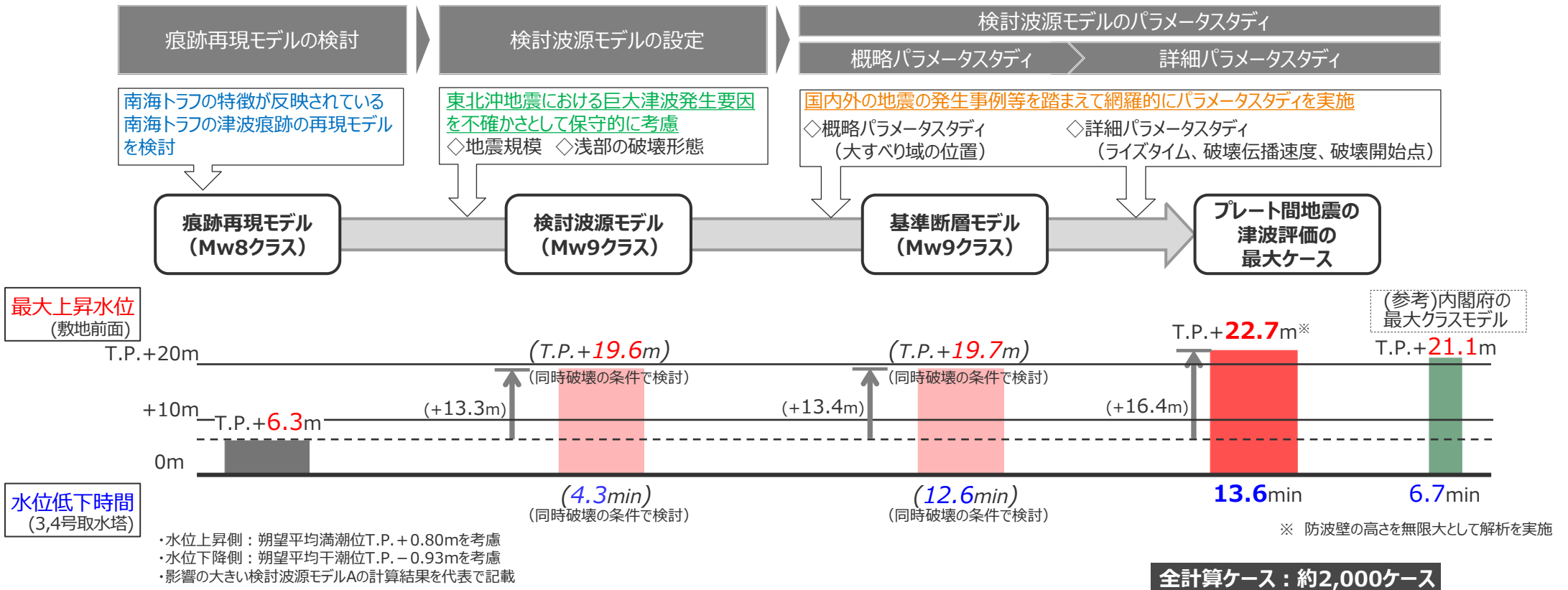
内閣府の最大クラスモデル
 津波評価に影響の大きいパラメータを非常に大きく設定(すべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを設定)することにより、その他のパラメータの不確かさを代表する方法で検討され、少ないケースで南海トラフの全域を網羅する最大クラスの津波として想定されたモデル。

敷地前面	取水槽				
	1,2号	3号	4号	5号	
21.1	4.6	7.1	7.9	9.9	

5 プレート間地震の津波評価のまとめ

プレート間地震の津波評価のまとめ

- プレート間地震の津波評価は、敷地に近い南海トラフの Mw9クラスのプレート間地震を対象とし、南海トラフの特徴が反映されている南海トラフの津波痕跡の再現モデル（痕跡再現モデル：Mw8クラス）を基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（地震規模、浅部の破壊形態）を不確かさとして保守的に考慮した東北沖型の波源モデル（検討波源モデル：Mw9クラス）を複数設定し、津波評価に影響を与える主要な因子（大すべり域の位置、ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）に関するパラメータスタディを、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めて網羅的に実施することにより、敷地への影響の観点から不確かさを考慮した津波評価を行った。
- プレート間地震の津波評価の結果、敷地前面の最大上昇水位はT.P.+22.7m、3,4号取水塔の水位低下時間は13.6minとなった。



参考文献

- 相田勇 (1981) 「東海道沖におこった歴史津波の数値実験」『地震研究所彙報』Vol.56, pp.367-390。
- 相田勇 (1985) 「東海地震津波の挙動－その数値実験－」『月刊地球』Vol.7, No.4, pp.204-215。
- 愛知県 (2014) 『平成23年度～25年度 愛知県東海地震・東南海地震・南海地震等被害予測調査結果』愛知県防災会議地震部会, 平成26年5月。
- 阿部朋弥, 白井正明 (2013) 「愛知県渥美半島の沿岸低地で見出された江戸時代の津波起源と推定されたイベント堆積物」『第四紀研究』Vol.52, No.2, pp.33-42。
- 飯田汲事 (1981a) 「宝永4年10月4日 (1707年10月28日) の宝永地震の津波被害」『愛知県被害津波史』愛知県防災会議地震部会, pp.36-49。
- 飯田汲事 (1981b) 「嘉永7年 (安政元年) 11月4日 (1854年12月23日) の安政地震の津波被害」『愛知県被害津波史』愛知県防災会議地震部会, pp.50-78。
- 飯田汲事 (1985a) 「愛知県及び隣接県被害津波史」『東海地方地震・津波災害誌』飯田汲事教授論文選集発行会, pp.669-790。
- 飯田汲事 (1985b) 「歴史地震の研究 (4) : 慶長 9年12月16日 (1605年2月3日) の地震及び津波災害について」『愛知工業大学研究報告. B, 専門関係論文集』Vol.16, pp.159-164。
- 飯田汲事 (1985c) 「昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布」『東海地方地震・津波災害誌』飯田汲事教授論文選集発行会, pp.449-570。
- 池谷仙之, 和田秀樹, 阿久津浩, 高橋実 (1990) 「浜名湖の起源と地史的変遷 (湖沼の成因と環境・地質)」『地質学論集』第36号, pp.129-150。
- 岩瀬浩之, 原信彦, 田中聡, 都司嘉宣, 今井健太郎, 行谷佑一, 今村文彦 (2011) 「高知県土佐清水市内における1707年宝永地震の津波痕跡に関する現地調査報告」『津波工学研究報告』第28号, pp.105-116。
- 内田主税 (2002) 「遠州灘沿岸, 静岡県大須賀町付近における沖積層中のイベント堆積物と古地形環境」『日本地理学会発表要旨集』第61号, 135p。
- 蝦名裕一, 今井健太郎, 大林涼子, 柄本邦明, 都司嘉宣 (2020) 「古絵図に基づく安政東海地震の浜名湖周辺における津波浸水域の分析」『歴史地震』第35号, pp.187-206。
- 愛媛県 (2013) 『津波浸水想定について (解説)』愛媛県, 平成25年6月10日。
- 大分県 (2014) 『津波浸水想定について (解説)』大分県, 2014年3月27日。
- 大阪府 (2013) 『津波浸水想定について (解説)』大阪府, 平成25年8月20日。
- 岡村眞, 松岡裕美, 佃栄吉, 都司嘉宣 (2000) 「沿岸湖沼堆積物による過去一万年間の地殻変動と歴史津波モニタリング」『月刊地球/号外』Vol.28, pp.162-168。
- 岡村眞, 松岡裕美, 古野北斗 (2009) 「浜名湖湖底堆積物に記録された2つの地震イベント」『日本地球惑星科学連合2009年大会予稿集』T225-P004。
- 岡村眞・松岡裕美 (2012) 「津波堆積物からわかる南海地震の繰り返し」『科学』Vol.82, No.2, pp.182-191。
- 岡村行信 (2012) 「西暦869年貞観津波の復元と東北地方太平洋沖地震の教訓－古地震研究の重要性と研究成果の社会への周知の課題－」『シンセオロジー』Vol.5, No.4, pp.234-242。
- 岡山県 (2013) 『津波浸水想定について (解説)』岡山県, 平成25年3月22日。
- 小原一成 (2009) 「フィリピン海プレート沈み込みに伴う西南日本のスロー地震群の発見」『地震』第2輯, 第61巻, pp.S315-S327。
- 海上保安庁『海洋台帳』深海版 (<http://www.kaiyoudaichou.go.jp/KaiyowebGIS/>) 。
- 香川県 (2013) 『香川県地震・津波被害想定第一次公表報告書』香川県, 平成25年3月31日。
- 鹿児島県 (2014) 『津波浸水想定について (解説)』鹿児島県, 平成26年9月24日。

参考文献

- 加藤勝秀, 森勇人, 佐藤嘉則, 松山昌史 (2020) 「津波波源モデルにおけるすべり量とライズタイムとの関係に関する検討」『土木学会論文集B2 (海岸工学)』Vol.76, No. 2, pp.I_355-I_360。
- 神奈川県 (2015) 『参考資料 津波浸水想定について (解説)』神奈川県, 平成27年6月22日。
- 気象庁 (1945) 『昭和十九年十二月七日東南海大地震調査概報』中央气象台。
- 気象庁 (1973) 「1972年12月4日八丈島東方沖地震について」『地震予知連絡会会報』第9巻, 3-4, pp.46-50。
- 気象庁 (2004) 『2004年9月5日23時57分頃の東海道沖の地震について (第2報)』平成16年9月6日。
- 気象庁 (2009) 『平成21年8月11日の駿河湾の地震で発表した津波注意報について』
(<http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/tsunamihyoka/20090811suruga-wan/index.html>)。
- 気象庁 (2010) 『2010年2月27日15時34分頃にチリ中部沿岸で発生した地震について (第3報)』平成22年2月28日。
- 北村晃寿, 小林小夏 (2014) 「静岡平野・伊豆半島南部の中・後期完新世の古津波と古地震の地質学的記録」『地学雑誌』第123巻, 第6号, pp.813-834。
- 北村晃寿, 川手繁人 (2015) 「静岡県南伊豆・吉佐美の海岸低地における津波堆積物の有無の調査」『静岡大学地球科学研究報告』第42号, pp.15-23。
- 北村晃寿, 鈴木孝和, 小林小夏 (2015) 「静岡県焼津平野における津波堆積物の調査」『静岡大学地球科学研究報告』第42号, pp.1-14。
- 北村晃寿, 三井雄太, 石橋秀巳, 森英樹 (2018) 「伊豆半島南東部静岡県河津町の海岸低地における津波堆積物調査」『静岡大学地球科学研究報告』第45号, pp.1-16。
- 熊谷博之 (1999) 「浜名湖周辺での東海沖の大地震に伴う津波堆積物の調査」『地学雑誌』第108巻, 第4号, pp.424-432。
- 熊本県 (2013) 『津波浸水想定について (解説)』熊本県, 2013年3月29日。
- 小池一之, 町田洋 (2001) 『日本の海成段丘アトラス』東京大学出版会, 2001年6月。
- 高知県 (2012) 『参考資料津波浸水想定について (解説)』高知県, 2012年12月10日。
- 国土交通省 (2019) 『津波浸水想定の設定の手引き Ver.2.10』国土交通省水管理・国土保全局海岸室, 国土技術政策総合研究所河川研究部海岸研究室, 2019年4月, 75p。
- 国土地理院『2万5千分の1地形図』『5万の分の1地形図』。
- 小松原純子, 藤原治, 高田圭太, 澤井祐紀, Than Tin Aung, 鎌滝孝信 (2006) 「沿岸低地堆積物に記録された歴史時代の津波と高潮: 南海トラフ沿岸の例」『活断層・古地震研究報告』第6号, pp.107-122。
- 小松原純子, 岡村行信, 澤井祐紀, 宍倉正展, 吉見雅行, 竿本英貴 (2007) 「紀伊半島沿岸の津波堆積物調査」『活断層・古地震研究報告』地震調査総合センター, Vol.7, pp.219-230。
- 小松原純子, 藤原治, 高田圭太, 澤井祐紀, Than Tin Aung, 鎌滝孝信 (2009) 「東海道白須賀宿付近の堆積物に記録された歴史時代の津波と高潮」『歴史地震』第24号, 169p。
- 佐賀県 (2016) 『津波浸水想定について (解説)』佐賀県, 2016年4月12日。
- 佐竹健治 (2013) 「第197回地震予知連絡会 重点検討課題「世界の巨大地震・津波」概要」『地震予知連絡会会報』第89巻, 12-6, pp.414-416。
- 佐藤善輝, 藤原治, 小野映介 (2016) 「浜松平野西部における完新世後期の浜堤列の地形発達過程」『第四紀研究』第55巻, 第1号, pp.17-35。
- 産業技術総合研究所『津波堆積物データベース』(https://gbank.gsj.jp/tsunami_deposit_db/)。

参考文献

- 穴倉正展, 澤井祐紀, 行谷佑一, 岡村行信 (2010) 「平安の人々が見た巨大津波を再現する—西暦869年貞観津波—」『AFERC ニュース』No.16, pp.1-10。
- 穴倉正展 (2011) 「津波堆積物からみた869年貞観地震と2011年東北地方太平洋沖地震について」『日本地震学会ニュースレター』Vol.23, No.3, pp.20-25。
- 穴倉正展, 藤原治, 澤井祐紀, 行谷佑一, 谷川晃一郎 (2012) 「海溝型地震履歴解明の研究」『地質調査総合センター速報 No.59, 平成23年度沿岸域の地質・活断層調査研究報告』pp.43-58。
- 穴倉正展, 前空英明, 越後智雄, 小俣雅志, 郡谷順英, 渋谷典幸 (2013) 「南海トラフ沿いの和歌山県串本町で検出された完新世イベント堆積物」『日本地球惑星科学連合2013年度大会予稿集』SSS31-35。
- 地震調査委員会 (2013) 『南海トラフの地震活動の長期評価 (第二版) について』平成25年5月24日。
- 地震調査委員会 (2017a) 『波源断層を特性化した津波の予測手法 (津波レシピ) 』地震調査研究推進本部地震調査委員会, 平成29年1月。
- 地震調査委員会 (2019) 『日本海溝沿いの地震活動の長期評価』平成31年2月26日。
- 地震調査委員会 (2020) 『南海トラフ沿いで発生する大地震の確率論的津波評価』地震調査研究推進本部地震調査委員会, 令和2年(2020年)1月。
- 静岡県 (1986) 『安政東海地震津波被害調査報告書 (特に伊豆半島東海岸について) 』静岡県地震対策課。
- 静岡県 (2015) 『静岡県第4次地震被害想定調査 (第一次報告) 』平成25年6月, 『静岡県第4次地震被害想定 (第二次報告) 報告書』平成25年11月, 『相模トラフ沿いで発生する地震の地震動・津波浸水想定～内閣府「首都直下地震モデル検討会」の震源断層モデルによる検討～報告書』平成27年1月, 『駿河トラフ・南海トラフ沿いで発生するレベル1地震の津波の想定報告書』平成27年6月。
- 杉野英治, 呉長江, 是永真理子, 根本信, 岩淵洋子, 蛭沢勝三 (2013) 「原子力サイトにおける2011東北地震津波の検証」『日本地震工学会論文集』第13巻, 第2号, pp.2-21。
- 杉野英治, 岩淵洋子, 橋本紀彦, 松末和之, 蛭沢勝三, 亀田弘行, 今村文彦 (2014) 「プレート間地震による津波の特性化波源モデルの提案」『日本地震工学会論文集』第14巻, 第5号, pp.1-18。
- 杉山雄一, 寒川旭, 下川浩一, 水野清秀 (1988) 『地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 御前崎地域の地質』地質調査所。高田圭太, 佐竹健治, 寒川旭, 下川浩一, 熊谷博之, 後藤健一, 原口強 (2002) 「静岡県西部湖西市における遠州灘沿岸低地の津波堆積物調査 (速報) 』『活断層・古地震研究報告』第2号, pp. 235-243。
- 武村雅之 (1998) 「日本列島における地殻内地震のスケーリング則—地震断層の影響および地震被害との関連—」『地震』第2輯, 第51巻, pp.211-228。
- 谷川晃一郎, 穴倉正展, 藤原治, 行谷佑一, 松本弾 (2017) 「高知県四万十町興津における津波堆積物調査 (予報) 』『活断層・古津波研究報告』地質調査総合センター, No.17, pp.31-38。
- 中央防災会議 (2001) 『東海地震に関する専門調査会報告』平成13年12月18日, 『東海地震に関する専門調査会報告』東海地震に関する専門調査会第11回, 平成13年12月11日。
- 中央防災会議 (2003) 『東南海、南海地震に関する報告』東南海、南海地震等に関する専門調査会, 平成15年12月16日。
- 中央防災会議 (2011) 『東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会報告』東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会, 平成23年9月28日。
- チリ中部地震津波合同調査グループ (2012) 「2010年チリ中部地震津波に関する日本での現地調査の報告」『津波工学研究報告』第29号, pp.37-54。
- 都司嘉宣, 上田和枝, 荒井賢一 (1994) 「須崎市を襲った歴史津波」『歴史地震』第10号, pp.95-115。

参考文献

- 都司嘉宣, 岡村眞, 松岡裕美, 村上嘉謙 (1998) 「浜名湖の湖底堆積物中の津波痕跡調査」『歴史地震』第14巻, pp.101-113。
- 都司嘉宣, 岡村眞, 松岡裕美, 後藤智子, 韓世燮 (2002) 「三重県尾鷲市大池, および紀伊長島町諏訪池の湖底堆積層中の歴史・先史津波痕跡について」『月刊地球』第24巻, 第10号, pp.743-747。
- 都司嘉宣, 岡村眞, 松岡裕美, 行谷佑一 (2003) 「高知県須崎市桐間池の湖底堆積層中の津波痕跡」『地球惑星科学関連学会2003年合同大会予稿集』J078-006。
- 都司嘉宣 (2006) 「小笠原諸島の津波史」『歴史地震』第21号, pp.65-79。
- 都司嘉宣, 大年邦雄, 中野晋, 西村裕一, 藤間功司, 今村文彦, 柿沼太郎, 中村有吾, 今井健太郎, 後藤和久, 行谷佑一, 鈴木進吾, 城下英行, 松崎義孝 (2010) 「2010年チリ中部地震による日本での津波被害に関する広域現地調査」『土木学会論文集B2 (海岸工学)』Vol.66, No.1, pp.1346-1350。
- 都司嘉宣 (2012) 「第二章 古文書から読む大地震・大津波の記憶」『千年に一度の大地震・大津波に備える～古文書・伝承に読む先人の教え～』しずおかの文化新書10。
- 土隆一 (2001) 「静岡県地質図」『静岡県の地形と地質－静岡県地質図20万分の1 (2001年改訂版) 説明書－』内外地図。
- 津波痕跡データベース (<http://tsunami-db.irides.tohoku.ac.jp/tsunami/toppage.php>) 東北大学災害科学国際研究所。
- 東京都防災会議 (2013) 『南海トラフ巨大地震等による東京の被害想定報告書』東京都, 平成25年5月
- 徳島県 (2012) 『参考資料 津波浸水想定について (解説)』徳島県, 2012年10月31日。
- 土木学会 (2016) 『原子力発電所の津波評価技術2016』土木学会原子力土木委員会津波評価小委員会, 平成28年9月。
- 内閣府 (2012) 『南海トラフの巨大地震モデル検討会 (中間とりまとめ)』南海トラフの巨大地震モデル検討会, 平成23年12月27日。『南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高について (第一次報告)』南海トラフの巨大地震モデル検討会, 平成24年3月31日。『南海トラフの巨大地震モデル検討会 (第二次報告) 津波断層モデル編－津波断層モデルと津波高・浸水域等について－』南海トラフの巨大地震モデル検討会, 平成24年8月29日。
- 内閣府 (2012b) 『平成23年 (2011年) 東北地方太平洋沖地震の津波断層モデルについて』第12回南海トラフの巨大地震モデル検討会参考資料1, 平成24年3月1日。
- 内閣府 (2013) 『首都直下のM7クラスの地震及び相模トラフ沿いのM8クラスの地震等の震源断層モデルと震度分布・津波高等に関する報告書』首都直下地震モデル検討会, 平成25年12月。
- 内閣府 (2015) 『南海トラフ沿いの巨大地震による長周期地震動に関する報告』南海トラフの巨大地震モデル検討会・首都直下地震モデル検討会, 平成27年12月17日。
- 内閣府 (2020) 『日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデルの検討について (概要報告)』日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデル検討会, 令和2年4月21日。
- 長崎県 (2016) 『津波浸水想定について (解説: 第2版)』長崎県, 平成28年10月31日。
- 七山太, 加賀新, 木下博久, 横山芳春, 佐竹健治, 中田高, 杉山雄一, 佃栄吉 (2002) 「紀淡海峡, 友ヶ島において発見された南海地震津波の痕跡」『月刊海洋号外』第28号, pp.123-131。
- 行谷佑一・都司嘉宣 (2005) 「宝永 (1707) ・安政東海 (1854) 地震津波の三重県における詳細津波浸水高分布」『歴史地震』第20号, pp.33-56。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト (2014) 『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成25年度 成果報告書』文部科学省研究開発局, 独立行政法人海洋研究開発機構, 平成26年5月。

参考文献

- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2015）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成26年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，独立行政法人海洋研究開発機構，平成27年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2016）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成27年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，平成28年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2017）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成28年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，平成29年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2018）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成29年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，平成30年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2019）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト平成30年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，令和元年5月。
- 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト（2020）『南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト令和元年度 成果報告書』文部科学省研究開発局，国立研究開発法人海洋研究開発機構，令和2年5月。
- 西仲秀人，熊谷博之，奥田 隆，鳥居龍晴，高野雅夫，中村俊夫（1996）「浜名湖周辺の津波堆積物から探る過去の東海沖地震」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』，Vol.VII，pp.193-203。
- 萩原尊禮（1989）『続古地震-実像と虚像』東京大学出版会。
- 萩原尊禮（1995）『古地震探究－海洋地震へのアプローチ』東京大学出版会。
- 羽鳥徳太郎（1975）「明応7年・慶長9年の房総および東海南海道大津波の波源」『地震研究所彙報』Vol.50，pp.171-185。
- 羽鳥徳太郎（1977）「静岡県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」『静岡県地震対策基礎調査報告書－第2次調査・津波第1報－』静岡県地震対策課，pp.14-38。
- 羽鳥徳太郎（1978a）「高知・徳島における慶長・宝永・安政南海道津波の記念碑－1946年南海道津波の挙動との比較－」『地震研究所彙報』Vol.53，pp.423-445。
- 羽鳥徳太郎（1978b）「三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」『地震研究所彙報』Vol.53，pp.1191-1225。
- 羽鳥徳太郎（1980a）「宝永・安政津波の現地調査による波高の検討」『月刊海洋科学』Vol.12，No.7，pp.495-503。
- 羽鳥徳太郎（1980b）「大阪府・和歌山県沿岸における宝永・安政南海道津波の調査」『地震研究所彙報』Vol.55，pp.505-535。
- 羽鳥徳太郎（1982）「高知県南西部の宝永・安政南海道津波の調査－久礼・入野・土佐清水の津波の高さ」『地震研究所彙報』Vol.56，pp.547-570。
- 羽鳥徳太郎（1984）「関東・伊豆東部沿岸における宝永・安政東海津波の挙動」『地震研究所彙報』Vol.59，pp.501-518。
- 羽鳥徳太郎（1985a）「東海地方の歴史津波」『月刊地球』Vol.7，No.4，pp.182-191。
- 羽鳥徳太郎（1985b）「小笠原父島における津波の挙動」『地震研究所彙報』Vol.60，pp.97-104。
- 羽鳥徳太郎（1986）「九州東部沿岸における歴史津波の現地調査－1662年寛文・1769年明和日向灘および1707年宝永・1854年安政南海道津波－」『地震研究所彙報』Vol.60，pp.439-459。
- 羽鳥徳太郎（1988）「瀬戸内海・豊後水道沿岸における宝永（1707）・安政（1854）・昭和（1946）南海道津波の挙動」『歴史地震』第4号，pp.37-46。
- 羽鳥徳太郎（1991）「鎌倉における明応（1498）・元禄（1703）・大正（1923）津波の浸水域」『歴史地震』第7号，pp.1-10。

参考文献

- 羽鳥徳太郎（2005）「伊勢湾岸市街地における安政東海津波（1854）の浸水状況」『歴史地震』第20号，pp.57-64。
- 羽鳥徳太郎（2006）「東京湾・浦賀水道沿岸の元禄関東（1703），安政東海（1854）津波とその他の津波の遡上状況」『歴史地震』第21号，pp.37-45。
- 原口強，鳥居和樹，山崎秀雄，関口秀雄（2008）「和歌山県田辺湾で発見された昭和南海地震津波堆積物」『北淡活断層シンポジウム2008講演要旨集』pp.41-42。
- 兵庫県（2014）『南海トラフ巨大地震の津波浸水想定について（解説）』兵庫県，平成26年2月19日。
- 平川一臣（2013）『津波堆積物が示す南海トラフの津波履歴，津波挙動（海食急崖，斜面からの証拠）伊良湖水道・菅島，志摩半島，紀伊長島，熊野，潮岬・串本』南海トラフの巨大地震モデル検討会（第35回）及び首都直下地震モデル検討会（第17回）合同会議 参考資料2 平川委員提供資料，平成25年3月19日。
- 廣内大助，佐藤善輝，松多信尚，堀和明，清水龍来，遠藤悠，西川由香，安江健一，顔一勤（2014）「静岡県太田川低地の堤間湿地における完新世後期の堆積環境変化」『愛知工業大学地域防災研究センター年次報告書』Vol.10，pp.43-46。
- 広島県（2013）『津波浸水想定について（解説）』広島県，平成25年5月2日。
- 福岡県（2016）『津波浸水想定について（解説）』福岡県，2016年2月18日。
- 藤原治，小野映介，佐竹健治，澤井祐紀，海津正倫，矢田俊文，阿部恒平，池田哲哉，岡村行信，佐藤善輝，Than Tin Aung，内田淳一（2007）「静岡県掛川市南部の横須賀湊跡に見られる1707年宝永地震の痕跡」『活断層・古地震研究報告』No.7，pp. 157-171。
- 藤原治（2008）「静岡県中部沿岸での1707年宝永地震による地殻変動の調査」『活断層研究センターニュース』第80号，pp.1-5。
- 藤原治，小野映介，矢田俊文，海津正倫，鎌滝孝信，内田淳一（2008）「完新世後半における太田川低地南西部の環境変化と津波堆積物」『活断層・古地震研究報告』No.8，pp.187-202。
- 藤原治，小野映介，矢田俊文，海津正倫，岡村行信，佐竹健治，佐藤善輝，澤井祐紀，Than Tin Aung（2009）「歴史と地層記録から確認された1707年宝永地震による遠州灘沿岸の隆起」『月刊地球』Vol31，No.4，pp.203-210。
- 藤原治，町田洋，塩地潤一（2010）「大分県横尾貝塚に見られるアカホヤ噴火に伴う津波堆積物」『第四紀研究』Vol.49，No.1，pp. 23-33。
- 藤原治，青島晃，佐藤善輝，北村晃寿，小野映介，谷川晃一郎（2012）「静岡県磐田市の太田川低地で見られる歴史津波堆積物」『日本第四紀学会講演要旨集』第42巻，pp.46-47。
- 藤原治・佐藤善輝（2012）「静岡県浜松市西部高塚池跡における津波堆積物調査（予察）」『日本地震学会講演予稿集2012年度秋季大会』P2-40。
- 藤原治（2013）「地形・地質記録から見た南海トラフの巨大地震・津波（東海地域の例）」『GSJ地質ニュース』Vol.2，No.7，pp.197-200。
- 藤原治，佐藤善輝，小野映介，海津正倫（2013）「陸上掘削試料による津波堆積物の解析—浜名湖東岸六間川低地にみられる3400年前の津波堆積物を例にして—」『地学雑誌』第122巻，第2号，pp. 308-322。
- 藤原治・澤井祐紀（2014）「静岡県沿岸の古地震・津波堆積物調査」『巨大地震による複合的地質災害に関する調査・研究報告書』産業技術総合研究所地質調査総合センター，Vol.66，pp.39-48。
- 藤原治，北村晃寿，佐藤善輝，青島晃，小野映介，小林小夏，小倉一輝，谷川晃一郎（2015）「静岡県西部の太田川低地で見られる弥生時代中・後期の相対的海水準上昇」『第四紀研究』第54巻，第1号，pp.11-20。

参考文献

- 防災科学技術研究所（2020）「1-2 日本周辺における浅部超低周波地震活動（2019年11月～2020年4月）」『地震予知連絡会会報』第104巻，pp.4-6。（http://www.hinet.bosai.go.jp/press/NIED_press.101210/）。
- 松岡裕美・岡村眞（2012）「津波堆積物から見た南海トラフ沿いの巨大地震履歴」『地震予知連絡会会報』第87巻，12-2，pp.495-496。
- 松多信尚，佐藤善輝，坂本絵梨，廣内大助，堀 和明，川上賢太，米原和哉（2016）「海岸平野の発達過程に基づく南海トラフ巨大地震時の地殻変動のパターンの解明」『第15回学術研究助成（2015年度）』国土地理協会。
- 松本弾（2017）「三重県津市の海岸低地における津波堆積物掘削調査」『活断層・古地震研究報告』地質調査総合センター，第17号，pp.15-30。
- 三重県（2015）『津波浸水想定について（解説）』三重県，平成27年3月31日。
- 三上貴仁，柴山知也，武若聡，Miguel ESTEBAN，大平幸一郎，Rafael ARANGUIZ，Mauricio VILLAGRAN，Alvaro AYALA（2011）「2010年チリ沖地震津波災害の現地調査」『土木学会論文集B3（海洋開発）』Vol.67，No.2，pp.I_529-I_534。
- 宮崎県（2013）『宮崎県地震・津波及び被害の想定について』宮崎県，平成25年10月。
- 村上仁士，島田富美男，伊藤禎彦，山本尚明，石塚淳一（1996）「四国における歴史津波（1605慶長・1707宝永・1854安政）の津波高の再検討」『自然災害科学』Vol.15-1，pp.39-52。
- 矢沼隆，都司嘉宣，今井健太郎，行谷佑一，今村文彦（2011）「静岡県下における1707年宝永地震津波の痕跡調査」『津波工学研究報告』第28号，pp.93-103。
- 山口県（2013）『津波浸水想定（瀬戸内海沿岸）について（解説）』山口県，平成25年12月24日。
- 東海・東南海・南海地震の連動性評価研究プロジェクト（2009）「サブプロジェクト1の研究成果の活用および地域研究会の開催」『連動性を考慮した地震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究 平成20年度報告書』。
- 和歌山県（2013）『「南海トラフの巨大地震」及び「東海・東南海・南海 3 連動地震」による津波浸水想定について』和歌山県，平成25年。
- 渡辺偉夫（1998）『日本被害津波総覧（第2版）』東京大学出版会。

参考文献

- Abe, Tomoya, Kazuhisa Goto, Daisuke Sugawara (2012), "Relationship between the maximum extent of tsunami sand and the inundation limit of the 2011 Tohoku-oki tsunami on the Sendai Plain, Japan", *Sedimentary Geology*, Vol.282, pp.142-150.
- Araki, Eiichiro, Demian M. Saffer, Achim J. Kopf, Laura M. Wallace, Toshinori Kimura, Yuya Machida, Satoshi Ide, Earl Davis(2017), "Recurring and triggered slow-slip events near the trench at the Nankai Trough subduction megathrust", *Science*, Vol.356, pp.1157-1160.
- Fujii, Yushiro and Kenji Satake(2007), "Tsunami Source of the 2004 Sumatra–Andaman Earthquake Inferred from Tide Gauge and Satellite Data", *Bulletin of the Seismological Society of America*, Vol. 97, No. 1A, pp. S192–S207.
- Fujiwara, Osamu, Kazuomi Hirakawa, Toshiaki Irizuki, Shiro Hasegawa, Yoshitaka Hase, Jun-ichi Uchida, Kohei Abe (2010), "Millennium-scale recurrent uplift inferred from beach deposits bordering the eastern Nankai Trough, Omaezaki area, central Japan", *Island Arc*, Vol.19, pp.374-388.
- Fujiwara, Osamu, Eisuke Ono, Toshifumi Yata, Masatomo Umitsu, Yoshiki Sato, Vanessa M.A. Heyvaert(2013), "Assessing the impact of 1498 Meio earthquake and tsunami along the Enshu-nada coast, central Japan using coastal geology", *Quaternary International*, Vol.308-309, pp.4-12.
- Fujiwara, Osamu, Akira Aoshima, Toshiaki Irizuki, Eisuke Ono, Stephen P. Obrochta, Yoshikazu Sampei, Yoshiki Sato, Ayumi Takahashi(2020), "Tsunami deposits refine great earthquake rupture extent and recurrence over the past 1300 years along the Nankai and Tokai fault segments of the Nankai Trough, Japan", *Quaternary Science Reviews*, Vol.227, Article105999, pp.1-19.
- Garrett, Ed, Osamu Fujiwara, Philip Garrett, Vanessa M.A. Heyvaert, Masanobu Shishikura, Yusuke Yokoyama, Aurélia Hubert-Ferrari, Helmut Brückner, Atsunori Nakamura, Marc De Batist(2016), " A systematic review of geological evidence for Holocene earthquakes and tsunamis along the Nankai-Suruga Trough, Japan", *Earth Science Reviews*, vol.159, pp.337-357.
- Goto, Kazuhisa, Kohei Hashimoto, Daisuke Sugawara, Hideaki Yanagisawa, Tomoya Abe (2014), "Spatial thickness variability of the 2011 Tohoku-oki tsunami deposits along the coastline of Sendai Bay", *Marine Geology*, Vol.358, pp.38-48.
- Heuret, Arnaud, Serge Lallemand, Francesca Funiciello, Claudia Piromallo, Claudio Faccenna(2011), "Physical characteristics of subduction interface type seismogenic zones revisited", *Geochemistry Geophysics Geosystems*, Vol.12, No.1, pp.1-26.
- Hirata, Kenji, Kenji Satake, Yuichiro Tanioka, Tsurane Kuragano, Yohei Hasegawa, Yutaka Hayashi, Nobuo Hamada(2006), "The 2004 Indian Ocean tsunami: Tsunami source model from satellite altimetry", *Earth Planets Space*, Vol.58, pp.195–201.
- Hirose, Fuyuki, Junichi Nakajima, Akira Hasegawa(2008), "Three-dimensional seismic velocity structure and configuration of the Philippine Sea slab in southwestern Japan estimated by double-difference tomography", *Journal of Geophysical Research Solid Earth*, Vol.113, Issue B09315, pp.1-26.
- Kato, Tetsuro and Masataka Ando(1997), "Source mechanisms of the 1944 Tonankai and 1946 Nankaido earthquakes: Spatial heterogeneity of rise times", *Geophysical Research Letters*, Vol.24, No.16, pp.2055–2058.
- Kitamura, Akihisa(2016), "Examination of the largest-possible tsunamis (Level 2) generated along the Nankai and Suruga troughs during the past 4000 years based on studies of tsunami deposits from the 2011 Tohoku-oki tsunami", *Earth and Planetary Science*, Vol.3, No.12, pp.1-20.

参考文献

- Kitamura, Akihisa, Kazuyoshi Yamada, Daisuke Sugawara, Yusuke Yokoyama, Yosuke Miyairi, Hamatome team(2020), "Tsunamis and submarine landslides in Suruga Bay, central Japan, caused by Nankai-Suruga Trough megathrust earthquakes during the last 5000 years", Quaternary Science Reviews, Vol.245, Article.106527, pp.1-23.
- Komatsubara, Junko, Osamu Fujiwara, Keita Takada, Yuki Sawai, Than Tin Aung and Takanobu Kamataki(2008), "Historical tsunamis and storms recorded in a coastal lowland, Shizuoka Prefecture, along the Pacific Coast of Japan", Sedimentology, Vol.55, pp.1703-1716.
- Loveless, John P. and Brendan J. Meade(2010), " Geodetic imaging of plate motions, slip rates, and partitioning of deformation in Japan", Journal of Geophysical Research, Vol.115, No.B02410, pp.1-35.
- Matsubara, Makoto, Katsuhiko Shiomi, Hisatoshi Baba, Hiroshi Sato, Takahito Nishimiya(2021), "Improved geometry of the subducting Philippine Sea plate beneath the Suruga Trough", Global and Planetary Change, Vol. 204, 103562, pp.1-11.
- Matsubara, Makoto and Kazushige Obara(2011), "The 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earthquake related to a strong velocity gradient with the Pacific plate", Earth Planets Space, Vol.63, pp.663-667.
- Miura, Seiichi, Narumi Takahashi, Ayako Nakanishi, Tetsuro Tsuru, Shuichi Kodaira, Yoshiyuki Kaneda(2005), "Structural characteristics off Miyagi forearc region, the Japan Trench seismogenic zone, deduced from a wide-angle reflection and refraction study", Tectonophysics, Vol.407, pp.165-188.
- Murotani, Satoko, Kenji Satake and Yushiro Fujii(2013), " Scaling relations of seismic moment, rupture area, average slip, and asperity size for $M \sim 9$ subduction-zone earthquakes", Geophysical Research Letters , Vol.40, pp.5070-5074.
- Nakamura, Yugo, Yuichi Nishimura, Purna Sulastya Putra(2012), "Local variation of inundation, sedimentary characteristics, and mineral assemblages of the 2011 Tohoku-oki tsunami on the Misawa coast, Aomori, Japan", Sedimentary Geology, Vol.282, pp.216-227.
- Nakamura, Masaki, Yasuhiro Yoshida, Dapeng Zhao, Hiroyuki Takayama, Koichiro Obana, Hiroshi Katao, Junzo Kasahara, Toshihiko Kanazawa, Shuichi Kodaira, Toshinori Sato, Hajime Shiobara, Masanao Shinohara, Hideki Shimamura, Narumi Takahashi, Ayako Nakanishi, Ryota Hino, Yoshio Murai, Kimihiro Mochizuki(2008), "Three-dimensional P- and S-wave velocity structures beneath Japan", Physics of the Earth and Planetary Interiors, Vol.168, pp.49-70.
- Nakanishi, Ayako, Narumi Takahashi, Jin-Oh Park, Seiichi Miura, Shuichi Kodaira, Yoshiyuki Kaneda, Naoshi Hirata, Takaya Iwasaki, and Masao Nakamura(2002), " Crustal structure across the coseismic rupture zone of the 1944 Tonankai earthquake, the central Nankai Trough seismogenic zone", Journal of Geophysical Research, Vol. 107, B1, 2007.
- Niwa, Masakazu, Takanobu Kamataki, Hideki Kurosawa, Yoko Saito-Kokubu, Masafumi Ikuta(2019), "Seismic subsidence near the source region of the 1662 Kanbun Hyuganada Sea earthquake: Geochemical, stratigraphical, chronological, and paleontological evidences in Miyazaki Plain, southwest Japan", Island Arc, Vol.29, Issue1, e12341, pp.1-26.

参考文献

- NOAA(2010), "TSUNAMI BULLETIN NUMBER 015", PACIFIC TSUNAMI WARNING CENTER, ISSUED AT 2082z 27 FEB 2010", National Oceanic and Atmospheric Administration, (<http://www.prh.noaa.gov/ptwc/messages/pacific/2010/pacific.2010.02.27.202736.txt>, <http://oldwcatwc.arh.noaa.gov/2010/02/27/725245/15/message725245-15.htm>).
- Park, Jin-Oh, Gregory F. Moore, Tetsuro Tsuru, Shuichi Kodaira, Yoshiyuki Kaneda(2003), "A subducted oceanic ridge influencing the Nankai megathrust earthquake rupture", Earth and Planetary Science Letters, Vol.217, pp.77-84.
- Satake, Kenji, Yushiro Fujii, Tomoya Harada, Yuichi Namegaya(2013), "Time and Space Distribution of Coseismic Slip of the 2011 Tohoku Earthquake as Inferred from Tsunami Waveform Data", Bulletin of the Seismological Society of America, Vol. 103, No.2B, pp. 1,473–1,492.
- Sato, Yoshiki(2013), " Late Holocene Geomorphic Development of Coastal Barriers Around Lake Hamana and in Hamamatsu Strand Plain", 九州大学学位論文.
- Tanioka, Yuichiro and Kenji Satake(2001b), "Coseismic slip distribution of the 1946 Nankai earthquake and aseismic slips caused by the earthquake", Earth Planets Space, Vol.53, pp.235–241.
- Tsuru, Tetsuro, Jin-Oh Park, Seiichi Miura, Shuichi Kodaira, Yukari Kido, Tsutomu Hayashi(2002), "Along-arc structural variation of the plate boundary at the Japan Trench margin: Implication of interplate coupling", Journal of Geophysical Research, Vol. 107, No. B12, 2537, pp.11-1-11-15.



中部電力